
SKY VALKYRIE

星乃カルマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S K Y V A L K Y R I E

【Nコード】

N 6 7 0 5 U

【作者名】

星乃カルマ

【あらすじ】

新人パイロットとしてユグドラシル基地に配属されたソエル。憧れだったチームの一員になった彼女は、そこで一人の少年と出会う。空を愛する少女ソエル。空に焦がれる少年アッシュ。二人の出会いは偶然なのか。それとも…。

この作品は小説投稿サイト、ノベリストにも投稿しています。

FLIGHT・1 チームヴァルキリー

青い空と綿菓子のような白い雲。それが延々と続いている。何の変哲もない風景だが、その二つが両手を広げて待っているように見えるのは気の所為だろうか。機内の小さな窓から見える翼は風を切り、順調に目的地に向かっている。神様が不機嫌でなくてよかった。天気も最高で申し分ない。

目的地に着くまでの間ずっと興奮で眠れなかった。機内映画を何本見たらうか、目と耳の疲労はピークに達していた。画面を切り替え、あとどれくらいの間で到着するか確認する。画面に映し出された飛行機から伸びている矢印は短くなっていた。あと数十分といった所だろう。折り畳み式の机の上に散らばった本やノートを片付けよう。ピンポンとアナウンスが鳴った。落ち着いた女性の声が流れる。

『皆様、当機はまもなくユグドラシル空港に到着いたします。添乗員の指示に従い、シートベルトを締め、テーブルを折り畳んで下さるようお願いします』

添乗員が席を回り、ベルトの締め方を教えてくれた。複雑な手順は無い。教科書を読むより簡単だ。ガクンと機体が高度を下げた。窓の外を見してみる。小さいが空港の建物と管制塔、滑走路が見えてきた。いよいよ着陸だと思ったその時、降下していた筈の機体が再び高度を上げた。不審に思った乗客達の囁き声が聞こえる。再びアナウンスが流れた。先程の女性の声ではなく、男性の声だ。

『機長です。先程管制塔から、アンティオキアの戦闘機が国境を越え、こちらに向かっているとの連絡が入りました。安全が確認されるまでの間、しばらく旋回を続けたいと思います。ご了承ください』
よく訓練された、落ちついた声だ。だが、僅かに動揺が走ってい

るのが解る。後部座席で悲鳴が上がった。悲鳴は連鎖し、次々と周りで悲鳴が上がる。窓の外を見た。機影がこちらに向かつて飛んで来る。機長が言っていたアンテオキアの戦闘機だ。

オレンジ色の光がすぐ横を走った。小さな爆発。左翼が燃えている。機銃に貫かれた部分が砕け散り、真つ逆さまに落ちて行く。機体が僅かに右に傾いた。飛行機はすぐに持ち直した。だが、天秤のように不安定で左右に揺れている。正義の羽と死者の魂を天秤にかけているようだ。何百人の乗客の命は、正義の羽に釣り合うのだろうか。

添乗員が各座席を回り、酸素マスクをつけるように指示した。緊急着陸をしようにも、戦闘機が蜂のように周囲を飛び交っている。燃料とマナが尽きて墜ちてしまうのがオチだ。

「ああ…死ぬなんて嫌…。神様…」

隣の座席に座っている女性が十字を切った。自分もこんな所で死にたくない。子供の頃から描いていた夢がやっと叶おうとしているのだ。死んでたまるか。

「見て！」

幼い子供の声が響いた。乗客達は一斉に窓の外を見た。アンテオキアの戦闘機とは違う機体が脇を駆け抜けて行った。味方？それとも敵の援軍？駆け抜ける際に、クルタナのエンブレムが見えた。どうやら前者のようだ。遙か前方で両機は一騎打ちを繰り広げている。

アンテオキアの戦闘機が機銃を発射。

クルタナの機体上昇。

ロールを織り交せてループに入る。

美しい弧を描く、アウトサイドループ。

あんな軌跡は見た事が無い。かなりの腕のパイロットだろう。

ダイブ。

風を切るグライド。

戦闘機の死角へ。どこを狙おうか考えている。

機銃が放たれた。

戦闘機の主翼を貫通。

黒い煙が上がる。

これ以上は無理だと悟ったのか、戦闘機は踵を返し逃げ去った。クルタナの機体が横に並び、翼を振った。もう安全だと言っているようだ。機体は傾き、空港の方角に飛んで行った。旅客機も砕けた翼を抱え、ユグドラシル空港に向かった。

旅客機は無事に滑走路にランディングした。消防車がすぐさま炎上している左翼に放水を開始する。飛行機から降りた乗客達の反応は様々だった。崩れ落ちて泣く者。家族や友人と抱きあつて無事を噛み締める者。怪我人や死者が一人も出なかったのは奇跡だ。

あの機体が滑走路の脇に止まっていた。パイロットはまだ居るだろうか。感謝の意を伝えようと、機体の側に走った。丁度、パイロットがコクピットから降りて来る所だった。空港の職員達と会話している。

「あの！」

パイロットが振り向いた。驚いた。彼はまだ若かった。恐らく十代後半だろう。柔らかなマロンペーストの髪に、春に芽吹く若葉を思わせる緑色の瞳。フェイクファーの付いた焦げ茶色のジャケットに緑色のベスト、ジーンズがよく似合っている。少年は背が高かった。180センチはありそうだ。

「ありがとうございます！貴方のお陰で、皆助かりました！」

「お礼なんてそんな…当然の事をしただけだよ」

少年の甘さが残る、柔らかいボーイソプラノ。彼は照れたように頭を掻いた。ジャケットに着けられているエンブレムが陽光を反射し煌めいた。

「あの…もしかして…チームヴァルキリーの人ですか？」

「え？そうだけど…君…もしかして、ソエル・ステュアートさん？」

「はい。失礼ですが…貴方は？」

「ああ、ごめん。俺はアレックス・フォン・アルジャーノン。君の

言うとおりのヴァルキリーのメンバーだよ。隊長の命令で君を迎えに来たんだ」

「失礼しました！ソエル・ステュアートです！よろしくお願ひします！」

慌てて先輩となるアレックスに敬礼した。彼も敬礼してくれた。

「こちらこそ、よろしく。じゃあ、行こうか」

「待って！」

声変りしていない少年の声が響いた。足を止めて振り向く。救急車に乗ろうとしていた男の子が駆け寄って来た。母親らしき女性が彼の後を追いかけて来る。男の子はアレックスの正面に立った。小さな肩が上下している。曇りのない無垢な目がアレックスを見上げた。

「ありがとう！僕、大きくなったらお兄ちゃんみたいなパイロットになって、悪い奴をやっつけるよ！」

少年が敬礼した。見事な動きと形。将来が楽しみだ。アレックスが敬礼を返す。彼は屈みこんで夢を抱いた少年の肩に手を置いた。

「その時は、一緒に飛べたら良いな。楽しみにしてるよ」

「うん！」

後ろで様子を見ていた母親が感謝の意味を込めた笑顔を浮かべて頭を下げた。仲良く手を繋いだ親子は待っていた救急車に乗り込んだ。サイレンを鳴らして救急車が走り去った。念の為に検査するのだろうか。怪我人や死者が出なくて良かった。冥界の河の渡し守りの舌打ちが聞こえてきそうだ。

「あの子、きつとパイロットになりますよ」

「そうだね。でもね、お礼なんていららないんだ。空を守る。それが俺達戦闘機乗りの仕事なんだよ」

空を守る。彼の言葉が心に響いた。滑走路が騒がしくなり始めた。カメラやガンマイクを装備した人の群れが空港の職員や警備員達と争っている。マスメディアがハイエナのように嗅ぎつけたのだ。「ヴァルキリーのパイロット、アンティオキアの戦闘機から旅客機を

「救う！」明日には新聞の一面にその見出しが堂々と顔を出すだろう。
「何か面倒な事になりそうだし、見つからない内に行こうか」
「はい」

繰り返し礼を言う職員達と別れた二人は空港に向かった。受付で荷物を受け取り、手続きを済ませた。衣類や生活道具を詰め込んだメタボリックのスーツケースをアレックスが運んでくれた。流石は男性といった所か、軽々と運んでくれた。さりげない気遣いに感謝した。この若さでジェントルマンとは大した人だ。

空港の外に出ると、アレックスは片手を上げタクシーを呼んだ。乗客の出現に胸を躍らせたタクシーがすぐに走って来た。アレックスは後部座席のドアを開けて先に乗るように促した。頭をぶつけないように注意しながら座席に座った。二人分の荷物をトランクに押し込むとアレックスは隣に座り、ドアを閉めた。運転手に目的地を告げる。年季の入ったエンジン音を響かせて車は走り出した。

今から数か月前、まだパイロット養成学校に通っていた頃の事だ。ある日何の前触れも無く教官に呼び出された。きつと、前日に提出したレポートの事で何か言われるのだろう。あのレポートは今思えば内容が酷かった。追試確実だ。教官の口から出て来た言葉に驚いた。何と、あのチームヴァルキリーの隊長が、メンバーの一人として迎えたいと言ってきたらしいのだ。断る理由なんて無かった。ある筈が無い。

チームヴァルキリーとは、クルタナ空軍が誇る精鋭チームだ。かつて「光の槍」と呼ばれた英雄が指揮するヴァルキリーはパイロット達の憧れの的だ。勿論、自分もその一人だ。その英雄が自分をヴァルキリーに迎えたいなんてこれ程栄誉な事はない。

「光の槍」と称えられた英雄がどんな人物なのかは知らない。解っているのは、男性である事と、名門貴族エリオット家の出身である事、九年前に一人で十五機の飛行機を墜としたという事だけだ。

マスメディアが嫌いなのか、彼がテレビに出ている姿は殆ど見た事が無い。

卒業と同時にユグドラシル基地に配属された。数週間前に届いた手紙には、ヴァルキリーのメンバーを迎えに寄こすと書いてあった。隊長直筆の手紙で、綺麗な文字だった。ユグドラシル基地はクルタナの首都から西に行った所にあるらしい。そこは海に面しており、隣国アンティオキアの国境に近い。何年も前から隣国とは戦争状態で、幾度となく激しい戦いを繰り返している。基地が国境に近い所に位置するのは、すぐにでも飛び立てる利点があるからだ。

海を挟んだ西側の大陸に位置する隣国アンティオキアは軍事国家で、世界でもトップクラスの軍事力を誇っている。東側に位置するクルタナは中立国で、無駄な争いを嫌う平和主義国だ。両国は五年前に激しい戦いを繰り返した。それ以来、両国の関係は悪化の一途を辿っている。

「アルジャーノンさんって私とあまり年が変わらないですよね。チームの皆さんの中で一番若いんですか？」

滑走路で彼と出会った時から抱いていた質問をぶつけてみた。もっと年上の人が迎えに来ると思うていから自分とそんなに年の変わらないアレックスを見て驚いた。十七歳だと彼は言っていた。

「いや、俺より一つ下の子がいるよ。確か…隊長が一番年上だったかな。それと、俺の事はアレックスでいいよ。まあ…パイロットの適性は若い人の方が高いからね。何でユグドラシル基地がこんな街外れにあるか知ってるかい？」

「えっと…アンティオキアとの国境に近いから…？」
「それもあるけど、この辺りはマナが濃いんだ。だから燃料の一部であるマナを集めやすいからだよ」

マナとはこの世界に満ち溢れているエネルギーの事だ。人々はマナの恩恵で文明を築き、発展させてきた。ソエルが乗る事になる飛行機も、今走っている車もマナを消費して動いているのだ。

マナはこの世界にある世界樹から生み出されていると聞く。だが、

何事にも限りがある。近年マナの量は激減しており、いずれは枯渇してしまつらしい。世界中の科学者がその危機を回避しようと研究を重ねているが、遅々として研究は進んでいない。

「世界樹が悲鳴を上げているのに、俺達ヒトは気付いてないんだ……」

ついさつきまで明るかった声とは対照的にアレックスの声と表情は暗く、翳っていた。

「アレックスさん……？」

「ん、いや、何でもない。ほら、基地が見えてきたよ」

心を覆っている憂いを振り払うようにアレックスが微笑んだ。彼が無理して微笑んでいるように見えた。道路と海岸線だけだった風景が変わっていく。働く人で溢れかえるビル。人々が暮らしを営む家。パイロットを見守る管制塔らしき建物が加わった。

いつもの日常を過ごす人々で賑わう街を抜け、車はさらに走り続けた。街外れまで走ると、車は嚴重に警備されているゲートの前で止まった。アレックスが警備員に身分証を見せる。「ご苦労様です」と言うと、警備員はゲートを開けてくれた。

首都から離れた場所にあるにもかかわらず、ユグドラシル基地の敷地は広大だった。車から降りて歩いて行くと、目に広大な滑走路が飛び込んできた。それはとても長く、地平線まで続いているように見えた。滑走路の脇には格納庫が三つあり、通り過ぎる際にちらりと見ると、中で作業している整備士達が忙しそうに動き回っていた。

「あれが宿舎。基地の人達が生活してる。その隣にある白いビルがオフィスビルだよ。作戦会議はそこでやるんだ」

アレックスが滑走路の反対側を指差した。赤茶色の屋根の建物と三階建てのコンクリート造りのビルがあった。ガラス製のドアを開けてオフィスビルに入る。ロビーに人の姿はなかった。床は綺麗に磨かれて二人の姿を映している。右にエレベーターとソファ、奥に階段があった。煙草を吸う人がいるのだろうか、階段の側に灰皿が

置かれていた。靴音が響く。女性が階段を下りて来た。二人に気付き、近くまで来ると彼女は足を止めた。

「あら…アレックス」

「こんにちは、メアリーズさん」

（綺麗な人だなあ……）

そう思った。緩く波を描く長い金色の髪。陶磁器のような白い頬はほんのりと赤みを帯びていて、翡翠色の瞳は優しく細められている。白いワンピースに紺色のジレを羽織ったその姿は、神話に出てくる女神のようだった。

「貴女…新人？」透明感のある鈴の音のような声だ。ぼんやりとしていた。我に返った。

「はっ…はい！今日ユグドラシル基地に配属された、ソエル・ステュアートです！よろしくお願いします！」

「私はメアリーズ・ローレンツ。貴女の先輩になるみたいね。隊長に会いに行くのね？彼はオフィスにいるわ。じゃあ、また後で」

ふわりと髪を揺らし、メアリーズは歩いて行った。主張しすぎない、控え目の花の香りが漂う。

「綺麗な人ですね。ローレンツさんもヴァルキリーのメンバーですか？」

「うん。パイロットの腕は相当なものだよ」

エレベータに乗り、三階で降りる。オフィスの前に着くと、急に緊張感が込み上げてきた。心臓の音が鼓膜を揺るがす。そんなソエルの肩を、アレックスが優しく叩いた。

「そんなに緊張しなくても大丈夫だよ。隊長は優しい人だから」

「ふ…ふわい…」

励ましてくれたアレックスも緊張しているのか、顔が強張っていた。

「アルジャーノンです。只今戻りました！」

アレックスがドアを二、三回ノックする。入れと声が聞こえた。

ドアノブを回し、二人は室内に足を踏み入れた。

オフィスはとてもシンプルだった。過度な装飾はなく、観葉植物と賞状の入った額縁が数点壁に飾られているだけだ。正面にデスクと黒の革張りのソファ。左右の壁に本棚が置かれていた。本棚は綺麗に整頓されていて、難しそうな書物が並べられている。

デスクの脇に青年が立っていた。二人に背を向けた彼は、窓の外を眺めている。方角的にオフィスは滑走路に面している。ここに向かうソエル達を見ていたのかもしれない。ブラインドを降ろすと青年が振り向いた。二人を、自分を見つめている。

「ご苦労だった、アルジャーノン。君が、ソエル・ステュアートか？」

「はい！」

「良い返事だ。私はノワリー・エリオット。チームヴァルキリーの指揮官兼隊長で、ユグドラシル基地を取り仕切っている」

年は二十代前半だろう。見るからに生真面目そうな青年だ。もつと年嵩の人を想像していた。アレックスも背が高いが、ノワリーも長身だった。前髪を伸ばしたショートカットの髪は深い緑色で、切れ長の琥珀色の瞳は鋭い知性の光を湛えている。紺色の制服の胸元には、輝かしい功績を象徴する勲章が着けられていた。肩には階級を現す星が煌めく。中尉か大尉だろう。右手にだけ貴族が着けるような白い手袋を嵌めている。

あれ？

どこかで見た顔だと思った。どこかで会った人だと思った。思い出そうと必死に考えた。モヤモヤしていた記憶がハッキリとしてきた。思い出した。彼は。

「あつ……貴方は……あの時の……？養成学校でぶつかつた……！」

青年が頷いた。言葉を失った。まさか、あの時、廊下で衝突した青年がチームヴァルキリーの隊長だったなんて。英雄「光の槍」と謳われたパイロットだったなんて。そうとも知らずに何て事をして

しまったんだ。死刑を宣告された罪人のように身体が震えた。

「黙っていてすまなかった。それと、もう一つ隠していた事がある。あの時、君の実技訓練を担当した教官も私だ」

「ええええええ　？」

絶叫が迸った。ジェットコースターに乗ってもこの悲鳴は出ないだろう。ファブレ教官も彼だったとは。どうりで見た事がない教官だと思った訳だ。コクピットの中で馴れ馴れしい口を利いてしまった。おまけに、光の槍と呼ばれたパイロットに憧れていると本人の前に告白してしまった。何という失態。恥ずかしさで顔が真っ赤になった。気にしなくて良い。ノワリーは寛大な心で許してくれた。縮こまって返事をした。ノワリーはアレックスに視線を向けた。

「アルジャーノン。三十分前、空港から連絡が入った。アンテيوخアの戦闘機が旅客機を襲撃したそうだな。それを、お前が撃墜したと。ステュアート、すまないが先に報告を聞きたい。座ってくれ」促されてソファに腰掛けた。隣にアレックス、正面にノワリーが座る。ずっと憧れていた英雄とまた出会えた。緊張と興奮を抑えるのに苦労した。

「えっと…彼女を迎えに空港に着いた直後でした。南西の方角からアンテيوخアの戦闘機が飛んで行ったんです。身分証を見せて、管制塔に行きました。戦闘機が飛んで行った方角には、これから着陸する旅客機が飛んでいると聞いたんです」

「お前の乗った機体はどこから調達した？」

「哨戒用の機体が空港にあったのでそれを借りました。それで戦闘機を攻撃しました」

手で機体の位置を示しながら、アレックスが詳しく説明した。ノワリーは真剣な面持ちで聞いていた。納得したように頷くと、彼は組んでいた腕をほどいた。

「解った。簡潔でいい、後で報告書を提出してくれ。ステュアート、長旅で疲れただろう。詳しい話は後日話す。今日はゆっくり休むといい。ああ、そうだ。コレを渡さないとな」

ノワリーが立ち上がり、側まで来た。慌てて立ち上がる。彼はスーツの胸ポケットから小さく光る物を取り出し、手渡した。渡された物を受け取り、しげしげと眺めた。満面の笑みが広がった。

世界樹を模した繊細な模様と、戦乙女ヴァルキリーの横顔が刻まれたエンブレム。表面にはユグドラシル基地と、チームヴァルキリーの名前が彫られている。憧れだったチームの一員になれた証だ。

「ようこそ、チームヴァルキリーへ」

「あっ…ありがとうございます！」

見上げると、ノワリーは微かに微笑んでくれた。端正な顔立ちにドキリとしてしまう。

「アルジャーノン、ブルーがもうすぐ偵察飛行から戻る筈だ。出迎えてやってくれ」

「了解しました」

敬礼し、二人はオフィスを出た。夢見心地に廊下を歩きながら、前を歩くアレックスに話しかけた。

「あの、ブルーさんって？」アレックスが振り向いた。歩く速度を落とし、隣に並んだ。

「ヴァルキリーのエースパイロット。確か…ソエルと同年だったはずだよ。俺はアイツを迎えに行くけど、君はどうする？疲れただろ？部屋に案内するよ」

同じ十六歳という事は、養成学校を出て間もないはずだ。同い年で精鋭チームのエースパイロットとは、相当な腕の持ち主なのだろう。興味が湧いてきた。

「私、ブルーさんに会ってみたいです！いいですか？」

「アイツに？俺はいいけど…アイツは、その、人嫌いで気難しいんだ。大変だよ？」

「大丈夫です！」

「わかった。まだ時間があるし…格納庫に行こう。飛行機を見せてあげるよ」

ビルを出て二人は格納庫に向かった。アレックスは人気があるよ

うで、途中ですれ違った人達から親しげに声を掛けられていた。彼が基地の人達から慕われているのも解る。アレックスは快活で気さくな人柄で、誰にでも優しく接してくれる。いつの間にかアレックスの事を好きになっていた。きつと、いい友達になれるだろう。

格納庫の前に着くと、シャツタの暗がりからバチバチと音が聞こえ、時折オレンジ色の火花が飛び散っていた。アレックスが言うには、リゲルという整備士が飛行機をメンテナンスしているらしい。シャツタをくぐって二人は奥に進んで行った。昼間なのに中は薄暗く、燃料や機械の匂いがした。数機の飛行機が置いてあつてブルーシートで目隠しされた機体もあつた。しばらく歩いて行くと、一人の女の子が機体の陰から顔を覗かせた。

九、十歳の可愛らしい顔立ちをした子だ。茶褐色の髪と、くるくるとよく動く大きな鳶色の目が愛らしい。青いネズミの縫いぐるみを大事そうに抱いている。

「あ！アレックス！」少女はアレックスに気付くと、顔を輝かせ駆け寄って来た。

「ただいま！いい子にしてたかい？」

大きく広げたアレックスの腕の中に少女が飛び込んだ。自分と同じ目線の高さまで軽々と抱き上げる。

「うん！ねえ、そっちの人は誰？」

少女が気付いた。アレックスに降ろしてもらい、興味津々といった顔で見上げる。

「私はソエル。ソエル・ステュアート。今日からこのパイロットになったの」

「あたしはゲルダ。よろしくね、新人さん！」

「うん！よろしくね」

「ゲルダ、リゲルはいるのか？」

「裏でお仕事してるよ。こっち！」

ゲルダの後に続き機体の裏に回ると、三人に背を向けた少年が座り込み、図面を覗んでいた。ゲルダが少年の側に行き、背中をつつ

いた。二言三言言葉を交わし少年が振り向いた。手に持っていた工具を置き、立ち上がる。目を覆っているゴーグルを外すと、青い瞳が現れ、嬉しそうに細められた。

「よお！アレクじゃないか。いつ帰ったんだよ……と、その子は？
見ない顔だな」

「ソエル・ステュアートです！今日ユグドラシル基地に配属されました！」

「隊長が言ってた新人りさんか。俺はリゲル・フォーマルハウト。
ヴァルキリーのメカニックス」

煤の付いた顔でリゲルが笑った。青みがかった銀色の髪は無造作に跳ね、瞳は深海を思わせる濃い青だ。灰色のツナギはオイルで真っ黒に汚れている。ツナギのポケットや腰に巻いたウエストバッグからは工具が飛び出していた。悪戯っ子がそのまま大きくなったような感じだ。

「へえ〜。なかなか可愛いじゃん。可愛い子が入ってきてよかったな」

星の名を冠した少年は首を傾げ、まじまじと眺めてきた。

「なあ、ソエルに飛行機を見せてあげたいんだけど……」

少し困った顔でリゲルが頭を掻いた。顎に手を当て、しばらく考え込むと口を開いた。

「悪い。今日中に全部の機体を見ないといけないんだ。今日は無理だ」

「無理言ってますみません……」

「いいって、気にすんなよ」

「リゲル。アッシュはいつ飛び立ったんだ？」

リゲルは壁に掛けられてある時計に目を向けた。指で時間を数える仕草をすると、振り向いた。

「確か…二時間前だったから…そろそろ帰ってくるはずだぜ」

リゲルが言うと同時に、外からエンジン音が響いて来た。その音は次第に大きくなってくる。耳を澄ましていたアレックスが頷いた。

「この音は…アッシュだな。無事に帰って来たみたいだ。会いに行こうか」

「はい」

「じゃ、俺は整備があるから」

肩を叩くと、リゲルは作業の続きに戻って行った。ゲルダも小走りに彼の後を追って行った。彼女は去り際に振り返ると、バイバイと手を振った。手を振り返すと、二人は来た道を戻り、滑走路に出た。

空を見上げると、機体がこちらに近付いて来るのが見えた。飛行機は無事に着陸して二人の前で止まった。その動きは実に滑らかで、アッシュというパイロットがエースである事を改めて認識させられた。機体は夜空のように深い、ミッドナイトブルーの色だった。機体にマーキングされたパイロットネームと機体名が見えた。

コクピットが開きパイロットが姿を見せた。小柄で華奢なパイロット。地上の重力に押し潰されてしまいそうだ。まず翼の上に降り、それから身軽に地面に飛び降りる。二、三步近づくと、ゴーグルのついたヘルメットを脱いだ。

機体と同じ色の濃紺の髪が、風に揺れた。

朝は大嫌いだ。

窓から差し込む柔らかい太陽の光も、羽のように軽やかに歌う鳥の囀りも、オレにとっては地獄で燃え盛る炎のように熱く、耳元で囁く悪魔のように憂鬱なモノだ。ずっと夜なら良いのに。神様は何で太陽と朝を創ったんだろう。

鳴る寸前の目覚まし時計を止めた。ゴソゴソと動く音。二段ベッドの上から下を覗き込んだ。視界に残る眠りの霧が晴れて、見厭きた髪の色が映った。長身の少年が着替えている。アイツだ。ルームメイトのアレックス・フォン・アルジャーノン。世界樹とマナを発見して、富と栄光を手に入れた大貴族の跡取り息子だ。

アレックスはアルジャーノンという名前を嫌がっていると聞いた。そんなに嫌ならくれてやれと言った事がある。そしたらアイツは複雑な表情を浮かべて、曖昧に笑った。嫌だ嫌だと言っているけど、変化を恐れているから、固定された日常がシフトするのが怖いから、結局はズルズルと引き摺って生き続けている。人間は解らない生き物だ。そんな生き物を創った神様も解らない。解らない事が積み重なって、この世界が出来たんだと思う。

「アツシュ？起きたのか？」

ボーイソプラノの声が奏でられ、マロンペーストの色が揺れて、いつものジャケットを羽織ったアレックスが振り向いた。素早く顔を引っ込めて眠っている振りをした。話しかけられるのが煩わしかった。ドアが閉まる音。スニーカーが擦れる音。二つが遠ざかったのを確認して目を開けた。二度寝しよう。そう思って寝返りを一回。眠りに引き込まれていく刹那、オフィスである男と会う約束をしていた事を思い出してしまった。

舌打ちをしてベッドから這い出した。白の半袖シャツとダークグ

リーンのカーゴパンツに着替えて、熟して落ちた林檎のように転がっているヴァイオレットのスニーカーに変わらないサイズの足を滑らせた。赤い紐を結んで完了。デスクの上のペンダントを首にかけた。そうそう、忘れる所だった。引き出しから小さな紙の箱を取り出してポケットに突っ込んだ。

部屋を出て一階へ。ピロティの向こうにある食堂から賑やかな声が聞こえた。騒がしい輪の中に入る気は無い。オレが行けば、子供達は明日世界が滅びると知った人類のように静かになるから。

朝食はいつも食べない。その必要が無いし、睡眠時間を割いてまで食べたいとは思わないから。それに、他人と馴れ合うのは嫌だ。面白くもない世間話に愛想笑いを浮かべ、安っぽい友情を演じるのも吐き気がする。群れなければ生きていけない奴等と一緒にされるのはゴメンだ。世界が終わるまで、オレは独りで生きていくんだ。

でも、アイツ アレックスだけは違った。極度の人嫌いのオレが唯一心を開いている相手。オレとアイツは特別な絆で結ばれている。友情という陳腐な言葉では無い、もっと強い絆で。

「あら。ブルー君じゃない」

運悪く食堂で働いている女性に見つかってしまった。聞こえないように舌打ちをして振り向く。白いエプロンを着けた女性がそこに居た。白い色を見る度にあの場所を思い出す。消毒液のツンとした匂いが嫌いだっただ。

「朝ご飯食べていくでしょう？おばちゃん、腕によりをかけて作るわ」

「…いらぬ。朝はいつも食べないから。それに、隊長と会う約束をしてる」

「そう、残念ね。でも、朝は食べなきゃ駄目よ」
女性がにつこりと微笑んだ。

いかにもオレを心配しているようだった。

きつと、彼女の微笑みはフェイクなんだ。

見てみる。

今に化けの皮が剥がれて自己満足の塊が現れるぞ。

フェイクの笑顔を返してやった。

満足そうに頷くと、女性は食堂に入って行った。

「バン」

白い背中に見えない機銃を撃ち込んだ。

肩甲骨の辺りに被弾。

真っ赤な血が白に映える。

彼女が飛行機ならすぐに修理できる。

頭はコクピット。

心臓はエンジン。

手足は翼とエルロン、ラダー。

口は機銃で悪意の弾を撃ちまくる。

人間はそうはいかない。

何て不便な生き物なんだろう。

外の空気は冷たかったけど、澄み切って清々しかった。冷たい粒子を吸い込んで頭の中をクリアにした。空は雲が多いが、隙間から晴れ間が見える。この分だと昼前には快晴になるだろう。滑走路の反対側にあるオフィスビルへ。エレベーターで三階に上昇。ノックをして挨拶するのが面倒だった。ノックをせずにドアを開けた。

飾り気の無いシンプルなオフィス。正面のデスクに座って書類を読んでいた青年が顔を上げた。オレがノック無しで入って来る事を知っていたような顔だった。相変わらず、稲妻のように勘が鋭い男だ。

この男　ノワリー・エリオットは初めて会った時から苦手意識を抱いていた。何でも一人でこなしてしまう完璧な青年。戦闘機で言うと、マルチロール機だ。おまけに容姿も端麗で頭も切れて、地位と名誉も兼ね備えている。英雄「光の槍」と謳われて、惜しまれながらも引退したノワリーは、十九歳という異例の若さで大尉に抜

擢されたと聞いた。

それは嘘だと思う。ノワリーは自分の意思でパイロットを引退したんじゃない。欲に塗れた人間の手で翼をもぎ取られて、空から引き離されたのだ。望みもしない地位に祀り上げられて、地上に縛り付けられてしまった。ノワリーの身体には汚れた糸が絡み付いていて、彼が地上で息をする度に、背中に残った翼を少しずつ千切っているんだ。

この男は苦手なのに、どこか似たような雰囲気を感じる。オレと同じように空に焦がれ、

空で散る事を望んでいる。

確信は無い。

だけど、

そんな気がする。

「早いな。この書類を読み終わるまで待ってくれ」

「…ああ。早くしろよ」

腕組みをして後ろの壁にもたれた。オフィスは禁煙だった。アレは煙草とは違う物だが、匂いは煙草と同じように人を不快にさせる事が多い。我慢しよう。環境と人に優しいアッシュ・ブルー。何て滑稽で陳腐な謳い文句なんだろう。辞典並の分厚さを誇る書類を読み終えたノワリーは慣れた手つきでサインを書いて、デスクの引出しにしまった。

「で、オレは何をすればいいんだ？」

「国境から二十五キロ地点を偵察飛行してくれ。それだけだ。これからすぐに飛び立って欲しい。構わないか？」

「解った。グングニルの状態は？」

「フォーマルハウトに連絡しておいた。二十分後には整備が終わるそうさ。他に訊きたい事は？」

「ねえよ」短く答えた。ドアノブに触れて、わざとらしく思い出した振りをした。「そう言えばアレックスはどこに行ったんだ？」

「アルジャーノンは新人を迎えに空港に向かった。何か問題でもあ

るのか？」

「無い。うるさい奴が居なくなつて嬉しいだけさ」

苦笑するノワリーを視界の端に捉えてオフィスを出た。新人と言ふ言葉が気になった。一体どんな奴なんだ。腕はたつのか。色々気になった。考えるのは後で良い。その内、嫌でも思い知るさ。

スモークを吸いながら第一格納庫に向かう。スモークはオレにだけ処方された特別な薬だ。形は煙草に似ているが、とてつもなく苦いしハイになれない。コレを吸わないと身体の調子が保てない。つくづく面倒な身体と思う。

シャツタをくぐつて中へ。ここはいつも薄暗い。貧弱な蛍光灯。電気が点いていても暗闇を追い払えないのか。自分の機体を探した。すぐに見慣れた色の戦闘機を見つけた。機体の前に少年が居た。チームヴァルキリーの専属メカニックチームに所属している少年、リゲル・フォーマルハウトだ。星のように輝く銀色の髪が良く目立つ。名前に相応しい色だ。肩越しにリゲルが振り向いた。

「ウツス。悪いな。もうちょっとかかりそうなんだ。部屋で待つてるよ。終わつたら呼びに行くぜ」

「どのくらいかかる？」

「そうだな……三十分つて所かな」

「いいよ。待つてやる」

近くに積まれてあるコンテナの上に座つた。サンキュと笑つと、リゲルは作業に戻つた。迅速かつ無駄の無い動き。機体の隅々まで知り尽くしている動きに感心した。十七歳という年齢にもかかわらず、リゲルの腕はメカニックチームの中でも一、二を争う程だ。最年少で試験に合格した腕は伊達じゃない。

…ちよつと待て。コイツ、図面を見てねえじゃねえか。チラチラと横目で見える程度かよ。

「オイ」

「ん？」

「テメエ、ちゃんと図面見てるのか？真面目に仕事しろよ」

「図面は覚えてる。何回も整備してるんだ。大丈夫だって」

「ファック。そのスカスカの脳味噌に詰まってるとは思えねえな」

「はいはい。今度からは気を付けます」

リゲルはオレの毒舌を軽く受け流すと、壁際に置いてあつたボンベを抱えて剥き出しになっている燃料タンクの側に屈みこんだ。ボンベから伸びたチューブをタンクに繋ぐ。ノズルを捻って中身をタンクに注ぎ込む。あの中には燃料の次に大事なマナが詰まっている。飛ぶ為には欠かせない大事な物だ。額の汗を拭ったりリゲルが側まで来た。

「終わったぜ」

「一分三十秒オーバーしてる」

「うっ……そんなくらい勘弁してくれよ」

抗議するリゲルを無視してグングニルの側に行った。無限に広がる宇宙のようなミッドナイトブルー。宇宙に空気が無いのが残念だ。空気があれば、宇宙人相手に空中戦を繰り広げられるのに。お前に宇宙はまだ早い。空で我慢しろという事が。

「どうだ？新品みたいだろ？」

「グングニル、もつと軽く出来ねえのか？」

「はあ？何言ってるんだよ。限界ギリギリまで軽くしてるんだぞ。それに、グングニルは他の機体より小さいんだ。もう削る所は無い。これ以上軽くならない。出来ません」

主翼の真下に着けられている機銃に目をやった。世界中で使用されているコルト・ブローニングM2。オレより重い筈だ。

「機銃が邪魔だな。外せよ」

リゲルの顔が呆れ果てたように歪んだ。溜息が地上に落ちた。

「機銃が無いと戦えないだろ。念力で敵を倒すのかよ。エスパーか。大体、何で軽くしたがるんだ？」

「高く昇れるような気がする」

「墜ちるぞ」

「それを望んでる」リゲルの二回目の溜息が足下に落ちた。モヤモヤと渦巻いている。

「馬鹿な事言うなよ。もう行くのか？」

「ああ。濁った空気をこれ以上吸いたくない」

「了解。すぐに準備するよ」

数分の間。滑走路に行った筈のリゲルが戻って来た。忘れ物か？
トイレか？

「アツシユ。言い忘れてた」

「何だよ」

「ちゃんと帰って来いよ」

「ファツク。余計なお世話だ」

ウザい。口うるさい親みたいなさ言うな。中指を突き立ててリゲルの厚意を拒絶した。苦笑いを浮かべたりゲルは数人の整備士と滑走路に走って行った。もう一度グングニルを見上げた。目を閉じて、コイツと空を飛んでいるヴィジョンを思い描く。耳の奥で翼が風を切り裂く音がハウリングした。

そうだ。

早くコイツに乗って、

あの澄んだ、

穢れない大空に行くんだ。

濁りきった空気を吸い、

重くなってしまったては、空に浮かぶ事は出来ない。

そうなりたくはない。

そうなってしまえば……。

オレは生きていけない。

視界一杯に広がる白い雲と、透明なスカイブルー。二つの景色は互いを称え合いながら見事に調和していた。どんなに名を馳せた画

家でも、この景色は描けない。パイロットを包むキャノピーの向こうを指でなぞった。

空に来る度にいつも探してる。

白い雲の上に残された、神様の足跡を。

見つけたら、

きつと、

天国に連れて行ってくれる。

電子音が鳴り響いた。レーダーに映し出される戦闘機の機影。

せつかく夢を見ていたのに。

燃料とマナは充分過ぎる程ある。

十二時の魔法が解けるまで踊ろっじゃないか。

そうだ！来い！

オレの顎はテメエに牙を突き立てたくて、涎を垂らしてウズウズしてるぞ！

「パーティの始まりだ」

エンジンフル・スロットル。

ロール。

機銃を難なく避ける。

フラップ・ダウン。

エレベータ・アップ。

機首を空の上に。

捻りを加えて。

高く昇って行く。

敵も機首を上げる。

「ファック。テメエの飛行機じゃあ、オレには追いつけねえよ」

敵の速度と高度が落ち始めた。機体の性能が違うのだ。身を翻し、敵機は高度を下げていくしかない。敵のパイロットの悔しそうな顔が目に見えかぶ。

「そろそろお開きにしようぜ」

エレベータ・ダウン。

風に祈りを捧げて。

ダイブ。

身体がシートに押し付けられて。

重力が襲いかかる。

ブラックアウトする寸前で操縦桿を引き、

エルロン、ラダーで右。

鋭いターン。

敵の死角に簡単に回り込む。

「お家に帰りな、ボウヤ」

機銃のトリガに指をかけ発射。

すれ違いざまに撃ち墜とす。

黒い煙を上ながら、敵機は白い雲に吸い込まれるように消えていった。

しばらくすると、鮮やかな色のパラシュートが見えた。

パイロットが脱出したようだ。

地上に戻りたがる奴の気が知れない。

「……ファック」

オレも地上に戻ろうとしている。

何で？

何故？

地上に生まれた者の宿命か。

空に留まらない者の運命か。

好きで生まれた訳じゃない。

望まれて生まれた訳じゃない。

人間の自己満足と知識欲、探究心を満たす為に生まれ、生かされて来た。

生きているのが苦痛だった。

生まれた時からずっと、空で死ぬ事を望んでいた。

このまま昇って行けば、天国に行けるのだろうか。

青い空を泳ぎ、雲を突き抜け、太陽を尻目に高みを目指す。

でも、太陽に翼を焼かれたら？
蠟で塗り固められた、傲慢というヒトが持つ見えない翼。
神話に出てくるイカロスのように墜ちるのはゴメンだ。
あまりにも、惨めすぎるから。
どうせ死ぬのなら……。
空で、死にたい。

雲を突き抜けて地上に戻る。ユグドラシル基地の敷地が見えてきた。宿舎。オフィスビル。管制塔。

空に居続けられないオレの帰る場所。

フラップ・アップ。

エレベータ・ダウン。

ラダーを調整。

車輪を出す。

スロットルを絞って。

車輪が滑走路に触れた。

着陸の衝撃が響く。

滑走路をランディング。

グングニルは止まった。

コクピットを開けて主翼の上に降りた。重力が身体を押し潰そうとしてくる。息が詰まりそうだ。滑走路を歩いて来る二人の人影が見えた。こっちに近付いている。一人はアレックスだ。もう一人は女だ。

(メアリーか？いや、違う、少し…若い…)

目の前に居たのは、アレックスと見慣れない一人の少女だった。幼さの残る顔立ち。年は変わらないだろう。金色の髪をポニーテールにして、頭の左上で結っている。どこにでも居そうな、ごく普通の善良そうな一般市民。シンプルな少女だが、目の色は澄んだ青色だった。

何度も何度も夢に出てきた神様にしか作れない色。
ずっと焦がれている空の色だった。

地上に降り立ったパイロットは重力に押し潰される事無く、じつと立っていた。

何故だろう。しばらく彼から目を離す事が出来なかった。

磁石が互いに惹かれ合うような、そんな不思議な感覚を覚えた。

「お帰り、アツシユ。無事で良かったよ」

にこやかな笑みを浮かべたアレックスが歩み寄った。目にかかる前髪を鬱陶しそうに払い除けると、アツシユは彼に視線を向けた。

一瞬、アツシユの目がこつちを向いたような気がした。気の所為だったようだ。彼は目を合わせようとしなかった。

それにしても華奢な少年だ。小柄で、アレックスやノワリーより三十センチは低いだろう。うなじで跳ねた髪は機体と同じミッドナイトブルー。星の見えない夜空のように深い紫色の目は鋭く、全く隙を見せない。軍隊が身に着ける認識票のようなペンダントを着けていた。珍しいアクセサリーだ。白い半袖のシャツに、ダークグリーンのカーゴパンツという服装だった。パツと見では男性とは解らない。声が高ければ、誰もがアツシユという少年を女の子と間違えてしまうだろう。

「ファック。テメエにだけは心配されたくねえな」

心配しているのに何という返し方だ。アレックスは苦笑していた。彼の毒舌は日常茶飯事だという風に。

「そんな事言わない。で、首尾は？」

「一機墜とした。機体の形からして……アンティオキアの野郎だろうよ」

「アンティオキアか……。奴等、まだ世界樹を諦めていないのかな。それとも……」

「オレが知るかよ。オイ！その女！」

いきなり怒鳴られて飛び上がりそうになった。苛立った表情のアツシユが睨んでいる。無視されていたと思っていた。ちゃんと認識してるんじゃないか。

「何だ？テメエは。ガキはさっさとお家に帰りな」

同い年のアツシユの無礼な発言にカチンときた。自分だつて見た目が子供のくせに。どこからどう見ても小学生にしか見えない。

「ガツ！ガキじゃありません！ソエルっていう名前がちゃんとあります！それに、見た目が小学生の貴方にガキ呼ばわりされたくありませんね！」

アツシユの表情が強張った。電流が流れたように頬が引き攣っている。紫の双眸が殺意にも似た光を宿した。どうやら踏んではいけない地雷を踏んでしまったようだ。頭に血が昇って冷静になれなかった。

「…何だと？誰が小学生だつて？オレに喧嘩売ってるのかよ」

「チームのエースだか何だか知りませんが、少しいい気になってるんじゃないですか？」

「そんなに死にてえようだな。面白いじゃねえか。今すぐ墜としてやるよ！」

アツシユと睨み合い、見えない火花がバチバチと飛び散った。ガソリンが気化していれば大爆発していただろう。一触即発の空気が漂う。慌ててアレックスが間に入った。アレックスは背が高い。アツシユの小柄な姿が見えなくなった。

「まあまあ…喧嘩は良くないよ。ソエル、コイツがアツシユ・ブル！。さつきも話した通り、ヴァルキリーのエースパイロットさ。アツシユ、彼女はソエル・ステュアート。今日配属された新人パイロットだよ」

二人を交互に見ながらアレックスが仲裁した。同じチームに所属するのだ。これから幾度となく顔を合わせる事になるだろう。アレックスの言うとおり、喧嘩は良くない。怒りの炎を無理矢理鎮火さ

せた。だが、アツシユの火は消えなかつたようだ。激しい嫌悪感を露わにしたアツシユは両手をポケットに突っ込んで舌打ちした。

「ファツク！ファツク！ファツク！こんなガキがパイロットだと？ハッ！ヴァルキリーも墮ちたモンだな！アレックス！星野郎にちゃんと機体を整備しろって言っとけよ！」

お世辞にも上品とは思えない言葉使いだつた。一度も振り返りもせずにアツシユは歩いて行つた。渡り鳥のように、小柄な姿はすぐに見えなくなつた。不満が噴出した。

「何なんですか？あんな人がエースパイロットだなんて…信じられません！隊長とは大違いです…」

「ごめん。アイツも悪い奴じゃないんだ。俺からも謝るよ。許してやってくれないかな」

まるで自分が悪い事をしたようにアレックスが謝つた。甘く整つた顔は見ていて痛々しい程落ち込んでいた。彼に文句を言つても仕方が無い。肩を落として息を吐く。張り詰めていた緊張の糸が緩んだ。溜まっていた疲れが一気に押し寄せて来た。

目の覚めるような青空は、いつの間にか憂いを帯びたオレンジ色の夕焼けに染まりかけていた。

彼 アツシユと上手く付き合つて行けるのだろうか。

不安と共に、役目を終えた太陽が名残惜しそうに沈んで行つた。

耳元でけたたましい音が狂つたように叫んでいる。安らかな夢の中から強制的に離脱させられた。眠気の残る視界に小刻みに揺れる目覚まし時計が映る。唸りながら手を伸ばし、アラームのスイッチをOFFに。時刻は八時二十分。え？八時…二十分？ゆらゆらと漂っていた眠気は一気に吹き飛んだ。

「うそお！もうこんな時間？やだあ！どうしよう！」

昨日、アレックスに「明日は八時半にオフィスに集合だよ」と言われていた。後十分しか猶予が無い。ベッドから飛び出し、慌てて

準備を始めた。パジャマを脱ぎ捨ててハンガーに掛けてある制服に着替える。パジャマは丸めたまま放置。畳んでいる余裕は無い。寝癖で纏れた髪を櫛で梳いて、いつもと同じヘアスタイルに。五分でそれらをやってのけた。

一階のロビーに駆け込むと、アレックスが居た。読んでいた新聞をマガジンラックに戻したアレックスは片手を上げて微笑んだ。焦げ茶色のジャケットとジーンズ姿ではない。同じ制服を着ている。

「おはよう、ソエル」

「アレックスさん？急がないと遅刻ですよ？」

「俺も今起きた所なんだ。同じ遅刻仲間が居て安心したよ。じゃ、行こうか」

恐らくアレックスは待つていてくれたのだろう。彼の優しさが嬉しかったが、同時に罪悪感も覚えた。いくら新人とはいえ、迷惑をかけたばなしというのもバツが悪い。自然と溜息が洩れる。もっとしっかりしなくては。心の中で叱咤した。

オフィスの前に着くと中から話し声が聞こえた。既にミーティングは始まっているようだ。ノワリーの厳しい顔が目に見え。恐る恐るドアを叩き、二人は部屋に入った。

デスクの正面にあるソファにメアリーとリゲルが座り、部屋の隅っこに腕組みをしたアッシュが壁にもたれて立っていた。紫の目がチラリと一瞥し、すぐに目を逸らした。デスクには眉間に皺を寄せたノワリーが座っていて、分厚く束ねられた書類に目を通していた。早く謝らないと。時間が経てば経つ程謝りにくくなる。

「寝坊して申し訳ありませんでした！でも、アレックスさんは悪くありません！私を待つていてくれたんです！」

来るなら来い。お叱りの言葉を覚悟して頭を下げた。しんとした静寂。いつまで待つてもノワリーの鋭い声が聞こえて来ない。

「あ…あれえ？」

「隊長。ソエルとアレックスが来たわよ」

微笑みながらメアリーが言った。彼女の隣に座っているリゲルは

笑いを堪えているようで、小刻みに肩が震えている。アッシュは知った事かという表情だ。書類を読んでいたノワリーが顔を上げた。
「時間通りだな。全員揃ったな？では、今日のフライトの詳細を説明する」

「まっ…待って下さい！私、十分も遅れたんですけど…」

「十分も？いや、そんな筈は無い。ローレンツ、今は何時だ？」

「八時四十分…三十五秒よ」腕時計を覗き込んだメアリーが答えた。ノワリーはデスクの上にある置時計を手に取った。時間を確かめるように何度も覗きこむと、彼は溜息をついた。裏に付いているツマミを回して時刻を調整した。

「ふむ…。すまないな、二人共。どうやら私の時計が遅れていたようだ。時間は遅れたが、予定通り始めよう」

二人はメアリーとリゲルの向かい側に座った。立ち上がったノワリーはホワイトボードを引っ張って来た。ユグドラシル基地周辺が詳細に描かれた地図を貼り付け、振り返った。タクト代わりのペンで地図を指し示す。

「アンティオキアが度々クルタナの領空を侵略していると情報が入った。基地から北北西に六十キロの地点だ。ステュアート、ブルー、お前達に監視飛行を命ずる。もし、敵機に遭遇した場合はまず警告しろ。相手が警告を聞き入れない場合は追い払え。撃墜は最後の手段だ。ブルー、彼女のサポートを頼んだぞ」

チツとアッシュが舌打ちした。眉を顰めたノワリーがアッシュを見つめる。

「この女と飛ぶのはゴメンだね。オレは下りる」

「それは出来ない。ステュアートと飛ぶんだ」

「それは命令か？」

「そうだ」

気にいらねえ。アッシュが吐き捨てる。あからさまに嫌な顔をしてアッシュはオフィスを出て行った。気まずい空気が漂う。気を取り直したノワリーが全員を見回した。

「正午に滑走路に集合だ。アルジャーノン、フォーマルハウト。ステュアートを彼女の機体まで案内してやってくれ。以上だ」

アレックス達はオフィスから出て行った。残っているのは自分だけだ。デスクに座ろうとしたノワリーが怪訝そうに見てきた。

「あ…あの…隊長…」

「どうした？解らない事でもあったのか？ブルーの事なら気にしなくていい。彼はいつもあんな調子だ。誰に対しても冷たい態度を取るんだ。心配するな」

「はい。それと…時間の事なんです…」

椅子に座ったノワリーは背もたれに身体を預けた。思い出したように頷く。

「気にするな。私の時計が遅れていた。それだけだ」

「はい。ありがとうございます」

「礼ならアルジャーノンに言つと良い。長旅で疲れたお前を休ませてやって欲しいと言つて来た。ただし、今回だけだ。お前は名のあるチームの一員だ。次からは気を引き締めるように」

「はっ…はいつ！失礼します！」

敬礼してオフィスを退出した。ロビーで待っていたアレックス、リゲルと合流する。二人共好奇心で目が輝いていた。オフィスで何を話していたのか気になるようだ。

「オフィスで何を話してたんだ？」リゲルが尋ねてきた。やっぱり来たか。

「フライトの事で色々…」

「でも、隊長と二人きりだったんだよね。もしかして…愛の告白とか？」

「マジかよ。上司と部下だぞ。それに、八つも年上だぜ」

「愛に身分も歳の差も関係ないよ。で、キスしたの？」

「キスはもうしたんじゃないか？もつと過激な事だろ」

「ちっ 違います！アレックスさんとリゲルさんの馬鹿！」

真っ赤になつて腹の底から大声で怒鳴った。ノワリーに聞こえた

んじゃないかと思うくらいの声量だ。

「Schelmischer Erfolg! (いたずら成功!)」

悪戯小僧のような笑顔を浮かべたアレックスとリゲルは逃げて行った。飛行機まで案内してもらった約束だ。慌てて後を追いかけた。

並んで歩く二人は対照的だった。ファッションも性格もアシメトリーだ。制服をきちんと着こなしたアレックスは、貴族のような上品さと優雅さを醸し出していた。その服装のまま社交界のパーティーに行っても通用しそうだ。快活で気さくな彼は誰からも愛されるタイプだろう。

反対にリゲルは制服を独自のスタイルに着崩している。ボタンもきちんと留めず、ネクタイもしていない。チョーカーに左耳にはシルバーのピアス、右手にはブレスレットと指輪とアクセサリーが目立つ。嫌味だと思わない丁度良い個数だ。見た目が派手で、少し近寄りがたい印象を覚えるが、話してみると面白い。アレックスが貴族の子息なら、リゲルは町の不良といった所か。

「そう言えば、リゲルさんってメカニックですよ。どうしてミーティングに参加していたんですか？」

「メカニックチームの中で一番優秀だからな。代表で参加してるんだよ」

エヘンとリゲルが胸を張る。彼の隣でアレックスが笑いながら首を振った。

「違うよ。リゲルは酷い悪戯小僧だから、監視してるんだと思うよ」「監視？何でだよ」

「ほら。三年前の莓ジャム事件。あれからお前はミーティングに参加するように言われたんじゃないかなかったっけ」

「ああアレか。言われてみればそうかもな」

「莓ジャム事件？」深刻そうではない名前に興味を湧いた。

「三年前ね、俺とリゲルで隊長の靴に苳ジャムを入れたんだよ。その時の隊長の顔は見物だった」

「そうそう。ちょっと半泣きだったんだぜ」

常に冷静なノワリーの半泣き顔を想像して吹き出してしまった。

あのグニヤツとした感触のジャムを踏んでしまったら、誰だって半泣きになるに違いない。もし、その場に居たら、どんな顔をしていただろう。

「仲良いんですね」

「そうかな。結構喧嘩とかしてたよ」

「あのチビが俺よりデカくなりやがって。ショックだぜ」

「牛乳飲めよ。背が伸びるよ」

「それ、アツシユに言ってみろよ。機銃で撃たれるぜ」

前を歩きながら楽しそうに話す二人を羨ましいと思った。男の子同士の友情は青空のように爽やかなのに、女の子同士の友情というモノは、梅雨空のように湿っていて憂鬱な部分が多いのだ。同性同士の友情も悪くは無いと思っている。でも、時々爽やかな友情に憧れてしまう。

色々な会話を楽しんでいる内に第一格納庫の前に着いた。先に中に入ったリゲルの手招きに導かれて足を踏み入れる。相変わらず薄暗い。鯨の胃袋の中に迷い込んだ気分だ。第一格納庫はヴァルキリー、第二、第三格納庫は二つのチームが使用しているらしい。機体の整備をしたり、機械のメンテナンスをしているメカニック達が挨拶してくれた。数年ぶりに配属された新人が珍しいのだろう。

「昨日は悪かったな。メンテは終わったし、今日はヴァルキリーの機体を見せられるぜ」

「本当ですか？」

「うん。まずは俺の機体を見せるよ」

アレックスに案内されて機体の所へ。F-15ストライクイーグルと呼ばれる機種だ。二十数年前に開発された機体は全長十九メートルを超す機体にも関わらず、航続距離、速度、機動性に優れてい

る。胴体側面に大きく膨らんだ燃料タンクに、ランターン LANTIRN システムと呼ばれる赤外線監視装置、地形追従レーダーを搭載している。ボデイは鮮やかなジエイドグリーンに塗られていた。

「名前はメイデンリーフ。出会って三年かな」

「うわあ……」

「んで、隣にあるのがメアリースさんの機体、ブリュンヒルドだ」

感嘆する暇もなく、隣の機体に目を向けた。英雄に恋をした悲劇の戦乙女の名前。五年前に退役したF-14トムキャットだ。全長はメイデンリーフと同じくらいだろう。可変後退翼の採用により、高度での高速性能と低高度での機動性、短距離離着陸性能を両立させた機体だ。ボデイは淡いオレンジ色で、霧の向こうに沈む夕日を思わせた。

「最後に期待の新人さんの機体を紹介するぜ」

ブルーシートで覆われた機体の前に案内された。リゲルがブルーシートを捲った。真っ白な機体が視界に入った。

「これが、アンタの飛行機だ」

F-16ファイティングファルコン。全長は十五メートル弱だろう。高性能の代償として高価格になったF-15を補完する軽量戦闘機計画で開発された戦闘機だ。胴体と主翼を滑らかに繋ぐブレンドッド・ウィング・ボデイ。大きくて視界良好なキャノピー。操縦桿が右コンソールに配置されている珍しい機体だ。機体の重量はF-15の半分ほどしかない。

目の前に現れた機体の美しさに声が出て来なかった。相應しい言葉で褒めたいというのに、言葉が声にならなかった。翼を広げた白鳥のように、優雅で繊細な形。今にも大空の彼方へ飛び立ちそうだが見惚れる隣でリゲルが得意そうに胸を張った。

「凄いだろ？最新のエンジンで、少ない燃料とマナで長時間の飛行が可能になってるんだ。スピードはアッシュのグングニルに劣るけど、安定感と旋回能力はこっちの方が上だぜ。で、名前はとうする？」

「え？」

「自分の戦闘機には好きな名前が付けられるんだよ」後ろに立つアレックスが助言してくれた。

「じゃあ……アルヴィト！」

「アルヴィト？」二人が同時に訊いた。

「はい。古い言葉で、純白っていう意味なんです」

「へえ〜。いい名前じゃん。お前よりネーミングセンスあるな」

「ほっとけ」

二人の掛け合いに笑いながらアルヴィトと名付けた機体に近付いた。そつと、白いボディに触れた。

「よろしくね。アルヴィト」

もう少しアルヴィトを眺めていたい。その為には格納庫の主であるリゲルに許可を貰わないと。アレックスと話している銀髪の整備士の側に行った。

「あの、リゲルさん」

「ん？何？」

「もう少し、アルヴィトを見てても良いですか？」

「ああ、いいぜ。俺とアレクは宿舎に居るから。何かあったら呼んでくれ」

「はい。ありがとうございます」

二人を見送って、もう一度アルヴィトを見上げた。ボディには傷も汚れも無かった。ヴァルキリーのメカニックチームが丹精込めて整備してくれたのだらう。嬉しかった。機体の周りを一周してあらゆる角度から楽しんだ。早く一緒に飛びたい。気持ちが逸る。

「あれは……」

アルヴィトの向かい側にもう一つ機体があった。夢中になり過ぎて今まで気付かなかった。一度だけ見た事がある、ミッドナイトブルーの戦闘機。あのエースパイロットの機体だ。側に行った。

機体を見上げて驚いた。F-35Aライトニング。現在開発中の戦闘機ではないか。部隊配備されるのは来年だと聞いている。エー

スパイロットである彼だけに特別に支給されたのだろう。

アッシュの機体はただ速く飛ぶ事だけを考えて設計されたような形だった。余計な物を全て削ぎ落としたその機体は簡単に撃墜されそうに見えた。目立った傷も、被弾した跡もボディには無かった。彼の腕が卓越している証拠だ。アルヴィトと対になる色が綺麗だった。触れてみようかと手を伸ばした。

「オイ。グングニルに触るんじゃねえよ」

刺々しい声が響いた。格納庫の入り口にアッシュが立っていた。嫌悪を露わにした顔で睨んでいる。いつから居たのだろう。三人が立ち去るのをずっと待っていたのだろうか。

「あ…。ごめんなさい」

「ファック。邪魔だ」

アッシュは早足で脇をすり抜けて行った。ミッドナイトブルーの機体　グングニルを見上げている。異常な点が無いかチェックしているのだろう。彼は近くに置いてあった梯子を胴体に立て掛けた。梯子を上ってアッシュはコクピットに乗り込んだ。一体何をやるんだろう。気になって梯子を上った。

「あの…」両手を頭の下で組んで、目を閉じようとしていたアッシュと目が合った。

「…何だよ」

「何をするんですか？掃除ならお手伝いしますよ」

「ちげーよ、馬鹿女。フライトまで寝るんだ」

「えっ？」

フライトの前は神経が昂って、なかなか寝付けないモノなのに。流星は精鋭チームのエースパイロットだと感心してしまった。眠たそうにアッシュが欠伸をした。鋭い牙のような八重歯が見えた。

「オイ。…あんまり気張るなよ。オレ達が飛ぶ範囲は敵機と遭遇する事は滅多にねえよ。ただの偵察飛行だと思え。ま、ただのクソ面白くない偵察飛行だな」

思いがけないアッシュのアドバイスに驚いた。心配して言うてく

れたのだろうか。いや、足を引つ張られたくないから仕方なくアドバースしたのかもしれない。心配してくれているのだと思っておこう。最悪の出会い方をしたのに。少し見直した。

「は…はい！時間が来たら、起こしますね」

「はあ？んな必要ねーよ。コクピット閉めるからよ。…手エ挟むぞ、どける」

頷いて梯子を下りた。頭上で音が唸る。クラムシエルのキャノピーが閉まっていった。もう一度アルヴィトを眺めて格納庫を出た。立ち去る前に、一度だけ振り返ってグングニルを見つめた。透明な繭の中でアッシュは戦いの時が来るまで眠っているのだろう。

口の悪い、エースパイロット。

アッシュ・ブルー！

思った程、悪い人じゃ無いのかもしれない。

ついに初フライトの時がやって来た。支給されたフライトスーツに着替えて滑走路に向かった。ガチガチに緊張していて、歩く時に右手と右足が同時に出るありさまだった。滑走路にはアルヴィトとグングニルが引き出されていた。ノワリーとヴァルキリーのメンバーも居る。その中にアッシュの姿は無かった。ノワリーが近付いて来た。

「緊張しているようだな」

「はひ…」

「そう緊張しなくても大丈夫だ。お前達の飛ぶ範囲はクルタナの領空だ。敵に遭遇する事は無い。肩の力を抜いて、実技訓練だと思えば良い」

「はい。ブルーさんからも同じ事を言われました」

「そうか。そういえば、ブルーはどこに行った？」

「ここに居るよ」

遥かな高みから声が降って来た。見上げると、グングニルのコク

ピットからアッシュが見下ろしていた。整備士達はアッシュが乗っている事に気付かず、グングニルを滑走路に引き出したらしい。彼は身体を伸ばすと盛大な欠伸をした。緊張している様子など微塵も感じられない。経験の差を思い知った。

「準備OKです！」メカニックが合図を送って来た。ノワリーが頷く。

「必ず、無事に帰還するんだ。健闘を祈る」

白い手袋を嵌めた手が肩に置かれた。祝福の言葉より心強い言葉だ。全身を拘束していた緊張が一気に解けた。

「はっ…はいつ！行って来ます！」

敬礼をしてノワリーを見上げた。元英雄の指揮官は頷き、敬礼を返した。コクピットに居座るアッシュと目が合った。アッシュは酷く冷めた目で二人を見下ろしていた。小学校に初登校するガキか。きつと、そう悪態をついているに違いない。

華奢な身体がコクピットに沈んだ。キャノピーが閉まっていく。置いて行かれそうだ。慌ててアルヴィトに乗り込んだ。全ての機器をチェック。オールグリーン。スロットルレバーを押し上げる。エンジンの唸りと共に心臓の音が高鳴っていく。アルヴィトとグングニルは大空に飛び立った。

滑らかに風を切る翼の音が心地良い。無限の空に飲み込まれてしまいうさだ。高みまで上昇して、宇宙まで飛んでみたい。恒星や銀河が出迎えてくれるだろう。

「オイ。テメエ、飛んだ事はあんのかよ」

無線からアッシュの声が流れて来た。相変わらず不機嫌の代名詞のような声だ。

「あっ…ありますよ！って言っても、実技訓練だけですけど…。何度も訓練しましたから大丈夫です！」

「チッ。ド素人が…。無線のスイッチは入れておけよ」

「解りました」

フライトは順調だった。アッシュとノワリーの言葉通り、敵機の

姿は無かった。時計を確認。そろそろ基地に帰還する時間だ。

『時間だ。戻るぞ……ステュアート』

驚いて飛び上がった拍子にキャノピーに頭をぶつけてしまった。超が付く程人嫌いで毒舌家のアッシュが名前を呼んだのだ。少し認めてくれたんだ。ほんの僅かでも嬉しかった。一人喜びを噛み締めた。

「了解です！ブルーさん！」

『はあ？何だよ、その呼び方……』

突如コクピットに響き渡った警告音がアッシュの声を掻き消した。直後にリーダーが反応し、デジタルの敵機の機影がクツキリと浮かび上がった。敵は二機の背後を飛んでいる。少しずつ距離が詰められていった。

『ファック！オレは左に行く！お前は右に旋回しろ！』

グングニルが左に傾いてアルヴィトから離れて行った。電流のように緊張が全身を駆け巡る。

操縦桿を握る手が震えていた。

実戦は初めてだ。

飛行機を、

人を墜とすのも。

でも、

そつしなければ。

墜とされる。

『ソエル！』

アッシュの叫び声が鼓膜に響いた。右に旋回したはいいものの、アルヴィトは馬鹿みたいに突っ立っていた。無防備なアルヴィトに敵機が迫る。グングニルが脇を駆け抜けた。敵を挑発するように、主翼を振っている。アルヴィトからグングニルへ。ターゲットが変わった。アルヴィトから離れた場所で、両機は空中戦を繰り広げて

いた。

グングニルがスロツトルを上げる。

敵の進行方向に鋭く旋回。

敵機はグングニルを追い越してしまった。

オーバーシユート。

ブレイク成功だ。

グングニルがロール。

無防備な後ろに回り込む。

戦闘機にとって致命的なエリアになるリーサルコーンに入り込んだ。

射程距離に捉え、機銃を発射。

弾が軌跡を描き、

綺麗に穴を穿いて撃ち抜いた。

目の前で爆発した機体が墜ちて行く。

パイロツトは？

パラシユートは見えない。

コクピットに囚われたまま、炎上して灰になったのだろうか。

呆気無く、

いとも簡単に、

目の前で命が散って行った。

これが戦い。

戦争なんだ。

アツシユが居なかつたら、

炎上して、散ったのは自分だ。

二機は何とか無事にユグドラシル基地に帰還した。アルヴィトから降りてヘルメットを脱いだ。汗で湿った髪が顔に張り付いていて気持ち悪い。ぼんやりと髪の毛を引き剥がしていると、空気のように軽く、体重を感じさせない足音が近付いて来た。怖くて顔を上げ

る事が出来なかった。細い腕が襟元を掴んだ。激しい憤りで暗くなつた紫の双眸が睨んでいた。

「このファツキン野郎！何やってやがる！テメエはパイロットだろうが！敵を墜とすのがオレ達戦闘機乗りの仕事なんだよ！オレが居なかつたら、テメエは今頃棺桶の中だぞ？ヤル気あんのかよ！ああ？」

「……ごめんなさい」

身体は小刻みに震え、蒼白な顔をしていた。敵機の残像が脳裏に焼き付いて離れなかった。

「……クソ野郎が」

舌打ちをするとアツシユは襟元を掴んでいた手を離した。冷えきつた目で一瞥すると、アツシユは背中を向けた。一步、また一步と距離が遠ざかる。

「まつ……待つて！」置いて行かれたくない。アツシユの細い腕を掴んだ。アツシユが振り向く。氷河のように冷たい目だ。

「どこへ行くんですか？」

「オフィスだ。報告に行く」

「私も……」

掴んでいた手が勢い良く振り払われた。アツシユの視線に鳥肌が立った。存在を完全に否定しているような視線だった。

「墓場から這い出て来た死人みたいな顔しやがって。来るな。迷惑なんだよ。死人の方がまだマシだ。テメエは部屋に戻って荷物でもまとめてろ」

「……ごめ……んなさいっ……」

「……空で死ぬのは……オレだけでいいんだよ」

「……え？」

「……ファツク」

顔を背けるとアツシユはオフィスビルの中に入って行つた。群れからはぐれた鳥のように、広大な滑走路に一人取り残された。

忘れる事が出来なかった。

アッシュが呟いた言葉と、
紫の瞳に宿ったあの表情。
それは、まるで、
空に、
死に焦がれているようだった。

隊長に報告に行つたアツシユと別れ、重い足取りで宿舎に戻つた。心も体も疲れ果てていた。誰も居ない談話室のソファに座つて俯いていると、階段を下りてくる足音が聞こえた。アレックスが姿を見せた。長い脚を包むジーンズに白いカッターシャツ。焦げ茶色のジャケットは着ていない。柔らかな微笑みを浮かべた彼が側に来た。

「お帰り、ソエル。無事で良かったよ。アツシユは？」

「ブルーさんは…オフィスです。隊長に報告しに行きました」

「顔色が悪いけど大丈夫？飲み物でも買つて来ようか？」

隣に座つたアレックスが覗きこんできた。逃げ帰つて来た臆病者を心配してくれるなんて、本当に良い人だ。普通、優しい言葉は人を安心させるモノなのに、今はそれが酷く辛く感じる。彼に甘えて、全て吐いてしまえば楽になれるだろうか。

「オイ。役立たずに甘い顔すんじゃないやねえよ」

悪魔のように冷たく、ナイフのように鋭い声。談話室の入り口にアツシユが立っていた。苦虫を噛み潰したような顔で睨みつけている。目が合うのが怖かった。顔を伏せたままだった。眉を顰めたアレックスが立ち上がった。

「何だよ。役立たずって」

「ソイツはイキがつてたくせに、たつた一機の飛行機さえ墜とす事が出来なかつたんだぜ。ハッ！呆れるぜ。何の為にパイロットになつたんだ？空を飛びたいからか？そんなら部屋に籠つて空想でもして、模型の飛行機と遊んでろ。さつさと辞めちまえ！ファック！」

アツシユの辛辣な言葉は機銃の弾となり、心を撃ち抜いた。ターンもロールも出来なかつた。ここは空ではない。重力に縛られた地上だ。羽が無いから、飛んで逃げる事も出来ない。アレックスの表

情が変わった。アツシユの前に立って小柄な彼を見下ろした。

「…言い過ぎじゃないのか？彼女は新人なんだ、いきなり敵を墜とせなんて無理だよ。お前はパートナーだ。ソエルを補佐するのが役目だろ？」

「フアック！こんなクズに構ってられるか。墜ちればよかったんだよ！」

「お前！」

アレックスがアツシユに掴みかかった。アツシユの襟元を掴み、壁に叩きつけるように押し付けた。いつも穏和で、滅多に怒る事のないアレックスの顔は激しい怒りで歪んでいた。拳が振り上げられる。慌てて駆け寄り、アレックスの背中にしがみ付いた。ぎゅっと白いシャツを掴む。アツシユを殴ろうとした拳が止まった。

「止めて下さい！全部私が悪いんです！全部私がつ……悪いんですつ……！」

「…ああ、そうだ。全部テメエの所為だ。オレの前から消える」
「……ごめんなさいっ」

もうこれ以上涙を堪えるのは無理だった。泣き出す所を見られるのが嫌だった。泣けば何でも許される訳ではないのは解っていた。でも、涙は言う事を聞かずに溢れようとしていた。急いで階段を駆け上がり、部屋に飛び込んだ。ベッドのシーツに顔を押し付け、思い切り泣いた。

不甲斐ない自分が情けなかった。

アツシユの言うとおり、墜ちればよかったのだ。

背中にしがみ付いていたソエルは階段を駆け上がって行った。アツシユを掴んでいた手をほどく。沸々と湧き上がる怒りを抑えて息を吐いた。アツシユの毒舌は昔から知っているが、これは酷過ぎると思った。だが、彼を殴っても何も解決しない。後味の悪さが残るだけだ。

「…お前、そんなにソエルが嫌いなのか？」

「反吐が出るな。さっさと家に帰ればいいんだよ。アイツは戦闘機乗りにはむいてねえ。…優しすぎるんだよ」

「…アツシユ、お前…」

ぼつりと呟いたアツシユの顔に暗い影が出来た。無言のまま脇をすり抜け、華奢な背中が階段の暗がりには消えていった。

それから数週間が過ぎ去った。あれから飛ぶ事も無く、鬱屈とした日々が続いた。食事も喉を通らず、部屋に籠る毎日。心配したアレックスとメアリー、リゲルが部屋を訪ねて来たが、その都度大丈夫だからと嘘を言っただけで彼等に会おうともしなかった。部屋の中は心の中を映したように荒れ果てていた。床には脱ぎ捨てられた衣類が置まれる事無く散らばっていて、真つ暗な部屋のカーテンは閉まっていた。たまに毛布にくるまり、ベッドの上で何度もすすり泣いた。墜とされる恐怖。

アツシユの鋭い言葉が心を抉る。

もう、駄目かもしれない。

もう……。

空で散れないなら、

いっそ、地上で。。。

虚ろな目に、床に転がっている剃刀が映った。ベッドから這い下りて剃刀を手を取った。カバーを外すと灰色の刃が顔を出した。罪人を待つギロチンのように血を吸いたがっている。貪欲な刃先を左手首に当てた。軽く力を込める。細い線が手首に刻まれ、真紅の珠がぶつと浮かんだ。もっと力を込めなければいけない。だが、一線を越える事が出来なかった。

不意に、死ぬ前にアルヴィトを見たいと思った。のろのろと立ち上がって、手探りしながら暗い部屋を出た。アツシユ達と会いませんように。臆病な祈りをしながら階段を下りた。幸い誰にも会う事

無く宿舎を出る事に成功した。綺麗な星空だった。神様からの最後のプレゼントだろうか。

滑走路を横切って第一格納庫の中を覗いた。整備士やリゲルの姿は無い。真夜中だから当然か。安心して中に入り、電気を点けた。ジジジと虫の羽音に似た音で鳴きながら細長い蛍光灯は明るくなった。アルヴィトを認識。側に行つて見上げた。汚れの無い真っ白な色が、荒れ果てて傷ついた心を清めていく。ジワリと涙が込み上げた。

「…っ…ごめんねっ…ごめんねっ…アルヴィト…！情けないパイロットでごめんねっ……！」

白いボディに縋り付いて泣いた。泣き叫んだ。やっぱり死にたくない。アルヴィトと一緒に、ヴァルキリーのパイロットとして空を駆けたい。

「誰か居るのか？」

入口の方で人の声が聞こえた。涙で濡れた顔を上げて振り返る。月の光を背後に浴びたノワリーが立っていた。彼はゆっくりとした足取りで中に入って来た。

「ここで何をしている？」

ノワリーは厳しい表情で見下ろした。アツシユの報告を聞いて呆れ果てているのだろう。弁明しても惨めなだけだ。口を閉ざした。ノワリーが何気なく視線を落とした。冷静な面が僅かに動く。素早く伸びた手が左手を掴んだ。そのまま顔の前まで持つて来る。シャツの袖が血で滲んでいた。剃刀で切った傷だ。しまったと思つた時には遅かった。ノワリーの手が袖を捲り上げた。直線に走つた傷が現れる。端正な顔に眉間の皺がきつく寄つた。

「…これは何だ？」

「……」

「質問に答えるんだ」

「…剃刀で切りました。死にたかつたんです」

「理由は？」

「…この前のフライトで、私はチームに迷惑をかけました。ブルーさんにもそう言われました。戦う事の出来ない臆病者の私は、生きていても仕方が無いって思っただけで……」

パシッ。乾いた音が格納庫に木霊した。ノワリーに叩かれた頬が赤く染まった。言葉は出ない。ただ、呆然と頬を押さえていた。叩かれた頬ではなく、心が痛かった。唇を噛み締めたノワリーは早足で格納庫から出て行った。見放されたのか。ズルズルと床に座り込んだ。数分の間放心していた。再び足音が。戻って来たノワリーは薬箱を持っていた。彼は正面に座った。スーツが汚れてしまうのに変な心配をした。傷薬。ガーゼ。包帯。中身が次々と並べられていった。

「腕を出しなさい」

素直に従って左手を出した。手首を握ると、ノワリーは傷薬を染み込ませたガーゼで消毒した。ツンとした匂いが鼻の奥と傷口に沁みだ。黙々と作業が続けられる。綺麗なガーゼが傷口を覆い、包帯がきつめに巻かれた。

「…何故叩かれたか解るか？」

ノワリーの声は震えていた。答える事が出来ずに沈黙していた。「お前はチーム全員の気持ちを裏切ろうとした。それがどんな事が解っているのか？」

一言一言が心に突き刺さった。馬鹿な事をしてしまった。遅すぎる後悔が責める。

「…私…戦う事が出来ない臆病者で…皆に迷惑を……」

「我々はチームだ。迷惑をかけるのは当然だ。失敗を恐れるな。人は傷つく度に強くなれる。それを忘れるな。皆がお前を心配している。勿論、私もだ」

ノワリーの手が上昇。叩かれて赤くなっていた頬を優しく撫でた。ノワリーの両手が握り締めている手を包み込んだ。温かい体温が優しさとなり、凍りついていた心を溶かしていった。涙腺が激しく揺さぶられる。張り詰めていた糸が切れた。今まで堪えていたモノが全

て溢れ出した。

「うっ……うわああああんっ！」

ノワリーにしがみ付いて泣き叫んだ。彼の胸に顔を埋めて慟哭した。驚いた顔をしていたノワリーは背中に腕を回して、慰めるように頭を撫でて優しく抱き締めてくれた。

私はこんなに心配されている。

優しくされるまでその事に気付かないなんて。

まだまだ子供だ。

情けないくらい。

心の中で吹き荒れていた嵐が収まって、静けさが訪れた。ノワリーから離れて涙と鼻水を服の袖で拭いた。ノワリーが胸ポケットからハンカチを取り出して渡した。ハンカチを受け取り、鼻をかんだ。綺麗にアイロンのかけられたハンカチを皺くちやにしまった。

「落ち着いたか？」

「はい。あっ……これ、洗って返します」

「気にするな」

「本当に……申し訳ありませんでした！私、自分が不甲斐ないです！」「謝るのは私の方だ。ブルーから報告を聞いた。お前が新人だという事を考慮しなかった私の判断ミスだ。本当にすまなかった」

「そんな！私が悪いんです！隊長が謝らないで下さい！」

「いや、私の責任だ。……お前とブルーを死なせてしまう所だった。

ブルーの報告によると、お前達は国境から数キロの地点で敵機と遭遇したそうだな。その範囲はクルタナの領空の筈だが……」

「はい。ブルーさんもそう言っていました。どうなっているんでしょうか」

「……私も解せない。空軍本部からの伝達によると、ここ数年、アンテイオキアは度々クルタナの領空に侵入しているらしい。……まさか……アレに気付いたのか？」

視線を宙に彷徨わせながらノワリーが言った。最後の言葉は独り言のようだった。アンティオキアは世界樹と別の何かを探している。滑走路で聞いたアレックスの言葉を思い出した。ノワリーはその何かを知っているようだった。

「隊長、教えて下さい。アンティオキアは世界樹の他に、何を探しているんですか？」

しばらく考え込んだ後、ノワリーはいつもの冷静で、感情を抑えている表情で見つめてきた。話すべきかどうか葛藤しているようだ。ノワリーが立ち上がる。後に続き腰を上げた。決意したように息を吐くと、彼は口を開いた。

「…これは、私しか知らない機密事項だ。他言はしないと、約束してくれるか？」

「はい。約束します」

「私が今から話す事は、ジエネシスという者の事だ」

「ジエネシス…？」

「ジエネシスは遺伝子にマナを組み込まれて創り出された人間を指す。彼等はマナが薄い場所でも、濃い場所でも問題なく活動する事が出来る。空の上でも、地面の底でもな」

マナは高い場所に集まる物質だ。必然的にマナは空の上に溜まりやすく、地上には溜まりにくい事になる。

「ジエネシスは、何のために生み出されたんですか？」

一呼吸置いたノワリーの口から衝撃の言葉が告げられた。

「世界樹を見つける為だ」

「世界樹を…？」

世界樹が存在する場所を知る者は、発見者以外誰一人いない。文献によると、ワールドエンドという大陸にあると言われている。クルタナとアンティオキアの国境の真ん中にあるその大陸は、一年中濃い霧に覆われており、人間が足を踏み入れる事を拒んでいる。発見者の末裔である貴族も何も語ろうとしない。政府が極秘に圧力をかけているが、口を閉ざし続けている。

「世界樹を探す点では、ジエネシスは非常に有能な存在だ。マナの量に関係なく活動できるからな。だが、万能な者などいない。ジエネシスには欠点がある」

「欠点？」

「ジエネシスは思春期を過ぎたあたりから殆ど成長しない。しかし、身体の中身の老化が異様に早く、病原菌に対する免疫も低い。簡単に言えば、見た目は若い、中身は老人という事だ」

「ジエネシスは今どこにいるんですか？」

「……ヴァルキリーのメンバーの中に居る。…ブルーがジエネシスだ」

「ブルーさんが…？」

まさか彼がジエネシスだったとは。年齢の割に見た目が幼いのはその所為だったのか。しかし、何故ジエネシスであるアツシユがヴァルキリーに居るのだろうか。アンテイオキアに狙われているのならもつと安全な隠れ場所がある筈だ。

「何故…ブルーさんはヴァルキリーに？」

「四年前だ。彼の育ての親である人から頼まれた。彼女はパイロットになりたいというブルーの夢をかなえる為に、私に彼を託してくれた。私なら信頼できると考えたのだろう」

「そうだったんですか…」

「…どうやら、外部にブルーの情報が漏れつつあるようだ。…何とかしないと…」

ノワリーが無意識に右足をさすっていた事に気付いた。それはとても微細な仕草で、よく注意して見ないと解らないだろう。

「隊長…足にお怪我でも？」

ノワリーがこっちを見た。右足を見下ろして顔を上げる。いきなり上着のボタンを外し始めた。思わずドキリとしてしまった。ジャケットを脱ぐと手袋を外してシャツの袖を捲った。手袋の下から現れたのは滑らかな人肌ではなかった。次にノワリーはズボンの裾を膝上まで捲り上げた。

ノワリーの右腕と右足は、肘から下、膝から下がなかった。無い手足を補うように鈍く光る金属製の手足が着けられている。一般的な義手と義足とは違い、ロボットのようない機械の手足だった。口を開けて食い入るよう見つめた。

「……そんな……」

「昔、大怪我をした。それ以来義手と義足を着けている、それだけだ。これは一般には普及されていない、最新の義手と義足だ。機械の回路と神経、筋肉を直接繋いでいるから、付け外しは出来ないようになってる」

これが普通である事のように淡々とした口調だったが、ノワリーの表情は暗い影を帯びていた。

「もう飛べないし、飛ぶ事も無いだろう。だが、命が助かったんだ。神に感謝している」

ノワリーの唇が微笑みの形を作ろうとした。針金を曲げて作ったような、無理矢理笑おうとしている形。皮肉と、自分を責める響きが微かに声の中に混じっていた。訊かなければよかった。今更ながら後悔した。

「……すみません。余計な事を訊いて……」

「気にするな。お前に見せたい物がある。こつちだ」

ノワリーの後に続き、奥に向かった。一番奥にある機体の前に着いた。その機体はブルーシートで覆われていた。ノワリーはそれに近付くとシートを捲った。隠されていた機体が露わになった。蛍光灯が機体を照らし出した。

高潔な騎士が掲げる槍のように輝く銀色の戦闘機。F/A-18 スーパーホーネットだ。ホーネットを全面的に改修した結果、全長は1.3メートル伸び、主翼の面積は二十五パーセントも大きくなった。その特徴は大型ディスプレイを多用したコクピットだ。たった一人で空中戦から地上攻撃まで任務をこなせるように、操作の単純化が図られている。ボディの所々に修復された跡があった。優雅な外見に似合わない痛々しい傷跡だ。

「これは？」

「ブリーナク。私の乗っていた機体だ。五年前の大戦で大破したのを、整備士達が直してくれた。上の命令で、処分する事なくここに保管している。価値のある素晴らしい機体だというが、私にとっては忌まわしい機体だ」

ブリーナクを見上げる琥珀色の双眸は悔恨と苦痛に満ちていた。光の槍と謳われた彼をここまで苦しめるとは。五年前に何があったのだろうか。

「…その大戦で私はヴァルキリーを率いて飛び立った。大戦には勝利したがヴァルキリーは全滅した。私だけが生き残ってしまったんだ。お前と同じく私も死のうとした。だが、出来なかった。空で散った彼等の想いを裏切ってしまうと思ったからだ。私は誓った。もう誰も殺さない、死なせないと」

「……エリオット隊長……」

絶句した。栄光の裏にこんな悲しい真実が隠されていたとは。自分の悲しみがちっばけで、くだらないモノに思えた。宇宙の片隅で悲劇のヒロインを演じ、役に陶醉しきって周りが見えていなかった。

「…だから、もうあんな馬鹿な真似はしないと約束してくれるか？」

「…はい…すみませんでした」

「ブルーに会いに行くといい。気まずいままで何かと都合が悪いだろう」

気にするな、という風にノワリーが微笑んだ。ぎこちなかったが、作り物ではない本物の微笑みだった。微笑みの裏に決して癒されぬ深い傷を垣間見た。

「はっ…はい！」

入り口に走る。アッシュがどこに居るか解らない事に気付いた。足を止めると振り返った。

「あの…ブルーさんはどちらに？」

「多分、宿舎の屋上にいるはずだ。外は冷えるから、気をつけるように」

「はい！失礼します！」
敬礼すると、格納庫を飛び出して宿舎に向かった。
生まれてしまった深い溝を埋める為に。

「立ち聞きは良くないぞ、アルジャーノン」

足音が消えたのを確認してから、無人の入り口に向かって話しかけた。驚いた顔をしたアレックスが姿を見せ、苦笑しながら中に足を踏み入れた。

「気付いていたんですか？」

アレックスの正面に立った。萌える緑色の目が真っ直ぐ見つめ返してくる。瑞々しい若葉を連想させる色だ。

「ステュアートにブルーとジェネシスの事を話した」

「……そうですか。ソエルは元気になりましたか？」

「彼女は強い、きっと乗り越えるだろう。私を責めないのか？」

「責めるなんて……隊長は俺とアイツの恩人ですから。貴方には感謝しています。敵国の人間である俺と、ジェネシスであるアッシュを受け入れてくれて、守ってくれました。本来なら俺は……」

「それ以上言わない。私は当然の事をしたただけだ。もう休め、身体に支障をきたす」

「はい。あと一つ、いいですか？」

無言で頷いた。アレックスは微笑んで敬礼した。

「俺は、チームヴァルキリーが大好きです。失礼します」

一礼すると、アレックスは出て行った。彼の姿を見送る。格納庫は無人になった。孤独の闇が押し寄せる。

「守る、か……。シルヴィ、イーリス……貴方達を死なせた私に、そんな言葉は相応しくないというのに……」

言葉と共に未だ忘れる事の出来ない過去が鮮明に蘇った。

目を閉じて、死なせてしまった人々を思い出す。

冷たい壁にもたれ、しばらくその場に佇んでいた。

ノワリーの言うとおりで外は寒かった。宿舎に戻ってジャケットを羽織り、屋上に続く階段を上った。呼吸と共に白い息が吐き出される。そつとドアを開けた。錆かけた音を立ててドアが開く。屋上の端に小柄な姿が。アツシユだと一目で解った。転落防止用のフェンスにもたれて空を仰いでいる。

「あの…」

恐る恐る話しかけた。空から視線を外したアツシユがこっちを向いた。口に煙草に似た物を銜えている。先端から白い煙。風に乗って匂いが運ばれて来た。ミントに似た清涼感のある匂いだ。

「…何だ」

「その…私…謝りたくて…」

「何で」

「何でって…フライトで迷惑をかけて…」

「謝んな。テメエは誰にも迷惑かけてねえ。あれはオレのミスだ」

「でも…」

「でもクソもねえ。いいな？」

「…はい」

素っ気なくぶつきらぼうな口調だったが、アツシユが彼なりに励まそうとしているのが解った。不器用な優しさに心が温まる。アツシユの口から白い煙が吐き出された。帯状の煙が夜空に昇って行く。「それ、何ですか？」

「ああ？スモークっていうクソ苦い薬だ。コイツを吸わないと身体の調子が保てねえんだ。…聞いたんだろ？オレがジエネシスだって事を」

「それは…」

「隠すな」

「…はい。隊長から聞きました」

アツシユは短くなったスモークを灰皿で潰し、ポケットから新し

いスモークを取り出した。口に銜えてライターで火を付ける。乾いた音と共に、ライターの火がアツシユの白い顔を一瞬照らした。
「…そうさ…ジエネシスは世界樹を見つけて何がしたいんだ？神様にでもなるつもりか？ハツ、笑わせるぜ」

「……………」
「ファック…機械仕掛けの翼しか持たないヒトは、神様にも、天使にもなれねえんだよ…」

返す言葉も無く無言で立っていた。アツシユの紫の瞳は憂いに満ちていた。夜の冷たい空気を纏った風が吹いた。半袖姿のアツシユが腕をさすった。ジエネシスは免疫が低いと言っていた。

「ブルーさん、そろそろ中に戻りませんか？風邪ひきますよ」

「そのブルーさん、ってのやめてくれ。鳥肌が立つ」

「じゃあ何て呼んだらいいんですか？」
「ファミリーネームで呼ぶのはやめろ。あと、呼び捨てとさんづけも禁止だ」

「えっと……………じゃあ…アツシユ…君…」

がくつとアツシユが肩を落とした。呆れた顔で溜息を吐いた。

「ファック、何だよそれは…まあ、それで勘弁してやるよ……………ソエル…」

アツシユは恥ずかしそうに名前を呟いた。恋人同士がお互いの名前を呼ぶようだと思った。アツシユとの距離が近付いたような気がしたが、まだ二人の間には微妙な境界線があった。ヒトとジエネシスという見えないボーダーラインが。

「ソエル」

「はい？」

ポケットに手をつ突っ込んだアツシユが数歩距離を詰めて来た。僅かに眉が動いた。スモークが地面に落とされ、踏み消された。ポケットから離脱した手が左手を掴んだ。ゆっくりと袖が捲られる。白い包帯が顔を出した。

「…コレ、どうしたんだ？」

「…え？あつ…その…」

「やったのか」

アツシユに嘘は通用しないだろう。剃刀で切った事を話した。白い顔が苦痛に歪む。握る手に力が込められた。

「…オレの所為だ。酷い事言ったからな。本当にどうしようもねえ野郎だよな。いつも誰かを傷つけてばかりで…最低だな」

「違います！私が馬鹿だったんです！アツシユ君の所為じゃありません！」

「…謝つても何も解決しねえけど…ゴメンな。言い過ぎた」

「私も謝りたいです。…すみませんでした」

アツシユの指が包帯の下の傷をなぞった。壊れ物に触るような手つき。王子様が王女様の手を取るような仕草。ガラスの靴を拾い上げるような動き。アツシユの手が離れた。温もりだけがそこに残った。三本目のスモークを銜えるとアツシユは先端に火を点けた。

「先に戻ってる。コレを吸い終わったら行くからよ」

「はい。お休みなさい。あ、そうだ。コレ、着て下さい」

ダウンジャケットを脱いでアツシユに渡した。彼が風邪をひかなないように配慮したつもりだ。紫の目がじっとジャケットを凝視している。いらねえよ。拒否されそうな雰囲気だ。やっぱり、余計なお世話だったかもしれない。白い手がジャケットを掴んだ。アツシユはスモークを銜えたまま器用にジャケットを羽織った。火が燃え移ったらどうするんだと心配したが、赤い熱源はスモークの先端で大人しくしていた。人嫌いのアツシユが素直に受け取るなんて。驚くと同時に嬉しかった。

「…ありがとな。風邪ひくぞ。さっさと帰れ」

「はい。お休みなさい」

「ああ。また、明日な」

冷えきった屋上から暖かい宿舎の中へ戻る。

夜空を見上げる華奢な背中がドアの向こうに消えて行った。

階段を下りる足音が遠ざかる。
空を見上げた。

金網の隙間から瞬く星が見えた。

金網が無ければ手が届きそうだった。

「また明日…か。オレに明日なんてあるのかよ」

白い煙と苦い言葉を吐き出す。

ひっそりと、

誰にも知られる事なく、

煙と言葉は宇宙に昇って行った。

雲一つない夜の空。

何かの予兆だろうか？

聖者の声も、神のお告げも聞こえないというのに。
漠然としない予感がゆっくりと現れる。

気にしていても仕方ない。暗くなり始めた空を視界の端に捉えながら、滑走路の向こうの格納庫に向かった。明かりが点いているから誰か居るのだろう。数人の整備士達が機体を見たり、掃除をしている。所々切れかけた蛍光灯の下にリゲルが居た。グングニルの主翼の上に乗る、キャノピーを拭いている。靴はきちんと床に揃えられていた。土足のまま主翼に乗っていたら、殴っていた所だ。

「整備、終わったのか？」リゲルが振り向いた。

「ウーツス。とつくに終わってるぜ」

身軽に主翼から飛び降りたりリゲルは床の上に整列していた靴に足を滑らせた。軍手を嵌めたままの手で器用に靴紐を結んでいく。靴紐を結び終えたりゲルは顔を上げた。

「これからフライト？」

「ああ」

「大変だな。暗くなってきたから気をつけるよ」

「うるせえよ。ガキじゃあるまいし」

グングニルが滑走路に運ばれていく。機体を追って格納庫を出た。グングニルは真っ直ぐに空を見上げている。地面、主翼を順番に上がってコクピットに乗り込んだ。スクリーンパネルをタッチ。燃料もマナもフル。機体の胃袋は満たされている。操縦桿とスロットルレバー、フットペダルの動きも滑らかだ。

「アッシュ」

いつの間にか、リゲルがコクピットを覗き込んでいた。靴を脱いだ足で主翼の上に乗っている。両手に脱いだ靴を携えている姿は、買い物帰りの主婦みたいだ。

「何だよ」

「ちゃんと帰って来いよ。滑走路に誘導灯、点灯しとくからな」

「わかった。サンキュ」

紺碧の宇宙のような色の目が丸くなり、瞬きを繰り返した。不意打ちを食らったような顔だ。暗闇でいきなり殴られたら、こんな間抜けな顔になるのだろう。

「すっげー間抜け面だな」

「うっせえ。お前があまりにも素直で驚いたんだ。口の悪いアツシユ君らしくない」

「ファック。悪かったな、星野郎」

「それでこそアツシユだ」

一つ年上の整備士は一度だけ笑った。リゲルが主翼から飛び降りた。キャノピイの開閉スイッチを押しした。キャノピイが閉じていく。誰にも邪魔されない空間が出来あがる。

スロットルをゆっくりと上げる。単発のエンジンが唸り声を上げた。

ランディング。

テイク・オフ。

空へ。

主翼が風を切って空を飛ぶ。

上空に出ると、月と星が浮かんでいた。

地上より距離が近い。

コクピットの中から見ると星は綺麗だ。

貸し切りのプラネタリウム。なんて贅沢な。

でも、たまにはいいじゃないか。

たまにある事だから、大袈裟に感動する事が出来る。

たまに、という言葉が何もかも素晴らしく装飾してくれる。

そう、
何もかも。
死すらも。

グングニルが無事に飛び立ったのを見送ると、格納庫に戻った。アツシユが戻ってくるまで数時間ある。メシ食って、シャワーを浴びてから戻って来よう。ゲルダも首を長くして待っているだろう。彼女の機嫌を損ねると大変だ。散らばっている工具をツールボックスに戻す。同僚達は既に引き払っていた。街に繰り出して、バーで一杯やりに行つたのだらう。可愛い女の子より、飛行機の方が好きだから興味は無いが。

「仕事、終わったの？」

シャツタから格納庫を覗き込んでいたのはアレックスだった。もう一人連れが居る。ソエルだ。彼女はぺこりとお辞儀した。

「今晚は」

「ウツス。随分珍しい組み合わせだな。アツシユが見たら怒るんじゃないか？」

「アハハ。そうかもね」

ソエルには言葉の意味が伝わっていないようで、しきりに首を傾げていた。アツシユをからかうのはよそう。バレたら何をされるか解らない。しかし、何故ソエルとアレックスというペアが出来あがつたのか興味が湧いた。

「お二人さんは何をしてるんだ？デート…じゃないよな？」

「ちっ…違います！オフィスに報告書を届けに行くんです！」

ソエルは真っ赤になって否定した。証拠を示すように、手に持っていた封筒を掲げて見せた。サインペンで書かれた報告書の文字がマーキングされている。

「こんな時間に？」掛け時計の文字盤は午後十時を差していた。

「その…昨日徹夜で仕上げたものですから、半分寝惚けてて、誤字

と脱字のオンパレードだったんです。今日中に提出しろって言われていたから…アレックスさんに修正を手伝ってもらったんです。本当にありがとうございます。助かりました」

「困った時はお互い様だからね。気にしないで」

「あの…アツシユ君は？」

ソエルが格納庫を見回した。二人が格納庫に立ち寄った理由が解った。アツシユが無事飛び立ったかを知る為に来たのだ。

「アツシユなら、問題無く飛び立ったぜ。安心しな」

「良かった…」

ソエルが胸を撫で下ろした。自分はこんなにも心配されている。

その事を知ったら、あの口の悪い人嫌いのエースパイロットはどんな顔をするのだろう。一度見てみたいものだ。

「報告書を届けたらよ、部屋でトランプしようぜ」

「お。いいね、それ。ソエルもやろうよ」

「じゃあ、お言葉に甘えて」

「報告書を届けたら、俺の部屋に集合。各自、飲み物とお菓子を持って来るように！」

「了解！」

「了解です」

バリバリバリとプロペラが回転する音が格納庫に響いた。アツシユがフライトに出てから一時間は経っていない。そもそも、あの音は戦闘機のエンジン音ではない。あれはヘリコプターのプロペラの音だ。何だろう。嫌な予感が込み上げた。

ヘリの機影が滑走路に降り立った。搭乗口が開く。黒い影が地面に降りた。ライトの逆光が眩しくて、顔が見えない。ヘリのライトが消えた。女が一人と、黒いスーツを着た二人の男が格納庫に入ってきた。先頭を歩く女性がリゲル達の前で立ち止まった。

「今晚は。エリオット大尉に会いたいんだけど、彼は何処に居るのかしら？」

随分派手な女だな。一目見てそう思った。胸元が大きく開いた漆

黒のスーツ。スカートは短い。太腿が剥き出しになっている。スーツの上に科学者が着る白衣といった変わった着こなし方だ。金色の髪に、真っ赤なルージューとピンヒールが眩しい。さり気ない動きで、アレックスがソエルを背中に庇った。それを横目で確認すると、女性の前に立ちはだかった。

「アンタ、何者なんだ？怪しすぎるんだけど」腕組みをして女性を威嚇した。スーツの男が拳を鳴らした。

「いいのよ。これは失礼。私はオペラ・ド・グランツ。クルタナ空軍に所属する科学者よ。緊急の用があつて、エリオット大尉に会いに来ました。居場所を教えてもらえると、助かるわ」

オペラと名乗った女性は白衣のポケットから身分証を出して掲げた。写真と顔が同じだ。どうやら本人らしい。

「さあ？隊長なら、基地のどこかに居ると思いますよ」

曖昧に答えると、オペラはサングラスを外した。ロイヤルブルーの瞳が真偽を確かめている。オペラはソエルとアレックスにも視線を投げかけた。

「隊長は出かけている事が多いから、居場所は解らないです」

「私は新人ですから、ちょっと…」

オペラはフウと息をついた。場所を訊き出すのを諦めたのだろう。肩越しに振り向いたオペラは男達に目で合図を送った。

「…そう。解ったわ、ありがとう。自分の足で捜せという事ね」

護衛の男達を引き連れたオペラは格納庫に背を向けて出て行った。シャツタから顔を出して、彼女達が遠くに行くのを確かめた。

「あの人達、何なんだ？」眉間に皺を寄せたアレックスが呟いた。

「…解らねえ。隊長に伝えようぜ！」

壁に備え付けてある電話に手を伸ばし、オフィスの電話番号をプッシュした。コール音が四回。ガチャツと音がした。

『エリオットだ。どうした？』微かにだるさが残る声。寝ていたのかも知れない。

「フォーマルハウトです。ついさっき、空軍の関係者だと名乗る奴

等が来ました」

『何だつて？』マイクの向こうから聞こえる声に驚きが混じった。

『どこへ向かったんだ？』

「多分、オフィスだと思います。隊長を捜していました」

『解った。そこに居るのはお前だけか？』

「いえ。ソエルとアレックスも居ます」

『お前達はすぐに宿舎に戻るんだ。奴等は私が何とか追い払う。いいな？』

「了解」

受話器を元の位置に戻した。振り向いて二人に隊長の指示を伝えた。ソエルとアレックスは深刻な表情になっていた。

「私、オフィスに行つて来ます！」

「駄目だよ！部屋に戻るんだ。俺が行く」

「いいえ！戻りません！」

ソエルは大地震が起きようとも、世界が海の底に沈んでも、自分の決心を曲げないだろう。空色と緑色の視線が互いを睨み合う。根負けしたアレックスが肩を落とした。

「…解った。無茶はしないでね」

「はい！リゲルさんは？」

「俺も、大人しく部屋に戻る気は無いぜ。ここに残る。気をつけるよ」

「お前こそ」

アレックスと互いに頷き合った。二人は格納庫を飛び出して行った。格納庫には誰も居ない。自分だけが残された。ツールボックスを抱えて、自分に与えられた仕事を果たす為に奥に歩いて行った。

オフィスのソファに横になり、仮眠をとっていると突然電話が鳴り響いた。早く受話器を取れと急かしている。疲れでだるさが残る身体を起こした。四回目のコール音で受話器を取り、耳に当てた。

電話をかけてきた相手は格納庫に居るリゲルだった。

「エリオットだ。どうした？」

『フォーマルハウトです。ついさっき、空軍の関係者だと名乗る奴等が来ました』

リゲルの声は切迫していた。声を荒げそうになったが、上司である自分が慌ててはいけない。彼を不安にさせるだけだ。出来るだけ冷静な声になるように努力した。それが本当だとすると、奴等が目指すのはただ一つ。ユグドラシル基地の指揮官である自分が居るオフィスだろう。念の為、リゲルに彼等がどこに向かったか訊いてみた。予想通り、オフィスに向かっているらしい。格納庫にはリゲルの他にソエルとアレックスも居るようだ。三人に宿舎に戻るよう指示を出すと、電話を切った。

コツコツと廊下に靴音が響く。聞いた事がある高慢な音だ。椅子の背もたれにかけてあったジャケットに腕を通す。電気のスイッチを点けた。嫌な予感を和らげてくれるといいが。靴音はドアの前でピタリと止まった。ゆっくりとドアノブが回る。真紅のピンヒール、胴体の順番で白衣を着た女性が入って来た。彼女はノブを握っていた手を離した。ドアが完全に閉まる寸前、隙間から廊下に控える黒スーツの男達を認識した。

「久しぶりね、ノワリー。五年ぶりかしら？」

「…そうですね、グランツさん」

声に嫌悪の響きを含ませたが、オペラは気にしていないようだ。近付いて来たオペラはショーウィンドウを覗き込むような仕草で眺めてきた。妖艶な笑みが浮かぶ。脳味噌の少ない男が黄色い声を上げそうな微笑だ。

「しばらく会わない内に、随分と良い男になったじゃない。それに出世したみたいね。どう？私と楽しんでみない？」

真紅のマニキュアにラメを散りばめた手が伸びてきた。その手は左胸の勲章を撫でて、滑るような動きでシャツの隙間に潜り込もうとした。一步後ろに離脱。オペラは残念そうに微笑んだ。五年前と

ちつとも変わらない。変わったのは濃くなったメイクと服装だけ。
「あら、つれないわね。シルヴィの事をまだ引き摺ってるのかしら？」

「貴女には関係の無い事だ。そんなくだらない事を言う為に、私に会いに来たのではないのでしょうか？」

「本題に入りましょうか。クルタナ空軍は、興味深い情報を手に入れたの。それはある男からの情報よ。簡潔に言うわ。ジエネシスを渡しなさい」

「：ジエネシス？何の事が解りませんが」

ポーカーフェイスを演じていた表情が僅かに崩れるのを感じた。冷静さを維持しようと神経を集中する。表情が崩れたのをオペラは見逃さなかった。獲物を見つけた猛禽類のような獰猛さが青い目に宿った。

「とぼけても無駄よ。貴方が指揮するチームヴァルキリーにジエネシスが居る事は既に調査済みなの。あと、ジエネシスの血を引く者が居る事もね。ジエネシスの名前は知っているわよ。確か：アッシュ・ブルー君だったかしら？」

オペラの言葉に頭を殴られたような衝撃を受けた。ジエネシスとその血を引く者の事は、自分と本人しか知らない筈だ。数日前の夜の格納庫でソエルにも話したが、彼女は口の軽い者では無いという事は十分に理解している。臆病な程慎重に情報を管理してきたのだ。外部に漏れる事等あり得なかった。起こる筈が無い。

「仮に、ヴァルキリーにその様な者が居たとしても、部下を引き渡すような真似はしない」

「そう言うと思っていたわ。貴方は昔から頑固だったもの。さあ、入って頂戴！」

オペラが指を鳴らすと、廊下に控えていた男達がなだれ込んで来た。彼等は我が物顔でオフィスを物色し始めた。神経質に整頓された本棚の本を次々と抜き出してはページを捲り、デスクの引き出しの中身を容赦なくぶちまける。遠慮や配慮を母親の胎内に置き忘れ

てきたような探し方だった。簡単に見つかるような証拠を残す愚か者では無い。証拠は全て脳の中にある。拷問を受けようが、自白剤を飲まされようが、そんなモノには屈しない。業を煮やしたオペラがチキチキと爪を噛んだ。

「随分と焦らしてくれるわね。そういうのは好きじゃないのよ」

オペラは白衣のポケットから無線機を取り出した。電源を入れ、アンテナを伸ばす。周波数を調整した彼女はマイクに向かって叫んだ。

「待機中の全部隊に告ぐ！全部隊は第一格納庫に集合し、占拠せよ！ジェネシス　アツシユ・ブルーが帰還次第、捕獲しなさい！抵抗も考えられる！多少傷つけても構わないわ！ただし、生きたまま捕獲する事！」

「グランツ！」

彼女の命令を止めようと踏み出した。素早くオペラが何かを構えた。銀色の銃身が蛍光灯の明かりを反射した。銃口が胸に押し付けられ、そこを起点に皺が寄った。穴は心臓の真上に吸い付いている。オペラの指は引き金に。いつでも殺す事が出来る。

「動かないで。キスしたい程素敵な貴方の胸に、風穴が開く事になるわよ。しばらくの間大人しくして頂戴」

冷たく、冴え渡った面が言った。昔からオペラは野心に溢れていた。軍での地位をより強固なものにするなら、彼女は躊躇い無く邪魔者を排除するだろう。抵抗する事も出来たが、今自分が殺されれば、ヴァルキリーを守る事が出来なくなる。ここは大人しく従った方がいい。悔しさに歯噛みした。

「貴女という人は…どこまで愚かなんだ」

「怒った顔も素敵よ、ノワリー」

銃口にキスをしたオペラはドアに視線を向けた。妖艶な笑みはそのままに、目つきが鋭くなった。

「貴方と二人きりで楽しみたいと思ってただけど…どうやら招待状を受け取っていないお客様が居るようね」

銃口を向けたまま、オペラはドアを開けた。

第一格納庫でリゲルと別れ、すぐにオフィスに走った。ガラス製のドアを開けてビルに飛び込む。中は不気味な程静かだった。すでに軍の人間が来ているなら、エレベータでは音で気付かれてしまうかもしれない。階段で三階に駆け上がった。アレックスが顔を覗かせ、廊下を覗き込む。彼の後ろから同じように覗き込んだ。銃で武装した兵士は居ない。慎重に廊下を進んだ。

半開きになったオフィスのドアから話し声が聞こえる。ドアの脇には二人の黒スーツの男が控えていた。咄嗟に曲がり角の影に隠れた。耳を澄まして会話を聴き取るうと集中した。クルタナ空軍。ジエネシス。ジエネシスの血を引く者。アッシュ・ブルー。一件繋がりを持たない単語の切れ端が耳に届く。

「ジエネシスの血を引く者…？何でソレを知っているんだ…？」
隣で身を潜めるアレックスの呟きが聞こえた。彼の顔は死人のようになり青ざめていた。それに強張っている。

「アレックスさん…？」

急に廊下が慌ただしくなった。スーツの男達がオフィスに飛び込んで行った。距離を縮め、気付かれないであろうギリギリの位置に進んだ。物を引っ掻き回す音が中から聞こえている。更に近くへ。ドアの隙間から様子を窺った。白衣の女性と対峙するノワリー。オフィスを荒らし回る男達が居た。宝探しは失敗に終わった。目的の物は見つからなかったようだ。苛立ちを露わにしたオペラがポケットから無線機を取り出した。彼女が放った台詞は信じられないモノだった。

ジエネシスであるアッシュを生きたまま捕獲せよ。抵抗した際には武力行使も許可する。悲鳴が喉から迸りそうになった。気付かれしてしまう。慌てて両手で口を覆い、二人の存在を知らせようとする密告者を飲み込んだ。アレックスはますます青ざめていた。このま

まではアッシュが捕まってしまう。だが、ノワリーを置いてはいけない。どちらかを選べば、片方を失ってしまうかもしれない。後味の悪い二択問題だ。

「格納庫に戻るう」

「えっ…？ そんな！ 隊長はどうするんですか？」

「アッシュを優先しろ。隊長は…きつと、そう言うと思う。格納庫にはリゲルも居るんだ。二人が危険だ」

「でも」

「安心しなさい。二人共死なない方法があるわよ」

目の前のドアが開き、銃を構えたオペラが出て来た。余裕に満ちた微笑だ。

「大人しく私達の言う事を聞いてくれたら、殺さないであげるわ。あら、駄目よ、坊や。私に手を出したら…」

身構えたアレックスを見て、真っ赤なルージュを塗った唇が歪んだ。オペラがパチンと指を鳴らす。オフィスから男に拘束されたノワリーが出て来た。オペラの握る銃口がノワリーの左胸に食い込んでいる。あの下には生きる為に必要なパーツが埋め込まれている。

「貴女達の大好きな隊長の胸に、綺麗な穴が開いちゃうわよ」

ノワリーを人質に取られ、抵抗等出来る筈が無かった。ソエル達はオフィスに監禁されてしまった。見張り役を置いてオペラは第一格納庫に向かった。携帯電話も奪われ、オフィスの電話線も切られた。外部と連絡を取る手段は完全に断たれたしまった。

「隊長…ごめんなさい！ 私達の所為で……」

「お前達の所為では無い。まずは、ここから脱出する方法を考えねば……」

アッシュの事が心配で心配でたまらない。不安が心を押し潰そうと重さを増していく。祈るように両手を胸の前で握り締めた。

（お願い…無事でいて…アッシュ君……！）

ソエルとアレックスと別れた後、機体にある細工をしていた。よし。細工は終わった。後は無線で空に居るアッシュに連絡を取るだけだ。兵士達が無線で連絡していた内容を盗み聞きした。ジエネシスの少年、アッシュ・ブルーを捕獲しろ。ジエネシスが何なのかは解らないが、アッシュの身に危険が迫っているのは確かだった。

パイロットと連絡を取るには管制塔に行かないといけないが、空軍の関係者がうろついていた。銃で武装した兵士達が基地内を徘徊している。見つければ確実に捕まる。下手をすれば、撃たれてしまおうだろう。管制塔に行く以外にアッシュと連絡を取る方法を必死で考えた。そうだ。アレがあるじゃないか。

いつも愛用しているツールボックスをひっくり返した。中身が散乱する。アレでもない。コレじゃない。次々と中身を素早く仕分けしていく。目当ての物を見つけた。携帯電話に良く似た機械。仕事の合間に作っていた新型無線の試作品だ。完成予想はこれよりもっと小さい。独特の周波数を持ち、何者にも傍受されないようにしたものの、今の自分の技術では無理だった。試作品とはいえ、充分に機能する筈だ。

「アッシュ！聞こえるか？アッシュ！」耳障りなノイズが流れる。駄目か。そう思った時、ノイズが消え、声が聞こえた。

『誰だ？』

「俺だ！リゲルだ！聞こえてるんだな？」

『うるせえよ、星野郎。女みたいにキヤーキヤー喚くな。ちゃんと聞こえてるよ』

「今どこだよ！」

『はあ？基地に帰還する所だ。あと……四十分くらいで着く』

「戻って来るな！すぐに逃げろ！空軍の奴等が居るんだ！お前を捕まえようとしているんだよ！」

声が止む。舌打ち、ファックと吐き捨てる声。頼むから、逃げないなんて言わないでくれよ。返事を待った。

『……解った。彼女の所に行こうと思う。場所はアレックスが知っ

てる。知らせてくれて……ありがとうな』

「燃料とマナは持ちそうか？」

『ああ。大丈夫だ……』

ザザザ。どこかに行った筈のノイズが戻って来た。こんな大事な時に！無線機を乱暴に叩くが、アツシユの声は二度と聞こえて来なかった。

「動くな」

背後で声が。グイと背中になにかが押し付けられた。冷たくて重いソレを知っている。両親の命を奪った物だ。

「立ち上がって、こつちを向くんだ。抵抗するなよ」

高圧的な命令に従った。闇に溶け込む色の迷彩服を着た男が立っていた。身長は同じくらいだが、体重は男の方が重いだろう。兵士一人なら何とかなるだろうが、後ろには男の仲間が居た。

「小僧。お前がアツシユ・ブルーか？」

どうやら兵士はアツシユの顔を知らないらしい。上手く誤魔化せば、アツシユが逃げる時間を稼げる。

「ちょっと待て」仲間の一人がこつちへ来た。「違うかもしれぬぞ。身分証を探そう」

余計な事言っんじゃねえよ。兵士の手がポケットを隅々まで荒らし回る。

「あつたぞ！……成程、お前はヴァルキリーのメカニックか。小僧、質問だ。ジエネシスはどこへ行った？」

「俺が簡単に言うと思ってるのか？」

「我々は戦闘のプロであると同時に、拷問のプロだ。口を割らせる方法等いくらでもある。おい！連れて来い！」

兵士の仲間が二人の間を引っ張って来た。蛍光灯が二人の姿を暴き出す。マジかよ。

兵士に連れられて来たのは、メアリイとゲルダだった。青くて丸いネズミのぬいぐるみを抱き締めているゲルダは酷く怯えていた。今にも泣き出しそうな鷲色の瞳が助けを求めている。

「メアリースさん……！ゲルダ……！卑怯だぞ！」

女子供を人質に取るなんて、犯罪者並に卑劣な奴だ。兵士に悪びれた様子は無い。

「任務を遂行する為ならば、手段を選ばない。それが兵士だ。さあ、ジエネシスの居場所を言うんだ」

何をされてもアツシユの逃げた先を吐かないつもりだったが、二人を人質に取られてはとうしようもなかった。覚悟を決めたその時、メアリースが動いた。腕を掴んでいた兵士の足の甲を思い切り踏みつけたのだ。人間の急所の一つである足の甲を力の限り踏みつけられた兵士が苦悶の声を上げた。隙が生まれる。メアリースがゲルダを背中に庇った。兵士を睨みつけたメアリースは毅然と叫んだ。

「女だからって、甘く見ないで頂戴！」

「っ！このアマ！」

あまりの痛みにも頭にきた兵士がメアリースに銃を向けた。注意が逸れた。近くにあったレンチを掴んで、兵士の頭目がけて投げつけた。鈍い音が響く。レンチは見事に命中した。兵士は三人。脳震盪を起こした一人は床に倒れた。二人目を回し蹴りで昏倒させる。子供の頃に不良仲間をノックアウトさせた必殺技だ。二人目は片付けるのが面倒で山積みになっているガラクタの中へ。あと一人だ。

バン。

銃声がした。

火薬の匂い。

薬莢の落ちる音がやけに響いた。

脇腹に痛みが。焼けるようだ。

生温かい液体が流れている。

手を伸ばし、液体の正体を確かめた。

赤い。

真紅の。

真っ赤な 血だ。

「調子に乗りやがって ！」

兵士が持つ銃から煙が出ていた。
身体が痙攣してきた。

目眩がする。
意識がどんどん遠くなつて。
マジかよ。

俺 撃たれたのか。
冷たい床が、倒れゆく身体を受け止めてくれた。

雲海の上に広がる星空は素晴らしかった。空気が澄んでいると、こつも綺麗に見えるのか。地上の空気が濁っている事を思い知らされる。星とのデートを無粋な輩が邪魔をした。無線が鳴っている。

『シュ！聞こえるか？アツシュ！』基地の周波数では無い。盗聴マニアか？

「誰だ？」
『俺だ！リゲルだ！聞こえてるんだな？』

酷く慌てている。一体何だと問いただした。リゲルは基地に戻つて来るなど言ってきた。国外追放かよ。ふざけんな。まだ続きがあった。空軍の奴等が基地に来ている。オレを捕まえようとしている。理由は一つしか無い。ジエネシスである事が知られてしまったのだ。ファックと呟く。舌打ちして考えた。基地には戻れない。悔しいが、逃げるしかない。行くあてはある。オレを助けてくれた彼女の所へ。彼女の家に逃げる、場所はアレックスが知っていると伝えた。『燃料とマナは持ちそうか？』

「ああ。大丈夫だ。そつちは大丈夫……」
無線にノイズが混じり、通信を遮断した。ジャミングされたのか。狭いコクピットに警報が鳴り響く。レーダーに一機の戦闘機が映し出されていた。敵だ。直感した。このままケツを見せて逃げる気は無い。旋回して追手と対峙した。漆黒の夜空に敵の機体が浮かび上がった。

何だ？目を疑った。距離を縮めて来るのは、純白の機体だった。そつだ。ソエルの機体、アルヴィトと同じ色だ。色だけでは無い、形が微妙に異なるが、アルヴィトと同じボディだ。ソエルが追いかけて来たのかと錯覚した。

機体にマーキングされた名前はアルヴィトでは無かった。

ヴァルハラ。神々が住まう世界の名前だ。

ダダダ。敵がサプライズ攻撃。急旋回して放たれた弾を避ける。

ファック。いきなりかよ。今晚は、の代わりか。

オレをエインヘリヤルにする気か。面白い。

天国に連れて行ってくれるのか？

だけどよ、そう簡単には墜とされねえぞ！

スロットルを上げる。

速度をつけてエレベータ・アップ。

弧を描くループ。

上昇気流に乗ったコンドルのように舞い上がる。

ヴァルハラが後を追いかけて来る。

ブレイクの応酬。

シザーズで華麗なワルツを踊る。

速度はグングニルが上。旋回速度はヴァルハラに分が上がるようだ。

二機はロールを混ぜながら夜空を飛び回った。

しつこい蠅にお仕置きを。

エルロンを右へ。ラダーペダルを右に思い切り踏み込んだ。

切れ味の鋭いターン。

ヴァルハラは右側面へ回り込む。

ヴァルハラは体勢を整えようと、旋回の体勢に。

オレの方が僅かに速かった。

ファイア。

白い主翼を粉碎した。

白い機体は雲の下へ。

機首を上げて離脱。

背面になって戦況を確認。

随分と呆気ない。

本当に墜ちたのか？

あまりにも 弱すぎる。

その時だった。

雲の下に墜ちた筈のヴァルハラが真下から襲いかかって来た。間に合わない。油断していた。グングニルの胴体が貫かれた。爆発。

失速。

高度が下がる。

エレベーターもエルロンもラダーも駄目だ。

墜ちて行くグングニルの上空で、ヴァルハラが旋回していた。

罪人の死を見届ける、死刑執行人のようだ。

「…ファック。オレを墜とすなんて、大した野郎だぜ…」
真つ逆さまに。

地上に吸い込まれて行く。

今まで墜としてきたパイロット達も、こんな景色を目にしなが
ら墜ちていったのだろうか。

ふと、そんな考えが頭をよぎった。

天使になり損ねて地上に落とされた人間のようにだった。

天使は火から創られ、ヒトは土から創られた、という神話を思い
出す。

なら、天使でもヒトでもないオレは何から創られた？

急に可笑しさが込み上げて笑った。

罵りの言葉はなかった。

神に救いを請う、祈りの言葉もなかった。

キャノピーが透明で良かった。

空を仰いだまま、死ねるから。

あれからどのくらいの時間が経ったのだろうか。アッシュは無事だろうか。それだけを考え続けていた。誰も一言も発しない。沈黙だけが友達だ。隣に座るアレックスの顔は暗い。死刑を待つ囚人のようだ。

ノワリーが動いた。彼は立ち上がると、滑走路に面している窓を開けた。空気の入れ替えをしても、オフィスに沈殿する鬱屈した空気が浄化出来ないのに。ノワリーはカーテンを外し始めた。一体、何をするつもりなんだろう。模様替えをするにはあまりにも緊迫した状況だ。

「隊長。何をしてるんですか？」

「決まってる。ここから脱出する」

「脱出って…ここは三階ですよ？飛び降りる気ですか？」

驚きと呆れが混じった顔でアレックスが言った。ノワリーは大真面目だ。黙々とカーテンを外す作業を続けている。オフィスにある全てのカーテンを外し終えたノワリーは、今度はそれを繋ぎ始めた。ノワリーが考えている事が解った。

「隊長！もしかして…手伝います！」

アレックスも解ったようで、一緒にノワリーの作業を手伝ってくれた。白いカーテンは一本のロープに変身した。ロープ状になったカーテンを柱に結び付ける。解けないように、ありったけの力を込めて。オフィスの窓から垂れ下がったカーテンは、ギリギリ地面に届いた。

「アルジャーノン。先に下りて、ステュアートを支えてやってくれ。私は最後に下りる」

「解りました」

アレックスは窓から身を乗り出した。カーテンを握り締め、ロツククライマーのように身軽に降りて行く。彼が下に無事到着したのを確かめたノワリーが行けと促した。昔から運動は苦手だ。駄々をこねている場合じゃ無い。ぎゅっとカーテンを握った。全体重を細いカーテンに預ける。一瞬、カーテンがギシリと軋んだ。恐ろしい音に身が竦む。千切れないでと祈りつつ、少しずつ下りて行く。アレックスが腰を掴んで地面に下ろしてくれた。殿のノワリーも、無事に下りて来た。

すでに空は黒く染まっていた。気紛れに雲の隙間から顔を覗かせる月の光が基地を照らしている。第一格納庫に近付いた時だった。

バン。人間が作った機械仕掛けの悪魔が吠えた。音の発生源は格納庫からだ。足が自然と速くなる。三人は脇目も振らずに格納庫に飛び込んだ。そこで見たモノは。

目の前にうつ伏せに倒れたりゲルが居た。目を疑った。リゲルの身体の下に大量の血溜まりが広がっていた。彼の側にはメアリーと泣きじゃくるゲルダが座り込んでいた。

「リゲル！」

アレックスが駆け寄った。二人も後に続く。服が血に染まるのも構わず、アレックスはリゲルを抱き起こした。右脇腹に銃創が。粘着質のある血液はそこから流れ出ている。

「何があったんだ？」

ノワリーがメアリーの横に屈みこんで問いかけた。蒼白な顔でメアリーはノワリーを見上げた。救いを求めるように、ノワリーの腕を掴んだ。

「解らないわ……。ただ、いきなり銃で武装した兵士が部屋に入ってきて、格納庫に連れていかれて……。私は抵抗したの。私とゲルダちゃんを助けようとしたリゲルが……」

撃たれた。掠れた声が補足した。苦しげな呻き声がリゲルの唇の隙間から洩れた。固く閉じていた瞼が動き、濃い青い瞳が緩慢な動きで瞬きした。

「リゲル…！大丈夫か？」

「…まあな。つたくよ……一般市民を撃つなんて、どうかしてるぜ……」

「喋っちゃ駄目です！早く病院に連れて行かないと…」

「そうはさせないわ」

ピンヒールの音が高らかに響いた。入口を遮るように、兵士を引き連れたオペラが現れた。右手には銃。冷静さを演じているが、激しく憤っているのが解る。オペラが片手を上げた。散開した兵士が取り囲んだ。ライフルの銃口が狙いを定めている。

「餌を撒いておいて正解ね。整備士の坊やも役に立つじゃない。惚れ直したわ」

「ふざけるな！何でこんな事をするんだよ！」

「決まってるじゃない。ジエネシスとその血を引く者を捕獲する為よ」

「アツシユが…俺達が何したって言うんだ！」

「私はただ、ジエネシスに興味があるだけよ。マナを遺伝子に組み込んだ神秘的な存在。世界樹を感じ取れる唯一の存在。でも、お偉い様は私とは違う。彼等は世界樹を手に入れて、世界を支配する権利が欲しいだけ。俺達ってどういう意味かしら？坊やは何も関係ない筈よ」

「ジエネシスの血を引く者。俺を連れて行けよ！アンタが捜しているのは俺だ！」

「よせ！アルジャーノン！」

オペラは心底驚いた表情になった。驚きは笑みに変わっていった。ソエルもメアリイも、アレックスがジエネシスの血を引いている事に驚いた。ノワリーだけが冷静だ。

「…どこかで見えた顔だと思ったら…。アルジャーノン家の坊やね？世界樹とマナを発見した一族の子がジエネシスの血を引いているなんて、面白いじゃない。いいわ。「アーク」に連れて行ってあげる」
オペラがアレックスに近付いた。彼女の歩みが止まった。ソエル

達を守るように、ノワリーが立ちはだかったのだ。覚悟を決めた目でオペラを強く見据えている。綺麗に整えられたオペラの眉が動いた。

「…何の真似かしら？エリオット大尉」

「彼等には指一本触れさせない」

「上層部に反抗する気？こんなちっぽけな基地、いつでも捻り潰せるわよ」

「ユグドラシル基地の指揮官は私だ。部外者の貴女に命令する権利は無い。お引き取り願おう」

怒りで顔を真っ赤にしたオペラが銃を振り上げ、ノワリーの顔を殴った。一筋の鼻血が流れる。一触即発の空気の中、携帯電話の音が鳴り響いた。舌打ちをしたオペラがポケットから電話を取り出した。背を向けて会話を始める。電話を終えて振り返った彼女は幾分落ち着きを取り戻していた。

「……悪運が強いわね。今回は大人しく引き下がってあげる。でも、この一件は一部始終上に報告させてもらうわ」

白衣の裾を翻し、オペラは兵士を伴って立ち去った。滑走路に止めてあったヘリがプロペラを回して飛び去った。危機は去った。だが、アツシユの行方が解らない。

「アレク…アツシユは……彼女の所に行くって言った。お前なら、場所が解るって……」

「……もしかして……母さんの所？」

「場所は解るのか？」

「はい。アツシユが飛び立った方角から……北に七、八キロ行った所です」

「まずはフォーマルハウトを病院に連れて行く。ブルーを追いかけるのはそれからだ」

一刻も早くアツシユの安否を確かめたい。気がつけば駆け出していた。静かに佇む純白の機体を見つけた。キャノピーは開いたままだ。主翼に飛び乗り、コクピットに乗り込んだ。スロットルレバー

を押し上げる。エンジンが唸りを上げてアルヴィトが動き出した。ノワリーが気付いて叫んだ。

「ステュアート？何をしている！戻るんだ！」

「…ごめんなさい！」

アルヴィトは滑走路へ。ノワリーの制止を振り切り、純白の機体は舞い上がった。滑走路に立ち尽くすノワリーの姿がどんどん小さくなっていった。見えない糸に導かれるように、機首を空の彼方に向けた。

目の前でソエルとアルヴィトは飛び立ってしまった。止める事が出来なかった自分に憤る。すぐに後を追いたかった。だが、重傷を負ったリゲルを病院に運ぶのが先だ。何事にも優先すべきモノがある。

「アルジャーノン。お前は救急車を呼んで、フォーマルハウトを病院に連れて行ってくれ。ローレンツ、君はゲルダを頼む。二時間後に基地を発つ」

「隊長…コレを…」

瀕死のリゲルが箱型の機械を手渡してきた。丸い液晶画面に緑色の機影が浮かんでいる。アルヴィトと名前が表示されていた。

「アルヴィトに、発信機を付けておいたんだ。これで…ソエルの居場所が解ります」

「ありがとうございます。さあ、早く病院に」

アレックスとメアリーは二人を連れて出て行った。重い息を吐いて滑走路に出た。レーダーの画面に目を落とす。アルヴィトはそんなに遠ざかっていない。急いで基地を発てば追いつける距離だ。

「ソエル…アッシュ…無事でいてくれ…」

もう二度と、大切な者を失いたくないんだ。

祈るように呟いて、空を見上げた。

身体の内側にまで衝撃が響いた。激しく機体が揺さぶられる。翼を失った戦闘機なんて、ただの重い金属の塊だ。

少しづつ、グングニルが沈んで行く。

生命の海に還るのも、まあ悪くは無いな。

キャノピー越しに空を見上げた。

薄いヴァイオレットの空。

光に照らされ輝く雲達。

月は沈み、太陽が顔を出しかけていた。

波のリズムが子守唄となり、囁きかける。

眠れ良い子。

違う、オレは良い子なんかじゃない。

今まで何人墜としてきた？

何人この牙で引き裂いた？

何人殺して……。

もう、どうでもよかった。

心も身体も疲れ切っていた。

とても眠かった。眠ってしまおう。

この機械仕掛けのノアの方舟で、新しい世界が生まれるのを待とう。

白い鳩が新世界に連れて行ってくれる。

眠るように死ねる奇跡を、オレは信じていない。

永い眠りから覚めるように、暗かった空が明るく染まっていく。

目を凝らして、瞬きを忘れて、必死で広大な空の中にグングニルを捜した。上ばかり見てちゃ駄目だ。半ロール。背面になり、遙か下に広がる海に注意を向けた。黄金色に染まる大海原の真ん中に、機体が浮いていた。朝日が機体を照らし出す。ミッドナイトブルーの戦闘機。間違い無い。アッシュの機体、グングニルだ。

グングニルは海の底に沈もうとしていた。早くパイロットを助けないと。エレベータ・ダウン。グングニルに向かってダイブ。機体の側に着水した。衝撃で波が起こり、沈みゆくグングニルを飲み込む。墜落の衝撃でスイッチが壊れたのか、キャノピーは開いていた。コクピットに小柄で華奢な少年が居る。名前を呼んだが反応は無かった。

グングニルの先端が完全に沈んだ。後を追うように、コクピットと主翼。胴体、尾翼が姿を消した。コクピットにはアッシュが。急いで海に飛び込んだ。冷えきった海水が体温を奪っていく。限界まで肺に空気を吸い込んだ。アッシュを取り返すんだ。

重い金属の塊の機体は真つ逆さまに沈んで行く。水を蹴り、速度を上げる。胴体に辿り着いた。側に張り付いて救出を試みるが、アッシュの身体にはシートベルトが食い込んでいた。水中では思うように力が出ない。苦戦しつつも、何とかベルトの拘束からアッシュを解放した。後は地上に連れて行くだけだ。息は持つだろうか。

その時、急に機体の沈む速度が上がった。垂直尾翼が頭に直撃した。頭蓋骨に衝撃が伝わる。肺が溜めこんでいた空気を解き放った。口から泡が逃げて行く。意思とは無関係に脳が呼吸をしると命令を出す。いくら吸い込んでも入って来るのは水だけで空気は無い。

酸素を補給出来ない脳と身体が最終的に行き着く先は　ブラックアウトだ。

ごめんね、アッシュ君。

私、貴方を助けられそうにない。

身体に食い込んでいたシートベルトが解かれた。忌まわしい拘束具から解放され、圧迫感が無くなった。誰がベルトを外したんだ？意識を取り戻した目を開ける。海水が目染み込んできた。そうだ。オレは、撃墜されて海に落ちたんだ。

目の前で漂う物に気付いた。

金色の海藻？

違う。

まさか。

何で。

ソエルだった。主翼にもたれかかったソエルはぐったりとしていた。

コクピットから這い出して側に行った。頬を叩き、肩を揺する。彼女は動かない。頭から出血している。垂直尾翼に僅かな裂傷。ぶつけたのか？意識を失ったコイツが酸素を補給出来る筈が無い。フアック。

この大馬鹿野郎。

オレを助ける為に自分が犠牲になる気かよ。

そんな事はさせねえぞ。

あの時、言っただじゃないか。

空で死ぬのは、

オレだけで充分だって。

唇に、柔らかい感触が。

頬に添えられているのは、白くて細い手。

繋がった唇から、空気が注がれて。

誰？

そんな事をしたら、貴方が死んでしまう。

空っぽの肺に空気が溜まる。少しずつ、苦しみが遠ざかった。

目を開けた。

濃紺の髪が海月のように漂っている。

ヴァイオレットの目に私が映る。

アッシュ君？

彼が私に気づく。

酸素を補給し終えた唇が離れた。

につこりと、アツシユ君は微笑んだ。

繋いでいた手が、分離する。

そして、彼の身体は完全に力を失った。

「アツシユ君！アツシユ君！お願い！目を開けて！」

血の気を失って蒼白なアツシユの頬を叩いた。頭から出血しているアツシユは目を開けなかった。冷たい水の中に居たままでは低体温症になってしまう。アルヴィトの主翼の上に這い上がってアツシユを引き摺り上げようとしたが、力を失った人の身体はそう簡単に持ち上がるものではない。諦めたくない。奮闘を続けていると、緑色の機体が離れた所に着水した。

「ソエル！大丈夫かい？」

コクピットからマロンペーストの髪の子少年が姿を見せた。アレックスだ。助けに来てくれたんだ。安堵感で泣きそうになった。泣いている場合じゃないと言いつ聞かせた。

「私は大丈夫です！でも……アツシユ君が……！」

「今そつちに行くよ！」

アレックスが海に飛び込んだ。クロールで二人の側まで泳いで来た。彼は沈みかけているアツシユの身体を支えた。

「アツシユを上。俺が支えるから、君は引つ張って」

「はい！」

アレックスの援助で、アツシユを主翼の上に引き摺り上げる事が出来た。主翼に這い上がったアレックスはジャケットを脱いで丸めると、アツシユの頭の下に置いた。海水を滴らせながら彼はコクピットに行った。無線のスイッチをONに。マイクに顔を近づけた。

「こちらアルジャーノン。隊長、聞こえますか？」

「エリオットだ。二人は見つかったのか？」

「はい。ソエルは無事ですが、アツシユの意識がありません」

「解った。あと数十分でそちらに着く。何かあれば連絡を」

「了解」

通信が終了した。身も心も疲れ切って、その場に座り込んだ。今

頃になって身体が震え始める。怖かった。このままアッシュが目を覚まさなかつたら。大きな手が肩に触れた。

「アッシュは大丈夫だ。きつと いや、絶対に帰って来るよ」
隣に座るアレックスが微笑んだ。硬い笑み。彼も不安で堪らないのだ。励ます為に、平気な振りをしている。

「ソエル。アッシュは空で死にたいって言ってただろ？」

「はい」

「俺達ジエネシスは、遺伝子にマナを組み込まれて生み出されたんだ。マナは高く、空に還って行く性質を持つ物質だから、遺伝子に埋め込まれたマナが、空の中に還ろうとしている。だからアイツは空に焦がれて…苦しんでいるんだ。アイツがソエルを置いて行く訳が無い。アイツは変わろうとしているんだよ」

あの時滑走路で見てしまった、アッシュの顔を思い出した。

空に焦がれて、焦がれすぎて、苦しんでいるあの顔。

それは心に焼き付いて、消える事は無かった。

(アッシュ君……私、何も知らなかった……)

アッシュの容体に注意しながらひたすら待った。エンジンの音が近付いて来る。海面を滑るように走るボートはすぐ側で止まった。長身の青年が姿を見せた。

「ステュアート！アルジャーノン！無事か？」

ボートはゆっくりと慎重に主翼の側に接岸した。ボートから降りたノワリーが主翼の上に来た。横たわって動かないアッシュを見たノワリーの顔に緊張が走る。それでも、彼は冷静さを失わなかった。「ブルーをボートまで運ぶ。手伝ってくれ。ボートに乗り込んだらローレンツと応急処置を。アルヴィトとメイデンリーフは後で回収する。いいな？」

「はい！」

三人はアッシュをボートに運んだ。冷えた身体に毛布をかけ、暖

める。ボートはかなりの速度で水上を突き進んでいる。搭載されているエンジンの限界を超えるような勢いだ。少しでも早く基地に着いて欲しい。不安に押し潰されそうな肩に手が置かれた。降り注ぐ羽根のように、優しく、軽かった。

「大丈夫。アツシユは必ず助かるわ。こんな怪我で死ぬような子じゃないもの。信じましょう。ね？」

「…はい」

梢を吹き渡る風のようなメアリーの声が不安を追い払ってくれた。

(アツシユ君は必ず帰って来る。私達の居るこの地上に…)

ヒトは信じてもない神に、都合のいい時だけ祈り、救いを請う。それでも、ヒトは時折何かに縋りたくなる。

不安に襲われ、絶望感に苛まれた時、その暗闇から抜け出したいのだ。

必死に祈り続けた。

居るのか解らない、神様に。

かちかちと時間を刻む音が鳴り響く。時計は嫌味なくらい正確で、迫り来る審判の時を確実に伝えている。黒い革張りのソファの感触は冷たい。高級な物は全部冷たいのか。ますます不安が増大した。「これ以上、私のスーツに皺を増やさないでくれるか？」

隣に座るノワリーが溜息混じりに言った。我に返って手元を見下ろした。右手がしっかりと、糊の効いたスーツを握り締めている。操縦桿を握る時よりも力がこもっているような気がする。そこを中心にして蜘蛛の巣のような皺が広がっていた。

「でも、凄いですね、この花瓶。数十万はしますよ。これって、税金で買ったんですか？」

「恐らくそうだろうな。私腹を肥やす事しか頭に無いのだろう。呆れた連中だ」

アレックスは緊張した様子を微塵も見せずに、マントルピースの上に並べられている調度品をしげしげと眺めている。腕を組んだノワリーも堂々としていた。ウサギのように怯えているのは自分だけのようだ。鋼のように頑丈な神経が羨ましい。

「どうしてそんなにいつも通りなんですか？私達、査問会にかかれるんですよ？」

「恐怖に怯えていては、彼等の嗜虐心を刺激するだけだ。落ち着いて、いつも通り振る舞えば良い」

「……無理ですよお」

「……そんな顔で見ないでくれ」

情けない声を上げてノワリーを見上げた。洗練された端正な顔が困ったように曇められた。ノワリーは向かいに座るアレックスに助けを求める視線を投げかけた。

「人っていう字を掌に書いて飲み込むと、落ち着くよ」

「本当ですか？人、人、人……」

これでもかというくらい人という文字を掌に書き殴った。それを見ていたノワリーが呆れ果てた息を吐いた。

「本気にする奴があるか。迷信だ」

「隊長。そんな堅い事ばかり言ってるから、眉間の皺が増えるんですよ」

アレックスの言葉にノワリーが反応した。切れ長の目が細まり、稲妻のような視線がアレックスを貫いた。

「……今ここで、査問会を開いても良いんだぞ？」

「やつ……やだなあ！冗談ですよ！」

顔を引き攣らせながら必死に謝るアレックスが可笑しく、思わず吹き出してしまった。笑い声と共に緊張が吹き飛んで行く。緊張をほぐす為に、ノワリーは得意でも無い冗談を言ってくれたのだ。ドアがノックされ、女性が入って来た。知的な感じで、細いフレームの眼鏡が良く似合っている。

「エリオット大尉と部下の方ですね？準備が整いましたので査問室にご案内します」

女性の後に続いて部屋を出た。長い廊下に足音が木霊する。査問室に近付くにつれ、緊張と不安が膨張していった。

あの事件で怪我を負ったアッシュとリゲルが病院に入院してから数日後、ソエル、アレックス、ノワリーの三人に空軍本部に来るよう命令が下った。基地に届いた手紙には、三人を査問会にかけると短く書かれていた。私達は何も悪い事はしていないのに。理不尽さに憤ったのを覚えている。いくら上からの指示とはいえ、オペラ達は土足で他人の家に踏み込んで来たのだ。おまけに、リゲルを銃で撃ち抜き、アッシュを海の底に沈めようとした。まずはオペラが査問会にかけられるべきだと思う。

「……やっぱり、俺も怖いよ。飛べなくなるのかな」

「考えたくありませんけど……そうなるかもしれないね」

「何も心配するな。私が必ず守る。大丈夫だ」
前を歩くノワリーが振り返らずに答えた。一分の狂いも無く伸ばされた背中には、迷いも恐れも無かった。目の前の現実には挑むように、歩みを進めていく。

ついに審判の扉の前に着いた。案内人の女性は頭を下げると来た道を引き返して行った。ノワリーが到着を告げるノックをする。入れと声が。三人は部屋の中に足を踏み入れた。

焦げ茶色の机が楔型に整列していた。正面の壁にはクルタナ空軍の巨大なエンブレムが堂々と飾られている。恐らく複製品だろう。軍の幹部達が思い思いの恰好で椅子に座っていた。彼等の目の前には、ご丁寧の一つずつミネラルウォーターの入ったペットボトルが置かれていた。そんなに必要無いだろう。共有すればいいのに。何を張り合っているんだか。制服の胸にはビッシリと勲章が着けられていて、誇示するように陽光に煌めいた。エヘン。幹部の一人が咳払いをした。

「では、これより査問会を開く。ノワリー・エリオット大尉。ソエル・ステュアート飛行士。アレックス・フォン・アルジャーノン飛行士。グランツ博士の報告書によると、君達三人は彼女達の任務遂行を妨害したと書かれていたが、事実かね？」

「否定はしません。しかし、妨害という表現は腑に落ちませんね。それに、私はともかく、ステュアート飛行士とアルジャーノン飛行士は軍の規律に反するような行動はしていません。何故二人を査問会に招集したのですか？」

「彼等二人は特に反抗したからだ。博士に危害を加えようとしたと聞いている」

何という出まかせだ。反論しようとして口を開いたが、ノワリーが目で止めると遮った。言葉を飲み込んで押し黙った。

「全ては私の指示による行動です。二人に罪はありません。処分は

私だけで充分です」

「ぼそぼそと周囲から囁き声が聞こえた。幹部達が顔を寄せ合って秘密の会話をしている。」

「エリオット大尉を解雇すれば、国民の支持率低下は免れないぞ。何せ、奴は英雄だからな」

「だがジエネシスを引き渡す気は毛頭無いだろう。いっそ、基地を潰してしまえば…」

「基地を潰せば国境の守りが手薄になる！それに、ヴァルキリーにどれだけ予算を継ぎ込んだと思う？」

「ユグドラシル基地を監視下に置いておこうじゃないか。大尉には空軍の広告塔としての価値がある。解雇は出来ん」

「しかし…奴は頭が切れる。いずれ、我々に牙を剥くかもしれんぞ」
「輝かしい功績を持ち、容姿も申し分ない。国民から絶大な人気もある素晴らしい広告塔だ。むざむざ手放す訳には…」

「談合は、余所でやってもらいたいものだ」

良く通る低音の声が響き渡った。今まで沈黙も守っていた男性が初めて口を開いたのだ。男性は立ち上がると、真っ直ぐにノワリーを見つめた。二人の存在等眼中にないといった様子だ。ノワリーより背が高く、制服の下に逞しい身体が息づいている。彼と同じ濃い緑色の髪。甘さを削ぎ落とした鋭く精悍な顔立ちだ。

「エリオット大尉。報告書にはジエネシスの事しか記載されていないが、事実か？私は、ジエネシスとヒトの血を引く者が居ると博士から聞いたのだが」

男性の視線が動いてアレックスを捉えた。隣に立つアレックスが緊張して震えた。幹部達がざわめく。この事は知らなかったようだ。「彼女の空想上の話だと思えますが。聡明で知られる将軍がお伽話を信じておられるとは、驚きです」

「空想上の話では無いと私は思っている」

また幹部の男が咳払いをした。自分達を無視しているのが気に食わない、といった顔だ。

「エリオット將軍。息子との会話は家庭でもらえるかね？ここは我々に任せてもらいたいのだが」

エリオット將軍が見下したような、蔑んだような笑みを浮かべた。「任せる？大尉を利用して甘い汁を吸っている、腐りきった貴様等に何を任せるというのだ？」

「大方、私を解雇せずに広告塔として利用するつもりでしょう」

「ほほう…成程。良く解つたな」

「勲章を着けていれば権力を手にしたと思ひ込んでいる、腐った俗物の連中です。考えている事はお見通しですよ」

「ははは！違いない！」

痛烈な辛辣の言葉に査問室の空気が一気に凍りついた。將軍の豪快な笑い声だけが木霊する。侮辱された幹部達の顔がみるみる真っ赤に染まっっていく。とても際どい会話だ。恐れを知らない二人に感心し、同時に呆れてしまった。

「処分の内容は後日通達する。帰りなさい」

將軍の一言で査問会は張り詰めた空気のまま終了した。三人は敬礼すると退出した。査問室の空気は汚く濁っていた。上澄みだけが偽物のように綺麗で、積み重なった欺瞞や傲慢さ、負の感情が泥よりも重く沈殿しているのだろう。

「…俺の名前、出ませんでしたね」

隣を歩くアレックスがぼつりと呟いた。確かにそうだ。彼がジエネシスの血を引く者だという事は、オペラに知られてしまった筈。なのに報告書には部隊の行動を妨害したとしか書かれていなかったらしい。書き漏らしたという事はあり得ないだろう。

「何か意図があるのかもしれない。気を付けよう」

三人を追いかけるように足音が聞こえた。振り返ると、エリオット將軍が向かって来る所だった。数歩離れた距離で彼は止まった。堂々とした態度と体軀に威圧されてしまいそうだ。自信に満ち溢れていて恐れを知らない。そんな印象を覚えた。

「査問会は終わった筈です。まだ何か？」

「仕事の話では無い。五年ぶりに親子の会話をしたいと思ってな」

「貴方の顔は見たくないと、あの時言った筈ですが」

「冷たいな」將軍は一度だけ二人を見た。そして、ノワリーに視線を戻す。「しかし、壊滅したヴァルキリーを立て直すとは、見事な手腕だ」

「貴方達空軍が彼等を殺した。私はそれを忘れません」

これ以上話をしたくない。ノワリーの表情が語っていた。普通の親子の会話らしくない会話だった。

「母さんが会いたがっている。何故帰って来ない？」

「…帰る必要が無いからです。では、失礼。行くぞ」

ノワリーに促され、その場を立ち去った。足音も声も追いかけて来なかった。駐車場に止めてある車の所へ。

「あの…隊長…エリオット將軍って…」

運転席のドアを開けて乗り込もうとしたノワリーに質問した。肩越しに振り向いたノワリーは複雑な表情をしていた。

「クラッド・エリオット。名前の通り、私の父親だ」

「五年も家に帰ってないんですか？」

「そうなるな。正確に言えば…十年程帰っていない。家出同然に飛び出したんだ。戻る気は無い。さあ、基地に帰るぞ」

色々訊きたかったが、ノワリーは詮索されるのを拒むように運転席に乗り込んだ。それに訊ける雰囲気では無かった。三人を乗せた車は基地に向かって走り出した。

人には他人が深く足を踏み入れてはいけない領域があるのだ。

ソエルにも、アレックスにも、ノワリーにも。

誰にだって。

後日、査問会の結果が記載された封書が届いた。ノワリーは戒告処分。ソエルとアレックスは二週間の間、パイロットの資格を剥奪される事になった。処分の内容に消沈していた時、朗報が届いた。

病院に入院しているアッシュの容体が安定したと連絡が来た。面会も許可された。思ったよりも早い回復に安心した。早速お見舞いに行く事にした。

「出来たわ。うん。凄く可愛い」

櫛を握ったメアリーが満足げに微笑んだ。デスクの上にはマスカラやアイシャドー、化粧品が散らばっている。鏡の前に立った。映し出された自分の姿に驚いた。

薄いピンクのチークが白い頬に。いつも結び上げている髪は下ろし、ヘアアイロンで緩いウェーブを付けてもらった。ナチュラルな色のルージュとリップグロスを塗った唇はプルルと潤っている。生まれて初めてのメイクに戸惑っていたが、ここまで変身出来るとは。「これ…本当に私ですか？」いつもと違う自分にドキドキした。「塗り過ぎじゃ…」

「これでも薄いくらいよ。いつもの髪型も良いけど、下ろしても可愛いわね。アッシュに会いに行くんだから、おしゃれしないと駄目よ。これ、私からのお見舞い。手作りのアップルパイよ」

メアリーがリボンで結んだ箱を渡してきた。香ばしい香りが鼻をくすぐる。

「良い匂いですね」

「貴女達が居ない間、私がヴァルキリーを守るから安心して。他のチームから応援が来てくれるって」

ソエルとアッシュ、アレックスが居ないヴァルキリーでメアリーだけが唯一飛べる存在なのだ。彼女にかかる負担は大きくなるだろう。申し訳ない気持ちで一杯だった。

「…すみません」

「良いのよ、気にしないで。アッシュによろしくね」

「はい。行って来ます」

メアリーと別れて宿舎のロビーへ行った。ロビーにはアレックスが居た。シンデレラのような変身ぶりにアレックスは驚いていた。

「あれ？ソエル？」

「はい」

「へえ…雰囲気全然違うなあ。可愛いよ」

可愛いという言葉をさらりと口にするなんて凄いなと感心した。同性に言われるのと異性に言われる可愛さで感じる恥ずかしさはかなり違った。アレックスは旅行鞆を肩に提げていた。ジャケットのポケットから乗り物のチケットが顔を出している。

「ご旅行ですか？」

「うん。一週間休暇を貰って、実家に帰るんだ。母さんとも会っていないし、心配してるだろうから。アッシュとリゲルによるしく言っておいてくれないかな」

「解りました。お気をつけて」

「お土産、楽しみにしててよ」

基地を一緒に出てバス停でアレックスと別れた。アレックスを乗せたバスが走り去り、病院行きバスが到着する。バスに揺られているとアッシュに自分からのお見舞いの品を買っていない事を思い出した。慌ててブザーを押してバスを降りた。

ユグドラシル基地に所属する者なら一度は行った事がある街を歩き回って花屋を探した。交差点の向こうに一件の花屋を見つけた。レトロな雰囲気の小さな店だ。平日だから客は少ない。見覚えのある後ろ姿を見つけた。緑色の髪の長身の青年。花屋に居るとは珍しい。そつと側に行つて見上げた。気付いていないノワリーは白百合を眺めていた。

「こんにちは」

声をかけた。琥珀色の目がゆっくりと変身した姿を認識する。一瞬、ノワリーの顔が強張った。

「……シルヴィ？」聞き覚えの無い名前を呼ばれて戸惑った。人違いだとノワリーが気付く。

「いや、すまない。人違いだ。失礼だが、君は誰だ？見覚えが無いのだが……」

「私です。ソエルですよ」

不意打ちを食らったようにノワリーの目が丸くなった。常に冷静沈着なノワリーがこんな顔をするなんて驚いた。

「…ステュアートか？」

「そうです。あの、私…そんなに変ですか？」唇を尖らせて、拗ねた表情を作ってみた。

「そうじゃない。その…何だ…似合っているとのおうとしたんだ」目を逸らしたノワリーの頬はほんの僅かな赤色に染まっていた。

ノワリーが照れている。またまた驚いた。冷静で完璧な隊長がこんな顔をするなんて。可愛いとかからかったら怒られそうだ。

「病院からブルーの容体が安定したと連絡が入った筈だ。何故花屋に？」

「お見舞いの品を買い忘れてて。慌てて買いに来たんです。隊長こそお買物ですか？」

「ああ。病院に行くのなら、送って行くが…」

「え？」

「私では不服か？」

「いいえ！そんな事ありません！お言葉に甘えます！じゃあ、早く選ばないと…」

「慌てなくて良い。外で待っている」

白百合の代金をレジで払い終えたノワリーは外に出て行った。長考の末、ブルースターという花に決めた。花弁が五つに分かれた花で、空の色を写し取ったような水色が綺麗だ。花言葉は信じ合う心だと店員が教えてくれた。アッシュに相応しい花だと思った。

ノワリーはベンチに座ってコーヒーを飲んでいた。丁度飲み終わったようだ。空のコップをゴミ箱に捨てると、彼は立ち上がった。

通り過ぎる幅広い年代の女性が熱い視線を送っている。携帯で写真を撮る者。見惚れる者。友達と歓声を上げる者。反応は様々だ。

「隊長、凄いですね」

「何がだ？」

「女の人達が見てますよ。カッコイイとか言ってます」

「私にそんな価値は無い。行くぞ」

駐車スペースに止めてある黒のセダンに乗り込んだ。シートベルトを締めたのを確認したノワリーが車を発進させる。

華麗にターン。

車は道路をランディング。目的地は病院だ。

漆黒の機体はサイド・バイ・サイド。

地上のフライトが始まった。

「隊長も病院にお見舞いですか？」

「いや。私用で街に用がある」

「…私達の所為で迷惑をかけて…：申し訳ありませんでした」

「謝る必要は無い。上層部に逆らったんだ。まあ…：覚悟はしていただきますます申し訳無い気持ちになった。ヴァルキリーを守る為にノワリーは上層部に反抗したのだ。彼が居なかつたら、アツシユとアレックスはどうなっていたのだろう。軍の研究施設に連れて行かれてモルモットにされていたかもしれない。」

「ある程度私は国民から支持されている。私を解雇すれば、軍の支持率が下がる事を奴等は知っているようだ。下らない事に知恵が回るようだ。軍の飾りとして一生を過ごす気は無いが…：無駄な足掻きなのかもしれない。栄光など脆く儂いモノだ。私は翼をもがれ、片手と片足を失ったウサギだ。かつての英雄「光の槍」はお偉い様に祀り上げられて、利用されているだけだ。…：情けないな、本当に」

「そんな…：隊長は英雄「光の槍」です！憧れているパイロットはたくさん居ます！勿論、私だって…：」

弱音に似た言葉がノワリーの口から発せられた。赤信号で一時停車。横断歩道を歩行者が渡って行く。思わずノワリーの手に触れていた。優雅にピアノの鍵盤を弾いているのが似合う、繊細でしなやかな手。僅かに眉を上げたノワリーが見つめ返した。

「…辞めるなんて言わないで下さい。ユグドラシル基地とヴァルキ

リーには隊長が必要なんです」

信号から赤から青へ。重なっていた手がそつと除けられた。ノワリーが前方に視線を戻す。

「隊長…」

「…辞めるつもりは無い。ヴァルキリーは私の大切なチームだ。安心しろ」

「…はい」

前を見据えるノワリーの口元が微かに微笑んだ。白い建物が視界に入った。門をくぐり、病院の敷地内にある駐車場へ。機械にコインを入れて駐車券を購入する。適当なスペースに車を止めて院内に入った。

混雑しているロビイを歩き、ナースステーションへ。受付の看護士にアツシユの部屋番号を訪ねた。彼女はパソコンのデータベースを開くと、笑顔で512号室だと教えてくれた。柱に背を預けて待っているノワリーの所に戻った。街中と同じように彼は人目を惹いていた。流石は元英雄だと感心した。慣れているのか、ノワリーは平然としていた。

「512号室がアツシユ君の病室です」

「512か…五階だな。まだ時間がある。私も付き合おう」

「ありがとうございます。アツシユ君、喜びますよ」

「どうかな？驚くと思うぞ」

エレベーターで五階へ上がった。一定の感覚で並んでいるナンバプレートを確認しながら歩いて512号室を見つけた。中からどこかで聞いたような声が聞こえている。ドアを開けて様子を窺うと室内にはリゲルが居た。アツシユとベッドの上に胡坐をかいてトランプをしていた。悲鳴を上げたりリゲルがカードをばら撒いた。頭を押さえたりリゲルは髪を掻きむしった。

「くっそお〜！何でババばかり引いちまうんだよ〜！」

「それはアレだ。ババに愛されてるんだよ」

「うっし！もう一回だ！」

リゲルとゲームを興じているアツシユの表情は輝いていた。以前の彼には見られない笑顔が零れている。

「……二人は重傷ではなかったのか？」

「あんなに心配したのに……」

眉間に皺を寄せたノワリーは苦々しく呟いたが、安心した笑顔を浮かべていた。アツシユが二人に気付いた。悪戯が見つかった子供のような顔になる。手に持っていたトランプを投げ捨てたアツシユは素早くベッドに潜り込んだ。背を向けているリゲルはまだ気付かない。訝しげな表情で、狸寝入りをするアツシユを睨んだ。

「何してるんだよ。勝ち逃げなんて卑怯だぜ！」

「ファック！馬鹿！後ろを見る！」

「はあ？後ろ……」

振り向いたリゲルの顔が一瞬にして引き攣った。厳しく睨む二人と正面から目が合う。誤魔化すようにリゲルは笑った。

「隊長に……ソエル……」

「元気そうで何よりだ」

「アツシユ君！リゲルさん！」

「コレには深〜い訳があるんスよ」

病室のドアが勢い良く開け放たれた。恰幅の良い中年の看護師が部屋に踏み込んで来た。彼女の視線が室内を見渡し、リゲルの上で止まった。力強い足取りで看護師はベッドに突進した。まるで歩く戦車だ。二人は慌てて彼女の進路から退いた。

「見つけたよ！フォーマルハウト君！まったく…すぐに病室を抜け出すんだから！油断も隙もありやしないよ！」

「いててて！オバちゃん！耳が千切れちまうよ！隊長〜！ソエル〜！助けてくれよ〜！」

看護師はリゲルの耳を掴むとベッドから引き摺り下ろした。シートから出て来たアツシユも呆然としていた。情けない悲鳴の救難信号が響き渡る。二人はメーデーを無視する事にした。お灸を据えてもらっ良い機会だ。リゲルを連れて彼女は出て行った。悲鳴が遠ざ

かつて行く。三人は吹き出して笑った。笑顔を消したアツシユが真つ直ぐに見つめて来た。真剣な面持ちだ。

「ソエル。悪いけどよ、少し隊長と二人きりにさせてくれねえか？」

「あ、はい。解りました」

大事な話があるのだろう。ノワリーを病室に残して部屋を出た。

ソエルが出て行って、部屋に居るのはノワリーだけだ。二人共饒舌なタイプでは無い。しばらく沈黙が続いた。用があると言ったのは自分なのに。どう切り出せばいいか困った。

「具合は？」ノワリーが沈黙を破った。

「ああ…もう平気だ」

「安心した。皆、お前の事を心配している」

「隊長」

「ん？」

「しばらくヴァルキリーを離れたい。許可を」

「そう簡単に許可は出せない。理由を訊きたい」

僅かに顔を伏せて白いシートに視線を落とす。ノワリーは話し出すのを待っている。催促する気は無さそうだ。彼なら、世界が終わるまで待ち続けるだろう。言葉を綺麗に整理していた筈なのに。上手く出て来なかった。それでも、伝えないと。解ってもらえない。……今は何とか地上に留まってはいるけど、このままじゃ、いつか…いや、必ず空で死のうとする。オレは…生きたい。ヴァルキリーのメンバーと…ソエルと空を飛びたい。だから、空から離れて自分を見つめ直したいんだ」

顔を上げてノワリーの端正な顔を見つめた。この男は苦手だが、解ってくれると確信していた。腕組みをしているノワリーは黙っていた。感情の起伏が少ない彼は何を考えているのだろう。

「お前はヴァルキリーのエースパイロットだ。正直言って、痛い話だな。私はお前の意思を尊重する。上に話しておこう。ただし、完

全に回復してからだ。いいな？」

やっぱり、解ってくれた。理解してくれた。頷いた。ノワリーが側に。白い手袋を嵌めた手が頭を撫でた。驚いて瞬きした。ノワリーは腕時計を覗き込むと、ドアを開けた。去り際に肩越しに振り向いて微笑んだ。

「私達はお前を待っている。それだけは忘れないでくれ」

軽く片手を上げるとノワリーは出て行った。短い言葉だったが、彼の優しさを感じ取れた。

見えなくなつた背中に敬礼を。

決心がより強くなった。

後は　アイツに伝えるだけだ。

きつと、泣くだろうな。

ソエルは　泣き虫だから。

廊下で待っていると、病室からノワリーが出て来た。アツシユとの話が終わつたようだ。ノワリーが側に来た。残念そうな微笑みが浮かんでいる。

「すまないが、私はこれで失礼する」

「付き合つて頂いて、ありがとうございました。用事ですか？」

「ああ。婚約者の墓参りだ」

ノワリーの顔に暗い影が浮かんだ。訊いてはいけなかつたのかもしない。

「あ……すみません……」

「謝る必要は無い。また、基地で」

「はい」

ノワリーを見送ると病室に戻つた。窓際のベッドにアツシユは居た。窓の外を眺めていた横顔が動いた。静かな表情が微笑みを形作る。心が洗われるような気がした。微笑みを返した。

「……よお」

「お久し振りです」

「立ち話もなんだ。座れよ」

アツシュが顎で椅子を指示した。頷き、ベッドの側に椅子を引き寄せて座った。近くで見るアツシュの顔は聖者のように穏やかだった。白い肌がより白い。少し痩せたんじゃないか。鞆からラッピングされた箱を取り出した。メアリーからのお見舞いだ。

「これ、メアリーさんからです。手作りのアップルパイです」

「へえ…器用なモンだな」箱を開けたアツシュは感心したようにパイを眺めている。

「これは基地の皆さんから」

四角い色紙にはビツシリとメッセージが書かれていた。彼の為に基地に居るパイロットや整備士達に頼んで書いてもらった物だ。

「ファック。何だよこの似顔絵。ちつとも似てねえじゃねえか」

不満を言いつつもアツシュは嬉しそうに笑っていた。一番最後にとっておきのプレゼントを。花束を渡した。

「私からです」

花束を受け取ったアツシュは、目を細めて空の色を映した花を見つめていた。

「…綺麗な花だな。何て言うんだ？」

「ブルースターです。アツシュ君、青色好きかなって思ってた」

「大好きな色だ。そう言えば、アレックスは来てるのか？」

「アレックスさんは実家に帰ってます。アツシュ君によるしくって処分の事は言わなかった。アツシュに心配をかけさせたくない。」

「……皆に迷惑をかけちゃったな」

「迷惑だなんて…そんな事無いです」

会話が途切れる。心地良い、子守唄のような沈黙が流れた。カーテンが風にはたみいて白い波を描く。アツシュが正面から見つめてきた。紫色の瞳の奥に、強い決意の光が揺れている。

「…ソエル、オレはしばらくチームから抜けようと思う。空から離れて、自分を見つめ直したいんだ」

彼の言葉に驚かなかった。アツシュがそう告げる事を感じていたから。

「…はい」

「オレの中に眠るマナをよく知ってから、戻ろうと思う」

「…はい」

「今までのオレは、空に焦がれすぎて…苦しかった。自暴自棄になつてたんだ」

「…はい」

「お前何にも言わねえのかよ。はいばかりじゃねえか」

「アツシュ君がそう言うの、わかってましたから」

「何だよ、ソレ」

「待ってます…アツシュ君が戻つて来るまで、ずっと……」

何も言えなかった。涙で言葉が詰まり、出て来なかった。何を話そうかずっと考えていたのに、人魚姫が泡になった時のように言葉が散っていく。三百年経たないと散った言葉は出て来ない。

「…ファック」

アツシュが手を伸ばして引き寄せた。

華奢な身体で精一杯抱き締めた。

濃紺の髪が頬に触れ、

心臓の鼓動が伝わり、

溶け合い、

一つの音楽になった。

ゆるやかなアンダンテ。

空を飛んでいる時の風を切る音が蘇る。

耳元で、優しくアツシュが囁く。

背中を撫でる手が雲のように柔らかい。

「もう、空で死にたいなんて言わねえから。待ってるよ」

「…うん…」

ゆっくりと目を閉じた。

閉じた目の中に、大好きな、澄み切った青空が広がった。

遙か頭上に広がるのは、スカイブルーの空。

その空を貫くように、一筋の飛行機雲が走っている。アッシュは眩しそうに目を細め、空を見上げた。

「オレは必ず戻る。だから、それまで…墜とされんじゃねえぞ、ソエル…」

アッシュは静かに呟いた。

その言葉が、今も空を駆けるソエルに届くと信じて。

眩きは風に乗り、空の向こうに飛んで行った。

アツシュがユグドラシル基地を去ってから一年の月日が流れた。

基地を飛び立ち、空を駆けて帰還する。平穏とも言える日常の繰り返しだった。クルタナの領空に度々侵入していたアンティオキアの戦闘機と出くわす事も無かった。少しではあるが、情勢が安定してきている証拠だ。しかし、世界の利権を手中に収めようとしている彼等が世界樹を諦めたとは思えない。虎視眈眈と狙っているのだろ。クルタナ空軍の幹部達も世界樹の情報を手に入れたがっている。ノワリーの庇護の下を離れたアツシュが無事で居ると良いが。

そんな心配は杞憂に終わった。ある日、アツシュからメールが届いたのだ。いつの間に携帯電話を使うようになったのだろう。一週間に二、三回程度のやり取りだが、短い文面から彼が元気で過ごしている事が解った。勿論絵文字なんて皆無だ。ハートマークも付いていない。たまに綺麗な風景の写真も送られて来る。一人旅を満喫しているようだ。

飛行機と人を墜とす事の無い日々。

これが平和というモノなのだろう。

『そろそろ時間だね。基地に戻るろ』

ノイズ混じりのアレックスの声が無線から聞こえた。いつも無線は駄々をこねている。いつになったらノイズ無しで喋れるようになるんだろ。メカニックチームに頼んで修理してもらわないと。時計に目をやる。予定時間を丁度すぎる所だった。燃料とマナも充分残っている。基地まで余裕で帰れる量だ。

「了解です」

「俺が前を飛ぶよ」

鮮やかな緑色の機体が翼を振って前方を飛んで行く。アレックスの戦闘機、メイデンリーフだ。名前の由来は「若葉」からきているらしい。彼らしい名前だと思った。ラダーで機首を調整。メイデンリーフの後に続いた。

灰色のアスファルトの滑走路に難なくランディング。待っていた整備士達が二機を第一格納庫に運んで行く。青空に良く映える色の二機は格納庫の中に姿を消した。

「ソエルの腕も上がったよね。俺より上手いんじゃないかな」

「そんな事ありませんよ！まだまだ未熟者です」

「謙虚だなあ」

思いがけず褒められて内心喜んだ。確かにアレックスの言うとおりにだと思った。ほんの少しずつではあるが、操縦技術が上がっていると自負している。それでもアツシユやアレックスにはまだまだ敵わない。

アツシユがチームを抜けてから、アレックスがパートナーになった。一緒に飛んでいて気付いた。アツシユとアレックスの飛び方は光と影のように正反対だった。アツシユの動きは鋭角的で、パイロットが乗っていないようなそんな飛び方だ。いつ墜落してもおかしくない飛び方だ。それに対し、アレックスの動きは滑らかで安定感がある。安心して後ろや前を任せられる飛び方だ。人が一人ずつ違うように、空を飛ぶ軌跡もパイロットによって違うのかもしれない。早速携帯の電源を入れ、日課になったアツシユとのメールを開始した。ここ数日返事が返って来ない。色々忙しいのだろう。短く文章を打ち込み、送信する。送信完了の文字がディスプレイに表示された。

「二人共、ご苦労さん」

機体を格納庫に収納し終えたりゲルが手を振った。ツナギが相変わらず真っ黒に汚れている。

「お前さ」。たまには服洗えよ。女の子にモテないぞ」

「ほつとけ。そうそう、ソエルにお客様だぜ」

「え？私にですか？誰だろう…」

「ああ。オフィスに居る筈だぜ。会いに行けよ」

「お客様って…まさか…」

「さあ？誰だろうな」

リゲルは誰だか知っている。ニヤニヤ顔のリゲルに腹を立てたアレックスが彼の背中に蹴りをお見舞いした。もしかして。脳裏にある人物の姿が描かれた。直感が稲妻のように閃いた。

二人と別れてオフィスビルに駆け込んだ。着替えている暇は無かった。フライトスーツのままだ。エレベーターのボタンを連打する。トイレを我慢する時より焦っていた。到着したエレベーターに飛び乗り、三階へ上昇。逸る気持ちを抑えて廊下で乱れた呼吸を整えた。きつと。「彼」が帰って来たんだ。オフィスに近付くにつれて話し声が聞こえてきた。

「随分、迷惑をかけちゃったな」

「謝る必要は無いと思うが。もう大丈夫なのか？」

「まあ……何とか折り合いはついた。だから戻って来たんだ」

「そうか…安心した。お前が居ないとヴァルキリーは成り立たないからな」

「グングニルは…やっぱ沈んだままだよな」

「すまない。回収出来なかった。上に掛け合って、新しい機体を支給してもらった。グングニルと同じ機体だ。エンジンが最新式になっただけだ」

「良く予算を回してもらえたな。流石は英雄、と言った所か」

「辞めると言えば、奴等は慌てて御機嫌を取りたがる。利用するだけ利用してやるつもりだ」

「悪魔かよ。マジ怖え」

控え目な笑い声。会話が止まった。深呼吸をしてドアをノックした。入室を許可する声。ドアを開けて室内へ入った。デスクに座ったノワリーと、懐かしい姿が振り向いた。

「……よお」

はにかむようにアッシュが微笑んだ。うなじで跳ねた濃紺の髪に紫の瞳。小柄で華奢な身体は一年前と殆ど変わっていない。到着したばかりなのだろう、ソファアの上に小振りの鞆が置かれていた。

「お久し…振り…ですつ…」

声と涙腺が震えて涙が滲む。涙に驚いたアッシュが慌てて側に来た。

「なっ…泣く事ねえだろ…」

「ごめんなさいっ…嬉しくて…」

「…泣き虫な所は変わってねえな」

アッシュの手が伸びた。金色の髪が慰めるようにそっと指で梳かれる。二人の様子を見守っていたノワリーはデスクから立ち上がり、二人の側までやって来た。洗礼を受ける子供のようにアッシュは静かに立っていた。

「ブルー、これを。返す時が来たようだ」

ノワリーはヴァルキリーのエンブレムをアッシュの掌の上に置いた。まるでアッシュの下に戻るのを待っていたかのように、エンブレムが一瞬煌めいた。アッシュはエンブレムをそっと握り締めた。

「よく戻って来てくれた。我々は、君を歓迎する」

「お帰りなさい、アッシュ君」

アッシュのアメジストのような瞳が揺れ、目元にうつすらと涙を滲ませた。

「……ただいま」

短く答えたアッシュの声は嬉しさと喜びに震えていた。

オフィスビルを出て二人は並んで歩いた。一年間話したかった事が山のように積み重なっている。それを足場にすれば、スペースシヤトル無しで宇宙に行けそうな程だ。基地の事。ヴァルキリーのメンバーの事。フライトの事。話題は尽きず、時間だけが光の速さで

過ぎ去って行った。

ふと、アツシユの表情が豊かになった事に気付いた。一年前はいつも不機嫌そうに顔を顰めて悪態を吐き、言葉の端々に棘があった。世界の終焉を望んでいるような雰囲気纏っていた。今の彼は会話に相槌を打ち、まだぎこちない微笑みを浮かべる。変わりつつある自分に戸惑っているようだが、変化を受け入れようと努力しているようだ。じっとアツシユの横顔を観察していると、彼が振り向いた。慌てて明後日の方向を向いた。

「ソエル。格納庫に行ってもいいか？新しいグングニルを見たいんだ」

「勿論良いですよ！行きましょう！」

格納庫の前でアレックスとリゲルが話しているのが見えた。視力の良いアレックスが二人に気付いて手を振った。小走りに駆け寄って来ると、色んな感情が混じった表情でアツシユを見下ろした。

「……馬鹿野郎。一年も待たせやがって」

「相変わらず、図体だけは無駄に立派だな」

満面の笑顔を浮かべたアレックスがアツシユの髪をぐしゃぐしゃに掻き乱した。アツシユも彼に負けないぐらいの笑顔を浮かべて、アレックスの脛を思い切り蹴飛ばした。痛みに泣きながらもアレックスは笑っていた。そこにリゲルもやって来て、軽く片手を上げて挨拶した。

「よ。久し振りじゃん」

「そうだな。テメエも相変わらずだな、星野郎」

「あのなあ……いい加減、俺の名前覚えるよ。何だよ……星野郎って……」

「あーハイハイ。リゲル。オレの機体は元気か？」

ちよつと面食らったような顔をしたリゲルが瞬きした。アツシユが素直に名前を呼ぶとは想定していなかったらしい。気を取り直したりゲルが爽やかな笑顔を浮かべた。

「元気に決まってるんだろ！この天才メカニック、リゲル様が整備してるんだぜ？何ならテスト飛行してみるか？」

「駄目ですよ！隊長に許可を貰わないと…」

「大丈夫だつて。いざとなったら、隊長の靴にまた苳ジャムを入れるさ」

「そっか、その手があったな。今度はマーマレードにしようよ」

真面目くさった表情でアレックスとリゲルが言った。冗談めいているようで、はたまた本気で言っているよう聞こえる。二人の掛け合いは絶妙で、聞いているこっちまで笑い出しそうになる。

「そっか。やはりアレはお前達の仕業だったのか」

背後からここに居る筈のない青年の声が聞こえた。アレックスとリゲルの顔に浮かんでいた笑みが強張り、サツと青白く染まった。幽霊に怯える子供のような。二人を震え上がらせる悪霊はどんな姿をしているのだろう。振り向くと封筒を脇に抱えたノワリーが立っていた。怒っているように見えるが、形のいい唇が微かに笑っている。

「隊長？どうしたんですか？」

「書類を渡すのを忘れていた。ブルー、テスト飛行しても構わないぞ？許可は出す」

「…え？マジで…いいのか？」

「勿論だ。チームのエースパイロットの腕が錆ついては困る」
アッシュの顔に歓喜の笑みが広がった。リゲルの袖を引いて二人は格納庫に入って行った。すぐにグングニルが滑走路に引き出された。キャノピーに包まれたアッシュは真っ直ぐに空を見つめている。目が合うと、アッシュは笑ってくれた。

滑走路を走り抜けミッドナイトブルーの機体は大空に還って行った。様々なテクニクを駆使して空を自由に飛び回っている。ロール。ストール・ターン。インサイドループ。どの技も素晴らしい完成度だ。やっぱり、アッシュは空を飛ぶ為に生まれて来たのだろう。羨ましいと思った。

「…羨ましいな」

隣に立つノワリーがぼつりと呟いた。空を仰ぎ、グングニルの軌

跡を目で追っている。その視線はグングニルにピタリと吸い付いていた。あの銀色の機体で空を駆け抜けるヴィジョンを見ているのだろうか。

「時々…自由に飛べるお前達が羨ましいと思う。私は地上に縛られて、もう飛べない。光の槍と呼ばれたあの頃が懐かしい」

ノワリーの顔に未練がよぎったのを見てしまった。もう飛べないと解っていても、空を飛びたい。そんな切実な思いがまざまざと声に表れていた。表情に浮かんでいた。空を飛ぶという自由を知った者は 空無しでは生きていけないのかもしれない。

「…隊長」

「すまない。くだらない事を言ったな。私はオフィスに戻る。この書類をブルーに渡しておいてくれ」

数枚の書類を手渡すと、ノワリーはオフィスビルに戻って行った。彼の生き方を表すような、迷いのない足取りだった。誰の手も借りずに生きて来た背中だと思った。

ノワリーの姿がビルの中に消えるまで、ずっと見続けていた。

翌朝いつも早起きの目覚まし時計より早く目が覚めた。アラームのスイッチをOFFに切り替えて大きく伸びをした。今日から数日間フライトの予定は入っていない。二度寝も悪くは無いが、折角の貴重な休みをダラダラ過ごしたくない。まずは朝食を食べる事にした。パジャマを脱いで私服に着替える。階段を下りて一階へ。ピロティの向こうにある食堂に向かった。

食堂は同じ非番のパイロット達で混雑していた。皆暇を持て余しているのだろう。朝食を摂ったり、談笑したりしている。窓際の席に座るアッシュとアレックスを見つけた。アッシュが食堂に居るのは珍しいなと思いつつ声をかけた。

「おはようございます」

「おはよう」

「……ウツス」

座つても良いかと尋ねた。二人は快く頷いた。椅子を引いてアツシュの向かい側に座った。向かいに座るアツシュの顔は半分死んでいた。人目を気にせず盛大な欠伸をする。朝に弱いんだよとアレックスが囁いた。

朝食を取りにカウンターに向かった。メニューを吟味し、ロイヤルミルクティーとバタートースト、目玉焼きとサラダを頼んだ。後ろで笑い声が上がった。肩越しに振り向くと、アツシュと数人の少年が楽しそうに話していた。一年前のアツシュには見られない光景だった。出来あがった料理をトレイに乗せて席に戻った。既に二人は食事を終えていた。アツシュは野菜ジュース、アレックスは紅茶を飲んでいる。

電子音で合成された軽快なメロディが鳴り響いた。独特の世界観を持つアーティストの曲だ。発生源はアレックスのズボンのポケットだった。ごめんねと断ると、アレックスは席を立てて廊下に行った。窓越しに彼が会話しているのが見えた。横顔が時折嬉しそうな笑顔を浮かべている。

「アツシュ！」窓を開けたアレックスが顔を出した。「母さんから電話！お前に代わってさ！」

ズズズとストローが濁った音を立てた。アツシュが空になった容器をゴミ箱に投げ入れた。見事なロールを描き、空になった容器はゴミ箱の中に帰還した。ゴミ箱の中でリサイクルされるのを待つのだろう。立ち上がったアツシュは廊下へ。アツシュの姿が廊下に消えると、入れ替わるようにアレックスが戻って来た。

「アツシュ君のお母さんですか？」

「ううん。俺の母さんだよ。まあ…色々あってね。俺の母さんがアツシュの親代わりなんだ。ちなみに、宇宙一紅茶を淹れるのが上手いんだよ」

「そうなんですか。一度飲んでみたいですね」

会話を終えたアツシュが戻って来た。携帯電話を無造作に突き返

し、ポケットからスモークの箱を取り出した。上下に振って出て来た一本を口に銜える。喫煙コーナーに行こうとしたアッシュをアレックスが呼び止めた。

「母さん、何て言ってた？」

「あ？元気でやってるかとか…身体の調子はどうだとか…そんなモンだ。また、スモークを送ってくれるって言ってたぜ」

「俺の事は？」

「情けない息子だけど、よろしく頼むだよ」

「ちよいちよい！嘘だろ？母さんはそんな事言わないよ！」

「どうだか」

口を尖らせて抗議するアレックスを横目で笑うと、アッシュは喫煙コーナーに歩いて行った。食後のお茶を飲み終える頃にアッシュが戻って来た。窓の外に目を向けた。今日は天気にも恵まれている。

気持ちの良い青空が広がっていた。こういう日はどこかへ出かけたくなるモノだ。生憎、お弁当という気の利いた物は持って無いが。

「お二人共非番ですよ。これから街に遊びに行きませんか？」

「いいね。アッシュも行くだろ？」

「……まあ…良いけどよ」

アッシュは不満そうな顔をしていた。アッシュが不満に思う理由に気付いたアレックスがニヤリと確信した笑みを浮かべた。

「あゝ解ったぞ。お前、ソエルと二人つきりでデー……」

「馬鹿！ちよつと待ちやがれ！」

アッシュがアレックスの袖を掴んだ。そのまま二人は離れた場所でボソボソと何やら怪しい会話を始めた。交互に会話が繰り返り広げられているが、残念ながら会話の内容は聞こえなかった。アレックスがアッシュに囁く。直後、アッシュのハイキックがアレックスのお尻にクリーンヒットした。長身が一瞬エビ反りになった。

スッキリした表情のアッシュと、顔を引き攣らせて半泣き状態のアレックスが帰還した。情けない彼の顔を見て笑わないよう努力するのに苦労した。外出する時には指揮官の許可が必要だ。オフィス

に電話をかけたがノワリーは留守だった。事務の女性に伝言を頼んで街に繰り出した。

飛行機と違ってバスはよく揺れる。地上を走る乗り物は皆そうだ。人間も。大地に生きる者の宿命なのかもしれない。道路や線路に縛られて不自由な乗り物だと思う。でも、生きるには必要不可欠な物だ。

思えば街に来るのは数週間ぶりだった。世界を作り終えた神様の休日である日曜だから、家族連れやカップルが多い。本屋を覗いて最新刊を立ち読みしたり、流行の服をチェックする。久し振りに来た街は三人を喜んで出迎えてくれた。いくらからお金は持つて来たものの、帰りのバス代を残して財布は空になった。そろそろ帰らないとバス代を犠牲にして買い物してしまいそうだ。

「そろそろ帰りましょうか」

「んだよ。もう少し遊ぼうぜ」アッシュが不満を漏らす。

「駄目だって。ヒッチハイクして帰る羽目になるよ」

「それで、運転手に化けた殺人鬼に斧で首を切断されるってワケか？上等じゃねえか」

「もっ…もっつ！怖い事言わないで下さい！」

「あの、すみません」

背後から声をかけられて三人は振り返った。二人の男女が困った顔をして立っていた。亜麻色の髪の男性と金髪の女性。黒を基調とした服を着ている。

「道をお尋ねしたいのですが…共同墓地へはどう行ったらいいのでしょうか」

共同墓地の場所なら知っていた。街を一望出来る小高い丘の上にある。困っている人が居れば助けなければ。三人は二人を案内する事にした。墓地に向かう道中、軽く互いに自己紹介した。二人は夫婦で、デイヴィットとリリイと言う名前らしい。娘の墓参りに来た

までは良かったものの、共同墓地の場所を忘れてしまったと苦笑して話してくれた。死者が眠る墓地を守る門が見えてきた。悪魔や悪霊を追い払うと言われている銀製の門だ。

「良ければだが…君達も娘の為に祈ってくれないだろうか？」

「え？私達が…ですか？でも…」

「多くの人に祈ってもらいたい。光の国に居る娘も喜ぶよ」

断る気は無かったが、十字架を身に着けていない事に気付いた。

この世界では死者を悼む時に十字架のアクセサリーやモチーフを身に着ける事を習わしとしている。着けていないと、悪魔や悪霊を呼びこんでしまうのだ。

「すみません、俺達…十字架を着けていないんです」アレックスが申し訳なさそうに謝った。リリイが優しく微笑む。

「大丈夫よ。墓地に入る前に十字架を切れればいいわ」

胸の前で十字を切って銀の門をくぐった。ライトグリーンの草の上に白い墓石が綺麗に整列している。先客が居た。一つの墓石の前で静かに祈りを捧げている。白百合を携えた長身の青年。濃い緑色の髪が風と遊ぶようになびく。誰かはすぐに解った。ノワリーだ。屈みこんだノワリーは白百合を石の前に置いた。眠れる死者を起こさないように、そつと近付いた。

「…エリオット君？」

デイヴィットがノワリーのファミリーネームを口にした。どうやら知り合いのようだ。立ち上がったノワリーが振り向いた。動揺の色がまざまざと現れている。

「……お久し振りです」

「六年ぶり…になるのかしら？」リリイの微笑みは誰かに似ていた。

「ええ。六年ぶりです。すみません、貴方達がいらっしやるとは…すぐに帰ります」

ノワリーが一刻も早くこの場を立ち去りたがっているように見えた。夫婦の後ろに居る三人に気付き、行くぞと目で合図してきた。街に居る理由は後で訊かれそうだ。一体、この二人と何があったの

だろう。何も訊かずに従った方が良い。

「待ちなさい」

深海のように深く、温かいバリトンの声が呼び止めた。デイヴィットがノワリーに近付く。悪い事をして親に叱られる子供のように、ノワリーの顔に緊張が走る。リリイも夫の隣に立った。真珠の首飾りが無垢な輝きを放っている。

「君に、話したい事がある。聞いてくれるかね？」

「…はい」

「すまなかつた」

唐突にデイヴィットが頭を下げ謝った。彼に続きリリイも頭を下げた。切れ長の琥珀色の目が見開かれた。

「何故謝るんですか？頭を上げて下さい！」

「私達は君に酷い仕打ちをしてしまった。全てを失った君に、残酷な言葉を投げかけてしまった。愛する者を失った痛みを分かち合うべきだった。君に全ての責任を押し付けて……本当にすまなかつた」
「貴方は娘を愛してくれたのに、私達は理不尽な怒りをぶつけてしまったわ…ごめんなさい」

風が吹く。沈黙が流れた。木の枝から離れた木の葉が宙を舞う。誰も何も言わなかつた。沈黙が相応しいと思つたからだ。ノワリーはじつと黙っていた。言葉を探しているのだろうか。

「…顔を上げて下さい。お二人が謝る必要なんてありません。あれは…今でも私の責任だと思っています。私の力量が足りなかつたばかりに、シルヴィを死なせてしまいました。申し訳ありませんでした」

ノワリーが深く頭を下げた。一年前に彼から聞かされた事を思い出した。六年前の大戦でチームヴァルキリーを全滅させてしまった事を。生き残ってしまったノワリーは忘れてはいけない罪を背負つて生きて来たのだろう。ずっと、独りで。

「エリオット君。頭を上げなさい」

「……はい」

「私達は…以前のような関係に戻る事は出来ないのかね？」

頭を上げたノワリーがハッと息を呑んだ。静けさと優しさを湛えた四つの瞳が彼を見つめている。夫婦は許しを請い、遠回しに絶たれた交流を再びしたいと言っている。裂け目を修復しようとしている。

「しかし…私は…」

「逃げんなよ」

アッシュの声が割り込んだ。両手をポケットに突っ込んだアッシュがノワリーを真っ直ぐに見つめていた。睨みつけていると誤解されそうな目つきだ。紫と琥珀の視線が絡み合う。

「アッシュ君？」

「アッシュュ！」

慌てて止めに入ったが、アッシュは一瞥しただけで大人しくならなかった。そのまま言葉が続けられる。

「アンタとその二人に何があつたのかは知らないけどよ、目の前の現実から逃げるなんてアンタらしくないぜ。英雄「光の槍」だろうが。壁ぐらい簡単にブチ壊せる筈だ」

ファック。口癖の言葉を呟くとアッシュは黙り込んだ。ノワリーは長い睫毛に縁取られた瞼を伏せた。アッシュの言葉を噛み締めているように。彼が目を開けた。答えを待つ夫妻と向き合った。

「本当に…私なんかでよろしいのですか？」

「勿論だ。また、我が家に来て欲しい。酒でも酌み交わしながらシルヴィの事を話そうじゃないか。メアリーも喜ぶよ」

「近い内にお訪ねします」

デイヴィットが言った名前に聞き覚えがあつた。メアリーって、あのメアリー？いつも優しい彼女の笑顔が浮かんだ。アッシュとアレックスも気付いたようだ。おずおずと質問した。

「あの…もしかして、お二人はメアリーさんのご両親ですか？」

「あら。メアリーを知っているの？ええ、そうよ。メアリー・ローレンツの親ですわ」

「じゃあ、シルヴィさんって……」

白百合。一度だけノワリーが言っていた婚約者の墓参り。全滅したヴァルキリー。点と点が繋がって線になった。

「シルヴィ・ローレンツ、メアリーの姉だ。私が愛した女性で、婚約していた。六年前の大戦で命を落としてしまったが…今でも愛している。右手と右足を失っても彼女を助ける事が出来なかった。チームを守る事が出来なかった。彼等の人生を奪った罪は重い。一生を懸けて償うつもりだ」

ノワリーは墓石に刻まれた愛しい女性の名前を指でなぞった。慰めの言葉なんて言える筈が無い。彼が背負う十字架の重さを知らないのだ。それでも、少くくらしい重荷を分かち合いたい。助け合うのがチームだから。

轟音が鳴り響いた。沈黙の墓地の上を巨大な機影が飛んで行く。クルタナの飛行機かと思っただが、見た事ない形だった。機影は空の向こうへ飛んで行った。飛行機を認識したノワリーは険しい表情をしていた。

「アレは…クルタナの飛行機じゃねえぞ」

「…アンティオキアの爆撃機、ギガンテスだ。間違い無い。しかし…何故、アンティオキアの戦闘機がクルタナの領空を飛んでいるんだ？」

ブブブとバイブの音が。ノワリーがポケットから携帯電話を取り出した。シルバーのボディをスライドさせて通話を始める。会話を終えたノワリーの顔は更に厳しくなっていた。

「ローレンツから連絡があった。たった今、アンティオキアがクルタナに宣戦布告したそうだ。六年前の復讐と言っているらしい。ユグドラシル基地に戻るぞ」

「私達も家に帰ろう。シエルターに避難する準備をしないとな」

「ええ。ノワリー君、気を付けてね」

「はい。お二人もお気を付けて」

ローレンツ夫妻と別れて、ノワリーが運転する車で基地に続く道

を走った。制限速度ギリギリまで速度が上がっているのではないかと思うぐらいスピードが出ている。白い線が閃光のように流れて行く。カーラジオの電源をON。アンテيوخキア二度目の宣戦布告という速報が飛び込んで来た。

『先程、アンテيوخキアがクルタナに二度目の宣戦布告をしました！六年前の大戦の復讐だと激しく主張している模様です！繰り返します……』

異常な程興奮したアナウンサーが早口でまくし立てている。ラジオ越しに唾が飛んで来そうな勢いだ。これ以上聞きたくない。心中を察した助手席のアレックスがラジオを切ってくれた。車内は日曜のミサのように静かになった。

また戦いが始まるうとしている。

誰も墜としたりと思えば思う程、世界は無理矢理機銃のトリガを握らせようとするのだ。

「昨日、アンティオキアがクルタナに宣戦布告しました。六年前の大戦の復讐だと言っているようで、これは聖戦だと主張しています。すでに何機かのアンティオキアの戦闘機や爆撃機がクルタナの領空に侵入している模様です。尚、政府は……」

古びたラジオが陰気臭いニュースを吐き出している。眉を顰めてスイッチを切った。このまま聞いていると憂鬱になりそうだ。まったく、もう少し明るいニュースは無いのだろうか。昨日からテレビもラジオも同じ内容を延々と放送していた。政府によるプロパガンダじゃないか。国民を洗脳するつもりかもしれない。

コンテナの上に座っているアッシュがスモークの白い煙を吐いた。宙に漂う煙は器用にドーナツ状の形になった。飛行機でその輪をくぐれそうだ。溜息が自然に漏れる。アッシュが見下ろした。

「こんな状況なのに、偵察飛行なんて大丈夫かな」

「何言ってるんだよ。こんな状況だからだ。怖いなら尻尾巻いて部屋に籠ってる」

「お前と一緒に飛べるんだ。怖くなんか無いよ」

キモイとアッシュが吐き捨てた。言葉とは裏腹に口元に微かな笑みが浮かんでいた。キモイという言葉は照れ隠しだ。朝から格納庫に立て籠もっていたリゲルが出て来た。分厚い溶接用のマスクを脱ぎ捨てたりゲルは笑いながら近くにやって来た。軍手を嵌めた手が突き出される。何だと思い、アッシュと覗き込んだ。掌の上に消しゴム大の物が乗っている。

「あ？何だコレ」アッシュが顔を顰めた。

「超小型高性能無線機、タラリアさ！独特の周波数を持つてるから誰にも傍受されないし、互いに秘密の会話ができるんだぜ。我が親

友アツシユとアレックスに特別に進呈しよう」

「朝から何やつてるのかと思っただら…コレを作ってたんだ。機体の整備は大丈夫なのか？」

「大丈夫だつて！天才メカニックリゲル様を信じるよ！」

本当かと疑いつつ、泥棒と商売の守り神である神様が履くサンダルの名前の無線機を受け取った。シルバーのボディに羽が生えたサングルの模様が刻まれている。使い方を教わっているとソエルがやって来た。彼女はいつも時間に忠実だ。見習わなければ。

「おはようございます」

「おはよう」

「ウツス」

「それ、何ですか？」

ソエルがタラリアに気付き、覗きこんできた。隠せとリゲルがジエスチャーで指示を出す。それに従い急いで無線機をポケットに押し込んだ。慌ててリゲルが曖昧に誤魔化す。ソエルとノワリーは仲が良いともっぱらの噂だ。きっと、隊長に知られてはいけない物なのだろう。コッソリと開発していたに違いない。

「お前は非番だろ？何しに来たんだ？」

無愛想にアツシユが言った。本当は嬉しいくせにと小声でからかうと、剃刀のような鋭い左フックが飛んで来た。殺意のこもったフックを紙一重で避けた。

「お二人が無事に飛び立つのを見に来たんです。アンティオキアが宣戦布告したのに偵察飛行なんて危険すぎます。心配になって…」

「大丈夫だよ。エースパイロットのアツシユが居るし、すぐに戻って来るよ。心配してくれてありがとう」

「そっだよ。心配し過ぎじゃねえの？誰かさんみたいに眉間の皺が増えるぜ」

グングニルとメイデンリーフが滑走路に引き出された。ソエルの頭を叩いたアツシユはグングニルの所に向かった。ソエルの顔色は晴れない。曇り空のような不安が彼女の顔を覆い尽くしている。

「ソエル…そんな顔しないでよ。俺達は無事に戻るからさ」

「でも……凄く嫌な予感がするんです」

「アツシユは俺が守る。約束するよ。だから、安心して」

彼女の不安が晴れますように。祈りを込めて金色の髪を指で梳いた。アツシユを想ってくれる気持ちが嬉しかった。祈りは天に届いた。ソエルが微笑んだ。

「…はい。お気を付けて」

ソエルとリゲル、整備士達に見送られてグングニルとメイデンリーフは大空に飛び立った。クルタナの領空を見回る任務だ。いつもと同じコース。全神経を集中させて周囲を見回す。領空内とはいえ油断は禁物だ。いつ敵機と遭遇しても良いように、コンバットスプレッドを形成する。メイデンリーフが前を。適度に距離を置いたグングニルが後ろを平行に飛ぶ。言葉は要らなかった。ごく自然に、互いが取るべき位置を感じ取った。

『アンティオキアの野郎、ワケ解んねえな』

「だよな。両国は休戦状態の筈なのに…」

二人の会話にノイズが乱入してきた。何者かが無線を傍受して割り込もうとしている。

『君達…ヴァルキリーだね？』乱入して来たのは少年の声だった。

「そつだ。君は誰だ？」

『アンティオキアのパイロット』

『は？テメエ、何でオレ達の無線の周波数を知ってるんだ？それにここはクルタナの領空だ。さつさとお家に帰りな。撃ち墜とすぞクソ野郎』

アツシユの毒舌が炸裂。大抵の人間なら恐れをなす言葉だが、少年は怯んでいないようだ。

『もうすぐ、アンティオキアは世界樹を手に入れる。その為には君達の協力が必要なんだ。一緒に来てもらうよ』

「素直に従う気は無いよ。早く自国に帰った方が良い」

無線の向こうの少年が残念そうに溜息を吐いた。無闇に人を墜と

したくは無い。大人しく帰ってけると良いのだが。

『そう…残念だな。じゃあ、力ずくで行くよ』

レーダーが反応。二機の背後に敵機と思われる戦闘機が飛んでいた。白い雲に溶け込むような色。ダダダ。敵の機銃が火を吹いた。ロールで難なく避ける。

『アレックス。フォーメーション・ロザリオだ。Gはアップ、Mはダウン。いいな?』

「了解」

こちらの無線は敵に傍受されている。アッシュが暗号で指示してきた。フォーメーション・ロザリオはクロスターンの事だ。Mはメイデンリーフ、Gはグングニルを指している。

クロスターンは後方から敵機が接近してきた場合に用いられる機動で、二機が同時に方向転換する。交差部分で接触しないように互いに高度を調整しなければいけない。エレベータ・ダウン。高度を下げる。後ろを飛ぶグングニルも高度を上げた。

『行くぜ!』

「ああ!」

アッシュの合図でメイデンリーフとグングニルは同時に方向転換した。

メイデンリーフは右へ、グングニルは左に鋭くターンした。これなら互いの死角をカバー出来る。

敵機は二機の突然のクロスターンに気付かず、オーバーシュートした。

ヴァルネラビリティコーンがガラ空きだ。

速度を上げ、リーサルコーンに突っ込む。

メイデンリーフの機銃が敵機の尾翼を粉碎した。

あのパイロットは本気を出していない。二人と接触するのが目的だったようだ。

『やるじゃないか。感心した』

「これ以上攻撃をしたくない。アンティオキアに戻るんだ」

「戻らない。言ったよね？君達の協力が必要なんだ」

「しねえって言ってるだろうが！ストーカー野郎！」

「…我儘な人達だね。仕方が無いか…」

地上から閃光が走った。真っ直ぐにグングニルを貫こうと突き進む。

駄目だ！

レバーを押し上げた。エンジン・フルスロットル。

上昇。グングニルの前に躍り出た。

閃光が主翼を貫いた。燃料が爆発。翼が燃え上がった。

機体は墜ちて行く。

眼下の森へ墜落。

「アレックス！テメエ！何しやがった！」

「対空砲火。無数の砲身が君達を狙っている」

「…ファック！アレックス！アレックス！」

アッシュの叫び声が耳の奥に残響する。

耳が痛くなるようなハウリング。

痛みと共に、意識は沈んで行った。

アッシュとアレックスは基地を飛び立って行った。心配で心配でたまらない。何かしていないと不安に押し潰されそうだった。グルグルと基地を歩き回った。人工衛星のように何周も何周も。何回目かの周回軌道の時、入口のゲートの外に立つ人影に気付いた。チラチラと基地の中を窺っている。不審者だろうか。それともテロリストだろうか。身を守る武器を持たないまま近付いた。キャスケットを目深に被った若い男性だ。

「あの…」

ゲート越しに声をかけた。男性の肩がビクッと跳ねた。キャスケットの下にはサングラスをかけた顔があった。ますます怪しい。

「何かご用ですか？」

「あ…いや…用って程も無いんだけど…ユグドラシル基地に、フォーマルハウトっていう整備士が居るって聞いたんだ」

「ぎこちなく男性が口を開いた。フォーマルハウトと言えばリゲルの事だろう。珍しい名字だからすぐに解った。」

「リゲルさんの事だと思いますけど…」リゲルの名前に彼が反応した。「お知り合いですか？」

「まあ…そんな所かな。彼に会いたいんだけど…基地に入る事は出来るかな」

「柔らかな口調。不審者でもテロリストでも無さそうだ。大丈夫だろう。」

「出来ますよ。警備員の人に話して来ます。あ、来客用のゲートはあっちです」

「ありがとうと言うと、男性は来客用のゲートに歩いて行った。事情を話した警備員がボディチェックをする。凶器は持っていないようだ。記録に名前を書いた男性が入って来た。」

「宜しかったら、格納庫に案内しますよ」

「ありがとう。君は見た所、パイロットだと思うけど…大丈夫なのかい？」

「今日は非番で暇なんです」

「じゃあ、お願いしようかな」

顔を隠す必要が無くなったのか、男性がサングラスを外した。灰色の目が現れた。整った顔には火傷の跡が残っていた。キャスケットは被ったままだ。誰かに追われているのだろうか。近くで見るとまだ若い青年だと解った。ノワリーと同年か、一つか二つ年下だろう。バックに適当な数字がプリントされたジャケットにジーンズという服装だ。青年を外で待たせて格納庫を覗き込んだ。同じく非番のメアリーと、台車の上に寝転んでいるリゲルが居た。眠っているのか、彼は静かだ。

「あら…ソエルじゃない。どうしたの？」

「リゲルさんにお客様なんですけど…起きてます？」

台車の上に寝転んでいたリゲルが起き上がった。気だるそうに頭を搔く。

「うーい。起きてるよー。一体どこのどいつだ？俺様の眠りを妨げるとは、良い度胸だな」

青年が格納庫に足を踏み入れた。目深に被っていた帽子を脱ぐ。リゲルと同じ青みがかった銀髪が現れた。リゲルの表情が凍りついた。青い目が見開かれた。現世に蘇った死者を見るような視線だ。震える指先が青年を指差した。

「あ……兄……貴……？」

「そうだ。僕だよ、シエダルだ。元気だったか？」

「……元気？じゃねえよ！馬鹿野郎！」

リゲルがシエダルの顔を殴った。あまりに突然の事に誰も止める事が出来なかった。シエダルがよろめく。唇が切れて血が滲んでいた。次の一撃を加えようと、更に拳が振り上げられる。振り上げられた手は力を失って空を切った。

「何で……何で……生きてたのなら……何で会いに来てくれなかったんだよ……！」

拳を握り締めたリゲルは泣いていた。彼が泣く姿を初めて見た。

シエダルが一步前へ。同じ色の髪を撫でた。

「ずっと……ずっと待ってたんだぞ……」

「……ごめんな。本当に……ごめんな……」

銀色の髪の兄弟は互いに涙を流して再会を喜んだ。リゲルが落ちて着くと、シエダルは自分の事を話し始めた。アンティオキアで軍事活動に反対するレジスタンスを率いている事。顔の火傷の跡は軍隊と抗争した時に負った事。リゲルがユグドラシル基地に居る事を知り、人目を忍んで弟に会いに来た事。六年ぶりの再会だという事も。「こんな所で再会を喜ぶのも何だから、食堂にでも行ったらどう？」

確かにメアリーの言うとおりで。薄暗い格納庫で語り合うのは味が無い。彼等を二人きりにしようと思ったが、シエダルが二人の話も聞きたいと言ってきたので、彼の厚意に甘える事にした。

四人が格納庫から出た時、一機のセスナが上空を飛んで来た。尾翼から黒い煙が尾を引いている。尋常じゃ無い雰囲気だ。目の前でセスナ機が滑走路に激突するように不時着した。白と赤にマーキングされたボディが炎上する。数人の整備士達が格納庫から飛び出して来た。手に持った消火器で素早く火を消していく。四人も手伝った。黒焦げになった機体からパイロットが助け出された。

「グランツさん？」

助け出されたパイロットは一度だけ会った事がある女性だった。

兵士を引き連れてアッシュとアレックスを捕えに来た科学者、オペラ・ド・グランツ。オペラが気付く。よろよると立ち上がって歩いて来た。

「ここは……ユグドラシル基地ね……？良かった……エリオット大尉はどこ？」

「隊長は……出かけています。一体どうしたんですか？」

「大事な話があるの……すぐに伝えて頂戴……。奴等が動き出したわ……。あの二人を……狙って……る……」

「あの二人？誰ですか？」

傷だらけのオペラがよろめいた。駆け寄ったリゲルに支えられ、かろうじて体勢を維持する。

「アッシュ・ブルーと……アルジャーノンの坊やよ……無線を傍受したわ……アンティオキアが二人を捕えたって……」

空を見上げた。一時間程前に二人は飛び立った。そろそろ帰還している時間なのに、二人の乗る機影は見えてこない。オペラが質の悪い嘘を言っていると思った。思いたかった。だが、彼女の目は真剣だ。嘘をつく為にセスナを墜落させるとは思えない。顔から血の気が引いていった。オペラが苦しそうに咳きこんだ。

「すぐに救急車を！」

「駄目！救急車は呼ばないで頂戴！」

救急車を呼ぼうとしたメアリーをオペラが止めた。お願いと掠れた声で彼女が懇願する。リゲルの腕の中でオペラは気を失った。整

備士達に後片付けを頼んでオペラを医務室に運んだ。

「隊長に伝えたわ。すぐに戻るって言ってたけど……深夜頃になると思うわ」

「……そう。ありがとう」

意識を取り戻したオペラが頷いた。僅かな落胆の色が浮かんでいる。幸い命にかかわるような怪我は負っていないかった。軽い火傷と擦り傷、打撲が多かった。

「教えて下さい。アンティオキアがアツシユ君とアレックスさんを捕まえたって……本当ですか？」

「ええ。事実よ。帰って来ない所を見ると……多分、二人はアークに連れて行かれたと思うわ」

「何でアンタはここに来ただよ。俺達とは仲が悪いんじゃないの？」

椅子に座って頭の後ろで両手を組んだりゲルが敵意を隠さずに言った。銃で撃たれた恨みがあるのだ。無理も無い。

「……そうね。あの時の無礼な行為は謝るわ。私は彼等の計画が恐ろしくなったの。その計画にはアンティオキアとクルタナの政府の間が関係しているわ。軍の人間は誰も信用出来ない。大尉なら信用出来ると思った私は、計画書を盗んで飛び立ったの。でも、基地まであと少しという所で被弾してしまって……あの有り様よ」

「計画書は機体と一緒に燃えてしまったんだな？」シエダルが冷静に言った。

「そういう事になるわ。……ごめんなさい、自分が不甲斐ないわね……」

「アークって何ですか？」

「非人道的な実験を繰り返す研究施設。クルタナとアンティオキアの両政府が資金援助しているという噂だ。ジエネシスが生み出された場所でもあるんだ」

全員の視線がシエダルに集まった。ジエネシスの事は限られた人間しか知らない。その中にシエダルは入っていない筈だ。何故ジエネシスの事を知っているのかと訊いてみた。昔、ジエネシスを連れて脱走した女性を助けた事がある。彼は短く返答した。

「今すぐ二人を助けに行こう！兄貴！アークの場所は知ってるのか？」

「ああ。何年か前に、アークを爆破しようとして失敗したからね。場所は解るよ。ただし、施設が移動していなければの話だ。でも」
「すぐにでも飛び出して行きそうなりゲルをシエダルが止めた。焦燥に駆られている青い目が彼を見返す。

「君達だけで行くのは危険すぎる。エリオット大尉が戻るまで待つ方が賢明だ。解ったね？」

語気の強い声が念を押すように言った。壁に背を預けていたシエダルは身体を離した。

「もう行かないと。絶対にアークに行くんじゃないぞ。リゲル、お前の電話番号とアドレスを覚えてくれ」

シエダルがポケットから携帯電話を取り出し、赤外線通信を交わした。

「また会いに行くよ。元気だな」

弟の肩を叩くと、シエダルは出て行った。早くアッシュとアレックスを助けに行きたかった。メアリーもリゲルも同じ気持ちだ。でも、アークの場所を知らず、力を持たない自分達には何も出来ない。シエダルの言うとおり、ノワリーに頼るしか方法が無い。歯痒い気持ちを抱えたまま、時間だけが虚しく過ぎて行った。

夜の帳に包まれたユグドラシル基地。目を凝らして暗闇を見つめる。次第に闇に目が慣れてきた。獲物を探すライオンのように建物の陰に身を潜めて、彼が来るのを待った。来るかどうか確証は無いが。黒い塊が歩いて来た。未確認生物では無い。人間だ。警戒する

ように周囲を見回している。予想通り、基地の入り口ゲートでは無く、来客用のゲートに彼はやって来た。比較的警備が薄いからだ。それに電子ロックでは無い。彼がゲートのフェンスに足をかけた。乗り越えるつもりだ。そうはさせない。

「どこに行くんですか？」

影がビクツと震えた。ロッククライマーのようにフェンスをよじ登ろうとしていた動きが止まった。気紛れな月が顔を出す。煤やオイルで黒く汚れた灰色のツナギ。無造作に跳ねた銀髪が金属質な輝きを放つ。いつも身に着けているゴーグルが月光を反射した。

「ソ…ソエル…奇遇だなあ。アンタも真夜中の散歩か？」

地面に下りて、顔を引き攣らせたリゲルが苦し紛れの言い訳を言った。腕組みをしてキツと彼を見据えた。

「はぐらかさないで下さい！アークに行くつもりなんでしょう？駄目です！隊長が戻るまで待ちましょう！」

「待てるかよ！グズグズしてる間に、アイツ等が殺されるかもしれないんだぞ？そんな悠長な事言ってる暇はねえよ！」

リゲルが逆ギレしたように叫んだ。落ち着きを取り戻したりリゲルは悪いと謝った。

「…俺は行くぜ。止めたつて無駄だからな」

「止める気はありません。私も一緒に行きます」

リゲルが振り向く。意外な言葉を聞いて驚いている。

「…マジで言ってるのか？」

「はい」

引く気は無い。じつとリゲルを正面から見つめた。意思の強さが伝わった。解ったという表情でリゲルが頷いた。

「本気みたいだな。解ったよ。一緒に行こう」

「はい！」

「止めなさい。戻れなくなるわよ」

第三者の声が響いた。暗がりからオペラが現れた。暗闇に浮かぶ白い包帯が痛々しい。二人の前で彼女は立ち止まった。

「アークは武装した兵士で守られてるわ。当然、監視カメラも設置されている。もし、上手く潜り込めたとしても、生きて帰れる保証はどこにも無いのよ。こんな事は言いたくないけど、二人が生きているとは限らないわ」

厳しい現実が突きつけられる。それでも、二人を助けに行きたいという思いは揺らぐ事は無かった。

「それでも、俺は行く。大切な親友だから、見殺しには出来ねえよ」「私もです。私達はチームですから」

オペラが溜息を吐いた。何を言っても無駄だと悟ったのだろう。彼女は白衣のポケットから一枚のカードを取り出した。それを二人に渡す。

「これは…?」

「盗み出した物の中で、唯一無事な物。アークの入り口のロックを解除出来るカードよ。66号線を北上して、国境の向こうの森のどこかにあるとしか覚えていないの、ごめんなさい。私も行くわ」

「駄目だ。酷い怪我なんだぜ? グランツさんは休んだ方が良いつて」「そうですよ。隊長が戻って来たら伝えて下さい」

「…そうね。足手まといになってしまいわ。解ったわ。…: 気を付けて」

オペラを残してフェンスを乗り越えた。リゲルが茂みの中からバイクを引っ張り出して来た。いつの間に準備していたのだろう。ゴーグルを装着したりゲルの後ろに跨った。静寂の夜にエンジンの音が良く響く。二人を乗せたバイクは66号線を北上して行った。

月明かりが道路と灰色の堤防を照らす。生命の宝庫である海は死んだように静かだ。たまにすれ違う車のカーラジオがうるさいくらい良く響く。耳元で唸る風が速く走れと急かしているような気がした。

「なあ、ソエル」

「何ですか？」

「意外に、胸大きいんだな。小さいと思ってた」

緊張感の無い台詞に驚き、呆れて、恥ずかしさに顔が真っ赤に染まった。ツナギの腰に巻き付けていた手を離して胸を覆い隠す。途端にバランスを崩して慌てた。捕まってるよと前のリゲルが笑う。バイクから転げ落ちるのはゴメンだ。仕方なくリゲルにしがみ付いた。

「リッ：リゲルさんの馬鹿っ！変な事言わないで下さいっ！」

「悪い悪い。湿っぽい空気は苦手なんだよ。国境が見えてきたぜ」

果てしなく続く有刺鉄線のフェンスが見えてきた。侵入者を監視する塔が宵闇に浮かぶ。離れた所でバイクを降りる。目立たない草むらにバイクを押し込んだ。茂みの隙間から様子を窺った。銃で武装した兵士が居た。問題はどうかやって向こう側に行くかだ。

「ガキの頃によ、兄貴に連れられて国境を越えたんだ。フェンスに穴が開いていた筈だぜ。直されてないと良いけどな」

「行ってみましょう」

「ちよい待ち！見てみな」

油断せずに冷静に監視を続けている兵士達の動きが急に慌ただしくなった。無線で連絡を取る声が耳に届く。

「こちら国境監視部隊。……何だって？レジスタンスの奴等が暴れている？増援が必要か？……ああ。了解。すぐに増援を率いて急行する。おい！第一、第二部隊は俺と来い！第三と第四部隊は引き続き監視を続ける！」

了解と声が飛ぶ。指揮官らしき男は部隊を引き連れて走って行った。兵士の数が減った今がチャンスだ。二人は姿勢を低くしてフェンス沿いを走った。ほつれた金網を見つけた。リゲルが言っていた穴だ。服が引つ掛からないように注意して隙間を抜けた。難関の一つであるサーチライトも何とか突破した。川を渡って二人はアンテイオキアに不法入国した。

森の中に逃げ込んで乱れた呼吸を整えていると、リゲルのポケッ

トが音を鳴らした。慌てたりゲルがポケットに手をつ突っ込む。軍手を嵌めた手が携帯電話を引っ張り出した。メール受信を知らせるランプが点灯している。

「兄貴からだ。俺達がアークに行くだろうって思ってたらしい」

「じゃあ…レジスタンスが暴れているのも、シエダルさんが…？」

「らしいな。ん？何か画像が添付されてる…って、コレ、アークの場所じゃねえか？」

「え？」

縦長のディスプレイを覗き込んだ。地図らしき画像が表示されている。地図の一点に赤いバツ印が刻まれていた。恐らく、アークがある場所だろう。二人が居る所からそう遠くは無い。

「行きましょう」

「ああ」

ガサリとすぐ側にある茂みが音を立てた。猛獣か？それとも、猛獣より厄介な人間か？リゲルが前に進み出る。意外な人物が姿を現した。

「た…隊長…？」

「メアリーズさん？」

茂みの中から出て来たのは、猛獣でも厄介な人間でも無かった。

外出中のノワリーと基地に居る筈のメアリーズだった。二人とも厳しい表情だ。雷雲が渦巻いていて、今にも雷が落ちそうだ。

「どうしてここに…？」

「テレポートしたのかよ。超能力者だったとか？」

「違います！」メアリーズが叫んだ。落雷の時が来た。「グランツさんから二人がアークに行っただって聞いて、後を追いかけて来たんです！その途中で隊長と合流して、ここまで来たの！どうして私に言わなかったの？何で相談してくれなかったの…？私達は同じチームでしょう？」

涼やかな声は震えていた。唇を噛み締めたメアリーズは必死で涙を堪えている。馬鹿と呟くと彼女は背を向けた。

「ローレンツの言うとおりだ。何故、私が戻るまで待たなかった？」
ノワリーが静かに言った。メアリーののように怒鳴りはしなかったものの、切れ長の目にはバチバチと弾ける稲妻のような怒りが渦巻いていた。腕組みをして二人を見据える彼は、神々の王ゼウスが地上に降臨したみたいだった。

「……ごめんなさい」

「…すんません」

焦燥と不安に駆られて無謀な行動をとってしまった。非はこっちにある。素直に謝った。二人を覆っていた雷雲が薄れた。

「…解ってくればいいの。怒鳴ってごめんなさい。でも、本当に心配したのよ？」

涙を拭ったメアリーが微笑んだ。涙の跡が残る笑顔に胸が痛んだ。ノワリーが息を吐いて、組んでいた腕を解いた。

「基地に戻れ、と言っても聞かないだろう。アークの場所は解っているのか？」

「はい。兄貴から地図が送られて来ました」

リゲルが携帯をノワリーに渡した。ディスプレイの照明が画面を見るノワリーの顔を照らす。地図を脳に刻み込んだノワリーが携帯電話を返した。彼は周囲を見回して夜空を見上げた。方角を確認しているのだろう。

「地図によると…アークはこっちのようだ。私から離れるな。行くぞ」

先頭にノワリー、隣にはメアリーが。最後尾にリゲルという陣形を組んで森の奥に進んだ。見張りの兵士達が居ない事を祈った。開けた場所に着いた。夜の森に白い建物の影が浮かび上がった。金網と鉄格子で囲まれた建物。規則正しく整列した窓が嵌め込まれている。病院のように真っ白な外観はどこか不気味だった。木の陰に隠れて様子を窺う。

「アレ…アッシュ達の機体じゃない？」

メアリーがフェンスの向こうを指差した。金網の向こう側に二機

の戦闘機が置かれていた。一機は酷く破損している。ミッドナイトブルーと緑色の機体。マーキングされたアッシュとアレックスの名前。グングニルとメイデンリーフだ。

「ああ、間違い無い。ブルーとアルジャーノンの機体だ。やはり、アークに監禁されているようだな」

「問題はどうかやって助け出すか、ですよね」

その時だった。周囲の木立から無数の兵士が現れた。赤いレーザーの照準が四人を捉えている。いつの間に、狼の群れの中に飛び込んでしまったのだろうか。ノワリーが三人を背中に庇った。

「お前達……クルタナ空軍のヴァルキリーだな？お前の顔は知っているぞ。六年前に我等の同胞を殺したパイロットだ」

「殺したとは聞き捨てならないな。力で国民を黙らせるような国の奴に言われたくないと思うが」

「若造が生意気な口を！」

銃口がノワリーの頭に突きつけられた。誰もが震えあがる場面だというのに、ノワリーは平然としている。

「待て！生きたまま連れて来いと博士に言われただろう。銃を下ろせ」

兵士の中で年長らしき男が言った。彼等を率いるリーダーのようだ。激昂していた兵士が渋々銃を下ろした。忌々しげに舌打ちをすると、男は隊列の中に戻った。

兵士達に連行された四人はアークの施設内に連れて行かれた。廊下を歩いたり曲がったりを繰り返す。科学者とすれ違ったり、ガラス窓の向こうで動き回る研究員達が居た。エレベーターに押し込まれて地下深くへ。降りた先に嚴重にロックされた扉があった。カードキーが端末にスライドされ、数ケタの暗証番号が打ち込まれた。扉が口を開けた。

照明が点けられていない薄暗い部屋。パソコンの画面と巨大なモニターだけが光っている。太く長い容器が至る所に並べられていた。液体の向こうに小さな影が見える。動物か。それとも。

一斉にライトが点灯した。それでもまだ薄暗い。太陽から逃げているように。男が一人、優雅に椅子に腰かけていた。

「君達が来るのを首を長くして待っていたよ。君達は運が良い。見たまえ」

男がリモコンを手につけて、モニターを操作した。訳の解らない数式や数字、化学記号が消えた。代わりに映し出されたのは海面に浮かぶ大陸だった。竜巻のように渦巻く霧が晴れていく様子が映し出されている。

「ご覧。ワールドエンドの霧が晴れていくよ。滅多に見れない光景だ。偶然かな？それとも運命かな？どちらにせよ素晴らしい」

歌うように軽やかな口調で男が言った。彼は椅子を回転させると立ち上がった。

「初めまして、ヴァルキリーの諸君。私はパスカル・フォン・アルジャーノンだ。ようこそ、方舟へ」

ワールドエンドを覆う霧が晴れる時、世界は滅びに向かうと言われている。

目の前で、霧は晴れてしまった。

世界は終わるのだろうか。

頭が割れるように痛い。頭がカチ割られていない事を祈りながら手をやった。割れ目は無い。嫌な匂いが鼻の奥に突き刺さった。思い出したく無い記憶が脳から這い出して来た。記憶を無理矢理押し込めて目を開けた。

病室のような狭い部屋。どこかは解っている。理解している。目を開ける前から嫌な予感はしていた。戻って来たのだ。呪われた鳥籠の中に。薬を打たれて気を失う以前の事を思い出す。

偵察飛行中にアンテオキアの野郎と空中戦をした。
勝ったと思っていた。

思いこんでいた。
その直後に対空砲火が火を吹いた。
オレを庇ったアイツが墜ちて

そうだ。

アレックスはどうなった？

「アッシュ！気が付いたんだな？良かった…！」

壁際に座っていたアレックスが立ち上がって駆け寄って来た。目尻にうつすらと涙が。頬に擦り傷を負っている。どうしたんだと訊いた。墜落する際に負った傷だと答えが返ってきた。

「ここは……「アーク」か？」

「うん。間違い無いよ」

ギイ。軋んだ音が鳴る。ゆっくりとドアが開いた。冷たい床を革靴を履いた足が歩く。その音は知っている。全ての生命を軽んじた目で見ているあの男の足音だ。

「おはよう、ゼロ君。いや、違ったな。今は……アッシュ・ブルーだったね？」

「……テメエ」

「……父さん」

「久し振りだね、アレックス。五、六年ぶりかな。大きくなったな」
ジェネシスを作り出した男、パスカル・フォン・アルジャーノンが入って来た。真正正銘のアレックスの父親だ。マロンペーストの髪に、灰色の目。白衣の下に地味な色のシャツとチノパン。どこにでも居そうな中年の男だが、穏やかな外見の奥深くに狂気を隠している事を知っている。奴の狂気は他人をも飲み込む。

「手荒な真似をして悪かったね。気分はどうだい？」

「ファック！良い訳ねえだろうが、クソ野郎！さっさとここから出しやがれ！」

「それは出来ない。君達は彼等をおびき出す餌だから」

「餌……？どういう事なの？」

ドアがノックされた。パスカルが返事をする。くぐもった声が壁の向こうから聞こえた。

「博士。奴等を連れて来ました」

「全員、生きているかね？」

「はい。ご命令通り、生きたまま連行しました」

「ご苦労様。すぐに行きますよ」

足音が遠ざかる。餌。奴等を連れて来た。生きたまま。言葉と言葉が繋がった。

「テメエ、オレ達を餌にしてソエル達をおびき出したのか」

「おや。良く解ったね。残念だけどご褒美は無いよ。そういう事だ。後で迎えを寄越すから、それまで大人しくしていてくれたまえ」

白衣を纏った背中がドアの向こうに消えた。カチリと唯一の出入り口がロックされた。逃げる術は何も無い。鍵も工具も持っていない。ヒーローも助けに来ない。

「……アッシュ」

「……ファック」

実験器具に怯えるマウスのように、檻の中で大人しくしている事

しか出来なかった。

ワールドエンドを覆い尽くしていた霧の鎧が剥がれ落ちていく。そして、ソレは姿を現した。

天を貫かんばかりにそびえる巨大な大樹。瑞々しい新緑の葉が雲を抱くかのように広がっている。アルジャーノン一族が発見したとされる世界樹ユグドラシルだ。世界中の科学者が血眼になって探していた生命の樹は、いとも簡単にその姿を現した。アルジャーノン家の血を引く男パスカルは、恍惚とした表情でモニターを眺めていた。恋人に愛を囁く時のような表情だ。

「美しい。素晴らしい。今まで本の挿絵でしか見た事がなかったからね。どんなに有名な作品も、この子には敵わない」

パスカルがリモコンのボタンを押した。画面が切り替わり、また訳の解らない数式や化学記号が表示された。凡人には理解出来ない数字達。パスカルが椅子から立ち上がった。両手を上に伸ばし、大きく伸びをする。我が家のリビングでくつろいでいる感じた。銃で武装した兵士達が居る事にも留めていない。当たり前だ。兵士達は彼を護衛しているのだから。

「さて、色々話したい事があるんだがね。紅茶とお菓子を出せないのが残念だよ。君、彼等をお呼びしてくれたまえ」

敬礼した兵士が部屋の外へ出て行った。数分後、複数の足音が廊下に木霊する。ドアが開いた。兵士が連れて来た人数は五人。その内三人は見知った顔。アッシュとアレックス、査問会で会ったエリオット將軍だ。残りの二人は初めて見る顔だった。四十代後半の太った男性と、金色の髪の少年。少年はダークグリーンのフライトスーツを着ている。恐らく、アンティオキア空軍のパイロットだろう。「アッシュ君！アレックスさん！」

「すぐに駆け寄ろうとしたが、ノワリーに引き戻された。無数の銃口が狙っている。彼等はいつでも侵入者を蜂の巣に出来るのだ。ノ

ワリーもクラッドも互いの存在に気が付いていたが、会話は無かった。一度だけ視線が交差しただけだ。仰々しくお辞儀をすると、パスカルは白衣に包まれた腕を左右に展開した。

「では、紹介しよう。まずは　クラッド・エリオット將軍。言わずとも知れた、クルタナ空軍のエリート幹部だ。そこに居るノワリー君のお父上でもある。まあ、君達も知っているとと思うけどね。次はオズワルド大佐。彼もクルタナ空軍の幹部だ。メタボリックシンドROOMに悩んでおられるが、それなりに偉いお方だ。敬意を表した方がよいよ」

エヘンとオズワルド大佐が怒ったように咳払いした。半ば中傷された紹介に憤慨しているようだ。

「博士」少年が口を開いた。

「どうしたね？」

「自分で自己紹介しても良いですか？」

「勿論、構わないよ。君にとっても、彼女にとっても大事な事だからね」

「ありがとうございます」

少年の視線がこつちを向いた。髪も目も同じ色だ。顔立ちも似ている。違うのは声と身長に、性別と体重ぐらいだろう。

「やっと会えたね、ソエル。僕はノエル・ステュアート。君の双子の兄妹だよ」

鈍器で頭を殴られたような衝撃が襲いかかった。衝撃は頭蓋の奥に響き渡り、脳味噌を揺さぶった。少年の言った言葉の意味を理解するのに時間がかかった。何を言っているんだ。頭がおかしいんじゃないか。否定する言葉が次々と浮かぶ。同じ空色の目は真剣そのものだった。

「な……何を言ってるのか解らないわ。私に兄は居ない筈よ？」

冷静さを演じたつもりだったが声が震えていた。不気味な速さで

心臓が脈打つ。

「僕達は幼い頃に引き離された。君は、両親が自動車事故で死んで、聞いていたよ。それは違う。二人は…彼に殺されたんだ」

ノエルが視線を動かした。視線の先に居たのは、パスカルだった。全員の視線が科学者に集まった。パスカルは薄い微笑みを顔に張り付けていた。注目されているのを喜んでいるような微笑みだ。

「殺したとは心外だなあ。彼等は軍の国家プロジェクトに参加するのを拒んだ。あろう事か機密情報を盗んでクルタナに亡命しようとしたんだよ？ 反逆者は処刑しないといけない法律になっているんだから仕方ないじゃないか。私も心苦しかったよ。ご両親は優秀な科学者だったからね」

「嘘……嘘よっ！」

「嘘じゃない」 即座にノエルが否定した。「これが真実なんだ。僕と君は同じ遺伝子を持つ兄妹なんだよ」

「嘘じゃないなら、何で貴方はアンティオキアに居るの？ 何で両親を殺した男と一緒に居るの？」

「僕は 世界樹が憎い」

静けさに満ちていたノエルの表情が僅かに変化した。険しい光が目奥に宿る。

「世界樹さえなければ、父さんと母さんは殺されずに済んだ。僕とソエルも別れる事は無かった。暖かい食卓を家族で囲み、幸せな日々を過ごす事が出来たんだ。博士は世界樹を枯らしてくれると言った。彼が両親を殺したのは確かだと思う。けど、全ての元凶はユグドラシルだ。だから、僕は彼に協力しているんだ」

淡々とした口調でノエルは語り終えた。彼と目が合う事は無かった。空色の目はグレイの床の一点を見つめていた。パチパチと乾いた拍手が鳴り響く。拍手の主はパスカルだ。

「感動の再会をありがとう。涙腺が緩みそうになったよ」

エヘン。風船玉のように丸い身体を軍服に包んだオズワルドが二回目の咳払いをした。

「おや、どうしました？オズワルド大佐。喉が痛いのなら、喉飴をお持ちしますか」

「どういう事だ？ワシは世界樹を枯らすという事を聞いた事がないのだがね」

「言った覚えはありませんよ。私は、この子を使って世界樹を枯らすつもりです」

パスカルの手が白衣のポケットをまさぐった。彼が引つ張り出したのは掌ほどの大きさのアンブルだった。ガラスのボディの内側で濁った緑色の液体が揺れている。

「コレは「ニドホグ」と言いましたね。遠い昔にご先祖様が回収した世界樹のDNAをいじくって作り出した細菌です。マナを食い荒らすようにプログラムしたから、この子を世界樹に送り込んだらどうなると思う？ユグドラシルは自らの生み出すマナで生命を維持している。きつと、彼等のように死ぬでしょう」

パスカルが部屋の隅にある試験管の列を指し示した。兵士に連行された時に見た物だ。明かりが点いた今、ガラスの向こう側に浮いているモノを認識出来た。

全身に鳥肌が立った。凍りつくような恐怖。液体の中に浮かんでいたのは子供だった。小さな身体にプラスチックのチューブが絡みついていて。生命活動を表示している機械のモニターには何の反応も無かった。子供達は 死んでいるのだ。

「子供？まさか、彼等は 冷静なノワリーの面にも驚愕の色が僅かに表れていた。「ジェネシス……？」」

「正解。オリジナルのゼロ いや、アッシュ・ブルー君が脱走した後に創ってみたんだがね、どれもこれも完全な個体にならなかった。廃棄するのも勿体ないし、折角だからニドホグの実験サンプルになってもらったんだよ。予想通り、マナと遺伝子を食い荒らされた彼等は死んだ。ニドホグは哺乳類にも効く事が証明されましたよ」

「テメエ！人の命を何だと思ってるやがる！」

子供達と同じジェネシスであるアッシュが叫ぶ。パスカルはアッ

シユを一瞥しただけだった。

「彼等はヒトじゃないよ。失敗作だ。人間は思い通りに創れないが、ジェネシスは簡単に創れる。また創れば良い」

ヒトの命を軽々しく思っている発言に絶句した。誰もが狂気の科学者パスカルに恐れを抱き始めていた。この男は人間じゃない。悪魔に魂を売り渡したのだ。

「ふざけるな！ユグドラシルを枯らす事は許さんぞ！我々は手を組んだ。ワシが橋渡しになったんだぞ？」

「手を組んだ？寝言は寝てから言っして下さい。アンティオキアはクルタナと手を組んだ覚えはありませんよ。だって、ほら、ニユースでも言っていたでしょう？宣戦布告したと」

モニターが切り替わった。アンティオキアの基地から飛び立つ戦闘機や爆撃機が映し出された。軍事施設には巨大な対空砲火やミサイルが出番を待っている。オズワルドの顔色が真っ青に染まった。哀れだと思っくくらいに彼の身体が震え始めた。

「どっ…どっという事だ？パスカル、貴様は世界樹を手に入れる為にはクルタナの協力が必要だと言った筈だ！だから、ワシ達は何年も前から貴様らに協力して」

「何年も前から敵国と癒着していたのか？オズワルド殿」

クラッドの問いかけにオズワルドは振り子のようにコクコクと頷いた。オズワルドは冷たい床にガクリと座り込んだ。丸い顔を脂汗が流れる。パスカルがクスクスと笑った。今にも軽やかな声でお気に入りの歌を歌い出しそうだ。

「それは君達を利用する為の嘘だよ。残念だったね」

ドアがノックされて開いた。兵士が顔を覗かせた。

「博士。そろそろお時間です」

「解った。名残惜しいが、私も色々忙しいのでね。ジェネシスと愛しい息子、そして キメラに会えて嬉しかったよ」

見ているだけで憂鬱になりそうな灰色の目が動いた。アツシユ、アレッククス、ノワリーを順番に見つめた。ノワリーで視線を止めた

パスカルは満足そうに微笑んだ。彼は肩越しにクラッドに目を向けた。

「息子さんにそっくりですね、將軍。我ながらいい作品だ」

「…そっくり？何を訳の解らない事を。私は彼の息子だ。おかしなことを言わないでもらいたい」

「おやおや。將軍、大尉に本当の事を話していないのですか？彫像のようにクラッドは喋らない。言葉を口にするのを恐れているようだ。やれやれ。パスカルが肩をすくめた。

「無口なお方だ。こういう大事な事は自分の口から言った方が良くと思うのだがね。ああ、君。もう少し待ってくれるように言ってくれないかな。それと、車をもう一台手配するように言ってくれたまえ」

頷いた兵士はドアを閉めて出て行った。デスクに積まれていた書類を隅に押しやると、パスカルはその上に座った。

「ノワリー君。君はね、十七年前に死んだ」ノワリー・エリオットのレプリカなんだよ。君のお父様は一人息子を亡くされて、というよりか、跡継ぎを亡くされて酷く失望なされた。將軍は当時メラを研究していた私に救いを求めた。丁度良い機会だと思った。私にも彼にも利益がある事だからね。そして、將軍の提供してくれたDNAをベースにして君が生まれたという訳だ」

ノワリーの顔面から血の気が引いた。真っ青になっても、ノワリーは冷静さを維持し続けていた。

「違う。私は、キメラでは無い」

「いいや、君はキメラだよ。オリシナ・マソラと接触して、彼女から聞いた筈だ」

聞いた事の無い名前がパスカルの口から発せられた。知らない名前の筈なのに、知っているようなデジャヴを覚えた。

「オリシナ・マソラ？」眉間に皺を寄せたノワリーが呟く。「

誰なんだ？私は知らない」

「ノワリー君と同じキメラの女の子だよ。君と接触させる為に籠の中から解き放った。でも、彼女は行方不明になってしまつてね。頑丈な鎖を付けておくべきだったな。で、彼女とセックスしたのかい？」

「……何だつて？」

「マソラとセックスしたのかと訊いているんだよ。彼女は君の種を宿す為だけに創ったんだ。結果が知りたいんだよ。その様子だと、やらなかったようだね。マソラは君の好みでは無かつたのかな？なら、今度は、君の亡き婚約者が……そこに居るステュアート嬢のレプリカでも創つてみるとしよう。どちらかなら、君も喜んでセックスしてくれるだろう」

「ふざけるな！」

ノワリーの表情に怒りの色が現れた。切れ長の双眸がパスカルを激しく見据えた。琥珀の中で稲妻が弾ける。轟く雷にパスカルはものもしない。おもちゃで遊ぶ子供のように笑っているだけだ。

「いい加減にしろ、パスカル」沈黙の誓いを破ったクラッドが口を開いた。

「これは失礼。貴方の御息を侮辱してしまいましたね」

「アレは息子では無い。成長すればする程「ノワリー」に似てくるおぞましい化け物だ。吐き気がする。創るべきでは無かつたのだ」

「……！」拒絶の言葉がノワリーの心を打ち砕いた。

「酷い！隊長に謝つて！」

怒りに我を忘れてクラッドに掴みかかった。相手が大人の男性で、自分の倍はある体躯の持ち主だという事も忘れて。

「小娘が！立場を弁えろ！」

頑丈な腕が横に薙いだ。弾き飛ばされて床に尻餅をついた。メアリイが助け起こしてくれた。ノワリーが父親だと信じていたクラッドを睨んだ。

「私の部下に手を上げないでもらいたい！」

「キメラが生意気な口を利くな！」

クラッドが睨み返した。憎しみ。恐怖。全ての負の感情が混じった目だった。ノワリーは怯まない。ここが空なら、即座にドッグフアイトになっているだろう。騒ぎの元凶であるパスカルが仲裁に入った。

「まあまあ。親子喧嘩はクルタナでして下さい。おっと失礼。親子ではなかったか。そろそろパーティーはお開きにしましょう。君達彼等をクルタナまでお送りして差し上げる。殺しちゃ駄目だよ」

悠々と脇をすり抜けたパスカルはドアの前で立ち止まった。ノエルも後に続く。

「ノエル……」

ノエルが肩越しに振り向いた。車で待ってるよと言い残し、パスカルは出て行った。二度と合う事が無いと思っていた視線が再び出会った。

「今度会う時は、僕達は敵同士だよ」

郷愁等感じていない声が心に突き刺さった。違う形で再会していれば、感動を分かち合う事が出来たのに。一步、ノエルがドアに近付いた。兄を引き止める効果のある言葉が出て来ない。涙を堪えるので精一杯だった。

「オイ、ノエル」

アッシュがノエルを呼び止めた。ノエルが足を止めて振り向いた。

「あの時、オレを墜としたのはテメエか？」

「そっだよ」

「良い腕してるぜ。敵同士なのが残念だ」

「僕もそう思う」

短い会話を終えたノエルは出て行った。微かなエンジンの音が聞こえた。車が走り出す音。兵士に連れられた一行はパスカルが手配した車でクルタナに戻った。誰も何も言わなかった。重すぎる真実に押し潰されて、何も言えなかった。

「明朝、我々アンティオキアはクルタナに攻撃を開始する！これは聖戦だ！我々には慈悲も慈愛も無い！容赦はしない！六年前に殺された同胞達の恨みを思い知るのだ！」

食堂の小さなテレビの画面一杯にアンティオキアの大統領が映し出されていた。拳を振り上げて集まった民衆に演説している。自分達が正しいと思いこんでいる顔だ。戦争に正しい者など存在しないというのに。食堂に集まっていたパイロット全員が画面を食い入るように見ていた。画面がスタジオに切り替わる。評論家達が議論を始めた。彼等は議論をするだけで良い。戦うのは兵士達だ。もつともらしい理論を言っていればいいのだから。言葉だけでは戦争は終結しない。

帰還したユグドラシル基地は緊迫した重苦しい空気に包まれていた。明日の朝、戦いが始まるのだ。六年前の大戦よりも規模が大きくなるだろうとパイロットや整備士達が噂していた。

「緊急事態だつてのに、エリオット大尉はオフィスに籠ったきりか」
食事を摂っていたパイロットが不満げに零した。彼の友人である男がパスタの絡まったフォークをタクトのように振った。

「さあな。怖気づいたんじゃないのか？エリートは挫折に弱いつて言うじゃない。飛べない元英雄様は、弱虫野郎だったってコトさ」

「違う。賛同の声が周囲から上がる。明らかにノワリーに対する侮辱だ。怒りに顔が険しくなる。同じテーブルに座るアッシュ達も怒りを感じているようだ。勢い良く立ち上がった拍子に、椅子が大きな音を立てて横倒しになった。ステージに上がったアーティストのように視線が集まった。」

「違う！隊長はそんな人じゃない！何も知らないくせに…知ったよ
うな事言わないでよ！」

呆然とする顔の中にノワリーを侮辱した二人を見つけた。思い切り睨みつけた。効果は抜群。あぐりと口を開けた二人は石のように固まった。

「私、隊長に会って来ます」

アツシユ達と目を合わさなまま食堂を飛び出した。ピロティを走り抜けて宿舎の外へ。暗くなり始めた空が基地全体に影を落とす。怒りで頭が爆発しそうだった。滑走路の真ん中で足を止めた。水気を含んだ空気を肺に吸い込んだ。しっとりとした冷たさがオーバーヒートした頭を冷却してくれた。

空気のように軽い足音が追いかけて来た。足音の主は解る。ゆっくりと振り向いた。数歩後ろにアツシユが立っていた。後ろに陣取ったアツシユは動かなかった。いつも不機嫌な顔がますます不機嫌になっている。怒りに身を任せ過ぎたかもしれない。

「……アツシユ君」

「行くんだろ」

「…え？」

「オフィスに行くんだろ。オレも行く。…オレだって、隊長を心配してるんだ。同じチームだからよ」

「…はい」

ヴァイオレットのスニーカーを履いた足が距離を縮めた。気がつくくと、アツシユに抱き締められていた。

「お前も辛かったんだろ？ やつと会えた兄貴から敵同士だなんて言われてよ。人の事を心配するよりも、まずは自分の事を心配しろ。優しすぎるんだよ、ソエルは……」

華奢な手が背中を滑るように撫でた。密着した心臓が互いのリズムで見事なコンチエルトを奏でている。そのメロディは大空を思い出させてくれた。ポロポロと自然に涙が零れた。

「思い切り泣いちまえ。思う存分泣き叫んで、心を綺麗にしろ」
「……アツシユ君……私っ……私っ……！」

アツシユの薄い肩に顔を埋めて泣き叫んだ。心に沈殿していた濁ったモノ全てが涙に濾過されて出て行った。

涙が涸れて、嗚咽も止まって、心は綺麗になった。整理出来た。アツシユから離れて微笑んだ。照れたようにアツシユが笑う。元

気が出たと伝えると、良かったと返事が返ってきた。

「私達…今までずっと、隊長に守ってもらってばかりでしたね」

「ああ…そうだな。今度は、オレ達が隊長を助ける番だ」

「はい」

助け合っのがチームだとノワリーは教えてくれた。

喜びも、悲しみも、痛みも分かち合いたい。

支え合ってこそ、チームなのだから。

オフィスビルの前に来た時、何気なく上を見上げた。ミッドナイトブルーの空にクツキリと浮かぶ黒い影が見えた。影は屋上に佇んでいる。それも、屋上の端に。嫌な予感が鎌首をもたげた。つられて上を見上げたアツシユの顔が強張った。

「まさか 隊長か？ファック！マジかよ！」

「急ぎましょう！」

ビルに飛び込んで階段を駆け上がった。蝶番が引き千切れそうな程強くドアを開けた。音に反応した長身の青年が振り向いた。彼が居る位置は屋上の端っこだ。一步踏み出せば地面に叩きつけられる。端正な顔は蒼白で、死にゆく英雄のようだった。ノワリーが無理に微笑んだ。

「ステュアートに…ブルーか。どうした？」

「隊長の事が心配で……」

「私は大丈夫だ。お前達はもう休め」

「でも……」

「大丈夫だと言っている！」

ノワリーが声を荒げた。唇を噛み締めた彼は、泣いていた。とめどなく流れる涙がアスファルトの地面に染みを作っていく。苦悩と悲しみに満ちた嗚咽が響いた。

「…私は「ノワリー」の代用品なんだ。彼の代わりに光の槍と称えられ、シルヴィを愛し、ヴァルキリーを壊滅させて右手足を失って、

ローレンツとゲルダから家族を奪った。私の生きて来た道は、彼が生きる筈だった人生だったのかもしれない。もう…どうしたらいいのか解らない。私は化け物だ。生きていてはいけないんだ」

ノワリーが地面を見下ろした。死を選ぼうとしている。受け入れようとしている。死神がすぐ側まで迫っているのを肌で感じた。

「隊長は、空で散った皆さんの想いを裏切る気ですか？ 私達の想いを裏切るんですか？ そんな事しないで下さい！ 死んじゃ駄目です！ 空でそんな事しちゃ駄目です！」

ノワリーが息を呑んだ。充血した琥珀色の目が驚きに見開かれた。彼が何かを呟く。風にそよぐ草の音よりも小さい声だった。

「私達には…ヴァルキリーには…隊長が必要なんです！」

「…私は何も出来ない。飛ぶ翼を失った私には何も……」

常に冷静で、ヴァルキリーを導いて来たノワリーは生まれたばかりの赤子のように弱々しく、痛々しかった。絶望した彼の心に言葉は届かないのだろうか。死に取り憑かれた目が空を仰ぐ。天国の門を探している。光の国の入り口を探している。

「駄目えっ！」

小柄な影が脇を駆け抜けた。アッシュがノワリーに掴みかかった。そのままノワリーを地面に引き摺り倒した。馬乗りになって襟元を握り締める。激しい感情を秘めた紫の目がノワリーを睨みつけた。

「ファック！ 出来るとか出来ないとかの話じゃねえんだよ！ やるしかねえんだ！ 何が飛べないだ！ 何がカメラだ！ ヒトもカメラも関係ないだろうが！ 動物だって空を飛んでるんだ！ 誰だって飛べるんだ！ テメエはそれを口実に逃げてるんだよ！ 空から逃げてるんだよ！」

静寂と沈黙。一瞬、世界から音が無くなった。ファックと呟くとアッシュは襟元を掴んでいた手を解いた。ノワリーの上から離脱。くるりとアッシュが振り向いた。彼は迷いの無い足取りでドアに向かった。

「行くぞ」

「え…？ でも…」

「こんな弱虫野郎、ヴァルキリーにはいらねえよ」

アッシュとノワリーの間で立ち尽くした。アッシュは立ち止まると、一度だけ振り返った。

「翼は誰の背中にも生えてる。飾りが重すぎて飛べないなら、そんなモン捨てちまえ」

華奢な手がドアノブを回した。屋上から離脱したアッシュは二度と戻って来なかった。振り向いてノワリーを見つめた。彼は地面に座り込んだままだった。魂が抜けたように呆然としていた。

「隊長」ノワリーは視線を落としたままだった。

「空で待っています」

私達の想いが届きますように。

願いと祈りを込めて敬礼した。

敬礼は返ってこなかった。

ノワリーを残して屋上から離脱した。

オフィスビルの前でアッシュが待っていた。宿舎に向かう途中会話したが、アッシュの口からノワリーの名前は出て来なかった。反対側からこつちに向かって来る人影が見えた。一人が手を振っている。アレックスとメアリー、リゲルだ。三人もノワリーに会いにオフィスに来たようだ。ノワリーの様子を伝えた。彼等の表情が曇った。

「…無理も無いよね。信じていたモノ全てが偽物だったんだから…」

「今は…一人にしておいた方が良くと思います」

「そうね」メアリーが同意した。「あの後大変だったのよ。アレックスとリゲルが彼等と大喧嘩を始めたの」

「おうよ！アイツ等全員フルボッコにしてやったぜ！」

アレックスとリゲルの悪戯コンビが力瘤を作って笑った。その隣でメアリーが嘆息する。

「……隊長は…戻って来るんでしょうか…」

眩きに誰も答える事は出来なかった。誰かが肩を叩いた。隣を見やった。静かな面のアツシユが立っていた。

「戻って来るさ。翼は失っても、誇りは失っていねえよ」

短い言葉だったが、アツシユが誰よりもノワリーを信じている事が解った。アレックスもメアリーも、リゲルも、誰もが信じていた。ノワリーが戻って来る事を。彼は英雄、「光の槍」だ。そう簡単に折れたりしない事を信じている。

待つ事しか出来ないけど、
信じる事は出来るから。

ボタン。ドアが閉まる音で現実に引き戻された。ソエルとアツシユの姿は無かった。呆れて帰ってしまったのか。心配して来てくれた二人を拒絶してしまった。煩わしかったのかもしれない。偽者じや無いお前達に何が解るんだ。頭の片隅でそう思っていた。両親も、名前も、精神や肉体、記憶さえも、全てがフェイクだった。もう、何を信じたら良いのか解らなかった。いや、初めから信じるモノ等何も無かったんだ。

傷ついた心を引き摺ったまま、足は自然と第一格納庫に向かっていた。一つの機体の前に導かれるように近付いた。天窓から差し込む月の光がシルバーのボディを照らしている。気高く、高潔な輝き。自分とは大違いだった。

「空から逃げている……か」

アツシユの言葉に苦笑した。

確かにその通りだと思う。

地上に閉じ籠って、空から逃げていた。

見つからないように息を潜め、

目立たないように翼を折り畳んで隠れ続けていた。

飛ぼうと思えば、いつでも飛べたのに。

ブリューナクはずっと待っていてくれたのに。

今からでも間に合うだろうか？

それとも、蠟のように溶けてしまったのだろうか？

肌身離さず持つている指輪を胸ポケットから取り出した。空で散った婚約者、シルヴィに捧げたエンゲージリング。

「俺にも…出来るだろうか…」

そつと指輪の滑らかなラインをなぞった。

目を閉じる。

幻のイージスとシルヴィが現れて、

大丈夫と言ってくれた。

肩を叩いてくれた。

そして、手を振りながら消える。

閃光と共に、

稲妻が駆け抜けて。

目を開けた。

「……行って来るよ。イージス、シルヴィ」

指輪に口づけを。

もう、大丈夫。

俺は 飛べる。

運命の朝が来た。太陽はいつも通りに東から昇って来た。大自然には戦争等関係無いのだ。軽く朝食を摂って第一格納庫へ。アツシユ達が居た。他のチームも居る。彼等は皆、一様に驚いた顔をしていた。何だろうと思った。中に入って、彼等と同じ方向に顔を向けた。

「隊……長……？」

整列した機体の前に立っていたのはノワリーだった。背中を向けて、ブリューナクを見上げている。ゆっくりとノワリーが振り向いた。虚ろだった目には揺らぐ事の無い強い光が宿っていた。生きる希望を見出したのだ。生きる力を取り戻したのだ。

「心配をかけてすまなかった」

「もう…大丈夫なんですか？」

愚問を言ってしまったと思った。発狂しそうなくらい重い真実を突きつけられたのだ。大丈夫な訳無いじゃないか。ノワリーが頷く。そして微笑んだ。全てを乗り越えた者の微笑みだった。

「ああ。私は…もう逃げない。お前達と共に空を駆ける事を誓う」
この場に居る全員が驚き、歓喜の笑みを浮かべた。仲間とハイタッチする者。情けない顔で泣きじゃくる者。拳を突き上げて笑う者。反応は様々だったが、誰もがノワリーの復帰を喜んでいて。やっぱりノワリーは誇りを失っていなかった。光の槍が再び輝く時が来たのだ。

「勝手な真似は許さんぞ！」

怒り狂った声が祝福の場を台無しにした。全員が振り向く。怒りで顔を真っ赤にしたオズワルド大佐が入口に立っていた。彼の後ろにはクラッド・エリオット将軍が控えていた。怒り狂うオズワルドとは対照的に、能面のように無表情だ。群衆を掻き分けた二人はノワリーの正面に立った。オズワルドの顔に狡猾な笑みが広がった。

「エリオット大尉。君をユグドラシル基地の指揮官から解任すると上から通達があった。今日からユグドラシル基地の指揮官はワシだ」
「私は何も聞いていませんが」冷静な表情のまま、ノワリーが静かに答えた。

「当然だ。たつた今、ついさつき決まった事だからね。長い間ご苦労だった。荷物を纏めて出て行きたまえ」

「従う気はありません。貴方の独断でお決めになった事でしょうか？ 出て行くのは貴方の方です。オズワルド大佐」

薄ら笑いを浮かべていた顔が強張った。ノワリーが大人しく従うと思いきや、こんでいたようだ。企みはいとも簡単に失敗し、あろう事が逆に帰れと言われたのだ。再び怒りの感情がオズワルドの丸い顔を覆い尽くした。ノワリーのネクタイをオズワルドの手が掴んだ。半ば理性を失った目がノワリーを睨みつけた。

「キメラ風情が生意気な口を利くな！貴様は「ノワリー」になれなかったレプリカだ！この出来損ないめ！」

「酷い！」

何という罵詈雑言だ。思わず叫んだ。アッシュもアレックスも憤っている。殴りたい。クビになっても良い。拳を握り締めた。

「止めるんだ。……彼の言うとおりだ。私は……出来損ないのレプリカだ」

「なあ……。キメラやレプリカって何なんだ？」

パイロットの一人が呟いた。蜂の巣をつついたようにどよめきが大きくなる。ニヤリと泥のような湿った勝ち誇った笑みがオズワルドの顔に表れた。学生に演説する教授になりきったオズワルドが周囲を見回した。

「諸君、知らないのかね？この男は十七年前に死んだ、「ノワリー・エリオット」のレプリカなんだよ。我々はソレをキメラと呼んでいる。君達が尊敬し、崇拜する英雄殿は、醜い化け物なんだよ」

「その化け物に媚びていたのは誰だ？」

「……何？」

オズワルドの勝ち誇った顔が固まった。ノワリーが手を振り払う。「化け物の俺に媚びて、へつらつて、甘い汁を吸ってきたアンタ達の方が醜い化け物だ。腐りきった俗物め。この勲章が欲しいんだろう？こんなモノ、欲しければくれてやりますよ」

ノワリーがジャケットを脱いで投げ捨てた。金属の硬質的な音が響き渡る。ヴァルキリーのエンブレムだけが、白いカッターシャツの上で煌めいていた。

「このエンブレムには空を駆ける人々の誇りが詰まっている。貴方には背負いきれない重さの誇りだ！」

英雄が高らかに吠える。ワツと歓声が上がった。四面楚歌の状況に陥ったオズワルドが蒼白な顔で見回した。

「この男は「キメラ」だぞ？化け物なんだぞ？何故言う事を聞くん
だ？」

「うるせえ！風船玉！」

リゲルが一步前に踏み出た。もう我慢出来ないといった表情だ。リゲルの周りにはメカニック達が。それぞれ凶器を握っている。

「キメラだろうが、レプリカだろうがどうでも良いんだよ。俺達はチームヴァルキリーだ。エリオット隊長の命令しか聞かねえし、従わねえ。よく覚えとけ！クソ野郎！」

リゲルが中指を突き立てた。格納庫に居る誰もが、全員が、ノワリーの下で飛びたいと思っている。空を駆けたいと願っている。その為にはこの男を追い出さなくては。全員が一致団結した。

「もう止めたらどうだ？オズワルド殿」

状況を傍観していたクラッドがその口を開いた。オズワルドは金魚のように口をパクパクさせたが、言葉は出て来なかった。

「指揮官の座に就く事は諦めた方が賢明だ。大人しく身を引く事だな」

「クラッド！貴様　！」

「消え失せる！蛆虫が！」

クラッドの恫喝がオズワルドを直撃した。哀れな小心者の大佐は叫び声を上げて逃げて行った。ノワリーとクラッド。二人の目が合った。

「……將軍」

「お前を庇った訳では無い」

「解っています。私は…俺は…「ノワリー」として生きていきます。ここに居る彼等はキメラの俺を必要としてくれている。一緒に空を飛びたいと思ってくれている。それだけで　俺は生きていける。」

「ノワリー」として生きていける。貴方が俺を息子として見ていないくても、俺は…貴方を父親だと思っています」

ほんの僅か、無表情だったクラッドの表情が動いた。敬礼をしたノワリーは彼から離れた。

「各自機体を点検しろ！点検が終わり次第基地を飛び立つ。まずは我々ヴァルキリーが先陣を切る。他のチームは俺からの指示がある

まで待機だ。いいな？」

指示に従い、それぞれの機体を見に行った。異常は無かった。どの機体も飛び立つのを待っている。大空に軌跡を描くのを待っている。アルヴィト、グングニル、メイデンリーフ、ブリュンヒルド、そして　ブリューナクが滑走路に引き出された。ノワリーがメンバーを見回した。

目が合う。

意思が伝わる。

頷いた。

勇敢で、

気高い稲妻が一人一人の魂の奥で轟いた。

「チームヴァルキリー、出撃する！」

スカイブルーの空はアンティオキアの軍勢で真っ黒に染まっていた。何百機の戦闘機がひしめき合って蠢いている。ケーキに群がる蟻を連想した。例えるなら、ヴァルキリーが甘いケーキになるのだろう。クルタナが誇る精鋭チームはケーキのように甘くは無い。

黒い波の向こう側に世界樹ユグドラシルが見えた。狂気の科学者、パスカル・フォン・アルジャーノンは世界樹に向かっていているに違い無い。それとも、すでに到着しているのだろうか。

ワールドエンドに辿り着くにはアンティオキアの包囲網を突破しなければいけない。ヴァルキリーの機体は五機。対するアンティオキアの機体は数百。激しい戦いになるのは確実だ。生きて帰れる保証はどこにも無い。それでも行かなければならない。パスカルの狂気から世界樹を守る為に。

『ソエル。大丈夫か？』無線が繋がってアッシュの声が聞こえた。気遣ってくれているのが解る。

「はい。何とか…」

『心配すんな。オレが居る。アレックスとメアリイも居る。あの「光の槍」が居るんだ。大丈夫だ』

「はい。もう怖くありません」

『全員、準備は良いか？』アッシュに続きノワリーの声が聞こえた。いつも冷静さを与えてくれる。

「アルヴィト。大丈夫です！」

『グングニル。いつでもいけるぜ』

『メイデンリーフ。準備OKです』

『ブリュンヒルド。問題無いわ』

『俺が道を作る。チェック・シックス。各自、常に六時の方向を警』

戒せよ。フォーメーション・デルタ。隊列を維持。散開しても、互いの機体の位置を見失うな』

「了解！」

『行くぞ！』

ノワリーの号令が響いた。スロットルを上げたブリューナクが先頭を駆ける。群がっていた戦闘機の集団が分裂した。人海戦術。数で圧倒する気だ。勝てるだろうか。一瞬、不安が頭をよぎった。すぐに不安を追い払った。こっちには卓越した腕を持つアレックスとメアリーが居る。何よりも、アッシュとノワリーという二人のエースパイロットが居るのだ。負ける気は無い。輝くような勝利を信じている。互いの機体を確認出来る距離を維持。ヴァルキリーは散開した。それぞれの戦いが始まった。

先手必勝。

ブリュンヒルドは瞬間に二機を撃墜した。

白鳥の湖を踊るプリマドンナのように美しく優雅な軌跡だ。

ブリュンヒルドの背後に黒に塗り潰された機体が迫る。

追跡を振り切らなければ。ロール旋回。ブレイク。

敵もブレイク。シザースが繰り広げられる。

シザースになった場合、運動性能が高い方が勝利する。二機共殆ど同じスペックだ。

ブリュンヒルドの背後に敵機が追いついて来た。

このままでは。

緑色の閃光が駆け抜けた。黒い機体を機銃の弾が貫いた。

爆発。パイロットがコクピットから脱出した。

アレックスの機体、メイデンリーフがブリュンヒルドの横に並んだ。

『メアリーさん！大丈夫ですか？』

『ええ。ありがとう。さあ！どんどん行くわよ！』

「了解！」
オレンジと緑の機体は踊るように、滑るように、敵の間を駆け抜けて行った。

グングニルとブリューナクの活躍は目覚ましかった。歴史の教科書に載ってもおかしくない。敵は二機を撃墜しようとして躍起になっているが、逆に返り討ちに遭って次々と墜ちて行く。それもその筈。精鋭チームのエースパイロットと「光の槍」と謳われたパイロットが相手なのだ。二人に勝てる者はこの世界には居ないだろう。それでも敵機は入れ替わり立ち替わり襲いかかって来る。奇跡が起きるのを信じているのだ。

五機の黒塗りの機体が突進して来た。どうやらオレに狙いを定めたようだ。ブリューナクより小型なグングニルなら比較的簡単に墜とせると思っている。浅はかな判断だ。一人で五機は流石にキツイか。ソエル達は自分の面倒を見るのに忙しそうだった。

「ファック。やるしかねえか」

「ブルー。聞こえるか？」

「ああ」

「ブリューナクが見えるか？四時の方向だ」

肩越しに四時の方向を見た。ブリューナクが飛んでいる。ケツに敵機は引き連れていない。引き離れたか、墜としたのだろう。

「アンタが見えるよ」

「スプリットは出来るな？俺が引きつける。お前はローグヨーヨーで奴等を墜としてやれ」

「了解」

五機の機体が迫る。グングニルの真下からブリューナクが上昇した。

加速したブリューナクに敵機の注意が一気に向く。
チャンスだ。

エレベータ・ダウン。

グングニルを降下。速度をつける。

ローグヨーヨーは深く降下してはいけない。接近した時に敵との相対角度が大きすぎると、射程内に捉える事が出来ないからだ。

速度が充分上がったのを見計らい、エレベータ・アップ。

見事なロールで敵の攻撃をかわすブリューナクと敵機の無防備なリーサルコーンが見えた。

グングニルの機銃が牙を剥いた。

ファイア。

五機の敵機は抵抗する間もなく撃墜された。

「隊長。大丈夫か？」

「ああ。お前が俺を心配するなんて珍しいな。明日は大雨だろう」

ノワリーが冗談を言うなんて珍しい。クスリと笑った。レーダーが反応した。気を引き締める。レーダーに映る巨大な機影はギガンテスだ。オレとノワリーを片付ける為に秘密兵器を投入したのだ。

「ブルー。お前はステュアート達の援護に向かえ。奴は……俺が墜とす」

「解った。墜とされるんじゃないぞ」

ブリューナクが翼を振った。左に傾いた銀色の機体はグングニルから離れて行った。ラダーで機首を振り、ソエル達の姿を捜した。

アルヴィトを見つけた。安定した動きで敵を墜としている。一人じや辛いんじゃないか。スロットルを押し上げる。ソエルの所に向かおうとした時、狭いコクピットにボーイソプラノの声が響いた。

「…シュ！アッシュュ！」

無線とは違う場所から声が聞こえる。コクピットを見回した。音の発生源はズボンのポケットだ。思い出した。ポケットに手をつ突っ込む。小さな銀色の物を取り出した。やっぱりコイツか。羽の生えたサンダルのレリーフが刻まれた小型の機械。超小型高性能無線機タラリアだ。リゲルから貰ったのをすっかり忘れていた。

「聞こえてるのか？アッシュュ！」少年のような柔らかい声。アレッ

クスだ。

「うるせえよ。聞こえてるっつーの」

『俺は今からワールドエンドに行くよ』

「は？何言ってるんだよ。勝手に隊列を離れるんじゃないやねえよ！」

思わず怒鳴った。優等生のアレックスらしからぬ言葉だった。一瞬、アレックスが黙り込んだ。

『行かないやいけなんだ。父さんを止めないと。それに…全部終わらせないといけない』

タラリア越しのアレックスの声は真剣そのものだった。彼が固く決意している事が解った。責任を感じているのだ。

「…お前、責任感じてんのか。オレを創ったのも、キメラを創ったのもお前の親父だ。ファック！お前には関係ねえだろうが。気に病むんじゃないよ」

『…でもさ、俺もアルジャーノンの人間なんだ。関係無いとは言えないよ。お前が何と言おうと俺は行くからな』

行きたければ勝手に行けばいい。一年前のオレなら躊躇なくそう言っていた。過去の自分とは違う。アイツを一人で行かせてはいけない。そう直感した。

「馬鹿。お前を一人で行かせられるかよ。オレも行ってやるよ。…全部終わらせようぜ」

『アッシュ…』スピーカー越しのアレックスの声が震えた。

「泣いている場合じゃねえぞ。お客様だ」

メイデンリーフと合流した直後にリーダーが反応した。数は二機。一人でも余裕で相手が出来る数だ。

「一緒に戦うか」

『そうだな』

「サンドイッチだ。どっちが囨になる？」

『え？サンドイッチ？お腹が空いたのか？』

「ファック！ちげーよ」怒った振りをした。アレックスは冗談を言っているのだ。

『お前が囷。俺がやるよ』

「チッ。いいトコどりかよ。ま、いいけどよ。丁重におもてなししてやるうぜー!」

『ああ!』

スロットルレバーを押し上げ、加速。同時にメイデンリーフが僅かに速度を落とした。

ブレイク。

敵の機体はグングニルの後を追いかけて来た。愚か者め。減速したメイデンリーフが敵の背後に現れた。

絶妙のタイミング。

素晴らしい阿吽の呼吸。

絆の強さを思い知る。

敵がターンする前にメイデンリーフの機銃が黒い胴体を撃ち抜いた。

相変わらず良い腕してやがる。感心した。

「お前、ワールドエンドに行く方角わかるのかよ」

『大丈夫。俺を信じろって。アルジャーノンの跡継ぎだよ?』

「何だよ。その根拠の無い自信は」

メイデンリーフが先導する。スロットルを調整。はぐれないように後に続く。ソエル達の機体がどんどん遠くなっていった。

ゴメン。謝った。

ソエルを残して行く事が気がかりだった。

墜とされないだろうか。

大丈夫。

英雄「光の槍」が守ってくれる。

エンジンフル・スロットル。

ギガンテスとの距離が縮まっていく。飛んでいるギガンテスは目の前に居る一機だけか。全てを奪い去ったのは奴だ。激しい感情が

身体の内側で渦巻く。飲み込まれてはいけない。息を吐いて気を沈めた。冷静と情熱の間に意識を集中させる。

ギガンテスの砲身がブリューナクを捉えた。発射音が響く。ミサイルが発射された。

スロットルレバーを最大まで押し上げた。

最高速度に到達。それでもミサイルは付いて来る。

赤外線ホーミングミサイルか。厄介な代物だ。六年前には無かった。進化したな。

フレア発射。

マグネシウムと火薬等を材料にしたフレアは機体から発射されると、数秒間激しく燃焼する。それが大きな偽の熱源となり、スケープゴートになってくれるのだ。

ターン。予想通り、ミサイルはフレアに引き寄せられている。

更に速度を上げた。一気に距離を詰める。

ミサイルは通用しないと判断したのか、機銃の弾が飛来する。

スナップ・ロール。

エレベータ・アップ。

ロール旋回しながら上昇。

エレベータ・ダウン。

風を纏ってダイブ。

お前の機銃なんて怖くない。

「Dein minus der Zahl... Sohn」

お前の負けだ、坊や」

亀のように鈍いソイツを機銃で撃ち抜いた。

炎上したギガンテスは燃え盛りながら地の底に墜ちて行った。進化したのはお前だけじゃないんだ。

「チームの皆、イージスさん、シルヴィ。…終わったよ」
目を閉じて囁いた。

記憶の中の彼等が笑っている。
目を開けた。

過去との決着はついた。

後は現在との戦いだけだ。

今度こそヴァルキリーを守ってみせる。

泣くのは後にしよう。

ターン。

戦いを続けるチームの下に向かった。

天空を貫く光の槍は錆ついてはいない。

目の前には純白の機体が飛んでいる。アルヴィトと双子のように瓜二つで、まるで鏡を見ているようだ。胴体と垂直尾翼にマーキングされた機体名とパイロットネームを認識した。

ノエル・ステュアート。

ヴァルハラ。

ほんの少し前に再会した、今まで存在を知らなかった双子の兄の名前だ。

『ソエル。今ならまだ間に合う。引き返すんだ。僕は君と戦いたくない』

「ノエル……どうして？私達は兄妹なのよ？」

『兄妹でも相容れぬ時があるんだ。僕は世界樹を枯らす為なら何だってする。お願いだから、引き返してくれ』

「……出来ない。私は、世界樹を守る」

無線の向こうのノエルが黙り込んだ。溜息。次に聞こえたノエルの声は感情を全て捨て去っていた。

『……残念だな。君なら解ってくれると思っていたのに。君が引かないなら、僕は全力でソエルを墜とす。…行くよ』

無慈悲な言葉が突き刺さる。何を言っても無駄だと悟った。言葉はノエルには届かない。

やるしかない。思いを全てぶつけるんだ。

二機は同時に速度を上げた。

交差した。すれ違う。

ドッグファイトでは相手よりも先に後ろを取らなければいけない。ターン。

間に合わなかった。ヴァルハラがピタリと後ろに付いている。振り切らなければ。

ロール。ロール。ロール。

螺旋状に飛行するバレルロール。

ヴァルハラもアルヴィトと同じ軌道で追いかけて来る。

ノエルの方が僅かに速度が速い。このままでは追いつかれる。

ヴァルハラのパトロー管が背後に迫る。

イチかバチかの賭けに出た。

フラップ・ダウン。

スロットルを絞る。

失速。

そして、ストール・ターン。

ヴァルハラがオーバーシュートした。

機体の位置を整える。

ヴァルハラのリールサルコーン内に入り込む事に成功した。

機銃のトリガに指をかけた。

撃て、撃ち墜とせ。右手が囁きかける。

出来る訳がない。半身を撃ち墜とすなんて。

『どうして撃たないの？早く墜としなよ』

生きるか死ぬかの瀬戸際なのに、ノエルの声は淡々と落ち着いていた。

「出来る訳無いじゃない！ノエルは…やっと会えたお兄ちゃんなんだもん！そんな事出来ない！」

後ろを見せていたヴァルハラが旋回した。互いに機銃の射程距離に入った。

『優しさは時に自分を危険に晒すモノになる』

「ノエル！目を覚まして！貴方が憎むべきモノは世界樹じゃない！

パスカルなの！彼が私達の両親を殺したのよ？」

ノエルは答えない。もし、彼が機銃を撃つたとしても、応戦する気は無かった。兄を撃墜するくらいなら、墜とされた方が良い。

「ノエル……」

諦めかけたその時、ヴァルハラが速度を上げて突っ込んで来た。

突然の事に回避出来ない。ヴァルハラが脇を駆け抜けた。背後で爆発音が。いつの間にか背後に迫っていた敵機をヴァルハラが撃墜したのだ。

「え……？」

「……ソエルの言うとおりだね。僕は間違ってたよ。パスカルを止めよう。一緒に戦うよ」

「ノエル……！ありがとう……！」

『まずは、ヴァルキリーの皆と合流しよう』

ヴァルハラが隣に並んだ。敵に注意しながらヴァルキリーの機体を捜した。キャノピイの向こうに銀色の機体が見える。距離は遠くない。距離が縮まる。息を呑んだ。ブリューナクは大量の敵に囲まれていた。

「隊長！」

すぐに援護しようと速度を上げた。アルヴィトとヴァルハラを阻むように敵がしつこく纏わり付いてくる。早くしないとノワリーが墜とされてしまう。焦る二人を嘲笑うかのように、次から次へと機体が群がる。

「隊長！隊長！」

必死に呼びかけた。無線が反応した。ボリユームを上げる。

『ステュアートか？』

「隊長！早く離脱して下さい！一人でそんな数は相手に出来ませんよ！」

『大丈夫だ』

「でも……！」

『俺を誰だと思っている？心配するな。まあ、見ている』

敵を引き連れたまま、ブリューナクが螺旋状に旋回しながら高速で急降下した。

銀色の閃光が空を貫きながら墜ちて行く。敵も同じ軌跡でブリューナクの後を追いかける。

ほんの僅か、ブリューナクがスロットルを絞った。

減速に気付かない敵達が順番にオーバーシュートしていった。

ブリューナクが敵の間を駆け抜ける。

稲妻のような鋭い動き。

いや、まさに稲妻そのものだ。

雷に撃たれた敵が墜ちて行った。

あの技は螺旋軌道で降下するスパイラルダイブという非常に高度な機動だ。エアショーでよく見る機動だが、実戦で使うにはリスクが大きい。それに、パイロットと機体に大きなストレスがかかる機動でもある。そんな難しい機動をいとも簡単に繰り出すとは。英雄と謳われたノワリーの腕に舌を巻いた。六年のブランクがあるというのに、彼の腕は衰えていない。それどころか冴え渡っている。

『こちらブリューナク。ステュアート、無事か？』

「はい！隊長こそ大丈夫ですか？」

『問題無い。ところで…お前の近くを飛ぶ機体は？』

『僕はノエル・ステュアート。ソエルの双子の兄です。アークでお会いしましたよね？安心して下さい。敵じゃありません』

『敵ではないという証拠は？』ヴァルハラが旋回した。ブリュンヒルドを狙う敵機を撃墜。

『これで信じてくれますか？』

「隊長。ノエルは私達と戦ってくれと言いました。信じて下さい。お願いします」

沈黙が流れる。スピーカーの向こうのノワリーは思案している。

『解った。ノエル、君を信じよう。共に戦ってくれ』

『ありがとうございます』

『こちらブリュンヒルド』メアリーの声が割り込んだ。『アレを見

て！』

ブリュンヒルドが翼を振った。翼が向いた方向を見た。二つの機体が敵を撃破しながら飛んでいる。ミッドナイトブルーと緑色の機体。間違いない。アッシュとアレックスだ。こちらから離れるように飛んで行く。

『こちらブリューナク！ブルー、アルジャーノン！何をしている？ 隊列に戻れ！応答せよ！……駄目だ。応答しない。どうやら無線を切っているようだ』

「あの方角は…ワールドエンドじゃないですか？」

『何だつて？あの二人は世界樹に向かっているのか？』

『すぐに追いかけないと！二人だけじゃ危険だわ』

『ローレンツ、君はノエルと共に基地に戻ってくれ。増援が必要だ。俺とステュアートで二人の後を追う』

『二人だけで？駄目よ！私も行くわ！』

『頼む。敵の増援が来る前に、本部に増援を要請してくれ。大丈夫だ。ステュアート達は必ず俺が守る。行ってくれ』

『…解ったわ。必ず無事に戻って来てね』

ブリュンヒルドとヴァルハラが向きを変えた。二機はユグドラシル基地の方角に飛んで行った。

『ステュアート、俺の後に続け。いいな？』

「了解です！」

ブリューナクとコンバットスプレッドを形成してワールドエンドを目指す。先頭を飛ばブリューナクが立ちはだかる敵を容赦無く撃墜していく。黒い波に穴が開いた。穴が塞がらない内に駆け抜ける。遠くに見えていた世界樹が近付いて来た。グングニルとメイデンリフの機影は見えなかった。墜ちたの？そんな筈は無い。あの二人が簡単に墜とされる訳が無い。

『ステュアート！降下しろ！』

ノワリーの指示が飛んだ。指示に従い、エレベータを引いて機体を降下させる。旋回したブリューナクがすり抜けた。爆発する音。一瞬、キャノピーにオレンジの色彩が投影された。肩越しに後ろを見やった。黒い煙で着飾ったギガンテスが墜落して行く。アルヴィトとブリューナクの背後に数十機もの爆撃機ギガンテスが飛んでいた。アンティオキアは何が何でもワールドエンドに行かせないつもりだ。

『俺が食い止める。お前は先に行け』

一瞬耳を疑った。いくらノワリーが英雄と言えども、一人である数を相手にするのは無謀だ。

「駄目です！私も戦います！」

『ここで二人共死ぬ訳にはいかない。大丈夫だ。必ず後から行く。信じてくれ』

「でも……！」

警告する音が鳴り響く。ギガンテスがミサイルを発射したのだ。ブリューナクが躍り出た。フレアでミサイルを引き寄せる。畏にかかったミサイルを機銃が貫いた。中規模の爆発が空を覆い尽くす。爆炎を突き破り、ブリューナクが巨人の群れに突っ込んで行く。

「隊長　！」

『行け！』

時には苦渋の選択をしないといけない。後ろ髪を引かれる思いで速度を上げた。天高くそびえる世界樹ユグドラシルが目前に迫った。スロットルを絞る。エレベータ・ダウン。ラダーで機首を下げる。車輪を出した。着陸の時だ。車輪が大地に触れて唄を歌う。ゴツゴツした岩場が衝撃を伝える。太い幹にぶつかる寸前でアルヴィトは止まった。

コクピットから這い出た。主翼を足場にして地上に降りた。空を仰いでブリューナクの姿を捜した。遠く彼方で爆発が連鎖している。炎上して墜ちて行く機体。ブリューナクでない事を祈った。祈りは届いた。ブリューナクは巨人の群れと集団戦を繰り返している。

満月を思わせる軌跡のアウトサイドループ。

華麗な軌跡に巨人は抗えない。

雷光がギガンテスを貫いた。

十、八、二、見る間に数が減っていく。

ブリューナクが最後の一機を撃墜した。

テイタノマキアは終わった。

機首の向きを変えたブリューナクがこっちに飛んで来た。翼を振って合図を送っている。着陸しようとしているようだ。慌てて距離を取った。アルヴィトから離れた場所にブリューナクは着陸した。キヤノピイが開いてノワリーが姿を見せた。この目で無事を確かめたい。急いで側に向かった。

「隊長！お怪我はありませんか？」

「ああ。大丈夫だ。お前は？」

怪我は無いと答えを返した。良かった。ノワリーが微かに微笑んだ。ブリューナクは右翼に僅かな裂傷を負っていた。数十機もの爆撃機からノワリーを守ってくれた機体に感謝した。

「これが…世界樹ユグドラシル…」

間近で見る伝説の樹に圧倒された。見上げても見上げても頂上が見えない。神々が放つオーラを纏った樹は静かに鎮座している。幹の陰から覗く機体に気が付いた。ミッドナイトブルーの主翼の先端が視界に飛び込んだ。

「隊長！アレを見て下さい！」

「あの色は　グングニルか？」

急いで反対側に回り込んだ。無造作に置かれた二つの機体があった。ミッドナイトブルーと緑色の戦闘機。グングニルとメイデンリーフだ。アッシュとアレックスはここに居る。だが、肝心の二人の姿が見当たらなかった。

「機体はあるのに、二人はどこにも居ない。どこに行ったんだ？コレは……」

ノワリーが見慣れない機体を発見した。一人一人がやっと搭乗でき

るくらいの大きさだ。グレイのボディにはアンテオキアのエンブレムがマーキングされていた。

「アルジャーノン博士が乗って来た機体じゃないですか？」

「恐らくそうだろう。二人が危険だ。早く捜そう」

二手に分かれて周囲を搜索した。ワールドエンドは草木が一本も無い、荒れ果てた大地だった。人が隠れていそうな場所なんてどこにも無い。ゴツゴツした岩場を歩いてくまなく捜したが、結局二人を見つかる事は出来なかった。

不意に、全身の細胞が凍りつくようなおぞましい寒気を感じた。後ろに何か居る。恐る恐る振り向いた。視界に入ってきたのは、虫のように蠢く木の根だった。木の根は生き物のような明確な意思を持って一斉に絡みついてきた。

「きゃあああっ！」

硬い木の根が全身を締めあげた。ギシギシと全身の骨が嫌な音を立てて軋む。巻き付いた根が身体を引き摺り始めた。どこかに連れて行こうとしている。巣に持ち帰って食べるつもりかもしれない。足をバタつかせて抵抗したが、人間離れした力に抗えなかった。

「ステュアート！」

悲鳴に気付いたノワリーが駆け寄って来た。腕を掴まれ強引に引き寄せられた。全身に巻き付いた根が引き剥がされていく。もう少しで解放されるという時、倍の数の根っこが襲いかかった。助けに入ったノワリーも木の根に捕えられてしまった。二人を拘束した根は、巣に持ち帰る作業を再開した。

二人の目の前で世界樹の幹に大きな穴が開いた。木の根は今しがた出来た穴に引き摺りこもうとしている。抵抗を続けるが、物凄い力で引つ張られていく。もう駄目。恐怖に目を閉じた。穴の中に放り込まれる感覚。それを最後に意識は闇の中に墜ちて行った。

地下特有のひんやりして湿った空気が肌を刺激する。ペチペチと

頬が叩かれている。赤く腫れないように加減されて。誰かが必死に呼んでいる。閉じていた目を開けた。白く霞んだ視界にぼやけた人影が映る。少しずつ視界がクリアになった。青年が見下ろしていた緑色の髪と琥珀色の目。翼と誇りを取り戻したパイロットだ。

「ステュアート！しっかりしろ！」

「あ…隊長…？」

冷たい地面に横たわっていた身体を起こした。頭痛がする。しばらくすると頭痛は治まった。

「怪我は無いか？」

「はい。大丈夫です。ここは一体……」

「多分、世界樹の中だと思う。私達は飲み込まれたんだ」

「飲み込まれた…？」

ノワリーの言葉が信じられず周囲を見回した。トンネルのような場所で薄暗い。天井と壁と地面を木の根が縦横無尽に走っている。

「もしかしたら、ブルーとアルジャーノンも飲み込まれたのかも知れない。捜しに行こう。立てるか？」

「はい」

ノワリーの手掴まって立ち上がった。彼に手を引かれて歩き出す。真っ直ぐな一本道が続く。先に進んでいるのか、それとも戻っているのか解らない。地図もコンパスも役に立たないだろう。ここは、未知の領域なのだ。

しばらく歩いていると、反対側から話し声が聞こえて来た。どんどん近付いて来る。人数は二人。言い争っているようだ。止まれとノワリーが手で制した。足を止めた。ぼんやりと暗がりには人影が浮かんだ。

「オイ。道に迷ったんじゃないかねえのか？さっきの分かれ道を右に行けばよかつたんだよ」

「お前が左に行くって聞かなかったから、こうなつたんだと思うんですけど」

「ファック！オレの所為にするんじゃないやねえよ！大体、世界樹に行き

たいつて言いやがったのはお前だぞ！」

「文句言うなら一緒に行くって言うなよ！」

「うっせえよ！図体だけデカイ野郎！」

「何だよ！チビチービ！」

反対側から歩いて来たのはアッシュとアレックスだった。歩きながら器用に喧嘩している。二人の口喧嘩は小学生レベルだった。死ぬ程心配したのに。二人は元気そうだった。

「アッシュ君！」

「アルジャーノン！」

立ち止まって喧嘩していたアッシュとアレックスがこっちを向いた。駆け寄って彼等との距離を埋めた。

「ソエル？隊長？何でここに居るんだ？」

「お二人を追いかけて来たんです。無事で良かったです！」

ノワリーが無言で近付いた。ゴチンと音が響いた。ノワリーの拳骨がアッシュとアレックスの頭に飛来したのだ。おまけに機械で出来た硬い義手の右手だ。半端ない痛さだろう。呻いた二人が頭を押さえた。

「馬鹿者！勝手に隊列を離れるなど言った筈だ！私達が…私がどれ程心配したと思ってるんだ！まったく…無事で良かった…」

切れ長の目につつすらと涙が滲んでいた。息を呑んだ二人は素直に謝った。目尻を濡らす涙に気付いたノワリーがすまないと謝った。素早く涙を拭う。失ったチームを思い出したのかもしれない。すぐにノワリーはいつもの冷静な顔に戻った。

「アルジャーノン。博士はここに居るのか？」

「はい。ここに居ます。来る途中にワールドエンドに着陸する機体を見ました。でも、世界樹のどこに居るのかは…」

何せクソ広いからな。アッシュが補足した。確かにアッシュの言うとおりだ。巨大な世界樹の中は不思議の国のように入り組んでいる。パスカルがどこに居るのかは誰も見当がつかない。悠長に再会を喜んでいる暇は無い。アッシュ達が来た方向に進む事にした。

奥に進むにつれ、空気が重くなっていくような気がした。高濃度のマナが溜まっている。アッシュがそう説明した。身体が圧迫される感じ。アッシュとアレックスは平気なようだ。

「行き止まりか」

先頭を歩くノワリーが足を止めた。彼等の目の前には道ではなく、木の根が絡み合った壁が広がっていた。根っこを引き剥がしてみれば、そこにあるのは壁だけだった。道を間違えたかと思ったが、歩いて来た道は愚直な一本道だ。脇道等無かった。

「ファック！ どんだけ広いんだよ！」

アッシュが壁を蹴った。明らかに苛立っている。焦っているのは皆同じだった。

「落ち着け、ブル！。引き返して、別の道を探すしかないな」

「そうですね」

「たっ…隊長！」

アレックスがノワリーを呼んだ。彼の側へ行くと、アレックスは驚いた表情を浮かべて立ち尽くしていた。何と、目の前の壁が生き物のように動いているではないか。瞬く間に新しい道が出来あがった。意思を持った何かか四人を導いているようだ。進むべきか戻るべきか。ノワリーに判断を仰いだ。

「隊長、どうしましょう…」

「私は…戻るべきだと思う。畏かもしれない。ここは誰も足を踏み入れた事のない世界樹の中だ」

「待ってくれ。オレはこの道を行った方が良いと思う」

アッシュがノワリーの導き出した結論に真っ向から反対した。切れ長の目がアッシュを捉える。

「何故そう思う？理由を訊きたい」

「…つまりは言えねえけど…この先にあのクソ野郎が居る。世界樹がそう言ってる気がするんだ」

アッシュが呟いた。紫の目が遠くを見る。聞こえない声を聞くように。アレックスがアッシュの隣に立った。

「俺もアッシュと同じ意見です。確証はありません。でも…この先に父さんが居ます。隊長、お願いします」

アレックスが頭を下げた。ノワリーが考えを巡らす。アッシュもアレックスも遺伝子にマナを組み込まれている。その二人が同じ意見を口にした。二人には解らない何かを感じたのかもしれない。信じてみる価値はあると思った。

「隊長。私も行くべきだと思います。お願いします」

ノワリーの答えを待った。彼の頭の中では様々な考えが浮かんで消えて、難解な方程式を解いているに違いない。判断を誤れば三人の命を危険に晒してしまうのだ。眉間にきつく寄っていた皺が和らいだ。答えが出たようだ。厳しい顔。望んでいる答えでは無くとも、彼の判断に従うつもりだ。

「…解った。お前達を信じてみよう。但し、絶対に私の側から離れるな。いいな？」

ノワリーの判断に感謝した。ノワリーを先頭に世界樹が作り出した道を進んで行く。平坦だった道が上り坂に変化した。遥かな高みに向かっていているのだ。前方に針のように細い光が見えた。光を指して。光が近づく。大きくなる。開けた空間に辿り着いた。

アッシュとアレックスは正しかった。

ついに見つけた。

狂気に囚われた科学者。

パスカル・フォン・アルジャーノン。

辿り着いた場所は円形で天井が高い空間だった。戦士達が死闘を繰り広げるコロッセオに良く似ている。血生臭い戦いを観賞する観客は居ない。中心には幾重にも絡み合った根が柱のようにそびえていた。根の隙間からぼんやりとした輪郭の燐光が零れている。柱の前にパスカルは居た。背を向けて佇んでいる。じっと柱を見上げている。警戒しながら距離を詰めた。

「アルジャーノン博士」

ノワリーの呼びかけにパスカルが振り向いた。灰色の双眸が嬉しそうに細められた。

「やあ。来てくれると思ってたよ。世界樹ユグドラシルへようこそ。言葉で表せぬ程素晴らしい。人類の楽園に相応しいと思わないかね？」

「大人しく我々と来て頂きたい」

「ん？何故だい？」

パスカルが首を傾げた。子供のように無邪気な仕草。それが逆に不気味だ。

「貴方は無意味な戦争を引き起こした張本人だ。軍法会議にかけるべきです」

「それは困るなあ。まだプロジェクト・エデンが完成していないんだよ」

「プロジェクト・エデン……？」

四人の声が重なった。パスカルは再び柱に目を向けた。凡人を遙かに凌駕した頭脳を持つこの男の考えている事が解らない。次から次へと理解出来ない言葉が飛び出してくる。

「君達も知っているだろう？人類の始祖であるアダムとイヴがエデ

ンの園を追い出された話を。愚かな行為だと嘆く者も多いが、私は大いに感謝している。原罪を背負った代わりに、人類は「知恵」というモノを得た。世界中に存在する生物の中で知恵を持つモノは人間だけだ。私の目的は永遠に枯れない世界樹を生み出す事だよ」

パスカルが言った事が信じられなかった。永遠に枯れない世界樹を生み出そうと、世界中の科学者達はその壁の厚さの前に失敗し、挫折していった。女の子が王女様に憧れるように、枯れない世界樹は科学者達の憧れであり、永遠の夢だ。だが、そんなモノは夢物語に過ぎない。狂気に飲み込まれて錯乱してしまったのか。

「ハッ！枯れない世界樹なんて創れるワケねえだろうが！ガキみたいな夢物語語ってんじゃねえよ！」

舌打ちしたアツシュが科学者の絵空事を否定した。反論に反論する事無く、パスカルは穏やかに笑っていた。

「ところが、創れるんだよ。長い年月を重ねて、やっとその方法を編み出した。このニドホグを使ってね」

白衣のポケットからパスカルが作り出した細菌が現れた。注射器の容器の中で漣のように揺れている。我が子を愛でる親のように、パスカルは液体を眺めていた。

「私はこの子にマナを食い荒らす性質を植え付けた。世界樹にニドホグを与えたらどうなると思う？自らの生命を維持するマナを食い荒らされた世界樹は当然のように死に瀕する。世界樹は生きようと生き残ろうと必死になるよ。そして、「進化」する。新しい種へ。

我々人類のようにね。何億年分の進化を一気にしようとするだろう。その為には生命力に溢れた養分が必要だ。ジェネシスに、ジェネシスの血を引く者。そしてキメラ。素晴らしい養分達が揃った」

狂気の目がニドホグから離れ、アツシュ、アレックス、ノワリーに移った。パスカルは三人を生け贄にしようとしている。悪魔のように恐ろしい考えに鳥肌が立った。彼は神から呪われた頭脳を与えられたのだ。

「ヒトを養分に出来るって…本気で思っているの？」

「出来るとも。何度も実験して成功したよ。勿論、お嬢さんも養分になってもらうよ」

パスカルは絡み合う根を引き剥がし始めた。隙間から洩れていた燐光の正体が明らかになった。剥がされた根の奥に巨大なクリスタルが輝いていた。大人の頭程の大きさだ。透き通るようなブルーグリーン輝きが美しい。心も体も吸い込まれそうなプリズムに目を奪われた。

「コレは……？クリスタル……？」

「そう。コレはマナ・クリスタル。いわゆる世界樹の心臓だよ。マナを生み出す原動力だ」

世界樹にこんな物が隠されていたとは。パスカルの手が愛おしげにクリスタルの輪郭をなぞる。その手は注射器に移り、細い針を覆っていたカバーを外した。指が慣れた手つきで先端を弾く。濁った緑色の液体が滲み出た。

「さあ、楽園が復活する時だ。君達は人間を遥かに凌駕するスペックの持ち主だ。素晴らしい養分になる事を期待しているよ。君達を取り込んだ世界樹は生まれ変わる。進化する。そして、永久にマナを生み出し続けるだろう。新しい世界の創造に貢献出来る事を光栄に思いたまえ」

「そんな事はさせんぞ。パスカル」

良く通る低音の声が響き渡った。後ろを振り向いた。恐れ等感じていない態度が声に表れている。クラッド・エリオットがパスカルを正面から見据えていた。一瞬、ノワリーとクラッドの視線が交差する。彼は四人の脇をすり抜けて、ねじ曲がった野望を抱く男の前に立った。ベルトに拳銃が収められたホルスターを提げている。

「これはこれは……エリオット將軍ではありませんか。こんな辺境の地においてになるとは、どうしました？」

「決まっている」

クラッドがホルスターから銃を抜いた。銃口を白衣の胸に突きつける。

「息子を取り戻しに来た。世界樹の餌にはさせん」

「おや？将軍はノワリー君を毛嫌いしていた筈。どういふ風の吹き返しです？」

「……貴様には関係無い。私が間違っていた。それだけだ」

「親の愛に目覚めたという訳ですか。そんな物騒な物を突きつけても無駄ですよ。古典的な脅しには屈しません」

パスカルが一步、また一步と後ろに下がって行く。パスカルを追いかけ、クラッドも距離を詰める。互いに隙を見せない。隙を見せた方が確実に負ける。息が詰まるような張り詰めた空気が漂う。

「それに、私を殺したら誰がニドホグを止めるんですか？この子の扱いは私しか知らないですよ」

「その時はその時だ。今は貴様を止めるのが先決だ」

「愚かな人だ」

刹那、一瞬の間隙をついたパスカルがクリスタルを覆う根の塊に針を突き刺した。閉じ込められていたニドホグが押し出されていく。パスカルが笑い声を上げた。狂気の淵に居るような笑い声だ。

「はははは！これで世界樹は進化する！生まれ変わるのだ！」

「パスカル！貴様あ！」

クラッドの指が引き金にかかった。銃口から弾丸が発射される事は無かった。突如、足下の地面が大きく揺れた。大地の下で何かが蠢いていた。地面を突き破って世界樹の根が飛び出した。何本も。数え切れないほどだ。指揮者の居ない楽団のように好き勝手に暴れ回っている。狂ったワルツを踊っている。ニドホグがマナを食い荒らしているのだ。身体の内側をボロボロに食い荒らされた世界樹が苦しんでいる。

束になった根が空気を切り裂いて牙を剥いた。慌てて地面に伏せて難を逃れた。地面に叩きつけられた根が砂埃を撒き散らした。視界が遮られてアッシュ達を見失ってしまった。埃にむせながらアッシュ達を捜す。黄土色の靄の向こうに見つけた。アッシュは無数の根に取り囲まれていた。助けに行かないと。世界樹に飲み込まれて

しまつ。

「アツシュ君…！」

「俺が行く。ソエルは安全な場所に居て」

アレックスの手が遮った。返事を待たずにアレックスは駆け出した。蜂のように飛び交う根の中をすり抜けて行く。彼はすぐにアツシュの側に辿り着いた。アツシュの腕を掴み、今にも彼を突き刺そうと蠢く根の群れからアツシュを引っ張り出した。執拗に追いかけて来る根っこから逃げる事に成功した二人は安全な場所に身を潜めた。

「アツシュ！大丈夫か？」

「ファック。最悪な気分だぜ。助かった。一体、どうなってるんだ？」

「…ニドホグの所為だよ。世界樹が暴走しているんだ」

アツシュとアレックスが安全な場所に隠れたのを見て安心した。

安堵の息を吐いた。彼等の所に行こう。

「伏せる！」

クラッドの叫び声が飛んだ。肩越しに振り向く。鞭のようにしなつた根が襲いかかって来る所だった。逞しい体躯が覆いかぶさってきた。そのまま地面に押し倒される。頭上スレスレの所を横薙ぎに薙いだ根が飛んで行った。あと数秒遅れていたら、首を切断されていたかもしれない。ゾツとした。

「油断するな」

「は…はい…。助かりました…」

コツと革靴の音が聞こえた。上等な革靴が目の前に立っている。ノワリーの靴では無い。顔を上げる。灰色の目が二人を見下ろしていた。ホルマリンにつけられたサンプルを見ているような目だった。「まだ生きていましたか。ゴキブリ並の生命力ですね」

「パスカル…！」

再びクラッドが銃を構えた。今度こそ撃ってみせる。決意が表情に表れていた。いつ飛び出すか解らない弾丸に怯える事も無く、パ

パスカルは笑っていた。パチン。パスカルが指を鳴らした。

「ぐあつ！」

「將軍！」

音に引き寄せられるように飛んで来た根がクラッドの右肩を貫いた。流れ出た鮮血が地面に滴る。落ちた拳銃に根が絡み付いた。根は器用に銃を拾い上げると、パスカルの掌の中に銃を落とした。飼い主が投げたボールを拾いに行く犬のような動作だった。

「よしよし、良い子だね。驚いたでしょう？世界樹は私の意のままなんですよ」

「世界樹が……？どういう事？」

「論より証拠だ。見たまえ」

パスカルが白衣の袖を捲った。現れた光景に息を呑んだ。パスカルの腕は人間の皮膚とは思えない姿になっていた。ヘドロのような濁った緑色に変色していて、硬い質感に変わっていた。皮膚の内側で何かが蠢いている。それが動く度に、皮膚が盛り上がったたり、血管が脈打ったりしている。おぞましい。その一言に尽きた。

「私の身体の中にニドホグを注射した。私の中のニドホグと、世界樹の中のニドホグは繋がっているんだよ。簡単に言くと、私が見えない糸で世界樹を操っている、と言う事だよ」

パスカルがクラッドから奪った銃を構えた。銃口は寸分の狂いも無く二人を捉えていた。人間の皮をかぶった悪魔はどっちを撃ち抜こうか迷っている。

「うん、そうだな。まずは將軍に死んでもらいましょう。貴方が生きてくると、色々と厄介だしね」

「私を殺す気か？私はエリオット家の当主だぞ？クルタナ空軍の幹部だぞ？私を殺せばどうなるか」

「知らないなあ。そんなモノ、死んでしまえばただのゴミですよ」

銃口がクラッドに狙いを定めた。

撃鉄が動く。

指が引き金に。

バン。

機械仕掛けの悪魔が吠えた。

視界に鮮血が飛び散る。

その血は、

クラッドの血では無かった。

「隊……長……？」

「ノワリー……？」

二人は同時に呟いた。目の前にノワリーが立っていた。

両腕を広げて。

神のお告げを聞く聖者のように。

静かに。

クラッドの胸に穴は開いていない。

どうして？

ゆっくりと、ノワリーが振り向いた。

「二人共……無事……か……？」

信じられない光景を見た。ノワリーの左胸に綺麗な穴が穿たれていた。真っ赤な血が白いシャツを染め始めていた。

「な……何故私を庇った？私はお前に酷い仕打ちをした……酷い言葉を

……」
「貴方は……俺と「彼」の父親だ……死なせはしない……」

ノワリーが微笑んだ。微笑みも束の間、ノワリーが血を吐いた。脛が落ちて。膝が崩れた。力を失ったノワリーをクラッドが抱きとめた。糸の切れたマリオネットのようにグッタリとして動かない。溢れ出る鮮血がクラッドの軍服に染み込んでいく。赤と紺色が混じり合い、紫色を生み出した。

「隊長？隊長！しっかりしてください！いやっ……いやあああああ
っ！」

「おや。死んでしまったか」

まるで他人事のようにパスカルが呟いた。キツとパスカルを睨みつけた。

「人殺しっ！よくも隊長を！」

「正確に言えば、彼はキメラだ。ヒトでは無いよ」

「っ！」

「父さんっ！」

暴れ狂う木の根の中からアレックスが飛び出して来た。不意を突かれたパスカルに飛びかかり、地面に押し倒した。父親の手から銃をもぎ取ったアレックスが立ち上がった。肩で息をしながら銃を構える。アルジャーノン親子が対峙した。

「父を撃つつもりか？止めなさい。お前には出来ない」

「出来るさ」

アレックスの指が引き金を引いた。

銃声。

火薬の匂い。

空の葉莢が地面に落ちる。

パスカルの太腿に穴が開いた。

「うぐっ！」

苦悶の声を上げたパスカルが地面に座り込んだ。

弾が補充される。

銃口が動く。

吸い寄せられるようにパスカルの頭に向けられた。

「今度は外さない」

アレックスのモノとは思えない、氷河のように冷え切った声だった。父親と同じ冷徹な光を宿した双眸がパスカルを捉えている。いつも快活で気さくな彼の内側にこんな一面が潜んでいたとは。人差し指が引き金に触れた。弾丸が頭蓋に食い込むのを待っている。

「ファック！止める！アレックス！」

アレックスの後を追いかけて来たアッシュが叫んだ。アレックスの耳に制止の声は届かない。我を失いかけている。パスカルと同じ

狂気に囚われかけている。アツシユの華奢な手がアレックスの腕を掴んだ。萌える緑色の目に理性が戻る。

「離せよ！終わりにするんだ！」

「こんな野郎、殺す価値もねえ！お前の手が汚れるだけだ！カルマが重くなるだけだ！お前がそんな事する必要はねえよ！」

アレックスの手から銃が離れた。ゴトリと音を立てて地面に落ちた。アツシユの説得の言葉がアレックスの心を貫いた。長身の身体が崩れ折れた。緑色の目に塩辛くて厄介な涙が溜まっていく。

「アツ…シユ…俺…俺っ…」

「…ファツク。泣くんじゃねえよ」

「息子の言うとおりで。終わりにしようじゃないか」

立ちほだかったパスカルが静かに言った。爬虫類のように冷たい輝きが目に宿っている。ニドホグに荒らされた左腕が掲げられる。

暴れ回っていた根が集結した。槍のように鋭く尖った先端が五人を狙っている。

「私は神になる！新しいエデンの園の神になるのだ！」

パスカルは狂信者のように笑っていた。彼が人間である唯一の証拠は足から流れ出る赤い血だけだ。

「違う！貴方は神なんかじゃない！人の命を弄んで、戦争を引き起こしてたくさんの人を傷つけた！何が神よ！貴方はただの人間じゃない！狂った哀れな人間よ！」

「そうだよ！ソエルの言うとおりだ！もう止めてくれ！父さん！」

「違うない！私は神だ！世界樹は私の物だ！マナも！世界も！運命も！小娘に何が解る」

パスカルの身体が硬直した。笑い声を上げていた口から大量の鮮血が溢れ出す。パスカルの腹部から世界樹の根が突き出ていた。彼が従えていたと思っていた世界樹がニドホグの支配から逃れたのだ。串刺しの身体が持ち上げられた。

「ばっ　馬鹿な…！ニドホグを飲み込んだというのか…？こんな所で…！死ぬ訳には」

止めを刺すように無数の根がパスカルを貫いた。ダラリと手が垂れ下がった。パスカルの目はもはや光を映していなかった。白濁した灰色の目は死という永遠の夢を見ていた。闇に堕ちた聖者の狂気は終わったのだ。

立っていられない程の地響きが空間を揺るがした。パラパラと土埃が舞い落ちる。ニドホグに侵された世界樹は限界を迎えている。急いでユグドラシルから脱出しないといけない。必死な呼び声が聞こえる。クラッドがノワリーを呼び続けていた。

「將軍！隊長は…？」

「微かに息がある。一刻も早く病院に運ばねば」

「オイ！こつちだ！」

壁際に居るアッシュが手を振っている。彼の側へ。ここに辿り着いた時と同じように、壁を覆っていた木の根が道を作り出した。世界樹が出口を作ってくれたのだ。急いで穴に飛び込んだ。薄暗い道を下り続ける。暗闇に慣れた目に光が届く。澄んだ空気が流れてきた。脱出成功だ。

アルヴィト、グングニル、メイデンリーフ、ブリューナク。四機の戦闘機は無事な姿で佇んでいた。ぼんやりと、薄い霧が周囲を包み始めていた。ワールドエンドが霧の中に沈もうとしている。世界樹が再び眠りにつこうとしているのだ。

「どうしましょう…！機体が足りませんよ！それに、隊長は…！」
悲鳴に近い声を上げた。五人に対し、機体は四つしかない。それに、銃で撃たれたノワリーは瀕死の状態だ。ブリューナクの操縦ななど出来る訳が無い。

「大丈夫だ。ブリューナクを借りる。ブリューナクのコクピットは広めに設計されている。二人ならギリギリ乗れる筈だ」

ノワリーを担いだクラッドがブリューナクに乗り込んだ。二人共背が高い。コクピットに乗り込めるか心配したが、何とか乗り込めたようだ。それぞれ機体に乗り込んだ。メイデンリーフを先頭に。グングニルを殿に。ワールドエンドを飛び立った。

濃い霧がワールドエンドと世界樹を包んで行く。

眠り姫を守る茨のように。

ラプンツェルを覆い隠す塔のように。

世界樹は二度と姿を見せないのかもしれない。

そう思った。

先頭を飛んでいるメイデンリーフが翼を振っている。何かを見つけたようだ。ノイズ混じりの音声が流れた。

『数キロ先に巨大な船が走ってる。敵かな？』

『いや、敵では無い。アレは……クルタナ空軍の空母、エインヘリヤルだ』

距離が縮まるにつれ、巨大な空母の全貌が見えてきた。戦乙女が掲げる剣のように鋭く、勇壮な外観だ。フライトデッキがチカチカ光っている。合図が送られているのだ。あのパターンは「高度を下げる」だ。デッキに着陸しろと伝えている。

『本当に味方なんだろうな。敵に乗っ取られてるんじゃないのか？』
アッシュの言う事は一理ある。信じられる証拠はどこにも無い。畏でも良い。捕虜になっても構わない。今はノワリーを病院に運ぶのが先決だ。アッシュにそう伝えた。そうだな。アッシュが同意する。

着陸の態勢に。

空母上空を旋回しながら一周した。

右舷後方から接近。アレステイングフックを下ろす。

一度エインヘリヤルを通過。

左へターン。

脚を下ろして減速。

左舷を通過。

百八十度ターン。

機首を着艦エリアに向ける。

グライドスロープ、着艦誘導電波を捉えた。

着陸信号士官の指示が無線を通じて伝えられる。

デッキ上に張られたアレステイングワイヤーをワイヤーキャッチが捉えた。

激しい衝撃。機体は無事に着陸した。

「ソエル！アッシュュ！アレックス！」

メアリイとリゲル、オペラが甲板を駆けて来た。ノエルが居ない不安が駆け巡る。コクピットからクラッドに背負われたノワリーを見た三人の顔が強張った。すぐに衛生兵がやって来た。動かすのは危険だと判断が下る。その場で応急処置が始まった。ネクタイが外され、シャツが開かれる。消毒。止血。素早い処置が施されていく。「このままでは危険です。一分でも早く病院に運ばないといけません」

「無線は使えるのか？ドクターへリを手配させねば」

「はい。勿論です。こちらです」

衛生兵とクラッドはデッキ内に降りて行った。残った衛生兵達がノワリーの手当てを続けている。空はいつもの綺麗な青さを取り戻していた。空を埋め尽くしていたアンティオキアの軍勢はどこに行ったのだろう。

「グランツさん。アンティオキアはどうなったんですか？ノエルは無事ですか？」

「ヴァルキリーと他のチームの活躍で、ほぼ壊滅状態よ。負けを認めた奴等は撤退したわ。それに、国内でもレジスタンスに触発された国民達が暴動を起こしているの。いずれ、アンティオキアは内側から崩壊するでしょう。クルタナの勝利よ。ノエル君も大丈夫。アンティオキアの残党を退治しているわ。安心しなさい」

兄貴がやってくれたんだ。リゲルが自慢げに補足した。長い戦争が終わろうとしている。それでも素直に喜べなかった。ヴァルキリーを守り抜いた光が消えようとしているのだ。地平線に沈む太陽のよう。

「大丈夫だ」

アッシュが隣に立っていた。紫の目が真っ直ぐに見つめている。宇宙のように深いヴァイオレットブルーに怒りや悲しみも吸い込まれそうだった。

「隊長がそう簡単に死ぬもんか。「光の槍」は折れたりしねえ」

「……うん」

手と手が自然に繋がる。指が絡み合って。励ますように力が込められた。

二人の祈りを抱えたエインヘリヤルは大海を切り裂くように走って行った。

その先に、救いがあると信じて。

「エリオットさん！聞こえますか？」

病院の真つ白な廊下を白衣の集団が駆けて行く。看護師の女性がストレッチャーに寝かされたノワリーに呼びかけているが、返事は返ってこなかった。固く閉じた瞼はピクリとも動かない。さつきよりも容体が悪化しているように見える。血の気を失った青白い顔は大地の底で眠る死者のようだった。左胸に穿たれた銃創から血が流れ続けている。

「心肺停止！すぐに緊急オペの準備を！」

叫んだ医師がストレッチャーに飛び乗った。ノワリーの上に跨った彼は心臓マッサーを始めた。看護師がAEDを手渡す。素早く装置が展開された。胸にパッドが貼られる。スイッチON。繋がったコードから電流が流れた。ノワリーの身体が跳ねる。マッサーを施していた医師の顔が僅かに和らいだ。彼等は手術室のドアの向こうに消えた。ドアの上部にあるランプが赤く点灯した。

固く閉ざされたドアの前で待っている事しか出来なかった。手術室を守る扉は彼等が中に入るのを拒んでいる。選ばれた勇者しか入れないのだ。慌ただしく駆け回る足音と、機材を動かす音が内側から響いている。小刻みに身体が震えた。最悪の結末が頭に浮かんだ。冷たいようで温かい、華奢な手が肩に触れた。すぐ側にアッシュが居た。彼は沈痛な面持ちをしていた。手に力が込められる。大丈夫だ。隊長を信じる。声にならない言葉が聞こえた。たまらずアッシュに抱き付いて細い肩に顔を埋めた。

「アッシュ君っ……」

「さつきも言っただろ？英雄がそう簡単に……死ぬ訳無いってよ」
アッシュの手が背中を撫でる。耳元で囁く声は嫌味なくらい落ち

着いていた。決して、冷酷でも、無慈悲でも無い。ノワリーを信じているからこんな声が出せるんだ。アレックス達も同じ思いだ。赤いランプが消えるのを待っている。朗報が来るのを信じて。

「ノワリーの容体は？」

空軍本部に報告に行っていたクラッドが廊下を走って来た。着替えている暇が無かったのだらう、血に染まった軍服のままだ。報告なんて後で良いのに。融通の利かない幹部達に腹が立った。

「心肺停止で……緊急手術中です……」

何て事だ。呆然とクラッドが声を絞り出した。ダンと鈍い音が響く。アレックスが壁に拳を打ちつけていた。何度も何度も。ただ一点を殴り続ける。皮膚が裂けて血が滲んだ。メアリーとリゲルが駆け寄った。メアリーのしなやかな手が彼の手を取った。リゲルが彼の両肩を掴んだ。

「アレックス！止めなさい！」

「血が出るぞ！止めろって！」

「俺の所為だ……！俺が勝手な行動をとったから……隊列を離れたから……隊長は……！」

顔を伏せたアレックスの口から苦悶の嗚咽が零れた。リゲルにしがみついて泣いている。隣に立つアッシュがファックと呟いた。紫の視線が床に落ちる。二人はワールドエンドに向かう為に隊列を離れた責任を感じているのだ。

突然手術室のドアが開け放たれた。ランプは点灯したままだ。服も手袋も真つ赤な看護師が出て来た。

「出血が酷い状態で、輸血が必要です。彼の血液型は解りますか？」
看護師の問いかけに誰も答えられなかった。ノワリーの血液型なんて訊いた事が無かった。クラッドが進み出た。憎らしい程落ちて着いているが、動揺の色を隠しきれいでいなかった。

「A型だ。私は彼の父だ。私の血を使ってくれ」

「私もA型です！使ってください！」

「解りました。こちらへ」

アッシュ達を廊下に残して二人は別室に案内された。左腕が消毒されて、チューブに繋がった針が刺される。看護師が機械のスイッチを入れた。ブーンと機械が動き始めて二人の血液を溜め始めた。死なない程度に血が抜かれていく。また来ますと断り、看護師は手術を手伝いに戻って行った。

「……アレは…助かるだろうか」

隣のベッドに腰掛けているクラッドがポツリと呟いた。息子をアレ呼ばわりするなんて。腹が立った。彼に怒りをぶつけてもノワリーを連れて行こうとしている死神は追いつけない。グツと堪えてクラッドに視線を向けた。

「必ず助かります。隊長は強い人です。將軍、貴方は…隊長を息子として見ていない筈です。何で世界樹に来たんですか？どうして輸血を申し出たんですか？」

アークでクラッドがノワリーに放った残酷な言葉を思い出した。その所為で自然と語気が強くなった。鋭い光を失った目が動いた。切れ味の鈍くなった光が目の奥で揺れている。表情を隠すように、クラッドは手で口元を隠した。

「ステュアート嬢。私は、基地で言ったノワリーの言葉が忘れられなかった。息子でなくとも、私を父親だと思っている事を。…成長するにつれ、「ノワリー」に似てくる。それが酷く不気味で、恐ろしかった。私は、彼を愛する事が怖かったのだ。だが、今は違う。ノワリーは私の息子だ。キメラでも、私の血と遺伝子を分けた息子なのだ。もっと早く気付くべきだった。もっと早く……」

「……その言葉を隊長に伝えてあげて下さい。きっと…待っています」

「……ノワリー」

その言葉を最後にクラッドは無言になった。機械が唸る音だけが響いていた。輸血が終わった。看護師が迎えに来る。部屋から出て二人はアッシュ達と合流した。永遠とも思える時間が過ぎ去った。不意に、赤ランプが静かに消えた。手術室のドアがゆっくりと開い

た。医師が顔を覆っていたマスクを外した。

「手術は無事成功しましたが、依然危険な状態です。恐らく…今夜が峠でしょう。集中治療室に運びます。何かあれば連絡しますので、連絡先を教えてもらえますか？」

医師の差し出したメモ帳にメモリーがユグドラシル基地の電話番号を書いた。クラウドも自分の携帯電話の番号を書いた。ノワリーを乗せたベッドが運び出されてきた。

ノワリーの目は閉じられたままだった。雲のように真っ白な顔。はだけられた胸には死と格闘した跡が刻まれていた。口を覆った酸素マスクが生きる為に必要な空気を肺に送り続けている。とても穏やかな顔だった。このまま起きないんじゃないかと思うくらいだった。首を振り、不吉な考えを追い払う。

「先生！隊長は……助かりますか？」

医師が振り向いた。彼は何とも言えない表情で首を振った。

「それは……解りません。予断を許さない状態です。私達は彼の生死を決める事は出来ません。生きるか死ぬかは、エリオットさん自身が決める事だと思っています」

到着したエレベーターに乗り、医師達は集中治療室のある階に昇って行った。もしかしたら、医師達は人間に化けた天使で、ノワリーを天国の門に連れて行くこうとしているんじゃないか。あの白衣は翼を隠す為のフェイクなのかもしれない。

そうだとしたら、その翼をもぎ取ってノワリーの魂を奪い返してやる。

飛んで逃げても無駄だ。

ヒトにだって翼はある。

機械仕掛けの翼に乗って機銃で撃ち墜としてやる。

神様が見ているのならこう言っただりたい。

誰にでも生きる権利がある。

私達は、貴方の玩具ではないと。

閉じていた瞼を太陽の光が容赦なく貫いた。紫外線を含んだ光は、しばらく瞼の奥の暗闇に残光として留まっていた。仕方無く目を開けた。青と白が黄金比で混じった空。人の手には負えない素晴らしき色だ。頭上にそびえる樹の上で小鳥が軽やかに歌っている。

（ここは……？確か、私は……世界樹で撃たれた筈……）

横たわっていた身体を起こした。焼けつくような痛みは消えていた。ネクタイを緩めてシャツを開いた。左胸にある筈の、醜く抉れた銃創が無い。見知らぬ場所に居る。傷も無い。不可解な事ばかりだ。

遠くに建つ門に気付いた。父と子と聖霊の似姿が精巧に彫られた門。一点の曇りの無い純白だ。そう、ソエルの機体、アルヴィトのような雲に溶け込む色。門が守る筈の建物の姿が無かった。門だけがそこに佇んでいるのだ。

あの門をくぐりたい。抑えきれない衝動と興味が湧いた。見る限り、呼び鈴のような物は無い。取っ手も付いていなかった。自然に開くのを待つしかないようだ。ソエル達の安否が気になったが、今は扉が開くのを待ちたかった。時間の感覚は無いに等しい。樹の幹に背を預け、小鳥の囀りに耳を傾けながら待ち続けた。

「何をしてるの？」

斜め後ろから声が聞こえた。まだ声変わりしていない少年の声。肩越しに振り向いた。いつの間に？どうやって来た？一人の男の子が立っていた。年の頃は九歳か十歳だろう。聡明で利発そうな子だ。白いカッターシャツの上に紺色のベスト。ワインレッドのネクタイと黒の半ズボンという服装だ。上品で洗練された格好。それなりの地位に就いている家の子だろう。同じ髪と目の色をしていた。

「あの門が開くのを待っているんだ。君は誰だ？どうやってここに来た？」

「門が開いたらどうするの？」質問に答えないうまま少年は隣に座った。

「向こう側に行くつもりだ」

「駄目だよ。あれは天国に続く門なんだ。向こう側に行ったら、お兄ちゃんの居る世界に戻れなくなるよ」

天国の門。だから、地上には無い美しさを感じたのか。魂が惹かれたのか。ならば、早く門をくぐりたい。向こう側にはイーリスとシルヴィが待っている。優しく微笑んで抱き締めてくれるだろう。

「私は……向こう側に行きたい」

「どうして？戻れなくなっても良いの？」

「私はキメラと呼ばれるレプリカだ。自然の摂理を無視した化け物なんだ。生きてはいけない存在だ。それに……もう良いんだ。ずっと、この時を待っていたのかもしれない。私は、あの時彼等と一緒に空で死ぬべきだった。これで、やっと、皆の所に逝ける」

大切なチームを残して逝く事に罪悪感を感じたが、天国の門をくぐりたいという気持ちが打ち勝った。あの時失った大切な人達が待っている。すまない。胸中で謝った。

「そんな事言わないで！」

立ち上がった少年が叫んだ。珍しい色の目の中で怒りと悲しみが渦巻いていた。

「お兄ちゃんはまだ向こうに行っちゃ駄目！」

「何故だ？」

「だって……僕の代わりに生きて欲しいから……」

「代わりに……？」

涙を溜めた顔で少年が頷く。今思えば、二人は良く似ていた。髪も目も。顔立ちも。いや、自分が少年に似ているのだ。バラバラだったパズルのピースがカチリと繋がった。真実が姿を現した。

そうか、この子は。

「君は……オリジナルの「ノワリー・エリオット」なんだな？」

再び少年が頷いた。服の袖で涙を拭ってニッコリと微笑んだ。謎を解いてもらって喜んでいるような顔だ。座ったまま話すのは失礼だと思った。立ち上がった。真っ直ぐに彼を見つめる。同じ琥珀

色の目が見つめ返した。

「パパを恨まないで。僕を亡くしてとても悲しかったんだ。僕とずっと一緒に居たかったから……お兄ちゃんを創ったんだよ」

「恨んでいないと言えば、嘘になる」

少年の顔色が変わった。晴天から曇り空へ。雨はまだ降っていない。

「彼は私から大切な者を奪った。それだけでは飽き足らず、翼までもぎ取るうとした。そう簡単に許せるものではない」

「じゃあ、何である時パパを庇ったの？」

「……それは」

世界樹の中でクラッドが狂気の科学者パスカルに撃たれそうになった時、気付いたら彼の前に飛び出していた。恨んでいるのなら、憎いのならクラッドの胸に銃弾が突き刺さるのを見ていれば良かった。神様が天国から下界を見下ろすように、冷静に、冷徹に見ているだけで良かった。

なのに、

何故、私は彼の前に飛び出したのだろうか。

「お兄ちゃんにはパパが好きなんだよ。だから、パパを助けてくれた」少年の言葉が心の奥に押し込めていた感情を揺さぶった。否定しつつも、信じたかった思いが次々と溢れ出した。言葉の代わりに涙が流れた。止まらない。乾かない。涙を消し去る魔法の言葉が解らない。

「私は……俺は……將軍に……父さんに認められたかった。愛されなかったんだ。本当の息子じゃないと言われても、キメラだと言われても……俺は父さんが好きだ。大好きだ。言いたい事が一杯ある。話したい事がたくさんあるんだ」

「なら、ここにいちやダメだよ。貴方の世界に戻って。待っている人がたくさん居るから。僕の代わりに長生きして、僕の代わりにその目で世界を見て、世界を感じ取ってよ」

子供とは思えない大人びた目で少年がノワリーを見上げた。曇り

のない青空のように澄み切った目だった。全てを失い、天国に飛ばうとした時に出会った少女と同じ目だった。キメラだと言われた時、自分が偽物だと知ってしまった時、また死を選ぼうとした。再会した少女に空で死ぬなと同じ事を言われた。青空を映した目が生きると言った。

そうだ。

あの時も、もう少し生きてみようと思ったんだ。

曇りの無い目が勇気をくれた。

死ぬ為の勇気では無い、死なない為の勇気を。

生きていても良いだろうか？

風が揺れる。

雲が動く。

ほんの僅か、世界が頷いたような気がした。

「生きてみようと思う。君の代わりに世界を見るよ。感じるよ」

「……うん」

少年がそっと抱き付いた。息遣いも、心臓の鼓動も、生体リズムも一緒だ。彼の全てが自分と同じ存在である事を証明していた。少年が泣いているのが解る。呼吸と肩が震えているから。そっと、夏の緑のような色の髪を撫でた。気持ち良さそうに目を閉じていた少年が目を開けた。彼は腕を離すと距離を置いた。別れの時だ。少年が微笑む。輝くような笑顔だった。少年の輪郭がぼやけていく。向こう側の景色がクツキリと見えた。

「……ありがとう」

声にならない声が耳に届いた。草が風にそよぐ音よりも小さな声だったが、どの音よりも大きく、確実に鼓膜に響いた。

少年は淡い緑色の燐光となり空気に溶けていった。

宇宙に、星に還っていったのだ。

寂しくはない。悲しくもない。

いつかきつと会える。

彼の想いに応えるように敬礼した。

意識が遠のく。
目覚めた時に居るのは
彼等が待つ世界だろう。

規則正しく脈を打つ電子音。乱れもなく、ただ淡々と、機械に繋がれた青年の生体リズムを刻んでいる。白い光が瞼を貫いた。カーテンの向こう側から差し込んでいる陽光の所為だ。どうやら、いつの間にか眠っていたらしい。椅子に座ったままの姿勢で眠っていたから身体の節々が痛い。

静かに病室のドアが開いた。病室の主に気を遣っているような開け方だ。飲み物の缶を持ったアッシュが入って来た。いつもと同じ不機嫌そうな顔だが、わざとそう見せているのかもしれない。彼の紫の目は、同じ感情の色に染まっていたから。

「まだ……目、覚まさねえか？」

「……はい」

「ほら。コレ飲んだら基地に帰って休め。一昨日からずっと居るんだろ？」

「私なら平気です。アッシュ君こそ……休んで下さい」

一昨日からずっと居るのはアッシュも一緒だ。ミルクティーの缶を受け取って断ったが、アッシュは頑なに帰って休めと言いつけた。コーラの缶を開けたアッシュは壁にもたれて飲み始めた。基地に帰る気はなさそうだ。

ノワリーが銃弾に倒れてから数週間が経っていた。弾丸の摘出と手術は無事成功したが、意識が戻らない状態が続いていた。以前より血の気が戻ったものの、青白い顔のままだった。氷河の氷の色を焼き付けたような白さ。空気を送る人工呼吸器と、酸素マスクの音だけが虚しく響いていた。そんな音は聞きたくない。温かい、心臓の鼓動の音が聞きたい。

自らの流した血で真っ赤に染まったシャツ。はだけられた胸に繋

がった、医療機器のコードやパッドが痛々しい。ノワリーの全身に無数の傷跡が刻まれているのに気付いた。裂傷が多い。現役のパイロットだった時に負った傷の名残だろうか。いつも身に着けている白い手袋も外され、あの機械の義手が見えていた。

「……隊長、傷だらけだったんだな」

コーラを飲み終えたアツシユがポツリと呟いた。顰められる眉。曇る瞳。彼と同じ痛みを感じているような口調だった。他人と同じ痛みを感じられる人間は優しい人だと思う。一年前のアツシユがこの場に居たら、どんな顔をして、どんな台詞を口にするのだろう。「痛みを耐えながら……オレ達を守ってくれてたんだよな。ファック。それなのにオレ達は……オレは……いつも迷惑をかけてよ……最悪だぜ」

「私だつて……同じです。ミスばかりしていたのに、隊長は笑って許してくれたり、時には厳しく叱ってくれたり……いつも、私達を見守ってくれていました」

言葉に詰まって、声の代わりに嗚咽が漏れた。遺影の前である故人を称えるスピーチみたいじゃないか。ノワリーは眠っているだけで、死んではないというのに。白い腕が背中に回された。アツシユに抱き寄せられて、そのまま肩に顔を埋めた。アツシユの音を聞いた。一つになって、悲しみを共有した。

「隊長が居ない空なんか……飛びたくないっ……」

「……オレもだよ」
神様。

お願いします。

泣き虫のままです。

だから、彼を返して下さい。

英雄を星座にしないで下さい。

未来を生きる力を下さい。

不意に、規則正しくリズムを刻んでいたモニターの波長に変化が現れた。低かった波が高くなって行く。ほんの僅か、一ミリ、動く

意思を示さなかった手が動いた。どんな鍵を使っても開かなかった
眼が開いた。琥珀色の目が現れた。ずっと見たいと焦がれていた色
ベッドの側に行った。まだ意識が朦朧としているのか、瞬きをする
目の動きは緩慢だった。

「隊長！ステュアートです！解りますか？」

「オレだ！ブルーだ！返事してくれよ！」

温もりを取り戻し始めた手を握った。握り返して来た力は弱かつ
たが、彼が生きる力を失っていない証拠だ。酸素マスクに覆われた
口が弱々しく動く。ステュアート、ブルー。二人の名前を呼んでい
るんだ。儚い微笑みが浮かぶ。また泣きそうになった。

「ソエルは医者を呼んで来い！オレはアレックス達に連絡して来る
！」

「はっ…はい！」

指示をしたアッシュが病室を飛び出して行った。軽い足音が廊下
を駆けて行く。ナースコールのボタンを押した。数分後、担当の医
師と看護師が飛んで来た。モニターと医療機器をチェックしたり、
触診したりと慌ただしくなる。彼等の邪魔をしてはいけない。廊下
に出てアッシュ達を待った。

一時間後、アッシュとアレックス、メアリーとリゲルが廊下を走
つて来た。本当なら、病院では静かに行動しないといけない。今度
から守ります。そう言い訳をして、ノワリーの病室に戻った。意識
を取り戻したノワリーは上半身を起こしていた。看護師の女性が彼
の身体からコードを外している。質問をしながら、医師がカルテに
ペンを走らせていた。少しの間だが、会話を交わす事を許された。
会釈をした医師と看護師が出て行った。

ベッドに身を預けたノワリーと向き合った。感動の対面だとい
うのに、相応しい言葉が思いつかない。奇跡の生還を称える台詞が出
て来ない。何か言いたいのに。言語中枢が壊れてしまったのか。も
どかしいまま、許された時間が過ぎて行く。ノワリーが笑った。そ
して、言葉が紡がれた。

「心配をかけて、すまなかった」

その言葉を引き金に、ソエル達の胸の中に押し込められていた感情や思いが爆発した。アッシュを残した全員が、ノワリーに向かってダイブした。一瞬、ノワリーが不意を突かれた表情になった。彼は笑顔を浮かべると、挑むように両手を広げた。出来るだけ傷口に触れないように、英雄の胸に飛び込んだ。四人分の重みを受け止めたノワリーが抱き締める。笑って、泣いて、生きている喜びを分かち合った。

一人取り残されたアッシュはポケットに手を突っ込んで、傍観者になっていた。また不機嫌そうな顔。今度は演技している訳ではなさそうだ。お気に入りの玩具を取られた子供のように、口を尖らせている。四人を解放したノワリーが再び腕を広げる。アッシュは動かない。アレックスが彼の後ろに回って、そっと、華奢な背中を押した。覚悟を決めた顔でアッシュがベッドの脇に立った。紫と琥珀色の視線が宙で交差する。

「……もう、大丈夫なのか？」

「ああ。心配をかけたな」

「よかった。オレ達は……オレは……アンタの居るヴァルキリーで空を飛びたいんだ。隊長と一緒に空を駆けたいんだよ」

「ありがとう」

短い言葉だったが、ヴァルキリーを愛し、空を愛するアッシュの全ての思いが詰まっていた。アッシュがノワリーの腕の中に入った。かつてヴァルキリーを支えたエースパイロットが、今ヴァルキリーを支えるエースパイロットの背中を優しく叩いた。ファック。呟いたアッシュが離脱。白い頬が赤く染まっていた。見るな馬鹿。鼻を殴りながら、アッシュが顔を逸らす。泣いているんだ。

「さあ、基地に帰りましょう。隊長はまだ怪我人です。無理をさせないわ」

太陽のように輝く笑顔を浮かべたメアリーが言った。彼女の言うとおりだ。ノワリーは昏睡状態から回復したばかりなのだ。無理を

させてはいけない。ノワリーはどこにも行かない。ユグドラシル基地で待つていれば会えるのだから。

「隊長。ユグドラシル基地で待つています」

チームヴァルキリーのメンバーは背筋を伸ばして敬礼した。二度と出来ない最高の動きで。琥珀色の目が揺れる。一筋だけ、涙が頬を伝って落ちた。

「……ああ。必ず、帰還する」

表情を引き締めたノワリーが敬礼を返した。

その顔は凜々しく、

高潔で、

まさに英雄「光の槍」そのものだった。

やっぱり、「光の槍」は折れていなかった。

誇りという稲妻を失っていなかった。

どんなに深い暗闇の中でも、

彼が居る限り、私達は迷わない。

光の槍が、道を切り拓いてくれるから。

数週間の入院が必要だと医師は言っていたが、それよりも早く退院出来そうだった。人間離れた回復力で退院する許可を得る事が出来ると確信していた。普通の人間ではあり得ない回復力だと言われた。医師は患者がキメラだという事を知らない。曖昧に笑って誤魔化した。

「……うん。もう大丈夫でしょう。傷口も塞がっていますし、体力も回復したみたいですね。退院の許可を与えましょう」

聴診器を首から外した医師が頷いた。傷の上に新しい絆創膏とガーゼが貼られる。銃で撃たれた傷は綺麗に塞がっていたが、跡が残るだろうと言われた。全身傷だらけだから気にしていない。彼等を忘れない為の傷だ。

彼から手術を担当した執刀医の話聞いた。銃弾は心臓から僅か

に逸れていたらしい。あと数センチずれていたら、確実に死んでいたようだ。左胸のポケットに指輪を入れていた事を思い出した。彼女がシルヴィが助けてくれたのか。君を助ける事が出来なかったのに。心が軋んだ。医師に指輪の事を訊いた。保管しているから退院する時に返してくれると言ってくれた。

「すみません」去り際の医師に声をかけた。何でしょうと医師が振り向く。

「あの時は…ありがとうございました。俺の事を御存知ですよね？」

「ええ、勿論です。驚いたな。僕の事を覚えていてくれたなんて。

お元気そうで何よりです。お元気そうでって言うのも変ですよね」

「貴方に二度も助けられました。本当にありがとうございました」

「お礼なんていりませんよ。生きようとする人達を助けるのが僕達の使命ですから。では、退院する時に会いましょう」

気さくな笑顔を浮かべた彼は頭を下げると出て行った。やっぱり彼だ。新しい手足を与えてくれた医師だった。忌まわしい手足だとずっと思い続けていた。けど、この手足が無ければ空を飛ぶ事が出来なかったのかもしれない。

退院する日が来た。ソエル達の所に戻れる時だ。少ない荷物を纏めていると、ドアがノックされた。チームの誰かだろう。どうぞと返事をした。意外な来訪者がやって来た。部屋に入って来た彼はぎこちなく口を開いた。

「……元気か？」

「將軍……」

クラッドの目は室内をぐるりと見渡すところちを向いた。接し方が解らず、困っているようだ。それは自分も同じだった。今まで親子らしい会話をした事が無かったから。

「はい。これからユグドラシル基地に戻ります。心配をおかけしました」

実の息子じゃないんだ。心配なんかしていないだろう？そう思いつつ答えた。クラッドが真っ直ぐに見つめる。数十センチの所まで

距離が縮まった。互いの間に緊張が走った。

「……私を恨んでいるか？お前から大切な者を奪い、翼をもぎ取った私を。キメラとしてお前を生み出してしまった私を……」

すぐに返答する事は出来なかった。許したい。許せるものか。二つの相反する感情が、正義の女神が掲げる天秤の上で激しく揺れている。この世と天国の隙間で出会った「ノワリー」に言った言葉を思い出した。負の感情が波のように引いて行った。

「…恨んでいました。でも、私は…俺は、翼を取り戻しました。大切な人達を見つけました。キメラでも生きていけると気付きました。あの時も言いました。貴方の息子では無いと言われても、俺は……」
遅しい腕が身体に回された。クラッドに抱き締められていた。肩が震えている。泣いているんだ。嗚咽に混じってすまないという言葉の切れ端が聞こえた。後悔と懺悔の涙が肩を濡らした。震える背中をそつと叩いた。ますます震えが酷くなってしまった。

「ノワリー」

「はい」

「今度、母さんと三人で旅行に行こう。色々話そう。共有しよう。私に父親らしい事をさせてくれ。お前はキメラでは無い。私の大切な息子だ。……愛している。ノワリー」

ずつと聞きたかった言葉。

ずつと待ち望んでいた言葉。

こんなに美しい響きだったなんて。

魂が震えた。

この素晴らしい響きを返さないといけない。

「俺も……愛してるよ。父さん……」

四角い窓の外を見上げた。

広くても、狭くても、やっぱり空は綺麗だ。

いつだって、自由だ。

雲がまばらに浮かぶ空。平和が訪れた事を祝福しているかのよう
に晴れ渡っている。暇なので第一格納庫まで足を伸ばした。アッシ
ユとアレックスの姿を認識。深刻そうな表情で会話している。真剣
な表情をしているのはアッシユだけだが。どんな話をしているんだ
ろう。気にはなつたが盗み聞きするつもりは無い。

「何で言わないんだよ。じれったいなあ」

「うるせえ。言える訳ねえだろうが」

「したんだろ？」

「は？」

「だから、キス、したんだろ？」

「ファック！ちげーよ！アレは、その、人工呼吸だ！」

「アッシユ君。可愛い」

次の瞬間、跳躍したアッシユの見事な飛び蹴りがアレックスの背
中に直撃した。盛大な音を立ててアレックスが地面に倒れた。仲が
良いのか悪いのか。喧嘩するほど仲が良いと言うが、本当だろうか。
二人の所まで歩いた。

「おはようございます」

「よお」

「お…おはよう…」

背中をさすりながらアレックスが起き上がった。無事に起き上が
れた所を見ると、脊椎に損傷は無いようだ。二人共暇そうにしてい
た。世界樹を巡る戦いから数ヶ月が経っていた。アンテリオキアは
連合の手で解体される事になるらしい。

世界樹ユグドラシルはワールドエンドと共に霧の中に消えた。二
度と姿を見せないのかもしれない。その方が良い。ヒトが触れては
いけない物なんだと思う。豪快な欠伸をしながらリゲルが格納庫か
ら出て来た。いつもと同じ真っ黒のツナギを着ている。彼に続いて
メアリイも出て来た。

「おはようございます。リゲルさん、メアリイさん」

「ウゝッス。退屈すぎて死にそうだ」

「おはよう、ソエル。さつきから同じ事ばかり。機体の整備があるじゃない」

「クソみたいにやったぜ。新品みたいにピカピカッスよ。何かさ、隊長が居ないと気が引き締まらないんだよなあ」

「隊長、いつ帰って来るんでしょうね」

（またそれかよ）

アツシユが心の中でツッコんだ。ニヤニヤと笑うアレックスとリゲルにアツシユのローキックが制裁を与えた。

「二週間って言ってたよ。家族旅行か。いいなあ」

「お前も行って来い。二度と帰って来んな」

「うっわ！ひつで〜！」

ユグドラシル基地にノワリーは居ない。二週間の休暇を取って、家族旅行に行っている。きつと、今頃家族と思いつり語り合っているのだろう。嬉しそうに笑うノワリーの顔が目につかぶ。本部からノワリーの代わりを務める指揮官が来ているのだが、リゲルの言うとおり、厳しい彼が居ないと何となく調子が出なかった。

「今から暇じゃ無くなるわよ」

艶やかな声が響いた。紺色のスーツを着こなしたオペラが歩いて来た。グラマラスなボディのラインがクツキリと浮かんでいる。彼女がノワリーの代役を務めているのだ。リゲルが顔を顰めた。

「出た。妖怪厚化粧年増女」

「……何ですって？」完璧なメイクに亀裂が走った。

「何でも無いッスよ！いつも綺麗だなあって。んじゃ、整備の続きがあるんで」

上手く誤魔化したリゲルは格納庫に逃げ込んだ。まったくオペラが呆れて溜息をついた。気を取り直した彼女は振り向いた。

「ソエル。ノエルのヴァルキリーへの異動が正式に許可されたわ」

「え？本当ですか？いつ会えますか？」

「今週中には会えるわ。これから忙しくなるわよ。国籍不明の戦闘機がクルタナの領空を徘徊していると情報が入ったわ。ソエルとア

ツシユにアレックス。これからすぐ飛び立って頂戴。なるべく穏便に済ませて。但し、場合によっては撃墜してもいいわ。整備士の坊や！機体の整備は終わったの？」

オペラが格納庫の暗がり呼びかける。ひよこつとりゲルが顔を出した。白い歯を見せて笑うとリゲルは親指を立てた。

「完璧つスよ！女王様」

またメイクに亀裂が広がった。オペラは堪えている。ピンヒールがターンした。指揮官の顔に戻ったオペラはとても凜々しかった。ノワリー並の生真面目な表情だ。

「さあ！ヴァルキリーの腕を見せて頂戴！」

「了解！」

アルヴィト、グングニル、メイデンリーフが滑走路に引き出された。キャノピーが空を映し、太陽の光を反射する。純白とミッドナイトブルー、緑色の機体がパイロットを待っている。

メアリイが微笑む。

リゲルが親指を立てる。

ノワリーが見守ってくれている。

アレックスが肩を叩く。

隣にアッシュが立った。

アメジストのような瞳と目が合う。

呼吸をするように、自然と笑顔が浮かんだ。

彼等の思いが背中を押してくれる。

だから、飛べるんだ。

空が笑っている。

私達を待っている。

空を飛ぶのに、理由なんていらぬ。

「行こうぜ！」

「はい！」

彼等の飛ぶ姿は戦乙女ヴァルキリーのようだ。
冷たくも、
美しく、
清らかに、
穢れの無い青空を踊るように飛んで行く。
掲げた剣で、
大空に軌跡を残しながら。

どうして空はこんなに自由なんだろう。キャノピーの外を流れて行く雲を見ながら思った。飛んでいる時だけ、地上のしがらみから逃れる事が出来る。

機器の横にある時計を横目で窺う。もうすぐ二時間。基地に戻る時間だ。重苦しい地上が両手を広げて待っている。そう思うといつも憂鬱な気分になる。いつそのまま燃料とマナが尽きるまで飛び続け、太陽に焦がれたイカロスのように墜ちてしまおうか。

『ブリーユナク。基地に帰還する。機首を南東に向ける』

隊長の声だ。いつも完璧なくらい冷静だ。

『どうした？エリオット、応答せよ』

答えないでいようか。そうすれば、煩わしい事から解放される。

でも…。

「…了解」

臆病者とは思われたくない。

そういうくだらない見栄が、自分を地上に結び付けている。

隊長の機体が滑走路に着陸。続いてブリーユナクも無事に着陸した。コクピットから降り、待っていた整備士達にメンテナンスを頼んだ。ヘルメットを脱いだパイロットは若かった。青年というよりは、少年という呼び方が相応しいだろう。深緑の髪に、切れ長の琥珀色の瞳。他人を拒絶している雰囲気印象的だ。

運ばれていった機体を追いかけて格納庫に入った。薄暗い格納庫を整備士達が動き回っている。彼等はいつも働き蟻のようだ。職務に忠実で、妥協する事を許さない。自分の仕事に誇りを持っている。

「異常はありましたか？」

ブリューナクを見上げている整備士に話しかけた。整備士は振り向き、皺の刻まれた顔に笑みを浮かべた。老齡だが身体つきは逞しく、赤銅色に焼けた肌が若々しい。

「お帰り、ノワリー。無事だったようじゃな」

「ええ、まあ。基地に帰るのを止めようかと思いましたが。燃料が切れるまで飛んで、墜ちたかったです」

「馬鹿な事を言うな。ワシをシヨック死させる気か？」

彼はゴツゴツとした手で頭をぐしゃつと撫でた。骨張ったマメだらけの掌が温かい。彼の生きた歴史が刻まれているんだと思う。

「シヨック死だなんて。ヴァルカンさんはあと百年は生きれますよ」「何を言つとるか！あと百五十年は生きるつもりじゃよ」

ヴァルカンはユグドラシル基地に所属する整備士の一人だ。彼等の中でも最年長で、四十年以上のキャリアを持つ大ベテランだ。典型的な職人気質で頑固だが、皆から慕われている。勿論、自分もその一人で、ヴァルカンを親のように慕っていた。若者が多いパイロットにとって、彼は親のような存在なのだ。

「メンテ、お願いします」

「了解。任せなされ」

ヴァルカンと別れて格納庫を後にした。滑走路を横切り、オフィスビルの隣にある宿舎に入る。談話室を通らないと部屋に戻れないのが嫌だった。いつも誰も居ない時を見計らって行くのだが、最悪な事に今日は数人のパイロットが居た。おまけに俺を嫌っている連中だった。素知らぬ顔で通り過ぎようとしたが、パイロットの一人が目ざとく気付いた。

「おい、お坊っちゃまのご帰還だぜ。今日は何機撃墜したんですか？」

挑発に近い声色だ。それに息が酒臭い。机の上にはビールの缶が転がっていた。このまま無視するのも癪に障る。敢えて挑発に乗ってやる事にした。

「今日は七機墜としました。俺の事より、貴方はどうなんですか？」
男の顔が僅かに引き攣った。

「…流石は名門エリオット家の方でいらっしやる。俺達平民とは違う血が流れてるからですかねえ…。お父上は空軍の幹部。お母上は貴族の娘。あー羨ましい」

大げさな身振りで男は皮肉たつぷりに言った。周りに居るパイロット達も口元を歪めて嫉妬に塗れた笑みを浮かべる。見るだけで反吐が出そうな、汚い笑みだった。

「そんなに金持ちになりたいなら、俺の父に言って養子にしてみたらどうですか？それが嫌なら生まれ変わるんですね。俺が撃墜してあげますよ」

男の顔が完全に引き攣った。温度計の温度が上がるように、みるみる顔が真っ赤に染まっていく。顔面に衝撃が走る。殴られたのだ。そのまま床に倒れた。一瞥すると男達は談話室から出て行った。錆びた鉄の味が口の中に広がる。顔を顰めた。それが苦味の所為なのか、悔しさの所為なのか、解らなかった。

基地に配属された時から一部のパイロット達に煙たがられていた。僅か十四歳で養成学校を首席で卒業し、ユグドラシル基地に配属されてすぐに天才的な技術を発揮した。瞬く間にチームのエースパイロットの座に上りつめたのだ。名門エリオット家の嫡男で、父も昔はエースパイロットだった。今は引退しクルタナ空軍の幹部として働いている。あまりにも恵まれ過ぎた環境が彼等の反感を買っているのだろう。

もやもやした思いを抱いたまま、階段を上がって部屋のドアを開けた。見慣れない青年がデスクに座っていた。背を向けているのでまだ気付いていないようだ。自分の領域を侵された様な気がして何となく腹が立った。

「…あの、そこ、俺の机なんですけど」

さっきの出来事もあってか自然と語気が強くなった。椅子を回転させて青年が振り向いた。ぼさぼさの茶褐色の髪に、無精髭の生え

た精悍な顔立ち。年は一回りは上だろう。少なくとも、同年代には見えない。これで同年代というなら立派な詐欺だ。

「ん？ああ、悪い。坊やの席だったか。もしかして、坊やがノワリー・エリオットか？」

「そうですけど。貴方は？」

「俺はジェラルド・イージス。今日から坊やと同室になった。へえ……こんな坊やだったのか」

坊や坊やと連呼するイージスに怒りを覚えたが、これから共に寝起きする事を考えると、喧嘩するのは馬鹿な事だ。

「名門エリオット家の奴がいるって聞いていたんだが、まだ子供じゃないか」

この男もか。溜息をついた。誰もが俺をエリオット家という色眼鏡で見るのだ。

さあ、次は何を言うつもりだ？

皮肉か？それとも嫉妬か？

彼の口から出て来た言葉は、意外なものだった。

「よろしくな、ノワリー」

イージスが右手を差し出した。肩すかしを食らったような、そんな感じを味わった。あまりにも間抜けな顔をしていたのだろう、イージスが訝しげに見つめていた。表情を引き締め、慌てて握手をする。イージスが闊達な笑みを浮かべた。

「こちらこそ……よろしくお願いします」

自分を色眼鏡で見なかった人物はヴァルカンを除き、彼が初めてだった。

この青年となら、巧くやっていけるかもしれない。

そんな微かな期待が芽生えていた。

「イージスさん！起きて下さい！」

巧くやっていける。昨日思った事を即座に訂正したい。二段ベッ

ドの上に寝ているイージスは、何度呼びかけても起きなかつた。豪快な鼾をかき、訳の解らない言葉を呟いている。音量をマックスにした目覚まし時計を耳元で鳴らしても、彼は全く起きなかつた。最強の盾イージスの名の通り、鉄壁の神経だ。

「うくん…愛してるぜ、シエラあ…」

「うわっ！」

イージスの頑丈な腕が身体に巻き付いてきた。そのまま引き寄せられ、分厚い胸板に顔を押し付けられた。大きな手が背中と腰を撫でる。あまりにも不快な感触に鳥肌が立った。身体を撫でる手がシヤツの中に潜り込んできた。「ひっ」と小さく叫ぶ。このままではまずい。色んな意味で危ない。枕元にあったペットボトルの蓋を開け、中身をイージスの顔に思い切りぶちまけた。

「洪水だ！逃げろっ！」

イージスが飛び起きた。茶褐色の髪から水を滴らせて何度か瞬きをする。鳶色の目が気付いた。

「あれ？坊や？」

「…おはようございます。早く準備して下さい、九時に滑走路に集合ですよ。俺は先に行ってます」

呆然とするイージスを残し、梯子を降りる。部屋を出て廊下を歩く。イージスが飛び出して来た。慌てて着替えたのか、シヤツのボタンを掛け違えている。指摘するとイージスは照れた笑みを浮かべた。年上のくせに、手のかかる子供みたいだ。でも、そんな所が少し羨ましい。なかなか起きなかつた事を伝えたと、イージスは素直に謝った。

「シエラって誰なんです？」

「俺の奥さん。凄い美人だぞ。…って、何で坊やがシエラを知ってるんだ？」

「寝言で言っていました」

「あとな、娘のゲルダもいるんだ。後で写真見せてやるよ」

「楽しみにしています」

「なあ、何か怒ってるのか？」

「怒ってません」

滑走路には既にチームのメンバーが揃っていた。昨日談話室に居たパイロット達の姿もあった。出来れば会いたくなかったが、同じチームだから仕方ない。チームの紅一点である女性も居た。

「全員揃ったな？ 国境から四キロ地点にある、アンティオキアの軍事施設を偵察せよという指令が入った。フォーメーションデルタ、時間は二時間だ。各自、常に無線で連絡を取り合うように！ 以上だ」

滑走路に引き出された機体に取り込む。異常無し。システムオールグリーン。燃料もマナも満タンだ。整備士のGOサインが挙がる。見事な陣形を形成し、チームは飛び立った。

フライトは順調。時折交信してくる仲間の声も元気だ。やっぱり空は良い。眼下に広大な施設が映った。恐らく、隊長が言っていた軍事施設だろう。円型のドームにキノコのように群生している煙突。灰色の煙が高く昇っている。産業廃棄物の煙だ。飛行機が墜ちていく時にあげる煙に似ている。

「空を、汚すなよ」

独り言のように呟く。でも、これは自己中心的な綺麗事なんだ。正しい事をしていると思っただけでも、実際はそれが間違っている事が多い。

『前方に敵機確認。各自散開せよ！』

『坊や！ お客様だぞ』

隊長の冷静な声とイージスの楽しんでいるような声がほぼ同時に聞こえた。レーダーを確認。四機の機体が映る。

退屈していた所だ。

さあ！ ワルツを踊ろうじゃないか。

エレベータ・ダウン。

機首を左に傾け、陣形から離れる。チームの機体も次々と離れていく。敵の二機がブリークナクに狙いを定めた。身の程知らずな奴等だ。

エンジンをフル・スロットル。
真つ直ぐ敵に向かって突っ込む。

中世の騎士が馬上で行う、槍と槍が交差する戦いみたいに。
敵が速度を落とした。

怖いのか？臆病者め。

ぶつかる寸前で右に大きくロール。

半ロールで後ろに回り込む。

無防備な背中が丸見えだ。

機銃のトリガに指をかけた時、無線が繋がった。

『坊や。悪いが、五秒後に左にグライドしてくれないか？』

イージスの声だ。もう少しでハイになれたのに。キャノピーの向こうに逃げる敵を認識。仕方がない。ショートケーキの苺は最後に食べるからこそ美味しい。

「了解」

『ありがとよ』

生体リズムに呼吸を合わせて。
時間を刻む。

五。スロットルを絞る。

四。フラップ・アップ。

三。操縦桿を左に傾ける。

二。ラダーも左へ踏み込む。

一。ブリューナクは左へゆるやかに滑空して行く。

大型の戦闘機がすぐ脇を上昇して行った。二十メートルを超す機体、スホイイSu-35だ。強力な二基のエンジンと稼働式排気ノズルを搭載したSu-27を発展させた戦闘機。ライトグレイのボディに翼を広げた梟のイラストがマーキングされている。女神アナが愛する知恵の鳥。イージスの機体ミネルヴァだ。

ミネルヴァは更に高く上昇して行った。刹那、オレンジ色の閃光が走った。綿菓子のような黒い雲が浮かび上がる。四機のうちの一機をイージスが撃墜したのだろう。戦いと知恵の女神が手を振って

いる。翼を振り返して一度逃がしてやった敵を捜した。

敵が正面から挑んで来た。

何だ。捜す必要はなかったな。

フルスロットル。

目と鼻の先まで迫る。

ぶつかるぞ。

玉碎する気か？

そんな散り方は嫌だな。

エルロン、ラダーを右に。

右翼を支点に機体を垂直にした。

翼がナイフのように空気を切り裂く。

奴は裏側を通り過ぎて行った。

敵も冷静だ。すぐさま旋回して体勢を整える。

エリアに入れる気はない。

背面のままスパイラル・ダイブに入った。

速度を増して、螺旋状に回転しながら墜ちて行く。

敵も付いて来ようと必死だ。

スロットルを絞って減速。

敵がブリューナクを追い越した。

また旋回に入ろうとしている。

遅い。

スロットル・アップ。

リーサルコーンに靴を脱いで踏み込んだ。土足のままじゃ失礼だ

ろう。最低限の礼儀だ。

ファイア。

左翼を貫いた。燃料タンクが燃え上がる。

爆発。

失速。

そして墜落。

黒いリボンがよく似合うよ。

機首を左右に振りもう一機を捜す。確認する事が出来なかった。魔法が解ける直前のシンデレラみたいに逃げ足が速い奴だ。

『ブリユーナク。無事か？』

『ブリユーナク、異常無し。一機撃墜。もう一機に逃げられました』

『ミネルヴァ、一機撃墜。元気だ』

『ブリユンヒルド、一機撃墜。問題ありません』

『了解。機首を北へ。フォーメーションデルタで基地に帰還する』

一瞬の油断が隙を生み、その隙が死に繋がる。

そんなストイックのような緊張感が好きだ。

チームは一機も欠ける事なく基地に帰還した。そのまま解散し、イージスと一緒に格納庫の前に居た。イージスは隣で煙草を吸っている。

「坊やは吸わないのか？」

風上に移動して頷いた。煙草の匂いは服に染み付くとなかなか取れない。煙草は本体よりも、煙の方が有毒だと聞いた。吸っている本人はそんな事どうでもいいのだろう。ハイになればそれでオーケー。

「これはこれはエリオット殿。今日も活躍したそうですね」

不快な声。アイツ等だ。滑走路を横切ってこっちに来る。取り巻きも一緒だ。薄ら笑いを浮かべたその顔はどんな生き物よりも醜かった。

「人を殺す気分はどうですか？最高ですよねえ」

「……」

「おい。やめろって」イージスの制止も聞かず、男は言葉が続ける。「天空を貫く光の槍？それがどうした。お前はただの人殺しだよ。血塗れの手で掴み取った栄光がそんなに嬉しいのか？ああ？」

「おい！坊やに謝れ！」

「よう、イージス。お前等そんな関係なのか？奥さんが泣くぜ」

「てめえ！」

イージスの手が男の襟元を掴んだ。凄まじい形相で睨みつける。

「…殺せよ」

「…坊や？」

何かが切れた。一步前に進んだ。また一步、男に近付く。底知れない暗さを湛えた声が口から発せられた。

「そんなに俺が憎いのなら殺せよ。お前等と同じ汚い空気を吸うより、死んだ方がマシだ」

長い前髪の間隙から覗く双眸が氷河のように凍りつく。琥珀の中に閉じ込められた感情が渦巻いている。あまりの凄惨さに男が後ずさりした。男が震える手でポケットからナイフを取り出した。

「言われなくても、そのつもりだよっ！」

「やめなさい！」

凜とした涼やかな声が辺りに木霊した。女性が格納庫の入り口に立っていた。足早に歩いて来ると、ほっそりとした手で男の腕を掴んだ。

「子供相手にみっともないわよ。隊長に言いつけても構わないのかしら？」

「…チツ。おい、行くぞ！」

男達の姿は宿舎の中に消えていった。彼等の後ろ姿を睨んでいた女性が振り返った。

「助かったぜ、シルヴィ」

「どういたしまして。貴方、怪我はない？」

「…余計な御世話だ」

「え？」

「どいつもこいつも低俗な奴ばかりでうんざりする！金、地位、名誉。アンタ達が気にするのはそんなくだらない事ばかりだ！こんなモノ、欲しかったらくれてやるよ！」

驚く二人をその場に残して立ち去った。宿舎に戻り、階段を駆け上がる。飛び込むように部屋に入るとベッドに寝転び、シーツの海

に身体を沈めた。干したばかりの、太陽の清々しい匂いがする。言
いようのない感情が次々と湧いて来る。二回ドアがノックされた。
返事をしないでいると、ドアの向こうから遠慮がちな声が聞こえた。
「坊や、俺だ。入っていいか？入るからな」

ドアノブが回り、開いた。イージスはベッドに近付くと椅子を引
き寄せて腰掛けた。顔を見られたくなかった。きつと、情けない顔
をしているから。枕に顔を埋めたまま黙っていた。

「泣いてるのか？」

泣いているとは思われたくない。ゆつくりと身体を起こした。俯
き加減で首を振る。

「なあ、ノワリー。泣きたい時は泣いてもいいんだぞ。俺が見るに
お前は感情を押し込めすぎてる。坊やぐらいの年頃の奴は、素直に
笑ったり泣いたりするもんだ。我慢しないでいいんだ。な？」

「…じゃない…」

「ん？」

「俺はっ…人殺しじゃないっ…」

「大きな声で叫べ」

「俺は人殺しじゃないっ！好きで墜としてる訳じゃないんだ！栄光
だって、欲しくて貰ったんじゃないよ！」

「ああ。そうだ」

「何で皆、俺を一人の人間として見てくれないんだ？エリオット家
の人間じゃない、ノワリーとして見て欲しいんだ！」

堪え切れなかった感情が溢れ出た。涙となり、頬を伝って引力に
引き寄せられていく。ズボンとシートに丸い染みが刻まれていく。
月のように丸く、満ち欠けのように形を変える塩辛い液体。イージ
スが椅子からベッドに移動して側に座った。抱き寄せて優しく背中
を撫でてくれた。父親のような、兄のような大きな手だった。

「泣け泣け。泣きたい時は思いつきり泣け」

思い切り泣いた。泣き叫んだ。

人前で涙を見せるのは恥だと、幼い頃から叩き込まれた。今思え

ばそれは、世間体に縛られたモノだったのだろう。

「ここは家ではない。

空のように自由だ。

「落ち着いたか？」

「…はい。見苦しい所を見せて、すみませんでした」

「泣きたい時はいつでも俺の胸を貸すぜ」

「しばらくは必要ないですよ」

「ははっ。そうか。外の空気を吸ってきたらどうだ？」

「そうします」

イージスに礼を言った。彼は気にするなと片手を挙げて微笑んだ。慈愛に満ち溢れた、最高の笑顔だった。貰った物は返さないといけない。笑みを返した。満足げに頷くとイージスは二段ベッドの上になり、横になった。すぐに規則正しい寝息が聞こえてくる。起こさないように静かに部屋を出た。

家に縛られるのが嫌で、家出同然に飛び出した。

彼等以上に、金と地位と名誉に縛られていたのは自分だった。

色眼鏡で見ていたのも…。

基地から離れた所には土手があり、二つを結ぶ道の途中には木が並んでいる。そこはとても日当たりがいい。お気に入り場所だ。滑走路を一望する事が出来るし、何よりも寝転んだ時に真っ青な空を仰ぐ事が出来る。寝転べばどこだって空を見る事が出来るかもしれない。でも、ここから見る空は格別だった。

「隣、いいかしら」

鈴の音のような声が頭上から降ってきた。見上げると、あの時の女性が立っていた。頷いて身体の位置をずらした。優雅な動作で女性が隣に座った。

間近で見ると綺麗な女性だと解った。風の精霊シルフィードのような金色の髪は緩く波を描き、長くもなく、短くもない、丁度いい

長さだ。彼女の瞳は、淡い翡翠色をしていた。山奥にひっそりと佇んでいる湖のように澄んだ色をしている。

「エリオット君、よね？さっきは大丈夫だった？」

「はい。迷惑をかけました」

「迷惑じゃないわ。悪いのはアイツ等よ」

「俺にも非があります。見下していたんです。光の槍と呼ばれていい気になってた」

「ねえ。どうして光の槍って呼ばれてるのかしら？」

「えっと…二年前でした。単独で偵察飛行をしていたんですけど、帰りに敵のチームと鉢合わせになったんです。相手が攻撃してきたので応戦しました。結果は敵は全滅。それだけです」

知らない人が居るんだなと思いつつ、説明した。手で機体の位置を再現しながら詳しく話す。

「チームって…何機だったの？」

「確か…十五機でした」

「十五機も一人で墜としたの？」

「ええ。それで気が付いたら、天空を貫く光の槍、なんて大げさな異名が付いたという訳です。俺は俺の飛び方をした。それだけなんですけどね」

「謙遜しないでいいのよ。ほら、こんな風に胸を張ってみるとか」

女性が大きく胸を張った。その仕草があまりにも可笑しくて、思わず声を出して笑っていた。

「笑った顔、凄く可愛いわ」

優しく微笑んだ彼女と目が合った。翡翠色の目が澄み切っていてとても綺麗だった。頬が熱くなり、心臓の音が速くなる。服に付いた草を払い、女性が立ち上がった。

「じゃあ、また会いましょう。ごきげんよう」

「あの！」女性が振り向いた。少し、驚いた顔だ。「貴女の…名前は何？」

「ローレンツ。シルヴィ・ローレンツ。君と同じチームよ。覚えて

ない？」

残念そうに微笑むと、シルヴィは歩いて行った。誰にも真似できない、綺麗な歩き方だった。モデルのような媚びた歩き方ではなく、自然に培われた嫌味のない歩き方だ。

「…シルヴィ・ローレンツ」

無意識の内に、彼女の名前を呟いていた。

イージスと二人で食堂で朝食を摂っていた。朝食といっても、既に九時を回っていた。流石に食堂は閑散としており、二人を含め六人しか居なかった。食器を動かす音が静かに響いている。噂によると、あのパイロット達は別の基地に異動になったらしい。イージスカシルヴィが隊長に報告したのだろう。詳細を訊く気はなかったし、聞きたくもなかった。知らない振りをするのが一番無難な選択だ。

「なあ、俺の娘、可愛いだろ？」

「…ええ」

「名前はゲルダ。今年で三歳になる」

「……若いですね」

「今はシエラと暮らしてるんだがな、もう笑った顔が最高に可愛いんだよ」

向かいの席に座るイージスは無骨な顔を緩ませ、写真を眺めている。ぼんやりとした思考のまま、適当に相槌を打った。

（笑顔が可愛い…か）

冷めきったベーコンエッグをフォークでつつく。半熟だった黄身は既に固まり、言う事を聞いてくれない。仕方なくコーヒーを一口飲んだ。ミルクを入れ忘れたコーヒーは苦味という機銃を撃つてきた。味覚に被弾。あまりの苦さに咳きこむ。イージスが呆れた顔を見た。

「どうしたんだ？坊や。さっきから変だぞ」

「……風邪をひいたみたいなんです。頭がぼんやりして、動悸と息

苦しさもありません。食欲はあるんですけど……」

ふうと重苦しい溜息を吐いた。口に詰め込んだパンを飲み込むと、イージスはニヤリと笑った。

「そりゃアレだな」

「アレ？」

「恋だよ。坊や、お前は恋してるんだ。相手は誰だ？俺の知ってる子か？」

「…ローレンツさん」

「シルヴィか？そうか…彼女か…」

イージスは無精髭を撫でた。考え込む時の彼の癖だ。助けて欲しい。救いを求める目で彼を見つめた。

「俺、どうしたらいいんですか？」

「何で俺に訊くんだよ…」

「だって、結婚してる」

「よし！俺がシルヴィを呼び出すから、すぐに告白しろ！んで、結婚して子供が産まれたら、真っ先に俺に報告するように！」

飛躍しすぎだと言いたかったが、イージスの厚意に甘える事にした。頼りになる友人が居て良かったと改めて思った。もつとも、友人と思っっているのは自分だけかもしれないが。朝食を終えてトレイを返す。イージスはシルヴィを捜しに外へ。何をすればいいか解らなかつたから、とりあえず部屋に戻った。

今日は非番だったので、何もする事が無かつた。ベッドに寝転び、家から持ってきた本を読んでいると、イージスがいきなり入ってきた。いくらルームメイトとはいえ、ノックぐらいしたらどうなんだ。喉まで出かかった言葉を飲み込んで起き上がった。

「話をつけてきた。シルヴィは格納庫の前で待ってるぜ。ほら、早く行く！」

背中を押され、半ば追い出されるように部屋を出た。入口の煉瓦のステップを降り、滑走路を横切る。格納庫の前に、ほっそりとした人影が立っていた。遠目からでも、それがシルヴィだと解った。

色素の薄い金色の髪が風に揺れている。自然と早足になっていた。

「ローレンツさん」

「あら。おはよう。機体を見に来たの？」

シルヴィは飛行服を着ていた。これから飛び立つのか、帰還した直後なのか、それとも着替えが無かったから着ているのか。少なくとも、三番目ではないだろう。どこか可笑しい三択問題だ。

「ねえ、イージスは？私、彼に呼び出されたんだけど……」

「いえ、貴女に話があるのは俺なんです」シルヴィの顔が少しだけ、ほんの少しだけ綻んだ。

「そうなんだ。じゃあ、話って何？」

「えっと……」

生まれてこの方、異性を好きになった事は一度も無かった。当然、告白の経験も無い。齒が浮くような気持ち悪い台詞なんて言いたくない。かといって「好きです」という一言で終わらせたくもない。それではあまりにも味気が無い。敵の機銃の弾道を読む方がまだ優しい。恋愛というメカニズムを解体して整備するより、飛行機を整備する方がよっぽど簡単だ。

「…私も君に話があるんだけど…先にいいかしら」

「は…はい」安堵した。気持ちを整理する時間が稼げる。シルヴィも黙り込んだ。話す決心がつかないのだろう。重大な話に違いない。彼女が話しだすまで待った。シルヴィが顔を上げた。

「…私…エリオット君の事…好きになつたみたいなの……」

「え？」

シルヴィの言葉に耳を疑った。シルヴィが自分に好意を持っているなんて、こんな都合のいい事がある筈がない。眉を顰め、訝しげに彼女を見つめた。

「すみません…今、何て言ったんですか？」

「え…？だから…好きなの……」

「もう一度」

「もう！何回言わせるのよ！恥ずかしいじゃない！」

シルヴィは顔を真っ赤にして睨んできた。興奮した表情はすっと消え、代わりに不安げな表情に取って代わった。沈黙に不安を覚えたらしい。

「…駄目…よね。ふふっ…そうよね、二つ年上なんだもの。若い子の方がいいよね」

「そんな事ありません！俺も…俺も、ローレンツさんの事…好きなんです…」

「本当…？」

シルヴィの声は震えていた。嘘をついていない事を示す。頷いた。シルヴィが微笑む。輝くような笑顔だった。

「どうして俺を？」

「君は私の事を知らないって言うてたけど、私は君の事を前から知ってた。感情を表さない子で、年の割に大人びている、背伸びし過ぎてるなあ、って思ってた見ていたの。名門出身を鼻にかけてる、そんな感じがしたわ」

その通りだった。否定する気はなかった。壁を作り、周りから遠ざかっていたのは自分だ。

「でもね、あの君の笑顔がとても素敵だった。本当の君を見たの。それからよ。好きだって気付いたのは」

「俺もです。貴女のあの笑顔が忘れられなくて…気付いたら、好きになってました」

あの時、二人は同じ時間を共有した。

同じように笑い、

同じように互いを好きになった。

偶然か？

それとも、運命か？

どちらでもいい。

見えない神様の悪戯に、密かに感謝した。

「ねえ…キスして」

「へ？」

思いもよらない言葉に間抜けな声が出ていた。シルヴィは両目を閉じ、背伸びして待っている。周りを見回し、誰も居ない事を確認した。身を屈めてシルヴィの唇にそっと口づけした。その感触はとても柔らかかった。空に浮かんだ雲に触れるとするならば、きっとこんな感触なんだ。でも、彼女の唇の柔らかさには勝てないだろうな。シルヴィが両腕を背中に回し、身を委ねた。彼女は華奢で、硝子のように繊細だった。抱き締めたら壊れてしまいそうな気がした。恐る恐る、シルヴィをそっと抱き締めた。大丈夫。壊れはしない。

「今度、私の家族に会ってもらっていい？」

「勿論です」

「それと、私に対する敬語とさんづけは禁止ね」

「解りました」シルヴィに睨まれて苦笑した。

「そうするよ。えっと……シルヴィ」

「よろしい」

優しく目を細め、シルヴィが微笑んだ。あの時と同じ、とても綺麗な笑顔だった。

キヤノピィから眺める太陽のような笑顔。

地上にも、こんなに素晴らしい景色があるんだ。

車という乗り物は不思議だと思う。飛行機と同じでマナを消費して動くというのに、その乗り心地は全然違うのだ。揺れが少ない飛行機に対し、車は容赦なく身体を揺らしてくる。少しくらい静かに走って欲しい。テンポの激しいロック音楽のように気が利かない奴だ。

三人は休暇を貰ってイージスが運転する車に乗り、それぞれの家に向かっていった。生きて帰る事が条件で、申請は簡単に許可された。最近は何事もなく安定している。チームを支える三人が何日か留守にしても、大丈夫なようだ。

車から見る景色はとても退屈だった。空があんなに離れて見える。下は黒いコンクリート。白いラインが果てしなく続いている。四角い形の車に乗っていると、棺桶に閉じこめられたみたいだ。いつ埋葬されるのか。もしかしたら、自分は既に死んでいて、車は墓地に向かっているのかもしれない。

死ぬなら空の上で散りたい。

抜け殻は、雲が拾ってくれる。

優しく、受け止めてくれるだろう。

「ここでいいわ」

イージスがブレーキを踏んだ。ゆっくりと速度を落として車は止まった。ドアのロックを解除。先に車を降りたシルヴィの後に続いた。

「じゃあ、明日の二時に迎えに来るからな」

「ありがとうございます。家族とゆっくりしてきて下さい」

「シエラさんとゲルダちゃんによろしくね」

イージスは敬礼した。二人を降ろした車は走り去って行った。

「さて。じゃあ行きましょうか」

シルヴィはいつもより機嫌がいい。ほんのりと薄化粧をした彼女はいつにも増して綺麗だ。同じようなメイクをして、同じような服を着ている女性達より何倍も綺麗だ。ファッション誌に載っている女性達を見ると、全員がクローンに見えてくる。髪型も服も笑顔も似たり寄ったりで、不気味だ。

今日はシルヴィの家族に会いに行くのだ。彼女は四人家族で、六つ下の妹がいるらしい。街の広場を抜け、何回か角を曲がると住宅街に着いた。両脇に点々と白い家が並んでいる。白い家に緑の芝生というコントラストが美しい。シルヴィは迷う事なく一軒の家の前で足を止めた。

「ここが私の家」

自分の家に比べればとても小さな家だ。だが、教会のように慎ましく、清らかだった。家の左手にある庭が綺麗だった。白い家に映えるように、赤、黄、オレンジ等の鮮やかな花が咲いている。庭の隅で小さな影が動いた。少女がシャベルで土を掘っている。シルヴィが柵越しに声をかけた。

「メアリイ。ただいま！」少女が顔を上げた。鼻の頭に泥が付いている。

「お姉ちゃん？お帰りなさい！」

メアリイがシャベルを置き、こちら側に回って来た。門を開け、シルヴィに飛びついた。シルヴィと同じ目の色で、髪は彼女より濃い金色だ。緩く波打っているのも同じ。双子に見える。

「こら！お客様が来てるんだから。もう少しおしとやかになさい」
「お客様？」

メアリイが気付いた。こんにちはと軽く挨拶する。少女の白い頬が真っ赤に染まった。か細い声で返事をする、メアリイは玄関のドアを開け、家の中に駆け込んで行った。

「俺、何か悪い事でもしました？」

「ごめんなさい。あの子、恥ずかしがり屋だから。さ、中に入って」

シルヴィと家の中に入った。右に靴箱。靴箱の上にはウエディングドレスのように真っ白な百合の花が花瓶と仲良くしていた。廊下は真っ直ぐ。左右にドアが並んでいる。その内の一つが開き、女性が出て来た。彼女もシルヴィと同じ髪の色をしていて、雰囲気似ている。母親だろう。

「お帰りなさい、シルヴィ」

「ただいま！父さんは？」

「公園を散歩しているわ。もうすぐ戻らって電話があったから、三十分程で戻るでしょう。あら…お客様？」

「は…初めまして。ノワリー・エリオットです。ローレンツさんとは…その…」

無意識にネクタイを直す。学芸会で主役を演じる子供みたいに緊張してしまう。隣でシルヴィがくすくすと笑った。笑わないで欲しい。こっちは真剣なんだ。

「エリオット君と私は付き合ってるの。今日は皆に紹介しに来たのよ」

「まあ…そうなの。初めまして。シルヴィの母のリリイです」

リビングに案内され、花柄のソファに座った。リリイが紅茶とクッキーをトレイに乗せて運んで来た。角砂糖を入れて一口飲む。高級な茶葉ではないけど、シンプルな味が新鮮で美味しい。落ち着いてきた頃、玄関のドアが開く音がした。

「主人が帰って来たみたい」

リリイが小走りに玄関に向かって行った。折角緊張の糸が緩んだのに、再び張り詰めてしまった。男性がリビングに入って来た。茶色のハンティングジャケットに、同色の毛織のベスト。黒のズボンという格好で、洗練された紳士みたいだ。短い髪は亜麻色だった。この家族は皆、髪の色が明るい。太陽に愛されているのかもしれない。「お帰り、シルヴィ。元気でやっていたか？」蜂蜜のように甘いバリトンの声。

「ただいま、父さん。今日は…えっと…彼氏を連れて来たの」

シルヴィの父の目が丸くなった。目を細め、彼はこっちを向いた。娘に相應しい男かどうか、確かめている視線だ。慌てて立ち上がり、挨拶した。

「ノワリー・エリオットです！シルヴィさんと、お付き合いです。ます」

出来るだけ誠意に答えた。沈黙が流れる。しばらく経つと、父は帽子を脱ぎ、優雅に一礼した。

「初めまして。シルヴィの父、デイヴィットです。お転婆な娘ですが、よろしく頼みます」

「父さん！」

笑い声が重なり、リビングに木霊した。プロのオーケストラが奏でる音色よりも素晴らしい音だ。シルヴィが隣に座り、二人の正面に彼女の両親が座った。

「ノワリー君はいくつ？」

「十七です」

「もしかして、君はあのエリオット家の者かい？」

「はい。あの…俺は、身分とか、そういうのは…」

「解っている。君はそんな事に囚われない人だと思っているよ」

デイヴィットの言葉にノワリーは安心した。エリオットという鎖はいつも影のように付き纏い、縛り付けてくる。メアリーがこの場に居ない事に気付いた。

「すみません。妹さんに挨拶してきてもいいですか？」

「勿論。庭に居るはずよ。あの子のお気に入りの場所だから」

失礼しますと言い、玄関から外に出た。頭上は真つ青。太陽の光が少し眩しい。家と庭を結ぶ木製の門を開ける。水の音と、鼻歌が聞こえてきた。白い帽子をかぶったメアリーが花に水をやっていました。

「メアリー」

メアリーの華奢な肩が跳ね、振り向いた。桃色のスカートの裾が花弁のように翻る。そんなに驚かなくてもいいのと思う。自分が幽霊みたいに錯覚してしまう。足もあるし、身体も透けていないか

らまだ大丈夫だ。

「さつきはちゃんと挨拶できなかったから。俺はノワリー・エリオット。君のお姉さんとお付き合ひしてる」

「あの…さつきはごめんなさい…いきなりでびっくりしたの」

白くて細い両手が震えていた。また頬が赤くなっている。これ以上赤くなると、破裂してしまうんじゃないか。極度の人見知りなのだろう。

「花が好きなの？」ゆっくりと側に行き、尋ねる。

「あ…うん。お姉ちゃんも好きよ。この白百合が大好きだって言うてた」

「俺も、好きなんだ」

「本当？」翡翠色の目が見上げた。純度の高い、透明な色だ。

「ああ」

優しい嘘をついた。本当は花なんて興味ない。場を和ませる為の嘘だ。でも、これから好きになるだろう。シルヴィを愛しているから、どんな物でも好きになれるかもしれない。

シルヴィと同じ物を感じ、

同じ物を愛したい。

シルヴィを愛している。

世界が終わっても、

ずっと、

彼女だけを愛し続ける。

「ノワリー、メアリー！おやつにしましょう！アップルパイを焼いたの」

庭に面した窓が開き、シルヴィが顔を出した。香ばしい匂いが風に運ばれてくる。ほのかに甘い、林檎の香りも鼻に届く。シルヴィが手を振った。手を振り返した。

「行こうか」

「うん」

メアリーが笑った。姉に似た、綺麗な笑顔。

子供は皆、簡単に綺麗な笑顔を浮かべる。
自分にもこんな頃があったのだろうか。
誰だって、綺麗に笑う事が出来る。
ただ、笑い方を忘れているだけなんだ。
きっかけさえあれば、簡単に思い出せる。

以前ほど、地上は窮屈だと思ふ事が少なくなった。空のように自由ではないが、地上にしかない、大切な人達を見つけた。笑い合う友人。愛し合う恋人。映画のシナリオのような平和な日々。誰かがシナリオを書き換えるのでないかという不安に襲われた時もある。情勢は安定していた。月日はあつという間に過ぎ去り、二年が経った。

「…また、ヴァルキリーのメンバーが一人墜ちたそうだ」

コーヒーを一口飲んだイージスがぼつりと言った。死者を弔うような口調だ。

「またですか？…これで三人目じゃないですか…」

ヴァルキリーは自分達が居るユグドラシル基地に所属する精鋭チームの事だ。そのメンバーが相次いで墜とされるなんてあり得なかった。

「エリオット！イージス！隊長が呼んでるぞ。緊急だつてさ」同僚が二人を呼んだ。

「何だ？」

「解りません。行ってみましょう」

フライトを終えたばかりで疲れていた。シャワーを浴び、部屋でゆっくりと休みたかったが、緊急だというから仕方ない。重い腰を上げて二人はオフィスに向かった。ノックをし、ドアを開ける。室内にはシルヴィと、初めて見る女性が居た。

「疲れているのにすまんな。彼女はオペラ・ド・グランツ。クルタナ基地のパイロットだ」

「よろしく」

軽くオペラが挨拶した。年はイージスより少し下だろう。輝く金色の髪が印象的だ。オペラはしばらくこっちを見つめていた。視線が泥のように纏わり付く。

「エリオット、イージス、ローレンツ。君達にヴァルキリーへの異動を命ずる。そして、エリオット、君にヴァルキリーの隊長を務めてもらいたい」

隊長の言葉が信じられずにぼかんとした。思考がクリアになって頭が回転してくると、やっとその意味が理解できた。

「どうして…俺が？」

「ここ数年の貴方の活躍を見た空軍幹部が是非と。これは凄い名誉な事よ」オペラが微笑んだ。

迷った。確かに、精鋭チームであるヴァルキリーの隊長になれるなんてこれ程名誉な事はない。だが俺はまだ十九歳だ。経験も浅い自分よりも年上で、熟練したパイロット達は何人も居る。辞退しようという結論に辿り着いた。大きな手が肩を叩いた。

「ノワリー。俺はお前が適任だと思ってる。坊やの下で飛べるなんて、俺は最高に嬉しいぞ」

「私もよ。貴方にはその資格がある。私達はノワリーの下で飛びたいわ」

二人の目は、期待と信頼に満ちていた。両親からもこんな目で見られた事があった。でも、彼等は違う意味の期待と信頼の目をしていた。

エリオットの名に恥じない生き方をしろ。

そう、そんな目だった。

メドゥーサの視線よりも怖い目だった。

それを弾き返す盾は掲げていなかった。

首を狩るハルペーも持っていなかった。

ヘルメスも、アテナも側に居なかった。

でも、今は違う。

俺を支えてくれる二人がここにいる。

「解りました。是非、俺にやらせて下さい」

「感謝する。これが正式な契約書だ。明日中に提出してくれ。ご苦労だった、ゆっくり休んでくれ」

敬礼し、三人は退室した。格納庫に用があるシルヴィと別れ、歩いていると、オペラの声が呼んだ。振り向くと、早足で彼女が向かってくる。

「俺は先に戻ってるよ」

イージスはそう言い、宿舎に入って行った。彼の姿が消えると同じ時に、オペラが前に着いた。イージスが居なくなるのを見計らったようなタイミングの良さだ。乱れた髪を直し、微笑む。彼女より頭半分背丈が高いので、自然と見下ろす形になる。オペラはもつと背が低いのもかもしれない。真紅のピンヒールを履いているから背が高く見えているのだ。そんな靴でよく歩けるものだ。変に感心した。

「グランツさん…でしたよね。俺に何か？」

「貴方とゆっくり話がしたいと思って。美味しいレストランを知っているの。これから行かない？」

息がかかる距離までオペラが近付いた。身体を押し付けてくる。手が伸び、腕に触れた。滑るように動き、胸を撫でる。鳥肌が立つ。彼女の手が服のボタンを外し始めた。冷たい空気が、現れた素肌に突き刺さる。これ以上我慢出来ない。後ろに下がり、離脱した。彼女の魂胆が見え見えだ。

「媚びても無駄です。俺には、愛する人が居ます。貴女は、俺に興味があるんじゃない。エリオットに興味があるんでしょう？」

「…まあ、そうと言えばそう。違うと言えば違うわね。私は、貴方にも、エリオットにも興味があるのよ。じゃあ、お休みなさい、ノワリー」

踵を返し、オペラは滑走路の向こうに姿を消した。後を追う気は無い。宿舎に戻った。談話室を通り、階段を上がる。部屋に入るとイージスは居なかった。脱ぎ捨てられた衣服が床で丸く縮こまって

いた。シャワーでも浴びに行ったのだろう。服をたたみ、彼のデスクの上に置いておく。契約書にサインをすると、ベッドに寝転んで雑誌を読んだ。雲の中に沈むように、いつの間にか眠りに落ちていった。

誰かが身体を揺らしている。眠気の残る目を開けると、緊迫した面持ちのイージスが視界に入った。爆音が響き、部屋が揺れた。目が一気に覚めた。

「何なんですか？」

「アンティオキアが奇襲攻撃を仕掛けてきてる。すぐに滑走路に集合だ。急げ！」

二人は急いで滑走路に走った。既にヴァルキリーのメンバーが揃っていた。当たり前だが、初めて見るパイロット達だ。シルヴィの姿を見つけ、安心した。

「これで全員揃ったな。諸君、緊急事態だ。アンティオキアが奇襲攻撃を仕掛けてきた。おそらく、国境に近い場所に位置するユグドラシル基地を潰そうとしているのだろう。夜が明け次第、出撃する！」

アンティオキアは世界樹を手にするという目的の他に、世界征服も企んでいる。国境に近く、飛行部隊の中でも精鋭であるチームヴァルキリーが所属するこの基地は大きな障害になるのだ。再び遠くの方で爆音が響いた。市街地の方角だ。シルヴィの家族は大丈夫だろうか。避難している事を祈った。

「エリオット、無理は承知で頼みたい。ヴァルキリーを率いて、先陣を切ってもらいたい」

隊長の言葉に戸惑った。まだメンバーの顔も知らず、彼等の機体の特徴や欠点も把握していない。イージスとシルヴィ以外のメンバーとは飛んだ事も無いのにいきなり飛べというのは無謀そのものだが、今は緊急事態なのだ。弱音を吐いている暇なんてない。

「了解しました」

「各自自分の機体を点検するように！一時間後に出撃する！」

隊長以外のメンバーは散らばり、それぞれの機体を見に走って行った。ブリューナクの所へ。整備士に機体の状態を聞き、燃料とマナを補給してもらおうように頼んだ。補給が終わるまでの間、彼はじつとそこに立っていた。右手が小刻みに震えていた。震えを止めようと拳を握り締めたが収まらなかった。

「大丈夫かね？」機体の整備を終えたヴァルカンが側に来た。

「…ええ。ヴァルキリーのメンバーと飛ぶのは初めてなんです」

「お前さんなら出来る。ほら、嬢ちゃんと話すといい」

短い会話だったが少し勇気が出た。ヴァルカンに礼を言い、シルヴィの所に行った。彼女は静かにブリュンヒルドを見上げていた。

「シルヴィ、大丈夫？」

「…怖くないと言ったら嘘になるわ。貴方こそ、大丈夫なの？」

「何とか。…君を…彼等を守るだろうか…」

「守れるわよ。貴方は光の槍なんだから。私達の道を切り拓いてくれると信じているわ」

表情こそ毅然としていたが、シルヴィの声は震えていた。無理もない。このフライトは今までにない大きな戦いになるだろう。生きて帰れる保証はどこにも無いのだ。むしろ、生きて帰れる事が奇跡だろう。

「シルヴィ」

「何？」

「無事に帰って来たら……結婚しよう」

「…え？」

ポケットから指輪を取り出した。シルバーのリングの頂に、無垢な光を抱くダイヤモンドが輝いている。シルヴィの左手を取り、薬指にそつと嵌めた。思った通り、ぴったりだ。ガラスの靴みたいに、指輪は彼女を選んだ。パイロットのシンデレラ。想像すると滑稽に思えてしまう。

「ノワリー……私なんかでいいの？」

「君がいいんだ。君しかない。俺は、シルヴィを愛しているんだ」
「……馬鹿」

シルヴィがしがみついた。両腕を首に回して肩に顔を埋めた。シルヴィを抱き締めた。

翡翠色の目はとても澄んでいて、

その色を忘れないように、琥珀の中に閉じ込める。

唇が重なり、

呼吸を分かち合った。

機体のメンテナンスが終わった。陣形を組み、ヴァルキリーは空に飛び立った。

空中は混雑していた。前方に黒い機影が広がっている。

アンティオキアの軍隊だ。数では圧倒的に負けている。

曲が始まるのを待っているのか？

奏者は揃っている。

タクトが振り下ろされるのを待つだけだ。

さあ、戦おう。

誇りと誇りをかけて。

これは、俺達の戦いだ。

幻想のタクトが空を切った。

四方で爆発が起こり、機体が墜ちていく。味方の機体なのか、それとも敵の機体なのか解らない。敵味方入り乱れ、気品のないダンスペーティのようだった。

メンバーを追い回す敵を発見。

機体の尾翼は黒い尾を引いていた。

無線で離脱を指示。

機体は緩やかに右に滑空して行く。

敵は蛇のようにしつこく追いかけている。

僅かに奴の方が旋回速度で勝っていそうだ。速度はブリューナクが上。オーバーシュートに注意しないと。

エレベータ・アップ。

機体を反転。

反動で速度が下がる。

奴を見逃すな。

目に焼き付ける。水晶体に刻み込み。

敵が下を駆け抜けて行った。

気付いた奴が旋回。

砂糖菓子のように甘い弾道の機銃。

ロール。

下手くそ。子供のおもちゃじゃないんだぞ。

速度を限界まで上げる。メーターのメモリが急上昇していく。

懐に飛び込んで交差する瞬間に弾を撃ち込んだ。

上昇して離脱。墜ちていく敵機を確認。

さて、これで何機目だ？

多過ぎてきりが無い。

『長：隊長！』無線が鳴った。尋常じゃない程切迫した声だ。

『こちらブリューナク。どうした？』

『ロツソとブランがやられました！俺も胴体に被弾！ああ…もう駄目です』

『』

『諦めるな！離脱するんだ！脱出装置を使い！』

『駄目です…壊れています…最後まで戦えなくて、すみませんで』

『』

『諦めるな！応答せよ！』

ノイズの後、無線は途切れた。

墜ちたのか、離脱したのか。いずれにせよ、知る術は無い。

上昇していたブリューナクをダイブさせる。

機首を左右に振り、戦況を確認。

突然警告音が鳴った。レーダーを見る。ミサイルが後方から迫っ

ている。

即座にスナップ・ロール。

すぐ横を横切り、ミサイルは敵機を破壊した。同士討ちだ。

「…何だ？アレは…」

後方に巨大な爆撃機が飛んでいた。無数の砲身が突き出ている。

それは火を放ち、次々と飛行機を墜としていく。自分の仲間を攻撃する馬鹿は居ない。居たらキスをしてやる。あれは、ヴァルキリーの機体だ。

ターン。

爆撃機に狙いを定める。

ブリューナクに気付き、砲台がこっちを向いた。

ロール。半ロール。スナップ・ロール。

雨のように降り注ぐ弾を見切り、上に回り込む。

破壊力は絶大だが、砲台の動きは鈍いようだ。

連続して機銃をお見舞いする。

砲台の一つが爆発し、次々と連鎖して爆発していく。

大きな爆発が起こった。爆撃機が炎上し、墜ちていった。

再び無線が鳴った。声がよく聞こえない。ポリウムを上げる。

『ノワリー…？』

「シルヴィ？無事か？」

『…いいえ…駄目みたい。エンジンをやられたわ。舵もきかないの』
弱々しい声。シルヴィが首を振る姿が脳裏に浮かんだ。

「離脱するんだ！」半ロールで背面飛行。キャノピーから下を見た。東に湖が広がっていた。「四時の方向に湖がある！うまくそこに着水すれば…」

『私も被弾してる。もう助からないわ。ごめんなさい、って家族に伝えて』

「駄目だ、シルヴィ！約束したじゃないか！生きて戻ったら、結婚しようって！」

『さよなら…ノワリー。……愛してるわ』

無線が切れた。周りを確認する。淡いオレンジ色の機体が、黒い煙をあげながら墜ちていく。眼下に広がる森に墜落した。小さな煙と火が見えた。すぐさま向きを変え、彼女が墜ちた辺りに向かおうとした。

爆発。何かが機体を貫通した。

がくんと機体が傾いた。そのまま失速。高度も下がっていく。

もう一機の爆撃機が斜め左に居た。

まだ居たのか？

それとも、墜とした奴が蘇ったのか？

ブリューナクは吸い込まれるように、地面に向かって加速していく。

操縦桿を引くが機体は上がらない。

どうした？反抗期か？

何故、言う事を聞いてくれない？

早く空に戻って、皆を助けなさいといけないのに。

「上がれええええええええええっ！」

渾身の力を込めて操縦桿を引いた。

ほんの僅か、機体が浮いた。

でも無駄だった。森に墜ちた。

木の枝を折り、そのまま地面に激突。ロールしながら転がる。ロールは空でするものなのに。

回転が止まった。吐き気がする。それに、身体中が痛い。特に右腕と右足が引き裂かれそうだった。

スライドを見てみたいに脳裏に次々と人の顔が浮かんだ。

家族。

シルヴィの家族。

隊長にチームの皆。

イーリス。

そして、シルヴィ。

タルタロスよりも深く、

暗い闇の底に、
意識は墜ちていった。

目を覚ますと森の中を歩いていた。誰かに支えられて引き摺られるようにして歩いている。右腕と右足の感覚が無かった。もしかしたら、繋がっていないのかもしれない。確認しようと思えば出来たけど、見るのが怖かった。意識がハッキリしてきた途端、激痛が全身に走った。思わず呻き声を漏らす。

「よう、坊や。気が付いたか？」懐かしい声が耳元で囁いた。

「イージス…さん？」

「俺のミネルヴァもやられちまってな。何とか離脱する事に成功したんだが、木に引掛かって墜ちてしまつてよ」

快活にイージスが笑った。元気そうに見えるが、彼の顔は蒼白だった。目の下に黒い隈が浮かんでいた。突然イージスが咳きこみ、血を吐いた。落ち葉の上に鮮血が飛び散る。

「イ…イージスさん…そつ…それはっ…？」

かろうじて動く左手で指差し、絶句した。イージスの腹部には機体の破片が突き刺さっていた。破片は背中まで貫通していた。イージスは気にする事なく歩き続けている。その度に鮮血が滴り、二人の歩んできた道に痕跡を残している。

「なあに、大した…事はないさ…ただ…ちょっと、どデカイ破片が刺さっているだけだ。安心しな。基地に連絡しておいた。指示された合流地点まであと少しだ」

「シルヴィは…？」

「…間に合わなかった。あの爆撃機にやられちまつたよ」

疑惑は確信に変わった。彼女は生きている。そんな微かな希望も打ち砕かれた。イージスが足を止め、再び吐血した。せめて彼だけでも助かって欲しい。そんな願いを込めて口を開いた。

「俺を置いて行って下さい…貴方だけでも助かって……」

「馬鹿言うんじゃないやねえ！坊や、お前だけは死なせない、助けてみせる。絶対にな」

また意識が朦朧としてきた。死神の足音が二人を追いかけて来る。どれくらい歩いたのだろう。二人は合流地点に辿り着いた。イージスと車に乗せられ、軍の病院に運ばれた。手術室に運ばれる途中、医師達が交わす会話が切れ切れに聞こえてきた。

一人は心肺停止。先程、死亡が確認された。

もう一人は右腕と右足に重傷を負っている。切断の可能性もあり。

三十分前に運ばれた女性も、死亡確認。

麻酔が投与され、意識が混濁していく。

きつと、これは夢だ。

目が覚めたら、シルヴィと結婚式を挙げるんだ。

白いウエディングドレスを着た彼女がヴァージンロードを歩いて隣に立つ。

イージスが快活に笑っている。スーツが似合っていないけど、まあいいか。

誓いを交わし、指輪の交換。神父の祝福を受け、唇を重ねる。

車じゃなくて、飛行機に乗って新婚旅行に行こう。

不思議の国が僕等を待っている。

きつと、素敵な旅になる。

きつと……………。

一定のリズムで鳴る電子音。霧で霞んだ視界に、モニターの黒い画面と、それに映る緑色の線が映った。何だか解らない数字が上がったり下がったりしている。次第に霧が晴れてきた。視界がクリアになる。身体はだるい。ほとんど動かせなかった。そこそこ動く首を左右に動かし、ここがどこなのか確認しようとした。

一言で言えば白い。天井も、壁もカーテンも真っ白だ。何だ、ベッドもシーツも白いじゃないか。花嫁に怒られるぞ。白い色は、花嫁だけが着る事を許された色なんだ。

花嫁？

シルヴィは？ イージスは？

ヴァルキリーはどうなった？

ここは地上か？

なら、早く空に戻らないと。

ドアが開き、医師と看護師が入って来た。医師はカルテを見ながらブツブツ言っている。看護師がベッドに近付き、人工呼吸器のマスクを外した。「ゆっくりと呼吸をしてみてください」指示に従い、ゆっくり呼吸した。その際に胸のあたりが少し痛んだが、肺に新鮮な空気が溜まっていくのを感じた。

「ご気分はどうですか？」

カルテをサイドテーブルに置き、医師が訊いた。良くないに決まっているだろう。そう言っただろうと思っただが、止めた。

「悪くないです。ここは…軍の病院ですか？」自分の声とは思えない、掠れた音だ。

「いえ。ここはクルタナの首都病院です。医療設備が整っているここに、貴方は移送されたんですよ」

「いつ退院できますか？」

「少なくとも五ヶ月はかかるでしょう。頭部を激しく強打、肋骨が折れ、肺に突き刺さっていたんですよ。死んでいても可笑しくない状況だ。助かったのは奇跡としか言いようがない」

奇跡、と聞いて笑った。そんなモノ、ラッピングした箱に入れて、リボンを結んでくれてやる。天辺に文字を書いたチヨコレートもつけてやるうか。医師と看護師も笑った。助かった喜びを噛み締めていると思っっているのだろう。看護師が医師に耳打ちした。彼の表情が翳った。咳払いをすると、医師が口を開いた。

「…エリオットさん。残念ながら、良い事ばかりではありませんでした。貴方の右腕と右足は酷い損傷を負っていました。治療を施しても、もう動く事はないと判断し……切断しました。でも安心して下さい。最新式の義手と義足を着けさせてもらいました」

身体を起こした。看護師が身体とベッドの隙間にクッションを入れてくれた。医師がシーツを捲った。現れた異様な光景に、言葉を失った。

鈍く光る銀色の機械が腕と足に繋がっていた。子供の頃にテレビで見た映画に出て来たロボットのような物だ。右腕は肘から先、足は膝から下が綺麗に無くなっていた。どこかに落としてきたのか？誰かが拾って、交番に届けてくれていたらいいのに。

「一般には普及されていない、最新の義手と義足です。機械の回路と神経、筋肉を繋いでいますので、脳からの電気信号をダイレクトに伝える事が出来ます。初めは動かす度に痛みが走りますが、慣れれば以前のように動くようになりますよ」

「失礼する」

来訪を伝える声の後、ドアが開いた。空軍の制服を着た男が室内に入って来た。長身に逞しい体軀。軍の幹部が身に着ける制服だ。会釈を交わし、医師と看護師は出て行った。

「七年ぶりか？ノワリー」

「…話したくない。帰って下さい」

「久し振りに再会した父親に、その言葉はないだろう」

クラッド・エリオットは何の表情も表さずに、淡々とした口調で言った。プロの殺し屋のように完璧だ。自分の心の内を読ませようとしないう。昔からそうだ。妻にも、息子にも。

「よく言いますね。俺を心配して会いに来たんじゃなくせに。跡継ぎの事が心配なんでしょう？この機械の腕と足を着けるように頼んだのも貴方ですね？」

「大戦は終結した。チームヴァルキリーの犠牲のお蔭で、我々は勝利した」

目を大きく見開いてクラッドを食い入るように見つめる。冷や汗が背筋を伝っていった。

この男は何を言っているんだ？
犠牲？

あの時隊長が言っていた言葉を思い出した。

先陣を切ってもらいたい。

まさか……。

口の中に苦味が広がった。

「……ヴァルキリーを捨て駒にしたのか？」

「そうだ。少しでも奴等を殲滅しておきたかった」

「ふざけるな！彼等を見殺しにしたんだぞ？」

「ポーンはいくらでも居る。重要なのは、いかにして自軍の戦力を減らさずに相手の戦力を削ぐかだ。キングは守らなければならない。あれだけの人数で敵の機体を半分以上墜とすとは、流星は精鋭チームだ。失うには惜しかった」

クラッドの言葉に落ち着きを取り戻した。自分がここに居るなら、あの二人も居るはずだ。

「シルヴィー……イージスは？チームはどうなったんです？」

「チームヴァルキリーは全滅した。ローレンツとイージスも一週間前に死んだ。遺体はここにある筈だ」

ベッドから跳ね起きた。点滴とチューブを引き抜く。クラッドの

制止も聞かず、病室を飛び出した。医師が話していた通り、歩く度に激痛が走る。院内を駆けずり回り、遺体が安置されている部屋を見つけた。

薄暗い室内に足を踏み入れた。正面にある台の上に誰かが横たわっている。二人だ。白いシートで覆い隠している。捲つてはいけない。頭の中で警告の声が聞こえた。震える手でシートを捲った。

イージスとシルヴィの顔が現れた。

真つ白で、眠っているような穏やかな顔。

おはようつて言ったら、起きるんじゃないか。

快活な笑みを浮かべて、イージスが坊やと呼んでくれる。

シルヴィも微笑み、あの透명한声で名前を呼んでくれる。

ずっと待っていてても無駄だった。

駄目だった。

二人は、もう目覚めない。

天国の門をくぐり、手の届かない所に行ってしまった。

「ノワリー。病室に戻るんだ」

「嫌だ…ずっと…ここにいる…」

「彼等は死んだ」

死刑宣告を告げられたみたいだった。何の感情もこもっていない、冷たい声だ。悪魔の王もこんな声をしているんだろう。もしかしたら、彼が悪魔の王なのかもしれない。全身から力が抜けた。床に座り込み、むせび泣いた。遅しい腕が身体に回された。クラッドに背負われて病室に戻った。こんな風に背負われたのは子供の頃以来だ。ベッドに寝かされて鎮静剤を打たれた。そのまま眠りの中に引き込まれていった。

ふと、気づけば滑走路の真ん中に立っていた。無くなった筈の腕と足があった。夢の中だと解っていた。早く目覚めなければいけないのに、夢から離脱する方法が解らない。後ろに誰か居る。夢で振

り向いたらいけないと聞いたような気がしたが、身体が先に動いていた。身体中の細胞が凍りついた。

「よう、坊や」

「久し振り」

ぞつとした。元気に微笑むイージスとシルヴィが立っていた。とても健康そうだ。機体の破片も刺さっていなかった。二人は笑っていたが、どこか不気味だった。不意に、イージスの顔が暗く歪んだ。「坊や。何で俺達を殺した？」

「…え？」

「お前が俺達を殺したんだ。おかげで俺は、シエラとゲルダに二度と会えなくなつた」

「何を…言つて…」

「そうね、貴方が私達を殺したのよ」

「違う！俺は…」

「人殺し」

「信じていたのに」

「家族に会いたい…」

呪詛の声が周囲から聞こえてくる。チームのメンバーが恐ろしい形相で睨んでいた。

手足を失つた者。

全身に火傷を負つた者。

折れた骨が肉を突き破っている者。

人とは思えない姿をしたパイロットが取り囲んでいた。

「ひっ……」

「愛しているわ。ノワリー」

血塗れの顔でシルヴィが微笑んだ。

夢から離脱。

呼吸が浅く、速い。汗で湿ったパジャマが身体に張り付いている。吐き気がして頭が痛い。

部屋を出て暗い廊下を歩く。トイレに向かう。

便器の前に屈みこんで吐いた。
血が混じるまで何度も吐いた。
蹲ってすすり泣いた。

背中を撫でてくれたイージスの大きな手はもう無い。
愛を誓い合ったシルヴィはどこにも居ない。

彼等は空で散った。

抜け殻は、雲が優しく受け止めてくれただろうか？
神様が拾ってくれただろうか？

俺は、大事な物を空に残してきた。

抜け殻だけが、地上に戻って来てしまった。

どうして、戻って来てしまったんだ？

どうして。

それからは無気力な毎日だった。一日の大半をベッドの上で過ごし、辛いリハビリを続ける、そんな日々が続いた。あれ以来父は訪ねて来ていない。生きてさえいればそれで充分なのだろう。質素な昼食を終えてぼんやりと窓の外を眺めていた。個室だから話す相手も居ない。その方がいい。好奇心な目で見られたくはない。ドアがノックされた。返事をする、花束を持った少女が入って来た。

「こんにちは…ノワリーさん」

「…メアリー？」

彼女の姿はシルヴィにそっくりだった。シルヴィより小柄で華奢だが、生き写しだった。彼等を殺した罰なのか？込み上げてくる悲しみが理性を奪っていった。

「お見舞いに来たの。これ、百合の花束。私が育てた花よ」

メアリーがサイドテーブルにある花瓶に花を入れた。一つ一つの動作がシルヴィを思い出させる。理由も無く苛立った。

「…帰ってくれないか」

「え？」

「悪いけど、帰ってくれ」

「どうして…?」

「帰ってくれっ!」

花瓶を掴んで床に叩きつけた。花瓶が粉々に砕け、百合の花が床に散乱した。じんわりと水が広がる。メアリーの身体が震え、涙が零れた。服の袖で顔を隠し、メアリーは飛び出すように出て行った。取り乱した足音が遠ざかっていった。

窓の外を再び見た。

秋晴れのような空。青く、一点の曇りも無い。

空を見たい。

そう思った。

松葉杖をつきながら、屋上に行った。階段は辛い。エレベーターで上昇する。割と素直にドアは開いた。洗濯された白い衣類がロープに吊るされてはためいている。屋上には誰も居ないようだった。屋上の端に行き、フェンスを乗り越えた。へりに立ち、真下を眺める。ミニチュア人形みたいに小さな人々が動いている。さあ、飛び降りて、彼等の平和な日常にスパイスを効かせてやろうじゃないか。

「駄目!」

甲高い声が背後から聞こえた。振り向くと、フェンス越しに幼い女の子が覗んでいた。少女は破れた網の隙間に手を突っ込み、服を掴んできた。小さな手でぐいぐいと引っ張る。

「はやくこっちに来て!」

引っ張る手の力が強まった。無視して飛び降りる事も出来る。だが、そうすれば子供を巻きこむ事になるだろう。仕方無くフェンスの向こうに戻った。子供はまだ服を引っ張っている。そんなに引っ張るなよ。義足に慣れていない足がふらついて尻餅をついた。少女が驚いて後ろに下がった。自分がしつこく引っ張ったせいだと思っただのかもしれない。仰向けになった。思った通り、綺麗な空だ。

「あの…大丈夫?」

「何が?」仰向けになったまま答えた。

「その…手と足…」服の裾が乱れ、機械の手足が見えていた。

「ああ…大丈夫だよ」

子供が側に来た。柔らかかそうな金色の髪。目は素晴らしい空色だ。何故だろう。気分が少し落ち着いていた。身体を起こし、広がる街並みを眺めた。

「お兄ちゃん、パイロット？」

「そうだった。でも、もう飛べないけど。どうして解った？」

「看護師さんから聞いたの。パイロットの人が入院してるって」

「…そう。君は？何で入院してるんだ？」

「えっとね…検査入院してるの」

「検査？」

「こんな所に居た！検査の時間よ」入口のドアが開き、女性が顔を出した。担当の看護師だろう。

「もう行かないと。またね！」

少女は小さな手を振り、看護師の女性と出て行った。

もうしばらく空を眺める事にした。

死ぬのが馬鹿馬鹿しくなった。

死ぬには勇気がある。

けど、その勇気があれば、何だって出来るのかもしれない。

許されるなら、もう少し生きようと思う。

またあの夢を見た。今度は真つ暗な闇の中に居た。

足下には血の池が広がっている。ぬるりとした感触。

無数の青白い手が全身を這い上がり、絡みついてくる。

触り、掴み、探る。

肉の腐り落ちた手が、隅々まで這い回る。

その内の一本が首を絞めてきた。

池から浮かび上がるように死者が前に立った。

紙みたいに白い顔。

全身に火傷を負っている。
シルヴィの顔をしていた。唇が動く。形を作る。
愛しているわ。

息が止まる寸前に目が覚めた。時計の文字盤を覗き込む。真夜中だった。眠れそうにないし、喉が渴いていた。震える身体を起こし、一階のロビーに向かった。

ロビーに人の姿はなかった。ナースステーションも明かりがついているだけで、誰も居ない。見回りに行っているのだろう。世界に自分一人しか居ないと思えるほど静かだ。もう人類は滅んでしまったのかもしれない。自販機でコーヒを買い、ソファに座った。正面の天井には大きな天窓があった。プラネタリウムみたいに星空を投影している。知っている星座がいくつもあった。優しかった頃の父に教えてもらった。

「こんばんは」後ろのソファからあの女の子が顔を出した。

「君は…この前の」

「眠れないの？」

「まあ…そんな所」

子供が隣に座った。足が床に届いていない。飛行機に乗る時は苦労するな。年は彼より一回りは下だろう。希望に満ち溢れ、挫折を知らない年代だ。

「何か飲むか？」

少女が頷いた。立ち上がり、自販機まで行った。コインを入れてオレンジジュースのボタンを押した。出て来たジュースを手にとって戻る。大分義足に慣れてきたようで痛みはあまり無かった。少女はジュースを美味しそうに飲んだ。

「夜更かしすると、怒られるぞ」

「平気。もう子供じゃないもん」

「よく言うよ」

「あたしね、大きくなったらパイロットになるんだ！テレビで見たパイロットさんが凄くカッコよかったの」

「ふうん…どんな人？」少女は眉を寄せた。思い出そうと努力している。

「どんな人かは知らないの。この前の大戦で活躍した、光の槍って呼ばれてる人よ。顔は知らない」

「…止めた方がいい」何で？という顔で、少女が顔を向けた。「そいつは臆病者だから」そう付け加えると、少女はますます見つめてきた。

「そいつは仲間を見捨てて、地上に逃げ帰って来た卑怯者だ。一度は死にかけたけど、空で死ねなかった。チームを守り抜くと誓ったのに、結局はチームを全滅させてしまった人殺しだ。光の槍は、錆びついてしまっただよ。彼は…もう、飛べない」

手に持ったコーヒの缶を握り締めた。アルミのボディが音を立ててへこんだ。

「ねえ…もしかして…お兄ちゃんが光の槍？」

無言で頷いた。俯いた。少女がじつと見つめているのが解った。その視線を受け止めるのが怖かった。憧れだったパイロットがこんな奴だと知って、幻滅したんじゃないか。

「死んじゃ駄目だよ」唐突に少女が言った。驚き、見つめ返した。

「お兄ちゃん…死にたがってる。駄目だよ。空でそんなことしちゃ駄目」

核心を突かれた様な気がした。全てを失って死を選んだ。

屋上から飛び降りようとしたのも、空に近い場所で死にたかったから。

「あのね、あたしのパパとママはお星様になったの。もう会えないけど、いつも空の上からあたしを見守ってくれてる。ママが言っていた。死んだ人は光になって、星の中心に還るんだって。そしてまた生まれ変わってくるんだって。お兄ちゃんの大切な人も、星に還る前に、会いに来てくれるよ」

涙が零れた。幼い子供の前で泣く姿を見せなくなかった。でも止められない。嗚咽が唇から洩れる。

「…ごめんっ…情けないよな…大人が泣くなんて…」

小さな手が触れた。空色の瞳がとても澄んでいた。空をガラス玉に閉じ込めたらきつとこんな感じになる。世界中の店を探しても、どこにも売っていない幻の品。

「あたしが側にいてあげる」

大人びた言葉に苦笑した。笑いながら泣いた。気がつくと、少女はもたれかかって安らかな寝息をたてていた。ロビイは寒いし、部屋に運んだ方がいいと思った。同時に少女の病室を知らない事に気付く。困り果てていると階段を駆け下りてくる足音が聞こえた。足音は廊下を曲がり、ロビイに近付いてくる。一人の女性がロビイに入ってきた。少女を抱き上げて女性の側まで行った。

「もしかして…この子の知り合いですか？」

「はい。伯母で、この子を育てています。どうも、ご迷惑をおかけしました」

慎重に少女を女性の腕の中に渡した。彼女を受け取った女性がお礼を言う。

「あの」立ち去ろうとした女性に声をかけた。少女を抱えた女性が振り向く。

「助けてくれてありがとう、ってその子に伝えてもらえませんか？」

「え？ええ。解りました。伝えておきます」

頭を下げると女性は廊下を曲がって行った。静まりかえるロビイ。また一人になってしまった。

『ノワリー』

とても小さな声が後ろで響いた。注意しなければ聴き取れないほど小さな声だ。振り向いた。心臓が止まりそうになった。臃げな輪郭のイージスとシルヴィが立っていた。向こうの景色が透けて見えている。夢の中で見た二人とは違って静謐で、穏やかな表情だった。『還る前に会いに来た。俺達は、坊やを憎んじやいないよ。むしろその逆だ』

『貴方と飛べて良かった。私達に縛られちゃ駄目よ。自由に生きて

ね

『じゃあな、坊や。お前は最高の友人だ』

『大好きよ、ノワリー』

最後に二人は微笑んだ。

心に余韻を残し、二人は消えていった。

彼等は誇り高く、空で散っていった。

その命は最期まで雄々しく、輝いていた。

勇敢で気高く、

稲妻のように、

自分達が生きた証を空に刻み込んだ。

敬礼した。

今までに行った敬礼よりも、素晴らしい動きで。

「……さよなら」

眩き、振り向いた。

抜け殻がそこにあつた。

それを拾おうとはしなかった。

そうして、過去の自分から離脱した。

思ったよりも早く退院出来る事になった。病室で荷物をまとめていると、ドアがノックされた。どうぞと返事をする。入って来たのは懐かしい人物だった。

「久しぶりじゃな、ノワリー」

「ヴァルカンさん？」

ヴァルカンは昔と変わっていないかった。いつもと同じ、オイルで黒く汚れたツナギだ。良く怒られなかったものだ。無理矢理入ったのかもしれない。彼は自分を貫き通す人だから。

「具合はどうだ？」

「墜ちたい墜ちたいと言っていたら、本当に墜ちてしまいましたよ」

「……ノワリー」

軽い冗談のつもりだったのだが、ヴァルカンの表情が暗くなってしまう。慌てて明るい表情を作った。

「もう大丈夫です。新しい手足にも慣れました。心配をおかけしました」

「そうかい、安心したよ。……イージスとシルヴィの事は…本当に…残念じゃった…」

目頭を押さえ、ヴァルカンが呟いた。少し胸が痛んだが、以前ほど悲しくならなかった。二人は自分の中で生きている。記憶も二人を忘れていない。

「シルヴィの妹さんが来ているようじゃが…どうするね」

「メアリイが？」

驚いた。あんなに酷い再会をしたのに、彼女はまた来てくれたのか？いや、彼女の友人が、偶然同じ病院に入院しているのかもしれない。思い上がるな。いずれにせよ、メアリイに会わなければいけない。

「メアリイはどこに？」

「一階のロビーに居るよ」

最後の荷物を鞆に詰め終わり、ヴァルカンと一緒に一階に降りた。混雑しているロビーを見渡す。人の波の中にメアリイの姿を見つけた。誰を待っているのか気になった。基地に戻るヴァルカンと別れ、彼女に近付いた。メアリイが顔を上げた。一瞬、怯えた表情を浮かべたがすぐに微笑んだ。

「…やあ」

「…こんにちは」荷物を置いて彼女の隣に座った。メアリイが話したすのを待ったが、彼女は無言だった。

「誰を待っているんだ？」

「え？…その…ノワリーさんを待っていたの。今日退院するって聞いて…」

「俺を？君に…酷い事を言ったんだ。嫌われたと思っていた。本当にすまなかった」

「嫌いだなんてそんな事思っていないわ。私こそごめんなさい。貴方がどれ程苦しんでいるのか知らなかった」

メアリイが首を振った。波を描く金色の髪が揺れる。

「貴方は姉さんを愛してくれた。姉さんの人生に幸せを与えてくれた。私も家族も、とても感謝してる」

メアリイの両目から綺麗な涙が溢れた。地面に落とすのは勿体ない。ポケットからハンカチを出してそっと拭った。

「ありがとう、メアリイ。その言葉だけで俺は救われる。でも、許してもらおうとは思わない。一生を懸けて罪を償うよ」

自分でも驚く程穏やかな微笑みだったと思う。そろそろ時間だ。立ち上がって鞆を肩に提げた。

「もう行くよ。来てくれてありがとう。嬉しかった」

「待って！」メアリイも立ち上がった。ポシエットを開けたメアリイは小さな箱を取り出した。受け取って蓋を開けた。

「これは……」

哀れなくらい折れ曲がった指輪が中に入っていた。唯一無傷なダイヤモンドが光っていた。あの時シルヴィにあげたエンゲージリングだった。思えば、あの瞬間が一番幸せな時だった。

「何故、君がこれを？」

「姉さんが最期まで身に着けていたの。貴方に預かって欲しい。二人の愛の証だから」

「……ああ。ありがとう」

大事に、慈しむように、指輪をしまった。これがあればいつでもシルヴィに会えるだろう。

「じゃあ、行くよ。元気で」

別れのハグをした。二年前の時みたいに、メアリイは白い頬を真っ赤にした。もう二度と会わないかもしれない。そう伝えようとした。でも、言わないでおく事にした。天気予報も外れる事がある。

病院の外に出ると一台の高級車が側で止まった。空軍の車だろう。根回しがいいな。運転手が後部座席のドアを開けた。気遣っている

つもりなのだろう。余計な御世話だ。自分で開かれる。文句は言わなかった。彼は、仕事をしているだけなんだ。

「どこへ向かう？」

「クルタナ空軍本部です」

「戻る前に、寄ってもらいたい所がある。構わないか？」

「勿論です。お気兼ねなくどうぞ」

「ありがとう。住所は……」

車は走り市街地に向かった。見慣れた住宅街に到着する。車を待たせて一軒の家に行った。呼び鈴を鳴らす。住人が出て来るのを待った。しばらくするとドアが開き、女性が出て来た。娘と同じ金色の髪。そう、シルヴィの母親リリイだ。少しやつれたように見える。……ノワリー君？」

「しばらくです。御主人はご在宅ですか？」

「ええ。どうぞ、上がって頂戴」

家上がり、何度も通った廊下を歩く。リビングのソファは同じ花柄だった。デイヴィットはソファに座っていた。彼もやつれていた。無理もない。娘を失ったのだ。子に先立たれた悲しみは計り知れない。

「久し振りだね。入院したと聞いていたが……もういいのかい？」

「はい」座るように促され、デイヴィットの正面に座った。沈黙。

鳥の囀りだけが聞こえる。

「私達に話があつてきたのだろうか？」

「……彼女は……シルヴィは最期まで勇敢に戦いました。誇り高く、空で散りました。全て俺の責任です。許して下さいとは言いません。俺を憎み続けて下さっても構いません。だから……彼女の後を追う真似だけはしないで下さい」

遠回しに二人に死ぬなど言った。懇願した。リリイが嗚咽を漏らした。再び沈黙が流れた。デイヴィットの目が見つめてきた。

ターンも出来ない。

ロールも、ループも駄目だ。

エルロン、ラダーで逃げてはいけない。

逃げる事なく、視線を正面から受け止めた。

「…私も、リリイも君を憎んではない。娘を愛してくれたのだから。…だが、もう二度とここには来ないでくれるかね？娘の死は、あまりにも辛すぎた」

口調は穏やかだったが、拒絶の意思がハッキリと表れていた。頷いた。覚悟はしていたが、改めて言われると辛かった。ただ、二人はシルヴィの墓参りをする事だけは許してくれた。深く一礼して家を出た。車の所に戻ると、運転手がドアを開けてくれた。まったくどこまで仕事熱心なんだ。少しは妥協しろ。

「待たせてすまない。用事は済んだ。本部に向かってくれ」
「はい」

慣れた手つきで運転手は車を発進させた。本当はイージスの家族にも会いに行くつもりだった。だが、何度電話しても繋がらなかった。諦めていない。必ず探し出すつもりだ。

車内の空気が濁ってきた。窓を半分開けた。濾過された空気が吹き抜ける。少し寒いが思考をクリアにしてくれた。車から見上げる空は狭い。屋根を剥ぎ取ってオープンカーにしたくなる。どんなに狭くても、やっぱり綺麗だった。

青空の舞台に雲の幕。

太陽と月と星の舞台照明。

飛行機の衣装を身に纏い、

優雅にメヌエットを踊ろう。

翼が素敵なメロディを奏でてくれる。

君が戻るその日まで、

俺は空を守り続けるよ。

ポケットに入れた指輪の輪郭をなぞった。

閉じた瞼の奥に、シルヴィの姿が描かれる。

ほら、いつでも会えるんだ。

望めば、いつだって……。

目が覚めた時は、ここがどこなのか解らなかった。

ただ解ったのは、自分が冷たい液体の中に浮かんでいる事と、幾本の細いプラスチックのチューブが身体に絡みつくように繋がっている事だった。分厚いガラス越しに、白い服を着た人間が何人も僕を見ている。水族館で泳いでいる魚みたいだ。きつと、彼等はこんな気持ちを味わっているに違いない。

生まれた時は覚えていない。

呼吸をしていたのだろうか？

産声を上げたのだろうか？

周りに浮かぶ気泡を見ている内に、瞼が重くなってきた。

不思議と、僕が開いている両目に対して液体はとても優しい。

考えるのに疲れて、僕は目を閉じた。

どれくらい眠ったのだろう、不意に液体が抜かれた。浮力を失い、僕は下に落ちていく。手、手、手。僕の身体を掴み、容器から引き摺り出す。チューブが引き抜かれ、固いベッドの上に寝かされた。一人の男が屈みこみ、僕を覗き込んできた。マロンペーストの髪と、灰色の両目が僕を珍しそうに見ている。まだ若そうで、細いフレームの眼鏡が男をインテリジェントに見せている。僕を生き物として見ていない目だった。

「やあ、おはよう。気分はどうだい？」

最悪だ。そう言いたかったけど、生憎僕は言葉を知らない。生まれたばかりの赤ん坊だって言葉を話せないのだから、当然だと思う。「まずは言葉を教えないといけないようだね」

簡素な白い服を着せられた僕の足下に小さな靴が置かれた。靴紐の結び方が解らず、ぼんやりしていると、男が紐を結んでくれた。これからは自分で結ばないといけないな。僕は彼の手の動きを目で追い、トレースした。

「こつちだ」

男は僕の手を引き、部屋を出た。天井も廊下も真っ白で、電灯とドア、ナンバープレートも規則正しく整列している。定規で測りながら、作ったに違いない。そんな事に労力を使うなら、もう少しこの景色に彩りを加えたらいいのにと僕は思った。男が足を止めた。白衣のポケットからカードキーを出し、ドアの横についている端末にスライドさせた。プッシュとドアが開き、中に入った。

正面に茶色い机と椅子。大きな布が垂れ下がっていて、机の上に丸いレンズのついた機械が置かれていた。男が椅子を引き、僕は大人しく座った。これから何をやらされるのか、不安と期待が半々といった所。男がコンセントを差し込み、機械のスイッチをONにした。レンズが光を発射。前方の布に、何だか解らない映像が次々と映し出されていく。

「この映像は、人類の愚かな歴史だね。中々面白いよ。一時間経ったら、また来るよ」

僕の肩を叩くと、男は出て行った。僕は視線を前に戻し、映像に集中する事にした。

人々が殺し合う。

握手をして平和を誓いながら、平気で嘘をついている。

エゴと欺瞞に塗れた正義を振り翳している。

次々と目まぐるしく変わっていく映像を、僕の脳は刻んでいった。映像に飽きかけた頃、画面一杯に巨大な大樹が映し出された。絡み合うように伸びる根。包み込むように生い茂る新緑の葉。僕は精一杯目を見開き大樹を見つめた。

忘れるな。

忘れてはいけない。

僕の奥深くに刻みこまれた何かが、命令している。

「それは世界樹だよ」

気付くと、いつの間にかあの男が居た。機械のスイッチを切り、僕の側に立つ。またあの目だ。新種を発見したような目。

「世界樹？」

僕の口から言葉というモノが出た。男は目を細め、それから感心したように笑った。

「もう言葉を覚えただね。流石、我々下等な生き物とは違う」

「世界樹って、何？」

「マナを生み出す大きな樹の事だ。ワールドエンドという大陸にある。私達はそれを探しているんだよ」

話はここまでだという風に、男は眼鏡のフレームを指で上げた。

僕もそれ以上訊く気はなかった。訊かなくても、いずれ知る時が来る。知識を蓄えなければ、生き物は生きていけないのだ。

「さて、ゼロ君。訊いてもいいかな？」

「ゼロ？」聞き慣れない名前に僕は首を傾げた。「ゼロって誰？」

「君の事だよ。まあ、我々が勝手に付けた名前だ。気にしないでくれたまえ。質問の続きをしよう。ゼロ、君は今何を考えている？」

僕は質問の意味を理解しようとししばらく考えた。自分は何者なのか。ここはどこなのか。何故ここに居るのか。考えている事はたくさんあってきりがない。でも、僕の頭の中には、考えとは違う、強い何かが芽生えていた。

「……飛びたい。空を飛びたい」

僕はそれを言葉にしてみた。乾いた音が室内に木霊する。何の感情もこもっていない、社交辞令のような拍手。男と同じ白衣を着た男女が拍手していた。

「エクセレントだ。諸君！今ここに、素晴らしい芸術作品が完成した！実験を第二段階に進めよう」

男に手を引かれ、僕はまた違う部屋に連れていかれた。この前の部屋とは違い、頑固なロックはついていない。甘い言葉を囁けば、簡単に開いてくれるタイプだ。お世辞にも広いとは言えない部屋だった。真つ白で、奥に小さな窓、隅の方に本棚とパイプ製の二段ベッドが数個あるだけだ。中に数人の子供達が居た。僕と同じような服を着ていて、脱色したような白い顔が並んでいる。不気味とは思わなかった。僕も、同じ姿をしているのだろうか。

「君にはしばらくここで過ごしてもらおう。数週間の辛抱だ。頑張つて」

本当に僕を応援しているのか疑ってしまう口調だった。彼は出て行った。上品な革靴の音がエコーし、遠ざかっていった。僕はしばらくそのまま突っ立っていた。靴を履いているのに、床がとても冷たかった。現実を教えようとしているのかもしれない。

「君、大丈夫？」

一人の子供が僕の前に立っていた。柔らかそうなマロンペーストの髪。目は鮮やかな緑色だ。その子供は比較的健康そうに見えた。地面に足を付け、しっかりと立っている。床が冷たくないのだろうかと思った。我慢していて、現実と戦っているのかもしれない。無言でいると、子供が覗きこんできた。好奇心の塊みたいな奴だ。

「僕はアレックス。君は？」

「ゼロ」

「ゼロ？変な名前だね」

変だと言われても腹は立たなかった。僕の名前ではないのだから当然だ。彼等が勝手に付けたモノで、お腹を痛めて産んでくれた母親や、大きく温かい腕で抱き上げてくれる父親が付けてくれた名前なら別だ。ゼロという名前は僕にとって、道端に転がる石ころのよくなモノだ。あの男は、たまたま爪先に当たった石ころを拾い上げ、それを僕に与えたにすぎないのだ。

「ここがどこかわかる？」アレックスが僕の横に座り、無意味な質問を投げかけてきた。

「知らない。訊かなくてもわかると思っけど」

「そうだよな。ごめん」

僕は疲れていた。長時間スライドを見たせいで頭の中が狂ったように踊っていた。彼との会話を切り上げ、空いているベッドに寝転んだ。白い海に身を沈め、胎児のように丸まった。

ヒトは皆、こんな風に生まれてきたんだと思う。
でも、僕は違う。

試験管が、僕の生みの親なんだ。

それからアレックスは、度々僕に話しかけてくるようになった。僕はそれを拒みはしなかった。話し相手が居るのは良い事だと思うし、何もすることが無い毎日の暇潰しにもなる。生まれたばかりの僕にとつて、彼は色んな事に対するお手本になった。話し方。話す時の仕草や表情。食器の使い方やマナー、服の着方、スライドでは学べなかった事を僕はすぐに覚えていった。他人の面倒を見るのが好きなのか、アレックスは親切に教えてくれた。こんなに親切だとかえって疑ってしまう。後で多額の金銭を要求されるんじゃないか。でも彼は子供だから大丈夫だ。子供の僕が心配する事じゃないな。

変化の無い、気が狂いそうな退屈な毎日。僕が生まれてからどのくらいの月日が経ったんだろう。殺風景な部屋には時計も、カレンダーも無かった。窓から見える太陽の位置で、大体の時間を知る事が出来た。何日経とうが僕にはどうでもよかった。誕生日を楽しみに待つ子供じゃあるまいし。馬鹿馬鹿しい。

「ゼロ！隠れて！」

アレックスが僕の腕を掴み、ベッドの陰に引き摺りこんだ。僕達が隠れると同時に部屋のドアが開き、白衣を着た男が数人入ってきた。彼等は品定めするような視線で子供達を見回した。数人の子供を選び、彼等は出て行った。足音が離れていくのを確認すると、僕達はベッドの陰から這い出た。

「アイツ等は何なの？」

「悪い人達だよ。僕達を実験台にしてるんだ」

「連れていかれた子達はどうなるの？」

「…知らない。多分、あの子達は…」

途中で途切れた言葉の続きは解った。彼等は二度と戻って来ないつまり、死ぬという事だ。

「死ぬんだ」僕は言った。息をするように簡単に。アレックスの表情が暗くなった。彼が頷く。怖いのかと訊くと、また頷いた。

死という事は怖い事なのか。神様から貰った命を返すだけなんだ。何が怖い？何を恐れる？

呼吸が止まり。

身体を清められ。

祈りの言葉を聞きながら土に埋められ、あるいは火に焼かれる。

灰になった骨が、飛んで行く。

土に埋められた身体が、還っていく。

ただ、それだけなのに。

いや、

それだけだから、怖いのか…。

次の朝、目覚めるとアレックスの姿が見当たらなかった。僕を見つけると、いつも駆け寄って来るのに。昨日よりも子供の数が減っていた。まさか、大人達に連れて行かれたのか？僕の中に不安が芽生える。不思議だった。少し驚いた。他人なんてどうでもいいと思っっている僕が、他人を心配するなんて。壁の向こうから足音がした。革靴の音。間違いない。あの男だ。カチリとロックが外され、ドアが開いた。

「おはよう、ゼロ君。気分はどうだい？」

「…彼はどこ？」

「彼？」

「アレックスがいらないんだ。どこに連れて行ったの？」

「ああ……」男の目が驚いたように丸くなった。「息子に会いたいのかい？」僕は頷いた。

「あなたの息子なの？」僕はまた驚いた。間抜けな顔をしていたのだろうか。男が口元に笑みを浮かべた。

「そうだよ。アレックスは私の可愛い息子だ。特別に会わせてあげよう」

男の後に続き、部屋を出た。部屋から出るのは本当に久し振りだ。空気もクリアだ。廊下を曲がり、エレベータに乗った。身体が引く張られる感覚。地下に着き、エレベータを降りる。薄暗い、湿った冷たい空気だ。青白く光る蛍光灯が見下ろしている。神様気どりのソイツを睨んでやった。

「さあ、入りたまえ」

室内はとても広かった。見た事も無い機械が並び、訳の解らない数字がモニターに羅列している。0と1の世界。頭が痛くなりそうだ。長く、太い容器の中に、居なくなった子供達が浮いていた。全身に細いチューブが絡みついている。僕と同じだった。容器に貼られたラベルに「廃棄」と書かれていた。

「少し待っていてくれ」

男は部屋の奥に行った。頑丈な扉が見えた。あの奥に、アレックスが居るんだ。僕は近くにあった椅子に座った。科学者達は僕の存在に気付いていない。気付かない振りをしているのか、忙しそうに動き回っている。それとも、僕は幽霊で、あの男とアレックスにか視えないのかもしれない。デスクの上に書類が置かれていた。手に取り、ページを捲ってみる。緑色の髪の毛の少年の写真が貼ってあった。年齢、身長と体重。出身地等が詳細に書かれていた。その中に書かれていた「キメラ」という文字が気になった。

「コラコラ。駄目だよ、勝手に見ちゃ。それはトップシークレットなんだ」

困ったような声が頭上から降ってきた。戻って来た男が僕を覗き

込んでいた。

「この人誰？」

「彼はあるプロジェクトの被験者だよ。今は優秀なパイロットとして活躍しているようだ。これ以上は言えない」

「キメラって何？」

「ノーコメント。アレックスはこっちだ」

男はドアの脇にある端末にカードキーを通し、フケタのナンバーを打ち込んだ。僕の目は彼の指を追い、ナンバーを頭に刻み込んだドアが開く。病室のような部屋だった。ベッドの上にアレックスが横たわっていた。顔色は病人みたいに青白かった。機械から伸びたチューブが華奢な腕に刺さっている。また来るよと言い、男は出て行った。僕は彼に近付いた。名前を呼んでみた。瞼が動き、萌える緑の双眸が僕を捉えた。

「…ゼロ…？」紙ヤスリのようにザラザラして掠れた声だった。

「ひさしぶり。会いに来たよ」

「嬉しいな…君に会えないと思ってた」

「僕も。何があったの？」

アレックスは身体を起こし、僕を見つめた。長い間じつと。視線で僕の身体に穴を開けるつもりか？

「…よく覚えていないんだ。注射を打たれて、その後気持ち悪くなった。意識が無くなって、目が覚めたらゼロがいた。でも…」

「でも？」

「マナとか、遣伝子とか…言ってたよ」

マナという言葉に僕は強く惹かれた。何だかとても懐かしい響きだ。生まれる前から知っているような気がした。ドアが開き、男と女性が入って来た。

「さあ、面会時間は終わった。ゼロ、部屋に戻ろう。アレックス、薬の時間だ」

脇に控えた女性が靴から注射器を出した。アレックスの表情が強張った。ウサギみたいに震えている。僕はここに残り、彼の側に居

たかった。でも無理だった。男に手を引かれ、あの部屋に連れて行かれた。子供の僕は、大人の男に抗う術を持っていなかった。

部屋は無人だった。子供達も居ない。僕一人だけだ。白い無人島にただ一人。ベッドに潜り込み、目を閉じた。誰も居ない空を飛ぶ夢を見た。

真夜中、僕は目が覚めた。こういう時は大抵何かが起こる。偶然流れ星を見たり、幽霊と出くわしたり、宇宙人と遭遇したり。室内を黒い影が動き回っていた。幽霊？宇宙人？影は何かを探しているようだ。僕はベッドから出て、影の側に行った。

「ねえ」影が震えた。電気のスイッチに伸びた僕の手を影が遮った。「駄目。明かりはつけなくて」女性の声だ。少しの間後、小さな明かりが灯った。懐中電灯だ。

「貴方、アレックスの居場所を知ってる？」

濃い栗色の髪と、アレックスと同じ緑の瞳。どことなく雰囲気は彼に似ている。血縁者だろうか。

「誰なの？」

「あの子の母親よ。お願い、教えて」

「ここにはいない。地下にいるんだ。案内するよ」

僕は記憶にある男の歩いた道のりをそのままぞった。エレベータで地下に降り、研究施設に着いた。幸い中に人は居なかった。僕はドアの前に行った。カードキーを持っていない事に気付き、女性を見上げた。女性が服のポケットからキーを取り出し、端末にスライドさせた。僕が暗証番号を打ち込む。飛び込むように彼女は中に入った。

「アレックス！」

ベッドの上のアレックスはぐったりとしていた。数時間前はあれ程元気だったのに。瞼が動く。彼が目を開けた。濃い隈の浮かんだ顔が、弱々しい笑みを浮かべた。

「ゼロ…母さん…？」女性に支えられ、アレックスが身体を起こした。

「ああ……！無事でよかった。ここから逃げるわよ！」

「待って！ゼロも一緒に連れてって！」彼女が振り向き、僕を見た。驚き、そして納得した顔。

「……ええ、そのつもりよ。さあ、早く行きましょう」

僕達は彼女に連れられ、部屋を出た。来た道を急いで戻る。廊下を走っているときたたましい音が響いた。警報ベルの音だ。どうやら見つかってしまったようだ。一斉に明かりがつく。僕達を捜すように足音が木霊する。施設の外に飛び出し、サーチライトの光を避けて森に逃げ込んだ。黒い森の中を僕達はひたすら走った。こんな緊迫した状況なのに、頭上はとても綺麗な星空だった。立ち止まって、じっくり星座を探したかったけど、彼女に怒られそうだ。前方に小さな明かりが見えた。木で造られた小さな小屋だ。

「誰だ？」鋭い声が聞こえた。

「私よ。エレノアです」

僕達の後ろの茂みから青年が出て来た。穏和そうな顔立ち。月の光に銀色の髪が光る。

「無事でしたか……。帰りが遅いので心配したんですよ。ここは目立ちます。さ、中へ」

青年の後に続き、僕達は小屋の中に入った。中は狭かったけど、あの部屋と比べたら天国だ。暖炉には火が灯り、パチパチと薪がはぜている。エレノアは手早く簡素な食事を作ってくれた。その間に青年が自己紹介した。彼の名はシエダルといい、アンティオキアの軍事活動に反対しているらしい。いわゆるレジスタンスというヤツだ。食事を終えるとエレノアとシエダルは窓の側で話し始めた。声は小さく、聴き取りにくかった。僕は二人に気付かれないギリギリの距離まで移動した。バレても星を見ていたと誤魔化せる絶妙の位置だ。

「ありがとう、シエダル。貴方達の協力で、二人を助ける事が出来たわ」

「いえ。それにしても、アルジャーノン博士も惨い事をしますね。」

…実の息子を実験台にするなんて…」

「あの人はマッドサイエンティストよ。もう夫でも何でもありません」

「…あの子、ゼロが…ジエネシスですか？」

「ええ」二人の視線がこつちを向いた。僕は慌てて窓の外を眺めているふりをした。

「信じられないな…。見た所、普通の子供じゃないですか」

「私も驚いたわ。あの人はオリジナルを創ったと言っていた。多分、彼がそうね。それからまたジエネシスを創ろうとしたけど、完全な個体は創れなかった。唯一成功したのが…アレックスよ」

エレノアの声が詰まった。嗚咽が漏れる。彼女は口を手で隠すと、ごめんなさいと呟いた。

「課題が山積みね…。アークを破壊しないと…たくさんの悲劇が生まれるわ。また貴方達に協力してもらおう事になるけど、構わない？」

「勿論です。今日は休んで下さい。奥に部屋があります」

「ありがとうございます」

エレノアは椅子の上でうとうととしているアレックスを起こした。

シエダルが彼を抱き上げ、ベッドに運んでくれた。シエダルはおやすみと言うと、ドアを閉めた。ドアの向こうから二人の会話が微かに聞こえてくる。今後の事を話し合っているのだろう。僕はベッドに寝転んだ。逃げる途中で見た星空を思い出し、見ようとしたが、天井が邪魔をした。目を閉じたら見えるかもしれない。目を閉じてみた。正解だった。瞼の奥に星空が浮かんだ。二人が話していたジエネシスという言葉が頭の隅に引っ掛かっていた。施設に居た時から思っていた疑問が確信に変わった瞬間だった。

僕は、人間じゃない。

「これがパスポートです。国境の近くに仲間がいます。気を付けて」シエダルからパスポートを受け取り、僕は国境に向かった。彼

の仲間が僕達を待つていた。黒い髭の男だった。縦にも横にも大きい体形で、熊みたいな奴だ。男が手招きし、後に続いた。彼が運転する車に乗り、僕達は国境を越えた。固い灰色のコンクリート。白い線が流れていく。車に乗るのは初めてだ。揺れが酷い乗り物だ。しばらく走り、車は屋敷の前で止まった。僕達を降ろすと車は走り去った。

とても大きな屋敷だ。門の柵が槍みたいで、近付いたら串刺しにされそうだ。エレノアが門に近付いた。僕は彼女が串刺しになるんじゃないかと心配したが、エレノアは門を開け、中に入った。アレックスも後に続いた。僕は躊躇し、ぼんやりと立っていた。

「大丈夫よ。行きましよう」

エレノアが僕の手を握った。彼女の手は温かく、僕の抱いている不安を追い払ってくれた。彼女が言うにはこの屋敷はエレノアの両親の家らしい。どうやら、僕はしばらくここで暮らす事になるようだ。エレノアとアレックス、彼等の祖父母も僕に優しく接してくれた。けど、優しくされればされる程、僕は自分の居場所が無くなっていくような気がして仕方が無かった。僕も出来るだけ自然にふるまおうと努力したが、多少のぎこちなさがあったと思う。どうしたらいいのか解らなかつた。スライドでは学べなかつた。

僕はぼんやりと空を眺めていた。身体の下にある芝生は高価な絨毯のような座り心地だ。ゆっくりと雲が横切っていく。自由で、縛られない彼等が羨ましい。

「隣、いいかしら？」

庭を横切り、エレノアが僕の隣に立った。断る理由も無いので頷いた。エレノアが隣に座った。香水の香りがした。

「何か用ですか？」

「貴方に話があるの」

「丁度よかつた。僕も訊きたい事があります。先に話してもいいですか？」

「ええ。どうぞ」僕は一呼吸した。

「ジエネシスって何ですか？」

エレノアの表情が強張った。予想していた通り、彼女は無言だった。僕が何も知らないと思っていたんだろう。僕は彼女の答えを待った。

「…聞いていたの？」僕は頷く。「…いずれ、話さなければいけないと思っていました」

エレノアはまた口を閉ざした。言葉を整理しているのだろう。

「…ジエネシスは遺伝子にマナを組み込んで創り出されたヒトの事を言います。生み出された目的は一つ、世界樹を発見する事。ゼロ、貴方はオリジナルと呼ばれるこの世界に一人しか存在しないジエネシスなの」

「アレックスは？」

「あの子は、半分ジエネシスで、半分ヒト。人間の血が濃いわ」

「…僕は、人間じゃない」

「いいえ、貴方は人間です。人為的に生み出された命とはいえ、貴方は一人の人間よ。ゼロ、私のお願いを聞いてくれる？」

「うん」

「私の息子になってくれない？」

唐突にエレノアが言った。僕は彼女の言葉を理解するのに時間がかかった。何を言っているんだろうと思った。

「どういう事？」

「そのままの意味。私の息子になって欲しいの。名前もちゃんと用意してあるわ。アッシュ。アッシュ・ブルー。どう？いい名前でしょう？」

僕は何も言えなかった。うまく言い表せない感情が、僕の深い場所から湧き出てくるのを感じた。喉の奥が痛くなり、鼻の奥が熱くなった。両目から液体が流れた。目尻に触れてみた。指が濡れる。僕は泣いていた。

「…アッシュ」

「僕は…生きていいいの？」

ずっと思っていた事を言葉にした。ますます胸が苦しくなり、僕は泣いた。

神様は無慈悲で残酷だ。

勝手に創っておいて、飽きたら知らんぷりするのだから。

「そんな事を言わないで。私も貴方も、生きる為に生まれてきたのよ」

エレノアが僕を引き寄せ抱き締めた。とても優しく、柔らかかった。雲の中に身を沈めているような感じ。彼女は僕が泣きやむまで、ずっと抱き締めてくれた。

僕はアッシュ。アッシュ・ブルー。

もうゼロじゃない。

僕は、産声を上げた。

オレは高い所が好きだ。少しでも空に近い所に居たいから。手を伸ばせば掴めそうなのに、やっぱり届かない。意地悪な野郎だ。屋根の上はオレのお気に入り場所だ。エレノアもアレックスも危ないから止めると言いやがるが、止める気はない。

「ゼロ…じゃないや。アッシュ、搜したよ」

窓が開き、アレックスが顔を出した。マロンペーストの髪が揺れる。器用に壁を伝い、オレの隣に来た。一年前はオレと同じくらいの背丈だったのに、コイツはオレよりでかくなっていた。成長期真っ盛りか。ジエネシスであるオレは殆ど成長しない。

「何だよ」

「母さんに話したんだって？その…パイロットになりたいって…」

「…ああ」

「何でなりたいの？」

「空で死ねるから」

簡潔に言った。簡潔に短く、無駄な言葉を削ぎ落とした答え。アレックスは黙っていた。

「僕も、なるよ」

「何に」

「パイロット」

「寝言は寝てから言えよ」

「本気だよ。お前を一人にさせたくないから」

沈黙。静寂が訪れた。冗談かと思っただけ、アレックスの顔は真剣そのものだった。鬱陶しくて、嬉しかった。相反する思いを感じるなんて、人間は複雑な生き物だ。

「このおせっかい」

「何とでも言えよ。そうそう、母さんが呼んでる。会わせたい人が来てるって」

オレ達は屋根から下り、室内に戻った。階段を下りると、廊下でエレノアが待っていた。穏やかで、理知的な笑顔。見る度に安心する。

「また屋根に居たのね？何度言ったら解るのかしら。二人に会わせたい人が居るから、来て頂戴」

彼女の後に続き、応接間に入った。広い室内に木霊する時計の音。窓から木漏れ日が差し込んでいる。男が一人、壁に飾られている絵を眺めていた。

「お待たせしてごめんなさい」

「いえ。気にしないで下さい」

男が振り向いた。まだ若い。オレより少し年上だろう。背が高く、紺色のスーツを着ている。女にモテそうな顔立ちだ。切れ長の琥珀色の目は、ナイフのように鋭い。どこかで見た顔だった。そうだ。施設で見た書類に貼ってあった写真の少年に似ている。

「彼はノワリー・エリオット大尉。ユグドラシル基地の指揮官で、チームヴァルキリーの隊長よ」

「よろしく」短くノワリーが挨拶した。

「チームヴァルキリーって…あの大战で活躍した？じゃあ、貴方が光の槍？」

オレの隣でアレックスが叫んだ。興奮で顔が紅潮している。

「もう過去の事だよ。私は引退した」暗い口調と、影のある微笑。

「お偉い様がオレ達に何の用ですか？」

「ジェネシスの事をエリオット大尉に話しました。貴方達二人を、ヴァルキリーに入隊させてくれると言ってくれたわ。大丈夫、彼は信頼できる人です」

「でも…養成学校を卒業しないと駄目なんじゃ…」

アレックスが疑問を口にした。誰もが思う当たり前の事だ。

「君達二人が大勢の人間の中で過ごすのはリスクが大きいだろう。ジェネシスである事が公になれば、二人は軍に連行されてしまう。私の管轄下にあるユグドラシル基地に居れば、君達は安全だ。エレノアさんはそれを考慮し、私に君達を託す決断してくれた。安心してくれ、必ず君達を守る」

パイロットになりたい。オレの夢をかなえる為に、エレノアはこの青年に頼みこんだのだろう。ノワリーの言葉に誠意を感じた。彼女が信頼している男だ。オレもほんの少し信じる事にした。

一週間後に迎えに来ると言い、ノワリーは立ち去った。色々準備をしている内に、あつという間に一週間が過ぎた。持って行く物はあまりなかった。小さな鞆を肩に提げ、玄関に行った。エレノアが待っていた。

「…気を付けて。身体を大事にしてね。これ、貰って頂戴」

エレノアはポケットからペンダントを取り出し、オレの首にかけた。兵士が身に着ける認識票みたいなデザインだ。シルバーのペンダントトップに文字が刻まれてあった。オレの名前だ。

「…ありがとう」

「忘れないで。貴方の帰る家はここだから…ずっと待ってるわ」

「…うん。必ず、帰って来るよ。行って来ます」

エレノアは優しく抱擁して送り出してくれた。

アレックスの呼ぶ声。アイツが居る。

オレは独りじゃない。

扉を開けた。
大空に続く扉を。

初めて彼と出会ったのは七年前だった。この日は良い天気だった。昨日から計画していた通り、庭に新しい花を植えようと思った。花の種もちゃんと買ってある。汚れても平気な服を箆笥から引っ張り出し、部屋で着替える。肥料を抱え、庭に出た。シャベルを騎士が持つ剣のように勇壮に構え、大地という大いなる敵との一騎打ちを開始した。

最初は固かった土も、掘り進める内に素直になってきた。ケーキのスポンジみたいに柔らかく変化している。拳大の穴を掘ると、種の入った袋の封を開けた。適当な数を摘まんで穴の中に落とす。次に肥料の袋を開け、説明書きを見ながら適量を穴に入れた。その上に土を重ね、シャベルで叩いて固めた。あとは水をやるだけ。中腰だった姿勢を起こし、身体を伸ばした。

「メアリイ！ ただいま！」

懐かしい声が後ろから彼女を呼んだ。振り向くと、柵越しに姉が覗きこんでいた。数週間ぶりの姉との再会に心が躍った。シャベルを放り出し、庭を回り込んで門を開けた。家の前の階段を駆け下り、シルヴィに飛びついた。背中に羽が生えているような跳躍。輝くような笑顔が見下ろし、次いで顎められた。怒っているのではなさそうだ。顔が半分笑っているから。

「こら！ お客様が来てるんだから、もう少しおしとやかにしなさい！」

「お客様？」

シルヴィの後ろに若い男性が立っていた。四歳程年上だろう。庭の緑よりも濃い色の髪に、琥珀色の目。細身のスーツが嫌味なくらい似合っている。陽光の光をスーツの生地が滑らかに反射していた。

高級な素材で作られたものだと思う。一般市民には手が出ない値段。自慢する為にわざわざ着て来たのかしら。彼は溜息が出る程端正な顔立ちをしていた。きつと、太陽神もこんな顔をしているのかもしれない。

「こんにちは」

長身の身体を折り、男性が会釈した。洗練された優雅な動作。育ちの良さが窺い知れる。形のいい唇が微かに微笑んだ。挨拶を返さなければいけないと思った。全身の血流が顔に一気に集中した。みるみる顔が赤くなっていくのが解った。

「こつ……こんにち……はっ……」

情けない声が口から出た。我ながら情けないと思った。これ以上彼と顔を合わせているのは無理だと即座に判断した。失礼だと解っていたが、急いでターンした。玄関のドアを開け、二階に続く階段を駆け上がる。部屋に帰還。ベッドにランディング。うつ伏せになり、枕に顔を埋めた。心臓の温度が急上昇していた。

玄関のドアが開く音。足音が廊下を通って行き、リビングに入っていた。シルヴィと男性の足音だろう。両親と楽しく談笑している。彼等の輪の中に入っていくたかつたが、そんな勇氣は無かつた。ヘラクレスのような勇氣があれば、堂々としていられるのに。

「そつだ！水をやらないと」

思えば数週間雨が降っていなかった。神様が世界中を砂漠にしようとしているのかもしれない。庭の植物達が、早く水をくれと叫んでいるのが今にも聞こえてきそつだ。リビングを通らずに、外に出られる事が救いだつた。出来るだけ足音を立てずに階段を下りた。まるでスパイみたいだ。静かにしてねとドアに囁きながら、鍵を開けた。

太陽の光が容赦なく肌を焼く。お気に入りの白い帽子をかぶり、庭に行った。ホースを蛇口に繋ぎ、栓を捻つた。水が勢いよく吐き出され、植物に恵みを与える。鼻歌を歌いながら、順番に水をやっていった。

「メアライ」

「きやつ？」

天敵に見つかったウサギのように飛び上がった。パイロットが感心する程の見事なターンで振り返った。リビングに居るはずの青年がいつの間にか背後に立っていた。そんなに驚かなくてもいいのに、と思ったのだろう、彼は残念そうな顔をしていた。

「さつきはちゃんと挨拶できなかったから。俺はノワリー・エリオット。君のお姉さんとお付き合いしてる」

律儀な人だと思った。彼の名前なんて後で姉から聞くのに。それだけを言いにはわざわざ来たのだろうか。姉や家族との楽しい会話を中断させてしまった。

「あの…さつきはごめんなさい…いきなりでびっくりしたの」

ホースを握る手が震え、落としてしまった。ぎゅっとスカートを握り締める。蜘蛛の巣みたいな皺が広がった。あの端正な顔が自分を見つめていると思うと、彼を直視できなかった。

「花が好きなの？」ノワリーが近付いた。

「あ…うん。お姉ちゃんも好きよ。この白百合が大好きだって言うてた」

庭の中央に咲いている百合を指差した。姉のお気に入りの花。私も大好きな花だ。

「俺も、好きなんだ」意外な言葉に驚いた。

「本当？」

隣に立つノワリーを見上げた。彼は頷いた。空と地上みたいに距離が離れているノワリーと共通のモノを見つけた事がとても嬉しかった。庭に面した窓が開き、シルヴィが顔を出した。二人を見つけると、シルヴィは笑った。真似出来ない、輝くような笑顔。

「ノワリー！メアライ！おやつにしましょう！アップルパイを焼いたの」

香ばしい匂いが鼻に届いた。香ばしすぎる気もするが、気にしない事にした。シルヴィは料理が苦手なのだ。

でも、これから死に物狂いで特訓するだろう。
こんな素敵な恋人がいるのだから。

この日は一人だった。両親と姉は買い物に行っていて、夕方まで帰って来ない。姉はまた休暇を貰い、家に帰って来た。ノワリーは一緒じゃなかった。安心すると同時に残念だった。留守番の任務はとて退屈だった。学校も日曜で休みだ。テレビ番組もどれもこれも同じような内容でつまらない。じっとしているのも時間の無駄だ。庭いじりをする事にした。軍手を箆笥から出し、庭に行った。ぶちぶちと雑草を引き抜く。

「メアライ」

「きゃっ?」

背後から名前を呼ばれ、驚いて叫んでしまった。振り向いた。柵の向こうにノワリーが居た。この前と同じスーツ。相変わらず身だしなみが整っている。厳しい家庭環境で育ったのだろう。名門エリオット家の嫡男だと家族から聞いた。アルジャーノン家に次ぐ名門貴族の名前だ。

「こっ…こんにはっ…」声が震えた。前よりはマシだった。多分、震度5くらいだろう。

「お姉さんに会いに来ただけど…居る?」

「買い物に行つてて…夕方まで帰らないの。携帯持つてるから、電話しようか?」

「いや、大丈夫だ。待たせて貰っても構わないか?」

「え?うん。あ、じゃあ、どうぞ…」

「ガーデニングしてるの?」

「うん。暇だから」

「俺も手伝うよ」

そう言うと、ノワリーはジャケットを脱いだ。ネクタイを緩め、シャツの袖を捲る。暇だからねという気さくな答え。貴族の人間は

他人を見下す者が多いと思っていた。姉が選んだ人なのだ。そんな事は無い。ノワリーはいい人だ。

「何をすればいいかな」

「えっとね…じゃあ、雑草取り、お願いします」

「了解しました。指揮官殿」

ユーモアに満ちた返事が返ってきた。彼は屈みこむと、雑草を抜き始めた。名門貴族の跡取り息子が腰を屈めて雑草抜きをしているなんて、誰も想像出来ないだろう。この事がエリオット家の者に知られたら、ギロチンで首を刎ねられそうだ。

ノワリーは時々身体を伸ばしながら、黙々と作業を続けている。彼の指は長く、しなやかな形だった。雑草取りにはむいていない、繊細なライン。ピアノの鍵盤を優雅に弾いている姿が浮かんだ。鼻筋の通った横顔をぼんやりと眺めていた。

「メアリー？」 我に返ると、ノワリーがすぐ近くに居た。僅かに首を傾げて見つめている。

「はっ…はいっ？」

「とりあえず、抜き終わっただけ…」 庭の隅に大量の雑草が積まれていた。

「ありがとう。疲れたでしょ？お茶にしましょうよ」

二人は家の中に入った。ノワリーをリビングで待たせ、キッチンに行った。戸棚から紅茶のティーバッグとクッキーの箱を取り出す。ポットとカップ、クッキーをトレイに乗せ、リビングに戻った。ノワリーの隣に座りたかったけど、そんな度胸は無かった。斜め向かい側に座るのが精一杯だった。

「この紅茶、美味しいね」

紅茶を一口飲んだノワリーが感想を漏らした。高級な物を飲み食いしている筈なのに、本当に美味しいと思ったのだろうか。舌が肥えずぎて、高級な物に飽きているのかもしれない。卑屈な考えを頭を振って追い払った。

「あの…エリオットさんはお姉ちゃんに何の用で来たの？」

「大した理由は無いよ。シルヴィに会いに来た。それだけ」

「お姉ちゃん、喜ぶよ」

玄関のドアが開く音がした。足音が廊下を通り、リビングに近づく。両親とシルヴィが姿を見せた。

「ただいま、メアリー。…ノワリー？来てたの？」

「ああ。迷惑だったかな」

「そんな事ないわ。…凄く嬉しい」シルヴィがはにかんだ。頬が少し赤かった。

夕食を御馳走になり、ノワリーは帰って行った。その日の食卓は賑やかで温かった。人が一人増えるだけでこんなに雰囲気が変わるものなのか。いずれ、これが日常となり、当たり前になるのだろう。隣同士に座った二人は幸せそうに語り合い、笑い合っていた。

二人の姿は美しく、綺麗で、一枚の絵画から抜け出たようだった。グラスのガラス越しにそれを眺めていた。

姉の恋人に恋をした。

この想いが許されない事だとは解っている。

禁断の果実を口にし、人類が知恵をつけたように、罪深いモノだという事も。

ノワリーと出会ってから二年が経った。シルヴィとノワリーの仲は順調で、喧嘩する事も無く二人は愛を育んでいった。このままいけば、彼等は結婚するだろう。学校の宿題を終えて教科書を閉じた。今夜は何故か無性に胸騒ぎのする夜だった。夕食も美味しかった。家族との団欒も楽しかった。宿題も終わった。それなのに、何でこんなに不安を感じるんだろう。

机のライトを消した時、窓の外が小さく光った。同時に爆音と振動が住宅街に響いた。姉とノワリーが所属しているユグドラシル基地の方向だった。ノックが二回。ドアが開き、デイヴィットが入って来た。

「お父さん！何があったの？さっきの…基地の方から聞こえたよ？」
「アンティオキアがクルタナに宣戦布告をしたらしい。シエルターに避難する。急いで荷物をまとめなさい」

頷いた。数日分の着替えと本を数冊鞆に詰め込んだ。一階に降りると、深刻な顔をした両親がテレビの画面を食い入るように見ていた。髪をワックスで後ろに撫で付けたキャスターが、ニュースの原稿を読んでいる。「アンティオキア宣戦布告！」という字幕が大きく映し出されていた。

『この事態について政府は、先程記者会見を行いました。軍を総動員し、直ちに攻撃を開始するそうです。この作戦にはユグドラシル基地に所属する飛行チーム、ヴァルキリーも参加するそうです』
テレビの電源を切った。シルヴィとノワリーも駆り出されるのだろうか。

「お母さん…お姉ちゃんは大丈夫かな…ノワリーさんは…」

「二人はきつと大丈夫よ。さあ、行きましょう」
アンティオキアの国境に近いこの街には、無数の避難シエルターが設置されている。核にも耐えられる金属で作られていて、一つのシエルターに約四千人が避難できるのだ。近所の人と友達も居た。軽く会話を交わし、割り当てられたスペースに座った。デイヴィットはラジオを鞆から出し、スイッチを入れた。ノイズが多かった。アンテナを伸ばすと、途切れ途切れに音が入ってきた。リポーターの興奮した声が聞こえる。

『私は今、ユグドラシル基地に居ます。これからチームヴァルキリーが飛び立つようです！敷地内に入れないので遠目からですが確認出来ません。今ヴァルキリーが飛び立ちました！関係者の話によると、ヴァルキリーの隊長は、あのノワリー・エリオットだそうです！』

愕然とした。ノワリーは違うチームに所属している筈。シルヴィも一緒に居るのだろうか。

『アンティオキアの軍事力はクルタナの何倍とも言われていますが、

我々には光の槍がいます！彼が必ず勝利に導いてくれるでしょう！
以上、現場からお伝えしました！』

これ以上聞きたくなかった。身体を丸め毛布にくるまった。地上で音が響く。ここに居れば安全だ。けど、シルヴィとノワリーは命を懸けて戦っている。ぎゅっと両手を握り締め、二人の無事を祈った。これ程必死に神に祈った事は無かった。都合が良すぎると思われるても構わない。大切な二人を無事に返して欲しい。

眠る事なく朝を迎えた。怖いくらい静かな朝だった。ラジオのスイッチを入れ、じつと聞き入った。大戦は終結し、クルタナが勝利したというニュースが耳に飛び込んできた。双方の被害状況の情報は解らなかった。

大戦が終結した日から数日後、軍の関係者が家を訪ねて来た。応対に出た母に封書を渡すと、彼は去って行った。母の指が封を破る開けちゃ駄目と言いたかった。嫌な予感がした。平和だった日常が一気に壊れていくような気がした。

手紙を読んだりリイが崩れ落ちた。蹲り、丸くなった背中の中このうから嗚咽が聞こえる。電話に駆け寄り、急いで父の勤める会社に電話した。父が帰って来るまで母の背中を撫で続けた。

姉が死んだ。空軍本部から届いた封書にはそう書いてあった。お悔やみ申し上げます。儀礼的なその文章が酷く腹立たしかった。軍は死んだ人達の事など、これっぽっちも思っていないのだ。一欠片の悲しみの感情も抱いていない。美しい謳い文句を掲げれば、兵士などすぐに集まる。彼等は使い捨てなのだ。

シルヴィの遺体が収容されている病院に向かった。デイヴィットもリイも無言だった。湿った土のような重苦しい沈黙が、車内を押し潰していた。少しでも沈黙から逃れたくて窓を半分開けた。姉が死んだというのに、空は清々しい青色だ。機影を探した。シルヴィが墜ちたというのは嘘で、今も元気に空を飛んでるんじゃないか。

病院に着くまでずっと飛行機を探していた。結局、見つからなかった。

医師に案内され、霊安室に行った。白い布の下から現れたシルヴィはとても穏やかな顔だった。とても。死んだとは思えなかった。「シルヴィさんの死因は出血性ショックでした。腹部に受けた銃創から大量に出血したようです。機体が墜落し、炎上した時にはすでに息を引き取っていたようです」

医師の言葉がぼんやりと頭に響いた。世界の果てから届いているような感じだった。リリイが泣き崩れた。魂の底から泣いているような声。絞り出すような声は、虚しく霊安室に木霊した。デイヴィットに支えられ、母は出て行った。

「彼女の妹さんですか？」医師が話しかけてきた。

「はい」

「これをお渡します」

医師は白衣のポケットから小さなビニール袋を取り出すと、手渡した。封を開け、中身を掌に転がす。

「…これ…」

言葉が出なかった。酷く折れ曲がった、シルバーのリング。シルバーの相棒が痛々しい姿をしているというのに、ダイヤモンドは何も知らずに無垢な輝きを放っていた。リングの裏を見た。「N・EとS・R、二人の愛は永遠に」という文字が刻まれてあった。部屋の暗い明かりを反射し、文字が光った。ノワリーがシルヴィに贈ったエンゲージリングだった。二人は結婚を誓い合ったのだ。言いようのない感情が込み上げた。

「馬鹿！お姉ちゃんの馬鹿！何で死んじゃったの？私達に全部押し付けて…全部置き去りにして…！ずるいよ…酷いよ…。お願い…目を開けて…帰って来てよお…お願い…」

泣いた。そして憎んだ。

姉にこんな運命を与えた神様を。

姉を奪った空を。

あの平和で、幸せな日々には戻れない。
もう、二度と……。

ノワリーが同じ病院に入院している事を知った。彼は重傷を負ったが一命を取り留めたらしい。両親は会いに行くなど何度も言った。掌を返した様な態度の急変だ。シルヴィが死んだのはノワリーの所為だと思っているのだ。それは間違っている。

こつそりと家を抜け出し、病院に行った。受付で病室を聞き、向かった。お見舞いに大好きな白百合の花束を持って。ノックをした。返事が聞こえる。ドアを開け中に入った。

「こんにちは…ノワリーさん」

挨拶をした。窓際のベッドに居るノワリーがゆっくりと振り向いた。

「…メアリー？」

ノワリーは酷く驚いた様子だった。昼食を終えたばかりなのだろう、サイドテーブルの上にトレイが置かれていたが、食事の大半は残されていた。彼はやつれていた。両目の下には濃い隈がくつきりと浮かんでいた。頭に巻かれた白い包帯が怪我の深さを主張していた。萎えそうになる自分を奮い立たせた。

「お見舞いに来たの。これ、百合の花束。私が育てた花よ」

花を包んでいる紙をゴミ箱に捨て、サイドテーブルにある花瓶に入れた。

「…帰ってくれないか」棘のある声が背後から聞こえた。

「え？」

「悪いけど、帰ってくれ」

「どうして…？」

振り向いた。ノワリーと目が合った。鳥肌が立った。彼の琥珀の双眸は、憎しみに満ちていた。

「帰ってくれっ！」

ノワリーが花瓶を掴み、床に叩きつけた。陶器の割れる音。床に花が投げ出された。水が広がり、床に染みを作った。無残に散らばった白百合。ノワリーが喜ぶと思って、大切に育てたのに。花が好きだというのは嘘だったの？心の奥で何か音が立てて壊れた。涙が溢れる。服の袖で顔を隠し、病室を飛び出した。逃げるように家に帰った。

自室のベッドに蹲り泣いていると、リリーが呼びに来た。リビングに下りると、厳しい顔をしたデイヴィットが待っていた。

「…何？」

「座りなさい」いつも穏和な父に相応しくない声色。大人しく正面に座った。

「…彼に会いに行ったそうだね。止めなさいと何度も言った筈だが…」

「会いに行ったわ。何がいけないの？」

「シルヴィを殺した男だ。二度と会いに行かないと約束しなさい」
「違うわ！ノワリーさんはお姉ちゃんを殺してない！彼の所為じゃない！二人共酷いわ！あんなに親しくしてたのに、態度を変えて…全部ノワリーさんの所為にするなんて間違ってる！理不尽よ！」

「メアリー！」

これ以上リビングに居たくなかった。このまま居続ければ、両親に酷い言葉を投げかけてしまいそうだった。離脱し、部屋に戻った。ベッドに飛び込み、毛布をかぶった。二人の気持ちは解る。娘を失った悲しみや怒りをどこにぶつけたらいいのか解らないのだ。勿論、私もそうだった。けれど、ノワリーを憎んだりしていない。二年経った今でも、彼が好きだった。

もう一度ノワリーに会いに行こうと思っていた。けど、あの日の彼の顔を思い出すと怖くなった。明日行こうと思っている内に、数ヶ月が経ってしまった。風の噂でノワリーが明日退院すると聞いた。明日行かなければ二度と会えないと思った。今度こそ会いに行こう。またこっそりと病院に行った。堂々と行けばいいのに、何で自分

はこんなに臆病なんだろう。両親を傷つけないからか。違うと思う。両親に嫌われるのが怖いからだ。ノワリーの病室は知っている。ロビイに足を踏み入れると、勇気が萎えてしまった。またあの目で睨みつけられたら、どうすればいいのだろう。ぼんやりとソファに座った。

「人違いならすまんが…もしかして、シルヴィの妹さんかね？」

俯いた頭上から声が降ってきた。顔を上げた。老齢の男性が見下ろしていた。日に焼けた赤銅色の顔に、サンタクロスみたいな真っ白な髭。オイルで汚れたツナギに、ユグドラシル基地のエンブレムが着けられていた。頷くと老人は隣に座り、ヴァルカンと名乗った。チームヴァルキリーのメカニックだったらしい。

「ほお…お姉さんに瓜二つじゃな。美人な所もそっくりじゃ」

「そんな…姉の方が綺麗ですよ」

「ノワリーに会いに来たのかね？」

「…はい。でも…怖くて…」

「怖い？」

「…この前会いに行った時の彼は…凄く怖かった。やっぱり…もう会わない方がいいかもしれません」

「…ワシは会って欲しいと思っておる」

思わずヴァルカンを見た。優しく、諭すような視線が見つめ返してきた。

「ノワリーはの…全てを失った。チーム、友人のイージスに……婚約者のシルヴィ。生き延びた代償は大きかった。彼は…右手足を切断したんじゃないよ。恐らく、もう飛べないじゃろう。それに…屋上から飛び降りようとしたらしい。思い留まったようじゃがの…。お嬢ちゃんから見放されたと知ったら…ノワリーは……」

ヴァルカンの言葉は途中で詰まった。絶句した。ノワリーが右手足を切断した事も、屋上から飛び降りようとした事も、これっぽっちも知らなかった。それなのに自分が悲劇のヒロインだと思っ込んでいた。ノワリーがどれ程苦しんでいるのか気にも留めなかった。

「ワシは会いに行くが…お嬢ちゃんはどうするかね？来た事を伝えておこうか？」

「……はい」

肩を叩き、ヴァルカンは人の波の中に姿を消した。馬鹿だ。馬鹿だ。馬鹿だ。自分とはとつもない愚か者だ。姉にそっくりな自分を恨んだ。だから、あの時ノワリーはあんな態度をとつたのだ。顔の皮を剥がして別人になりたいと思った。落としていた視線が、前に立つ革靴を捉えた。ゆっくりと顔を上げた。

「…やあ」

ノワリーが立っていた。スーツとコート。肩に鞆を提げている。一瞬怯えてしまった。ノワリーの顔は穏やかだった。短い返事をした。彼は荷物を置くと、隣に座った。何を言えればいいか迷っていたら、ノワリーが話しかけてきた。ノワリーに会いに来たと告げると、彼はあの日の出来事を謝ってくれた。胸が痛んだ。何回か言葉を交わした。ノワリーが立ち上がり、鞆を肩に提げた。どうやら迎えが来るらしい。

「待って！」

ポシエットから小さな箱を取り出し、ノワリーに渡した。中には指輪が入っている。蓋を開けたノワリーは驚き、愛おしげに指輪を指でなぞって目を伏せた。濃く長い睫毛が影を落とす。

「何故、君がこれを？」

「姉さんが最期まで身に着けていたの。貴方に預かって欲しい。二人の愛の証だから」

「……ああ。ありがとう」

ノワリーは壊れ物を扱うような手つきで指輪をポケットにしまった。彼は別れの抱擁をしてくれた。挨拶みたいなものだと思っていたが、嬉しかった。控え目に彼の背中に腕を回した。放すと、ノワリーは一度だけ振り返って立ち去った。

好きだと告白する事も出来た。でもしなかった。姉を裏切ってしまうから。それに、ノワリーは生涯シルヴィを想い続けるだろう。

姉の存在を越える女性が現れない限り。

そう広くない背中に、計り知れない重みを背負って彼は生きようとしている。

折れた翼を抱えて、地上で生きようとしている。

二度と飛べない空を見上げながら。

世界を支える孤独なアトラス。

支えたいと思った。

姉と同じ空で生きたいと思った。

飛行機は無事に滑走路にランディングした。空港でバスに乗り換え、揺られながら景色を眺める。目的地に着き、降りる。身分証と許可証を警備員に見せ、ゲートをくぐって敷地内に足を踏み入れた。目の前に広がるのは灰色の滑走路。両脇に格納庫とビル、赤茶色の屋根を頂く建物がある。オフィスはどこだろう。場所が解らなかつたので、誰かに訊いてみる事にした。格納庫の中を覗いてみた。人の気配は無い。中に入る。薄暗い建物内に足音が響く。何気なく辺りを見回していたら、驚く物を見つけた。

「…これは…」

見覚えのある淡いオレンジ色の機体。間違いない。シルヴィの機体、ブリュンヒルドだ。昔送られてきた写真に写っていた。姉と一緒に墜ちた筈の飛行機が何故ここにあるのだろう。触れてみようとして手を伸ばした。

「触っちゃ駄目だよ姉ちゃん！」

手を引っ込め振り向いた。コンテナの陰から三人の少年がこっちを見ていた。銀髪、マロンペースト、濃紺の髪の三人組だ。銀髪の少年が歩み寄って来た。何故か手に苺ジャムの瓶と革靴を持っている。

「勝手に触らないで欲しいな。隊長に怒られちゃうよ」

「この飛行機…誰の？」

「パイロットは居ないよ。運ばれて来たんだ。すっげえボロボロだったのを、俺達が直したのさ」

自慢げに少年が笑った。キャノピーが開き、シルヴィが降りて来る幻覚を見た。

「お姉さん、基地の人？」マロンペーストの髪少年が訪ねた。

「見た事ない女だ。不法侵入じゃねえのか」濃紺の髪少年が答える。失礼な言い方だ。

「正確に言えば…今日から基地の人間になるの。ここの指揮官に会いたいんだけど…オフィスってどこ？」

「反対側にあるよ。コンクリートのビルの三階で…赤茶色の屋根の建物の隣。案内しようか？」

「いいえ、大丈夫。ありがとう」

申し出を丁寧に断り、滑走路の反対側に行った。コンクリート造りのビルに入り、エレベーターで三階に上がった。廊下を進み、一つのドアの前で足を止めた。ドアの上部にプレートが付けてある。ノックをしたが返事は無かった。ノブを回し、室内に入った。

無駄な飾りの無い、シンプルなオフィス。彼らしいと思った。デスクの上に伏せられた写真立てがあった。手に取り、目を細めた。幸せな笑顔を浮かべる二人の男女が映っていた。やっぱり忘れないでくれている。

「メアリー？」

懐かしい声。振り向いた。長身の青年が立っていた。紺色のスーツ。肩には階級を表す星が光り、胸元には勲章が煌めいている。溜息が出るほど端正な顔立ち。緑色の髪は少し伸びていた。

「久しいな。二年ぶりか？」

「ええ。会えて嬉しいわ」

「私もだ。そうか…新人というのは君だったのか…。早速ですまないが、これが契約書だ。出来れば明日中に提出してくれ」

ノワリーは引き出しから数枚の書類を出し、手渡した。彼は右手にだけ白い手袋を嵌めていた。右手足を切断した。ヴァルカンの言

葉が蘇った。罪悪感が顔に出ないように演技した。ノワリーは勘が鋭いから、気付いているのかもしれない。でも、気付かない振りをしてくれるだろう。

「君に訊いても仕方ないと思うが…私の靴を見なかったか？」

「靴？革靴？」

「そうだ」ノワリーはスーツに不釣り合いなスニーカーを履いていた。

「そういえば…」格納庫に居た少年達を思い出した。「格納庫に居た男の子達の一人が革靴を持っていたわ」

「…アルジャーノンとフォーマルハウト…またあの二人か。まったく…彼等は酷い悪戯小僧なんだ。何度言ってもきりがない。ああ、すまない。敷地内を案内しよう」

ノワリーの後に続き、オフィスを出た。前を歩くノワリーは昔と変わらなかった。大きく変わったのは外見ではなく、中身だろう。口調は責任ある立場のモノに。昔ほど笑い顔を見せてくれなかった。無理矢理感情を押し込めているような感じがした。

「メアリー・ローレンツ」

足を止め、ノワリーが振り返った。

「チームヴァルキリーへよく来てくれた。我々は、君を歓迎する」ノワリーが敬礼した。無駄のない完璧な動作が素晴らしかった。

「よろしく願います。エリオット隊長」

敬礼を返した。ぎこちない動きだったが、彼は微笑んでくれた。ブリュンヒルドに乗りたいたいというつもりだ。

生きようとして、精一杯生き抜いた姉の軌跡を知る為に。

コポコポとカップに紅茶が注がれる。カップから立ち昇った湯気が宇宙に向かおうとするが、天井に阻まれて断念した。取っ手を指に引っ掛け、口に運ぶ。その辺の店で買った物なのに、淹れる人の腕で味が左右されるから不思議だ。自分の知る限りでは、彼女に敵う者は居ないだろう。一気に飲むのは勿体ない。一口飲み、コースターの上に置いた。

向かいに座る彼女と目が合った。彼女が微笑む。穏やかで理知的な笑顔。昔と同じだ。でも、笑う度に目尻に深い皺が現れるようになった。年を取ったんだなと思った。

「やっぱり、母さんの淹れる紅茶は世界で一番美味しいよ」

「あら。いつからお世辞が上手くなったのかしら」

「本当だよ」皿の上のクッキーを手に取り食べる。卵とバターをたっぷり使った母お手製のクッキーだ。

「アツシユは元気？…怪我をして入院したって聞いたわ」

エレノアの表情が曇り、溜息をついた。憂いを含んだ溜息は重く宇宙に行く事なく地上に留まった。心配するのも無理もない。息子同然に育ててきたのだ。アツシユに嫉妬していい。母は平等に愛を注いでくれたから。今は亡き祖父母も二人を慈しみ、愛してくれた。嫉妬するのはお門違いだ。むしろ感謝している。

「元気だってソエルが言ってた。俺も会いに行くつもりだよ。心配しないで」

「ごめんなさいね…彼の事ばかり心配して。体調はどう？おかしな所はない？頭が痛いつて言ってたわね」

エレノアが立ち上がり、こっち側に回って来た。白い手が額に触れる。コツンと彼女は額を合わせた。硬質な頭蓋骨の感触が伝わり、

次いで体温が伝わった。

「大丈夫だよ。頭が痛いのは、昨日の夜更かしが原因」

「心配なのよ。貴方は……」途中まで言いかけたエレノアは口をつぐんだ。

「貴方は、大切な家族だから」

そして言葉を変えて微笑む。彼女が言おうとした事は解っていた。他の人とは違う。エレノアはそう言おうとしたのだ。そう。俺は他の人とは違う。半分だけど、ジエネシスの血を引いているから。

大して意識した事は無い。ただ、たまに空へ還りたくなるだけだ。遺伝子にプログラムされたマナがそうさせる。薬物中毒のような感じで、苦しい時もある。だが、オリジナルであるアッシュは、もつと苦しいのだ。アッシュの事を思えば何ともない。

「明日、基地に帰るのね？」

「うん。病院に寄ってから、基地に帰るよ」

「じゃあ、今夜はアレックスの大好物の料理を作るわ。覚悟しなさい。うんと太らせてあげるからね」

「楽しみにしてる」

エレノアは微笑み、リビングを出て行った。足音と鼻歌が廊下を遠ざかって行く。大きく息を吐き、ソファの背もたれにもたれた。

天井に描かれた、名画の複製が視界に入る。首を動かすと壁に飾られた絵の中の人物と目が合った。

象牙の杖に身体を預けた老人。眼光は鋭く、隙を見せようとしな。世界樹を発見し、マナをエネルギーとして使う技術を編み出した男、ヴィンセント・フォン・アルジャーノン。アルジャーノン家の創始者だ。この男の多大な功績のお蔭で、アルジャーノン家は世界屈指の大富豪にのし上がったのだ。

「…確かに貴方は凄い人だ。でも、貴方は世界中に争いを起こした。パンドラの箱を開けたんだ。俺は、アルジャーノンの名前には縛られないよ」

兄弟は居ない。長男である彼は、生まれた時にアルジャーノン家

の跡取りという宿命を与えられた。だが跡を継ぐ気は無かった。世界樹を巡る愚かな争いをもたらした名前が疎ましかった。絵の中のヴィンセントが睨んだような気がした。負けじと睨み返してやった。結果は当然の勝利。相手は額に閉じ込められた絵だから当然の結果だ。相手にするのも馬鹿馬鹿しい。豪華な額縁と一生仲良くしてればいい。

エレノアは本当に好物ばかり作ってくれた。食べ過ぎないように気をつけた。パイロットは出来るだけ軽い方がいい。飛行機には様々な部品が詰まっている。そのうえ人間を乗せるのだ。重くなりすぎたら、空に飛び立てないような気がする。エレノアもそれが解っているようで、無理に勧めたりはしなかった。会話も弾み、魔法がかけられたような楽しい夕食だった。

「身体に気をつけて。これ、お土産。アッシュと基地の皆さんによろしくね」

「うん。母さんも身体に気をつけてね」
ずっしりと重い紙袋を受け取り、軽いハグをした。執事とメイド達に見送られ、家の門を開けた。彼等はすれ違う度に「行ってらっしゃいませ。お坊ちゃま」と言った。その呼び方をされると未だに落ち着かない。

バスを乗り継ぎ病院に向かった。受付でアッシュの病室を訊いてエレベータを待っていると、いきなり肩を叩かれた。振り向くと、快活に笑うリゲルが立っていた。彼の元気な姿を見ると自然と笑みが零れた。

「久しぶりじゃん。元気だったか？親友」

「お前こそ。もう退院？」

「いんや。明日退院。アッシュに会いに来たのか？」

「うん。あ、そうそう。これ、母さんから」紙袋を漁り、母手作りのクッキーが詰まっている箱を渡した。

「サンキユ」リゲルは慌てた様子で周りを見回している。「悪い！俺、戻るわ。じゃあ、基地で！」

片手を上げ、リゲルは素早く人混みに姿を消した。彼が立ち去ると同時に、恰幅のいい看護師の女性が現れた。彼女は地面をしつかりと踏み締めた足取りで横を通って行った。

「まったく…フォーマルハウト君はまた病室を抜け出したのね？鎖で縛っておかないといけないわ！」

通り過ぎる際に聞こえた呟きを聞き、リゲルが何度も病室を脱獄している常習犯だと知った。アイツらしいと笑う。音がしてランプが点灯した。到着したエレベータに乗り込み、五階で降りる。512号室を見つけた。ノックをして中に入った。

白い室内。あまり好きじゃない配色だ。小さな個室で、窓際のベッドにアツシユは居た。紫の双眸が気付いた。薄い唇にほんの少しの笑みが浮かんだ。

「……よお」

「見舞いに来たよ。怪我の具合はどう？」荷物を置き、ベッドの側の椅子に座った。

「まあまあだな。一週間後には退院できる」

サイドテーブルの上に果物が盛られた器と、花瓶に飾られた花を見つけた。淡い水色の花だ。空の色を花弁に焼き付けたような色。果物の山の中から林檎を手にとった。器の脇にナイフが置いてあった。ナイフを握り林檎の皮を剥いていく。シャリシャリという軽快な音。赤い皮が螺旋の形に変わっていく。

「お前、器用だな」ちよつと感心しているような声。「いい嫁になれるぜ」

「あのなあ…それは女の子に言う事だろ。その花、綺麗だな。誰かに貰ったの？」

「ああ…まあ…」

「ソエルだな？」紫色の目が二、三回瞬きした。凶星のようだ。照れるアツシユが可愛い。

「お前もやるなあ」

「ファック！勘違いすんなよ！たっ…隊長も一緒だった！」

「慌てちゃって可愛いな」からかってやった。アツシユの顔が真っ赤に染まった。

「…退院したら殺してやる」

「楽しみにしてるよ」

皮を剥くと、薄い黄色の果肉がこんにちはと姿を見せた。半分に切り、ナイフで細工を施す。余った皮を耳に見立てた、ウサギの形をした林檎が出来あがった。

「はい。ウサギさんの完成」

皿に乗せ、フォークを添えてアツシユに渡した。アツシユはしばらく見つめていた。可愛いなとか、上手いじゃねえかとか言うと思っていたが、彼はフォークを容赦なく突き刺し、林檎を口の中に放り込んだ。苦心して完成させた作品は、ものの数秒でアツシユの身体を構築する数億個の細胞の栄養源になってしまった。

「不味い。安物の林檎だ」言葉とは裏腹に目は笑っている。

「バスに乗り遅れるからそろそろ行くよ。これ、母さんから。お前の事心配してたぞ」

「…エレノアさんは…元気か？」

「ピンピンしてるよ。じゃあ、基地で待ってるからな」

「ああ」

お土産を渡し、病室を後にした。アツシユは変わった。それはきつと、ソエルと出会ったからだと思う。他人を拒絶する刺々しい雰囲気は以前より薄れつつある。自分以外に心を開く事は無かったアツシユが、基地の人間と楽しそうに言葉を交わす場面を何度か見かけた事があった。

アイツは笑っていた。

いつの間に、あんな顔して笑えるようになったんだろう。

驚き、安心した。

それと同時に、寂しくもあった。

アッシュの事は良く解っているつもりだった。
知らないアッシュがそこに居た。

言った通り一週間後にアッシュは戻って来た。ヴァルキリーのメンバー全員で出迎えた。少し痩せたみたいだったけど、顔色は良く、元気そうだ。

今日は非番だった。前日から立てていた計画を実行するチャンスだ。朝食を終え宿舎に戻る。ドアをノックして自室に入った。同室のアッシュの華奢な背中が視界に入った。背を向け、自分のデスクを整理している。

「今、暇？」

「見たらわかる」忙しいに決まってんだろ。お前の目はクソが詰まった穴かと表情が言っている。

「ちよつと出かけないか？」

「人の話、聞けよ。お前とか？まあ…いいけどよ」

「サンキュ。格納庫に用があるから、基地の入り口で待っててよ」
アッシュと別れて格納庫に行った。中を覗き込む。整備士達が忙しそうに動き回っていた。背伸びし、リゲルの姿を捜す。薄暗い格納庫で彼の銀色の髪は良く目立つ。すぐに無造作に跳ねた銀色の頭を見つける事が出来た。

「リゲル！」呼びかけるとリゲルが振り向いた。「アレ、借りていいか？」

片手を上げたりゲルは親指を立てた。OKのサインだ。手を振り返し外に出る。格納庫から少し離れた所にある倉庫に向かった。お目当ての物を見つけて引っ張り出した。それを引き摺り、アッシュの待つ入口に向かう。ズボンのポケットに両手を突っ込み、アッシュは待っていた。

「お待たせ」

「何だソレ。もしかして…ソレで行くのか？」

「そつだよ」

倉庫から引つ張り出して来たのは大型のバイクだ。整備士仲間がゴミ置き場から失敬して来たのを、リゲルが暇潰しにメンテナンステナンスした物だ。

「どこに行くんだよ」

「そつだなあ…66号線を通つて…海に行こうよ」

バイクに跨り、アツシユに後ろに乗るよう促した。嫌な顔をしたアツシユは、野郎に抱きつく趣味はねえよと言いつつ、渋々後ろに跨った。ヘルメットを手渡したが、アツシユはいらないと突っぱねた。

「ノーヘル？捕まるぞ」

「隊長が圧力をかけて、揉み消してくれるだろうよ。国の平和を守つてやってるんだ。ちょっとぐらい違反したつていいじゃねえか」

「じゃあ、俺もいらぬいや。ああ、そつだ」ジャケットを脱いで後ろのアツシユに渡した。

「何の真似だ？」

「バイクに乗つてると、意外に寒いんだよ。お前が身体を壊したら、俺が隊長に怒られる」

「…ブカブカ」ジャケットを着たアツシユが呟いた。袖がタツプりと余っている。笑いそうになった。

「よし、行くよ！しつかり掴まつてろよ！」

アツシユが背中にしがみ付き、白く細い腕が腰に回された。エンジンがかかる。ゴミ置き場から拾われてきたソイツは、生意気に軽快なエンジン音を響かせた。警備員に挨拶をして、開けられたゲートを抜けた。

渋滞する事が多い66号線は珍しく空いていた。殆ど貸し切り状態だ。誰かがこつそりとレンタルしてくれたのだろうか。カーブの少ない、真つ直ぐな道路をひたすら走る。もうすぐ海岸線が見えてくる筈だ。灰色の堤防の向こうに海が見えてきた。

今日の神様は機嫌がいい。不機嫌な雲は無く、青空が果てしなく

広がっている。海も真つ青だ。世界が逆さまになって見える。速度を落とし、適当な所で止まった。バイクのスタンドを立て、鍵をかける。後ろから降りたアツシユは堤防の上に入り、じっと空と海を眺めている。堤防に上ってアツシユの隣に立った。

「綺麗だな」

「ああ」

「アツシユ、その……チームを抜けるんだって？隊長から聞いた」「ああ。色々考えたんだ。オレは……少し空から離れた方がいい。エレノアさんに会いに行つて……それから一人で旅をするつもりさ」

「……そつか。いつ行くの？」

「明日」

「随分急だな。ソエルに言つたのか？」

「言つた。アイツ、泣きやがつた」

困つたような、それでいて心配しているような顔。溜息をつき、濃紺の頭を掻いた。以前のアツシユなら、ファッキン野郎とか、クソ女とか平気で言っていただろう。やっぱり、彼は大きく変わった。

「……なあ、アツシユ」

「何だよ」

「ごめん」唐突に謝つた。眉を上げたアツシユが視線を向ける。

「は？」

「……俺ばっかり大きくなつてさ。背も伸びたし、身体も重くなった。声も少し低くなつた。お前をおいて成長しちやつたな」

エレノアが言っていた。ジェネシスは思春期を過ぎたあたりから成長が止まる。ヒトの血が濃いアレックスは順調に成長していった。反対にアツシユは殆ど成長しなかった。彼もそれなりに背も伸びた。声変わりもした。だが、彼は四年前とあまり変わっていない。罪悪感を感じた。偽善者でも、エゴと思われてもいい。とにかく謝りたかつた。

「ジェネシスは短命だ。ヒトの血が濃いお前は大丈夫だろうが、オレはあまり長く生きられないと思う」

「……」

「そんなくだらない事でいちいち謝るんじゃないよ。お前、オレが死んだらどうするんだよ。長生きしてゴメンって墓の前で泣いて謝んのか？馬鹿じゃねえの」

「…でも」

「オレがいなくなっても、お前はお前のままで生きる。オレに縛られんな。お前の人生だ」

「そんな事…言うなよお。寂しいじゃん……」

俯いた。両目に涙が滲んだ。重力に引き寄せられ、足下のコンクリートに落ちた。幾何学的な模様が次々と染みを作る。座り込んで鼻を噉った。くしゃつと頭が撫でられた。顔を上げた。太陽の光と見下ろすアッシュの顔が視界に入った。困惑と心配が黄金比で混じった表情だ。

「言い過ぎた。…ゴメン」

泣くのは卑怯だと思った。アッシュを困らせたくないのに、思いとは正反対の事をしてしまう。

「ううん。俺こそ…ゴメン」

会話が途切れた。気まずさの無い、心地良い沈黙。堤防の下は黄色の砂浜だった。隅の方にテトラポッドが設置されている。海は底が見える程透明だった。色とりどりの珊瑚と楽しく戯れる魚が泳いでいる。スカイブルーの空と、エメラルドグリーンの海。人間の手では作り出せない、素晴らしい景色だ。ヒトが足を踏み入れてはいけない聖域なのかもしれない。気温が下がってきた。そろそろ基地に戻った方がいいだろう。

「さてと、そろそろ帰ろうか」

「大丈夫かよ」

「うん、平気」嘘をついた。これ以上アッシュを困らせたくない。

立ち上がり、身体を伸ばした。堤防から下り、バイクに跨る。エンジンをかけると、待ちくたびれていたバイクは拗ねた音を吐き出した。海を見たかったのだろうか。

帰りの風は、行きよりも冷たい。日が少し傾いた所為だろう。昨日より気温が高い日とはいえ、ジャケットなしでは流石に寒かった。まあいいや。アツシユに風邪をひかせたくないから。

「おい！」風に負けないように、アツシユが大声で叫んだ。

「何？」肩越しに振り向き、すぐに視線を前方に戻した。

「オレに運転させるよ！」

「駄目だよ。危ない」アツシユの申し出を1秒で却下した。事故を起こしたら大変だ。彼はヴァルキリーのエースパイロットなのだ。「ファック！もっとスピード出ねえのかよ」

後ろから身を乗り出したアツシユの手が脇の下から伸びてきた。慌ててその手を遮る。悔しそうに舌打ちする音がエンジン音に紛れ、耳に届いた。バックミラーに唇を尖らせたアツシユが映った。

「アツシユ！」

「ああ？」

「お前は風みたいだよ。自由で、縛られなくて、いつでも空に近い場所にいる。俺はお前の追い風になるよ。ずっと、支えるよ。それに、ずっと親友だからな！」

アツシユとは不思議な絆がっている。それを言葉で説明するのは難しい。敢えて言葉にするなら、親友という表現が相応しいと思った。後ろのアツシユが顔を伏せた。

「……馬鹿。スーパーファッキン馬鹿」

「馬鹿だよ。人はみんな馬鹿さ」

「アレックス」

「何？」

「……何でもねえ」

それっきりアツシユは無言になった。ありがとう。眩きが聞こえたような気がした。

空耳でも幻聴でもいいさ。微笑み、スピードを上げる。

合図も目印も無しに二人は出会った。

必然でも、偶然でも構わない。

見失ったらまた出会えばいい。不思議な絆があるのだから。
風が合図を送り、目印になってくれる。
バイクは風になり、66号線を駆け抜けて行った。

生まれた時、夜空を流星群が走った。だから、星の名前をつけたんだよと両親は笑いながら言っていた。本当なのかどうかは解らないが、半分そうだと思う。自分も兄も、星のように輝く銀髪を持って生まれた。それは日の光に当たると光を反射し、青みがかつた輝きを放つのだ。

リゲルとシエダル。似たような名前だが、性格は光と影、太陽と月のように違った。兄シエダルはどちらかと言えば家で読書をした、小説を書いたりするのが好きな文学少年だった。

反対に自分は友達と外で遊ぶのが大好きな子供だった。泥だらけの服で帰っては、母親に叱られたものだ。そんな正反対の二人にも、共通点があった。

兄弟は機械いじりが好きだった。家中の電化製品を解体して、よく両親を困らせた。彼等は兄弟を叱りはしたが、機械いじりを止めるとは言わなかった。それどころか、人に迷惑がかからない範囲でやりなさいと言った。

両親は飛行機の整備をするメカニックだったから、息子二人を自分達と重ね合わせたのかもしれない。いずれ、兄弟のどちらかが自分達と同じ道を歩むと思ったのかもしれない。

さほど裕福ではないが、満ち足りて、希望と幸福に溢れた日々。この幸せな毎日がずっと続くと思っていた。だが、無慈悲で慈愛の欠片もない悪魔が突然やって来て、希望と幸福を奪い去っていったのだ。まるで、不吉な黒い風のように。

両親とお休みのキスとハグを交わし、自分の部屋という城に戻っ

た。天井からぶら下がった模型のスペースシャトルや飛行機。壁には父から貰った飛行機の設計図が至る所に貼られている。

ベッドの上に陣取った玩具の工具を払い除け、安らかな眠りを司る場所を取り戻した。毛布にくるまり、明日の事を考えながら目を閉じた。うとうとしかけた頃、階下から響いて来た音が浅い眠りを破った。目を開け、じっと耳を澄ませた。音の正体は玄関のドアを激しく叩く音だった。

ガチャリとドアが開く音。次いで言い争う声が続いて聞こえた。あれは父の声だ。それに見知らぬ男の声。複数居る。そして、数秒の間を置いてパンパンと乾いた音が立て続けに響いた。テレビドラマや映画でしか聴いた事のない、悪夢のような音だ。何かを引き摺るような音と、ドアが閉まる音。音が止むと、急に静かになった。

何が起こったのか確かめに行こうと、部屋のドアに近付いた。ドアが外側から開かれた。心臓が口から出そうになった。何もしないで殺されるのはゴメンだ。せめて、少しぐらい抵抗してやる。立て掛けてあった金属バットを手に握った。

「リゲル？ 僕だ、シエダルだよ」

ドアの隙間から兄が顔を覗かせた。兄の姿をした悪霊かもしれない。バットが金属製ではなく、銀製だったらいいのと思った。銀は邪悪な霊を追い払ってくれる。バットの柄を手が白くなるまで握り締めていた。

「ほ…本当に兄ちゃんなの？」 身体も声も震えていた。

「ああ、本物だよ。安心して」

シエダルが部屋に入って来た。震える手に触れてきた手は温かった。氷のように冷たくない。よかった。生きている人間だ。やっと安心した。シエダルの肩を掴んだ。

「何があつたの？ 父さんと母さんは？」

「落ち着けよ！ 様子を見に行つて来るから、お前は静かにしてるんだぞ。いいな？」

解つたと言おうとしたけど、口から出て来たのは掠れた声だけだ

った。シエダルは右手に銃を持っていた。ギョツとした。呼び止める間もなく、兄は部屋を出て行った。ギシと階段が軋む音が遠ざかっていった。

しばらくシエダルの言うとおりに大人しく待っていた。でも、恐怖と心細さには勝てなかった。部屋を出て、一階に下りる。ステアは軋んだ音を立てて居場所を知らせている。お願いだから、もう少し静かにしてよ。懇願しながら一段一段降りて行った。階段を下りてすぐ目の前にある玄関にシエダルが立っていた。

「兄ちゃ……………」

シエダルの身体越しに、真っ赤な血溜まりが広がっていた。それは絨毯に染み込んでいて、巨大な地図を描いていた。錆びた鉄のようないが鼻についた。

「ひっ……………」

「リゲル？」

「うわああああああっ！」

喉が破れそうな勢いで叫んだ。シエダルが駆け寄り、肩を掴む。

それでも悲鳴は止まらない。コップから水が溢れるように、喉の奥から溢れ続ける。

「血っ…！血がっ…！何で？何で？父さんと母さんはどこ？銃の音が聞こえたんだ！銃の音が…！何があったの？ねえ！ねえっ……………」

半狂乱になった。シエダルが抱き締めた。怖い夢を見た時、父さんがこんな風に抱き締めてくれた。少年と大人の間をなぞる手が背中を撫でた。甘えると、母さんはこんな風に背中を撫でてくれた。兄の匂いと温もりだ。

「落ち着いて…ゆっくり呼吸するんだ」頷き、深呼吸を繰り返した。「よし、いい子だ。もう大丈夫だな？」

シエダルの胸に顔を埋めたまま、また頷いた。シエダルが退き、少し距離が生まれる。

冷静さと理性さを兼ね備えた灰色の目が優しく見つめている。曇り空のような色なのに、見つめていても憂鬱にならない不思議な色

の瞳。不思議と気分が落ち着いていた。

兄弟の後ろで物音がした。自分たち以外誰も居ない筈だ。振り向いた。暗がりから男が姿を現した。男が着ている服はアンティオキアの軍服だ。ダークグリーン地の布地に血痕が飛び散っていた。右手には銃。悪夢のような音を生み出す、機械仕掛けの人殺しの道具だ。「ガキ？そうか、アイツ等の子供だな？」息が酒臭い。思わず顔を顰めた。

「父さんと母さんをどこへやったんだ？」

問いかけに、男は馬鹿にしたような笑みを浮かべた。お前は何も知らない愚か者だという風に。推理小説の犯人を教えたがる奴が浮かべそうな笑みだ。

「何だ、なーんにも知らないのか。冥土の土産に教えてやるよ。お前のパパとママは軍に連行されたんだよ。明朝に処刑される。公衆の面前で、絞首刑さ。へへっ、鶏の首を捻るように簡単に死ぬぜ」
頭を衝撃という金槌が殴りつけた。嘘だ。嘘だ。嘘に決まってる。目の前の男が放った言葉が信じられなかった。更に男は言葉を続ける。

「二人は軍に反抗するレジスタンスの一員だ。多分、今頃はレジスタンスのアジトを吐かせる為に拷問されてるんじゃないか？ま、銃で撃たれてるからな。そう長くは持たないだろう。話は終わりだ。悪いけど、お前等にも死んでもらうぜ」

薄ら笑いを浮かべ、男が銃を構えた。銃口は真っ直ぐに二人を捉えている。男の指が引き金にかかる。それよりも早くシエダルが動いた。稲妻のような素早さで、彼は銃を撃った。螺旋状に回転した弾は空気を切り裂き、男の脇腹を貫通した。驚愕した表情を張り付けたまま、男は仰向けに倒れた。男は何度か痙攣したのち、ガクリと力を失った。

シエダルがゆっくりと振り向いた。玄関のドアに嵌め込まれているステンドグラスから差し込んだ月光が彼の髪を照らした。青色を微かに含んだ銀色の髪。同じ色をしているのに、とても神々しく見

えた。悪霊を追い払ってくれた聖者だと錯覚した。

「リゲル。今すぐ荷物をまとめて。必要な物だけだぞ」

「え？ど…どうして…」

「いいから早く！もうこの家には居られないんだ」

兄の険しい表情が、答えている時間はないと物語っていた。急いで自室に戻り、リュックに色々詰め込んだ。何を詰めるか考える余裕はなかった。整備関係の本。そうだ、着替えもある。筆筒をかき回し、下着と服を詰め込む。すでにリュックはパンパンにはちきれそうさだ。最後に入りたい物があった。

十歳の誕生日に父から貰ったゴーグル。残念だが入りそうにない入らないなら着けて行けばいい。ゴーグルを頭に巻いてリュックを背負い、兄の待つ一階に戻った。

「忘れ物はないな？ここには戻れないぞ」

「うん。大丈夫」

「よし、行こう」

主の居ない家を飛び出し、二人は走った。途中、サイレンを鳴らして走るパトカーとすれ違った。ゴミ箱の陰に身を潜め、上手くやり過ごす。銃声を聞いた近所の住民が通報したのだろう。警察は軍に懐柔されている可能性が高い。捕まればどうなるか解らない。軍に捕まっている両親を自白させる餌にされるに違いない。

森に入り、ひたすら走った。視界が開く。有刺鉄線のフェンスと監視塔があった。看板に大きく書かれた「国境」という文字。アンティオキアとクルタナを結ぶ国境だ。何故ここに来たのだろう。答えを求め、恐る恐るシエダルに視線を送った。

「兄ちゃん、ここ、国境だよな？何でここに来たの？」

「クルタナに逃げるんだ。あっちは安全だ」

「パスポートもないのにどうやって行くのさ！」

「強行突破だ。絶対に僕の手を離さないで」

冗談を言っているのかと思った。けど、シエダルの顔は真剣で、彼が本気だという事が解った。兄はこんな状況下で冗談を言うタイプではない。クラスにいつも冗談を言っている奴が居た事を思い出した。

そいつがこの場に居たらどんな反応をするだろう。怯えて泣き叫ぶに違いない。何故今こんなくたたらない事を思い出したのか不思議に思った。脳が恐怖を紛らわす為に、記憶から引っ張り出してきたようだ。

行こう。小声でシエダルが指示を出した。後戻りは出来ない。覚悟を決めて頷いた。フェンスに沿って歩き続ける。人目のつかない所に一人が通れるぐらいの穴が開いていた。シエダルが先にくぐり、リュックが引っ掛からないように注意しながら後に続いた。

隠れる場所が何一つない野原だ。蜂のように飛び交うサーチライトの光。監視塔には銃を構えた兵士が塔の上から周囲を見張っている。銃で武装した物騒なラプンツェル。ずっと先にある川を渡ればクルタナ国に入れるらしい。そんなに距離はないのに、果てしない道程に見えた。

呼吸を整え、タイミングを計った。ライトが二人のすぐ側を掠め、離れて行った。シエダルが繋いだ手を引いた。合図だ。飛び出した。真っ直ぐに川を目指して走った。不規則な動きをするサーチライトがこっちに来る前に川を渡らないといけない。

バシャツと足下で水が跳ねた。スニーカーとジーンズの裾が濡れた。水飛沫の音がうるさい。見張りの兵士には聞こえていない筈だ。兵士の耳が良くない事を祈ろう。生きた心地がしないまま、無事に向こう岸に着いた。

休む暇もなく二人は走り続けた。黒い道の向こうにオレンジ色の明かりが見えた。どんな光よりも暖かく見えた。近づくにつれ、明かりの正体は教会の窓から洩れている事に気付いた。

門を開け、敷地内に足を踏み入れた。シエダルが木製の扉を叩いた。内側で人の気配。ゆっくりと静かに扉が開いた。一人のシスタ

―が出て来た。彼女は兄弟を見ると、目を見開いた。

「シエダル君？」

「お久し振りです。シスターマリアンヌ」

「ここに来たという事は……ご両親は……」

シエダルは肩を落とし、無言で首を振った。マリアンヌは口を押さえた。胸の前で十字を切ると、彼女は胸に着けているロザリオを握り締め、祈りの言葉を呟いた。

「さあ、早く中に」マリアンヌが扉を開けた。蝋燭の明かりが見えた。

「…僕は戻ります。弟をお願いします」

「兄ちゃん？いやだ！一人にしないでよ！」

シエダルの両手が肩を掴んだ。じつと灰色の目が覗きこんできた。濁りのない、澄み切った色。強く、揺るぎない決意が宿っているのを見てしまった。

「ごめんな、リゲル。僕にはやらなきゃいけない事があるんだ。お前は強い子だ。僕が居なくても生きていけるよな？」

無理だよ。そう言いたかった。無理だと駄々をこねても、シエダルを引き止める事は出来ないだろう。逆に困らせてしまう。最後は聞きわけのいい素直な弟で居たかった。ボロボロと涙を零しながら頷いた。

もう会えなくなるシエダルにしがみ付いた。六つ年上の大人しくて、優しい兄。目の色は違うけど、同じ色の髪を持った一人の兄。シエダルの唇が額に触れた。祝福と愛のこもったキス。ギュツと力を込め、シエダルが離れた。

「愛してるよ、リゲル。元気でな。強く生きるんだぞ」

深く一礼すると、シエダルは来た道を引き返して行った。兄の姿が見えなくなっていく。視界から消えていく。映らなくなっていく。我慢していたモノ全てが溢れた。

聞きわけのいい素直な弟で居るのは無理だ。

シエダルが居ないと無理だ。

「いやだ！兄ちゃん！帰って来てよ！戻って来てよ！一人にしないで！うわあああんっ！」

手を伸ばして必死に叫んだ。

もう届かないとは解っていても、聞こえないとは解っていても、何か行動しなかった。

無駄だった。手は空を切り、声は虚空に吸い込まただけだった。兄は二度と帰って来なかった。

「コラっ！またお前達か！」

商店街に怒れる男性の声が響いた。ボタンと店のドアが乱暴に開き、数人の少年が飛び出した。それぞれ胸に数個のパンを抱えている。店主の追跡を振り切り、少年達は裏路地に逃げ込んだ。息を切らしながら戦利品を頬張る。

「お前等、何個パクった？俺は三個だ」リーダー格らしき少年が言った。二個、一個と少年達が自慢げに答えていく。

「リゲルは？」

無言でシャツを捲った。ドサリと数十個のパンが地面に落ちた。

少年達は目を丸くして、リゲルとパンの山を交互に見つめた。

「すげえな！俺達のグループに入って何日だったっけ」

「三日だよ」今日は機嫌が悪い。素っ気なく答えた。感嘆の音が鬱陶しい。

「じゃあ、次は明後日。トムじいさんの雑貨屋を強襲する。じいさんは耳が遠いから楽勝だぜ」

少年達と別れ、教会に続く家路を歩いた。あそこには戻りたくなかったが、帰る家がないので仕方がない。教会なのか孤児院なのか解らない中途半端な場所だ。

兄シエダルと別れて一年。度々教会を抜け出しては、街の不良グループとつるむようになっていた。店の商品を失敬したり、壁に落書きしたりしたりの悪行を繰り返す日々。彼等は偉業を成し遂げたような

顔をしているが、正直くだらない子供の遊びだ。そんな事で満足出来るなんて羨ましいと思う。

くだらないと思うなら止めればいい。そう言われても止めないだろう。抱えているやり場のない怒りや鬱屈とした感情をどこにぶつけたらいいか解らないのだ。

左右に小麦畑が広がる道を苛々しながら歩く。夕焼けに照らされた小麦が黄金色に輝き、風に揺れて黄金の波を作っていた。道の脇に小さな子供が立っていた。またアイツか。チツと舌打ちした。無視して通り過ぎようとした。小さな手が服を掴んだ。仕方なく足を止めた。

「…何だよ」

シスターが心配してる。少女の顔がそう言っていた。心配させるつもりで抜け出しているのだ。こんなチビに説教されたくない。服を掴む手を振り払い、突き進んだ。小さく、風に吹き飛ばされそうな足音が後をついて来る。

「ついて来んなよ。鬱陶しい」

蹴飛ばしたい衝動を抑え、代わりに睨みつけた。効果はあった。少女は怯え、足を止めた。だが、すぐに後をついて来る。彼女の存在を空気のように思う事にした。煉瓦の道を歩いて行くと、教会が見えてきた。清く貧しくを絵に描いたような外観。外も中も継ぎはぎだらけだ。尖塔の十字架が地面に影を作っている。扉の前に一人の女性。教会兼孤児院の主、シスターマリアンヌだ。最悪だ。

「リゲル！ 帰りが遅いから心配していたのですよ？ 午後の礼拝をさぼって… 何処に行っていたの？」

「別に。友達と遊んでたんだ」

「…またあの子達と居たのですか？ 彼等は悪い子達です。もう会いに行かないと約束しなさい」

「うるせえよ！ 母親面すんな！」

稲妻に打たれたようにシスターの顔が強張った。立ち尽くすシスターの脇をすり抜け、教会に入った。埃臭くて狭苦しい自室に飛び

込んだ。ベッドに転がり、真つ暗な天井を見つめっていると、後悔が鎌首をもたげ始めた。

言い過ぎた。

あの時、兄と一緒にに行けばよかった。

何故、人は、過ぎ去ってしまったてから後悔するのだろうか。

トムじいさんの雑貨屋を襲撃する日。シスターが事務室で仕事をしている時間を確かめ、窓の鍵を開けた。窓枠に足をかけた時、服の裾が引つ張られた。

「…放せよ」

「だめ。またわるいひとたちのところにいくんでしょ？」

「ガキには関係ない事だ。シスターにチクればいいだろ。俺は行くぜ」

服を引つ張る手を無理矢理引き剥がした。非難の視線が背中に突き刺さるのを感じながら、教会を抜け出した。午後の礼拝なんて鬱陶しくてダルいだけだ。祈りの言葉も賛美歌も面倒臭い。そんなモノを捧げても神様は助けてはくれない。

本当にあの少女はウザい。ウザすぎる。死神のようにいつも纏わり付いてくる。確か名前はゲルダだったか。五年前に勃発したアンティオキアとクルタナの大戦でパイロットだった父親を失い、その後心労で母親が病で亡くなったらしい。身寄りのない憐れな子供としてここに引き取られたのだ。

何故いつもついて来るのか。同じ肉親を亡くした者同士、何か感じたのかも知れない。

どうでもいい事だ。

道標のない自分の人生のように。

「な？楽勝だっただろ？」

リーダーが勝ち誇った顔で言った。他の少年も同意する。いつも裏路地。地面には戦利品の山。それぞれ自分の戦利品を掴み取っ

ている。

お前も取れよという声に曖昧に返事を返し、彼等と別れた。酒と煙草の匂いが後ろから匂ってくる。教会に帰る気がしなかった。気紛れにぶらぶらしていると、耳障りな雑音が聞こえてきた。音の発生源を辿る。老人が一人、道端に積まれた樽の上に腰掛けてラジオをいじっていた。雑音の発信源はあのラジオのようだ。

「さつきからうるさいと思ったら…アンタのラジオの仕業かよ」

「おや、すまんの。不快じゃったか。コイツが言う事を聞かんのじや」

老人が顔を上げた。オイルか何かで汚れたツナギ。白く長い顎髭は季節を間違えたサンタクロースみたいだ。マメだらけの手がツマミを回している。

「俺が直してやるよ。貸してみな」

ラジオを受け取り、老人の隣に座った。彼から工具を借りてラジオを解体した。どうやらバッテリーと周辺の部品を結ぶ回路の接触が悪いようだ。ドライバー、ペンチを駆使してひねくれた反抗期の機器を直した。蓋を閉め、スイッチをONにする。反抗期を乗り越えたラジオは古臭い歌を歌い始めた。

「ほらよ。直ったぜ」

「凄いの！坊主、いいメカニックになれるぞ」

メカニック。不意に両親の顔が蘇った。遅れてシェダルの顔も蘇る。記憶の中の彼等は笑っていた。

彼等は誇り高く、立派に自分の意志を貫いて生きたというのに、俺は何をやっているんだろう。

犯罪者みたいな行為を繰り返し、自分を育ててくれた人に暴言を吐いた。

強く生きるんだぞ。

シェダルの言った強く生きるという意味はこんなじゃないのに。

ボロボロと涙が零れた。他人の前で泣くのは嫌だった。虚勢とい

う壁が崩れ、堪えていた感情の全てが流れ出た。隣の老人が見ているのが解る。見るんじゃねえよ。顔を伏せた。

ゴツゴツした、マメと皺だらけの手が頭を撫でた。長い歴史を生きた目が優しく見つめていた。深い優しさを湛えた瞳。もう堪え切れなかった。赤の他人である彼に全てを話した。思い切り泣いた。

ごめん。父さん、母さん。

ごめんな、兄貴。

俺　馬鹿だ。

本当に馬鹿だ　。

「そうか……。ご両親は軍に連行されたのか。素晴らしいメカニックだったのじゃな」

可哀想にとか辛かっただろうとか、そんな類いの言葉は出なかった。下手な慰めや、偽善者のような同情は要らない。この男は信頼出来そうだ。

「ワシはヴァルカン。ヴァルキリーという飛行チームの整備士じゃった」

驚いた。ヴァルキリーといえば、クルタナ空軍が誇る精鋭中の精鋭の飛行チームではないか。

「だった？過去形だな。辞めたのか？」

「ウム、まあ、引き止められたが、そろそろ引退の時期じゃろうと思つての。若い者に後を託したのじゃ」

「爺さんならまだまだ現役でいけると思うけど。なあ、俺に色々教えてくれよ。俺：父さんや母さんと同じ道を歩みたいんだ」

「フム。ワシは厳しいぞ？」髭に埋もれた口がニヤリと笑った。「構わねえよ！」

「よかるう。じゃあ、明日　そうじゃな、昼の十二時半にここに来なさい」

ヴァルカンはツナギのポケットからメモ用紙とペンを取り出し、

地図を描いて渡してきた。ありがとうと久し振りに感謝の言葉を言った。彼と別れ、教会に戻った。

そつと窓越しに礼拝堂を覗き込んだ。シスターと子供達が祈りを捧げ、賛美歌を歌っていた。

歌はもう終わろうとしている。

彼等から見えない位置に移動し、ここに来てから初めて賛美歌を口ずさんだ。

次の日、約束の時間丁度にヴァルカンの描いた地図の場所に行った。倉庫のような建物があった。「ヴァルカン・ファクトリー。何でも修理します」と書かれた看板が高い壁の上に付けられていた。ラジオすら直せないのに大丈夫なのかよ。呆れながらシャツタをくぐり、中に入った。

昼間なのに陰気で薄暗い。車の残骸や、テレビ、色んな機械や家電製品が所狭しと積まれている。客なんか居ないだろうと思っていたが、何人かの人すれ違った。結構繁盛しているようだ。奥のカウンターにヴァルカンが居た。リゲルに気付いた目が嬉しそうに細められた。

「よ、爺さん。来てやったぜ」

「ほつほつ。待っておったぞ。早速仕事じゃ。ほれ、あの車を直してみい」

ヴァルカンが指差した先には、廃車寸前の車が置かれていた。ボディは錆だらけで、バンパーもボロボロだ。ボンネットは閉まらないのか、開きっぱなしになっている。

「うっわ。ひつでー。ボロボロじゃん」

「何じゃ？怖気づいたか？」

「誰が！見てろよ、新品みたいにしてやる！」

数時間の格闘の後、見事に車を修理した。錆だらけだったボディとバンパーは鮮やかな色を取り戻し、輝いている。シンデレラもピツクリだ。黒く汚れた顔でニツと笑い、ヴァルカンに向けて親指を立てて見せた。

「おお、新品同然じゃの。ご苦労さん」

ヴァルカンはカウンターの奥にある冷蔵庫からコーラのボトルを出した。古ぼけた戸棚からグラスを手に取り、カウンターのの上に置く。澄んだ音を立て、グラスに氷が投下。炭酸の泡に包まれた焦げ茶色の液体が注がれる。グラスを受け取り喉に流し込んだ。炭酸が口の中で花火のように弾けて消えていく。空になったグラスを返した。

「もう直すモンはないのか？」

「今日はここまでじゃ。無理をしてはいかん」

「また来てもいいよな？」

「勿論じゃとも。明日、また同じ時間に来なされ」

「ああ！」

それから毎日ヴァルカンの下に通うようになった。いつの間にか、不良グループとつるむ事はなくなっていた。鬱屈していた感情や、行き場のない怒りは消え去っていた。これが充実というモノなのだろう。ヴァルカンの指導の甲斐あって腕は上達していった。

今日のノルマの整備を終え、一息ついた。仕事終わりのコーラを飲む。疲れた体と神経に染み渡る。ヴァルカンが入口の方を指で指し示した。

「リゲルや。知り合いが来てるようじゃぞ」

「へ？」

肩越しに入り口を見やった。チラチラと小さな子供が中の様子を窺っている。鳶色の髪と同色の大きな瞳。子供の間で流行っている、携帯ゲームのモンスターの縫いぐるみを抱いている。青くて丸い、手足が短い大きな耳を持つネズミの奴だ。

「ゲルダか？入って来いよ！」

ゲルダが恐る恐る中に入ってきた。床に散乱している瓦礫や工具の山を避けながら近付いて来た。怯えた様子をしていた。何日か前

に冷たくしたからだろう。慣れない優しい微笑みを浮かべた。

「どうしたんだ？」

「シスターがしんぱいしてる」

「またかよ。行き先は言った筈だぜ」

「ただだけ過保護なんだよ。呆れると同時に嬉しかった。心配されている証拠だ。」

「今日は帰りなさい。心配をかけちゃいかん」

もつとここに居たかったが、ヴァルカンの言うとおりにする事にした。また明日来ればいいのだ。ゲルダの小さな手を引き、帰路を歩く。日も暮れ、人通りは少ない。通りを歩いていると、反対側から数人の少年が歩いて来た。アイツ等だ。ゲルダを後ろに庇い、足を止めた。

「よお。久し振りだな、リゲル。最近、顔見せないじゃん？ガキ連れてどこ行ってたんだよ」

「お前等には関係ないだろ。そこ、通してくれないか？」

「今度さ、深夜のコンビニ行って金でも奪おうぜ。実力もついたら、やれるぜ」

あまりにも幼稚な発想に呆れ果てた。もうコイツ等とは縁を切るつもりだった。

「俺、抜けるわ。お前等だけでやってくれよ」

リーダーの顔が引き攣った。すり抜けようとした二人の前に立ちはだかる。何の真似だ。凄みを利かせて睨みつけた。一瞬、少年達が後ずさる。だが彼等は尻尾を巻いて逃げなかった。安っぽい中古品のようなプライドがそうさせたのだろう。

「可愛い子連れてんじゃねえか。あ？俺等にちよつと回してくれよ」
リーダーがジロリとゲルダを眺め回した。いやらしい、ベトベトした視線だ。縫いぐるみを抱き締め、ゲルダが震えた。人形の白い腹がへこむ。

「へへっ。一回ガキ相手にやってみたか……」

電光石火の速さで繰り出された回し蹴りがリーダーの顔面を粉碎

した。フィギュアスケート選手顔負けのトリプルアクセルをしながら、リーダーの身体が宙を舞った。そのままゴミ置き場に突っ込み、彼は腐臭を撒き散らすゴミの山の中で失神した。鼻血が大量に流れている。

「わ　っ！ボス　！」

「てめ　！」

「よくもリーダーを！」

取り巻き　金魚の糞の少年達が一斉に飛びかかった。

数分後、彼等は呆気なくリーダーと同じ空を飛び、同じ軌跡を描き、同じゴミ置き場に不時着した。ピクピクと痙攣を繰り返すリーダーに唾を吐きかけてやった。

「いいか？クソ野郎共！金輪際俺とゲルダに近付くんじゃねえぞ！コイツに手エ出したら…！ブツ殺してやるからな！」

はい、はい。蚊の鳴くような声の返事が返ってきた。コイツ等は本当に救いようのないクソ野郎だ。コイツ等とつるんでいたと思うと吐き気がした。

一体、どこで道を間違えたんだろう。両親と兄が作ってくれた道なのに。

ゲルダが手を引いた。暗闇で揺らめく蠟燭のように、温かく、ホツとさせてくれた。心の奥まで優しい気持ちになれる温もりだった。「かえろ。みんな待つてるよ」

天使のように無垢で無邪気な笑顔が見上げてきた。この世の汚れなど知らない、真っ白な笑顔だ。つられて微笑んだ。小さくて軽い身体を肩車した。人形の丸い尻尾が背中当たる。キャツと小さな悲鳴が上がった。

「ゲルダ飛行士！基地に帰還するでありますか？」

「きかんするであります！」

「了解！」

ゲルダを肩車したまま、教会までの道程を走った。両腕を広げたゲルダの翼が空を飛ぶ。

どこまでも広がるオレンジの空と、小麦畑の黄金色の雲が綺麗だった。

いつもと同じようにヴァルカンの工場に行く時間がきた。物置から自転車を引つ張り出した。メンテナンスして綺麗になった物を報酬として譲り受けたのだ。軽快に煉瓦の道を走っていると、一台の黒いセダンとすれ違った。この街には似合わない高級車だ。車は教会の敷地に入って行った。さほど気にも留めず、そのまま工場に向かった。

「爺さんもケチだよな。そろそろ新型のエンジンを開発させてくれたっていいのよ」

仕事を終えて、ブツブツ愚痴りながら教会の門を開けた。真つ先に出迎えてくれるゲルダの姿が見当たらない。首を傾げつつ礼拝堂や食堂、部屋中を見て回った。神隠しに遭ったみたいに、ゲルダは居なくなっていた。何だろう。嫌な予感が広がった。一周して礼拝堂に戻ると、シスターが立っていた。彼女は真つ直ぐに、聖者が磔になった十字架を見つめていた。

「シスター、ゲルダが居ないんだ。どこに行っただんだ？」

シスターがゆっくりと振り向いた。深い悲しみと寂しさを湛えた目だった。

「…あの子はここを出て行きました。引き取り手が見つかったのですよ」

「え…？」ゲルダは身寄りがなかった筈。「嘘だ。アイツには身寄りがないって聞いた」

「ゲルダのお父様の友人の方が、彼女を引き取って育ててくれると仰ったのです。数週間前から度々ここを訪ねて、話を進めていました。勿論、あの子にも話しました。最初は戸惑っていましたが、快く承諾してくれました」

「…どんな奴なんだよ。ソイツは」沸々と怒りが込み上げてきた。

「ユグドラシル基地の指揮官で、チームヴァルキリーの隊長です。まだ若い青年ですが、誠実で信頼できる人ですよ。安心しなさい」
「安心出来るかよ！結局、大人の都合でアイツを引き渡したんだろ？」

「リゲル！」

教会を飛び出し、自転車に飛び乗った。チームヴァルキリー。確か、ヴァルカンはそのチームのメカニックをしていたと言っていた。死に物狂いでペダルを漕いで彼の居る工場に戻った。乱暴に自転車を止め、シャツタをくぐった。

「爺さん！」

扇風機を直していたヴァルカンが振り向いた。帰ったばかりなのに再び現れた事に驚いたようだ。

「おや。忘れ物かね？」

「違うよ！アンタに頼みがあるんだ！」ガラクタの山を掻き分け、ヴァルカンに掴みかかった。

「爺さんはヴァルキリーに居たんだよな？なら、コネがあるだろ？頼む！俺をヴァルキリーに入れるように頼んでくれ！この通りだ！」

汚れた床に手をついた。土下座した。じつとヴァルカンの言葉を待った。ヴァルカンが目の前に屈みこむ気配。マメと皺が刻まれた手が肩に触れた。顔を上げなさい。静謐な声に従い顔を上げた。

「…何があつたんじゃ？まず、訳を話しなさい」

「…ゲルダが引き取られちまつたんだ。ソイツはアイツの親父の友人で、ヴァルキリーの隊長だつて聞いた」

「…！！」白と灰色が混じった色の眉がピクリと動いた。それに気付かず話を続ける。

「だから、ヴァルキリーに入りたいたんだ！ゲルダを独りぼっちにさせたくねえんだよ！頼むよ爺さん！隊長と知り合いなんだろ？頼むよ…」

ヴァルカンは石のように動かなかった。本のページのように黙っていた。ブーンと冷蔵庫が唸る音だけが聞こえていた。

「…ヴァルキリーは精鋭中の精鋭チームじゃ。かなりの高度な技術がないと、専属のメカニックチームには入れんぞ。何ヶ月、何年、下手をすれば何十年もかかるかもしれん。生半可な覚悟では勤まらん。お前にその覚悟があるのか？」

「…ああ。何だつてやる。どんな事でも覚える。絶対に投げ出さない」

紺碧の宇宙のような青い瞳の中に強い意志を感じ取ったヴァルカンは、諦めたように肩をすくめた。やれやれと呟くと、複雑な顔で微笑んだ。

「まずは基礎中の基礎からじゃぞ？飛行機をいじるのはそれからじゃ」

「了解！」

大丈夫。道標の火は見つけたよ。

両親と同じ道を歩むんだ。

工場の奥に消えたヴァルカンの後を追いかけた。

「皆様、長旅お疲れ様でした。まもなくユグドラシル空港に到着いたします」

車内に流れたアナウンスで目が覚めた。カーテンの隙間から、太陽の光が差し込んでいる。座席の下に放り込んだ靴を履いた。ブレーキをかけバスが止まった。順番にバスを降りる。乗客全員を降ろすと、任務を終えた夜行バスは走って行った。

座席に座りつばなしで硬直した身体を伸ばした。ストレッチを済まして鞆を肩に提げ、タクシーを捕まえた。中年の運転手にユグドラシル基地までと頼む。快い返事が返ってきた。エンジンの音が車内に響く。いいエンジンですねと言うと、バックミラーに映る運転手が誇らしげに微笑んだ。

あれから半年。努力に努力を重ね、ヴァルキリーの専属メカニックチームの一員に選ばれた。史上最年少の快拳だと試験官に言われ

だが、そんなモノどうだっという。ただ、機械いじりが好きなのだ。妹のような、大切な存在の彼女に会いたいだけだ。

（ゲルダ、きつと驚くだろうな。。）

愛らしい顔の驚く様が目に浮かぶ。自然と微笑みが広がった。

道を照らしてくれる火は誰だっという。持っている。

それを見つけるのが難しいだけなんだ。

ゴーグルのレンズに、爽快な青空が広がった。

「やだやだ〜！あと十分しかない〜！」

昨日徹夜で仕上げたレポートの束を脇に抱え、死に物狂いで廊下を走る。クリップで止めていないレポートの束は落ち着きがなく、自分達を拘束している腕から逃れようともがいている。

「廊下は走らない！」と堂々と大きく書かれた張り紙が目に入るが、悠長に守っている余裕はない。このレポートを講義中に提出しないと卒業に必要な単位が取得出来ないのだ。おまけにその大事な講義に遅刻しそうだ。昨夜の徹夜が響き、寝過ごしてしまった。

腕時計の文字盤に目を落とし時間を確認。文字盤から離脱した時、曲がり角から歩いて来た男性に気付いた。急ブレーキをかけるが間に合わない。勢いよく男性と衝突してしまった。腕から解放されたレポートが宙を踊り、雪のように降り注いだ。

「いたたあ……。だ……。大丈夫ですか？」

男性は頭を押さえていた。衝撃が頭蓋骨に響いたのだろう。彼は大丈夫だと手で合図をしてきた。悪い事をしたと思いつつ、急いで散らばったレポートを集めた。衝撃から立ち直った男性も手伝ってくれた。何て心の広い人なんだと思った。愚痴の一つもこぼさず、黙々と集めてくれている。

「これで全部だと思うが……。確認してくれ」

手渡されたレポートは見事にページ順に揃っていた。機械のような正確さだ。全部揃っていると伝えると、彼は頷いた。

「本当にすみませんでした！お怪我はありませんか？」

「問題ない。大丈夫だ」

近くで見ると若い男性だと解った。二十代前半だろう。長身痩躯で、コートの下にスーツという服装だ。前髪の長い緑色の髪に琥珀

色の切れ長の目。珍しい目の色だ。溜息が出る程の端正な顔立ち。雑誌のモデル？パイロット養成学校にモデルとは不釣り合いだと思っただ。それにしてもかなりの美青年だ。ぼつと見惚れてしまった。「私の顔に何か付いているのか？」青年が眉を潜めた。

「いつ…いえ！何でもありません！」
「講義に遅れるぞ。急いだ方がいい」

青年が言うと同時に講義開始のベルが鳴った。遅刻しそうだという事をすっかり忘れていた。もう一度お礼を言い、青年と別れた。コンパスのように真っ直ぐに伸ばされた背中が廊下の角に消えて行った。

教室に飛び込み、席に着くと同時に教官が入って来た。前の席のミリーが振り向きウインクしてきた。ギリギリセーフだねと囁く。眠気と戦いながら講義を受ける。

ただ話を聞くだけなのに、何故いつも眠くなるのだろうか。教官の声に眠りを誘う魔法でもかかっているのかもしれない。何とか居眠りせずに講義を終えた。レポートも無事提出。教室を出てミリーと食堂に向かった。

ミリーとは養成学校に入学してから知り合った。太陽のように明るく元気な所が大好きだ。食堂は学生達で混雑していた。通勤ラッシュの駅みたいだ。運良く空いている席を見つけた。まるで宝くじに当たったような気分。急いで席を確保。食券を購入し、音を立てて栄養を要求する身体にランチを補給していく。

「ねえねえソエル。今朝、すごいイケメンを見つけたのよ！」
「へえ〜。どんな人？」

「学校の人じゃないと思うの。見た事がないもん。背が高くて〜切れ長の瞳！髪は緑色で、スーツが似合ってた！アレは神クラスの美青年よ！」

頬を染め、ミリーが身体をくねらせた。ツインテールに結んだ亜麻色の髪が揺れる。海の底で漂う海藻みたいだ。彼女はカツコイイ男性に目がない。移り気で、コロコロと趣味がよく変わるのだ。長

身で緑色の髪。思い出した。

「あ。その人なら私も会ったよ。今朝廊下でぶつかっちゃったの」
ミリーの天使のような顔が豹変し、醜く嫉妬する女の顔になった。
彼女はスプーンで頬をつついてきた。衛生的にどうかと思う。

「なぐに〜よ〜！廊下でぶつかったあ？少女漫画みたいな出会い方
じゃない！恋に落ちたらアタシが撃墜してやるからね！」

「落ちません！」

腑に落ちない表情でミリーはデザートプリンを食べ始めた。大
体、あんな美青年と恋に落ちる訳がない。高嶺の花だ。テレビドラ
マじゃあるまいし。

「ソエル。次の授業はなに？」

「え？えーっと…」鞆を漁り、時間割を見る。「うわ。実技訓練だ。
おまけに複座型飛行機」

複座型飛行機とは座席が前後に並んだ機体の事を指す。簡単に言
うと、二人乗りの飛行機の事だ。教官が後ろに座り、操縦技術をチ
ェックするのだろう。まだ訓練が始まっていないというのに緊張し
てきた。栄養を補給したばかりの胃がキリキリと軋んだ。昼休み終
了のベルが鳴った。運命の時だ。

「頑張つてね！」

「うん！」

ミリーと別れて更衣室に走った。ベルの音が後ろを追いかけてく
る。悪魔の足音みたいだ。訓練用のフライトスーツに着替え、教官
が待つ滑走路に向かう。

滑走路には既に機体を引き出されていた。訓練用の機体T-4ブ
ルーエンジェルだ。青と白に塗られた機体に天使の翼がマーキング
されている事からその名前で呼ばれているのだ。

機体の脇に教官らしき男性が居た。数人の人と会話している。男
性が気付いた。ゆっくりと振り向いた。

「クラスと名前を」

「はい！C4A、ソエル・ステュアートです！よろしくお願いしま

す！」

「君を担当するファブレだ。準備は？」

「大丈夫です！」

「解った。機体に乗って来てくれ」

機体は複座型にしては珍しいサイド・バイ・サイドだった。隣に教官が座るのかと思うとまた胃が軋んだ。コクピットに乗り込みながら首を傾げた。あの教官は初めて見る。ヘルメットとバイザーで顔が隠れていて解らないが、鼻筋の通った顔はまだ若い。操縦席に座り、ベルトを締める。ファブレ教官も反対側から乗り込んで来た。背が高いから窮屈そうだ。

「高度2000フィート前後を維持。十キロ飛んだ時点で旋回、ここに帰還だ。いいな？」

「了解です！」

「機器の確認を」

「はい！」

ガチガチに緊張しながらタッチスクリーン式の画面をチェックした。操縦桿とスロットルレバー、フットペダルも正常に動きそうだ。パラシュート袋も座席の下にちゃんとある。燃料とマナも満タンだ。「オールグリーンです」

「了解。離陸開始」

ゆっくりと慎重にブルーエンジェルが動き出した。スロットルを上げる。ゴウとエンジンが唸った。滑走路を走っていた機体が浮いた。重力が手を伸ばし、連れ戻そうと必死になっている。さようなら。ブルーエンジェルは翼を広げ、空に飛び立った。

フライトは順調。天気も荒れていない。反抗期を無事乗り越えたのだろう。いい子だ。四方を青い空と雲が流れて行く。プラネタリウムを見ているような気分だ。星が見えないのが残念だ。

「綺麗…」無意識に呟いた。隣に座るファブレが顔を向けた。

「確かに、綺麗だな。君は空が好きなのか？」

「えっ？」まさか話しかけられるとは思っていなかった。「はい！大好きです！」

「パイロットを目指す理由を聞きたいのだが、支障がなければ教えて欲しい」

「えっと…子供の頃にテレビで見たパイロットに憧れて…それでパイロットになりたいって思ったんです。ありふれた動機ですみません」

「いや。解りやすくもいい。憧れたというのはどんなパイロットだった？」

「五年前の大戦で活躍した「光の槍」です。画面一杯に映し出された銀色の機体がとてもカッコよくて…しばらく頭から離れませんでした」

「……そうか。だが、あまり美化しない方がいい。理想と現実は違うモノだ。真実は時として残酷だ」

「…ファブレ教官？」

ファブレの声は微かに震えていた。耳が良い者にしか解らない程の微細な震えだ。彼は左手で右腕を掴んでいた。余程力が込められているのだろう、きつく皺が寄っていた。皮が破れ、血が流れてしまっているのではないかと心配した。

「すまない、気にしないでくれ。もうすぐ十キロ地点だ。旋回の準備を」

「はい」

高度を調整。エルロンとラダーを倒して機体を傾ける。その時、突然機体が失速した。そのまま徐々に回転し始めた。エルロンも効かない。操縦桿を手放してみたら回転は続いている。

「えっ？うそ、やだ！どうしよう！」

遭遇した事のない事態に大きく動揺した。対処法が解らない。

「落ち着くんだ。これはスピンと呼ばれる現象だ。まず、揚力を発生させなければならぬ。ゆっくりと速度をつけるんだ」

北風のように凜とした声が冷静さを与えてくれた。冷たさと厳しさの中に優しさが混在している。頷き、スロットルレバーを上げて速度をつけた。

「よし、それでいい。回転方向と逆のラダーを動かすんだ」

機体は右に回っている。左のラダーペダルを踏んだ。回転のスピードが遅くなり、しばらくすると回転が止まった。分厚いフライトスーツに包まれた背中を冷や汗が伝う。安堵の息をついた。

「止まったようだな」

「はい。ありがとうございます。教官の指示のお陰です」

「いや、君が冷静に指示に従ってくれたお陰だ。訓練生の多くはパニックを起こす」

軽く微笑むと、ファブレは視線を前方に向けた。彼に習い、ソエルも視線を前方に集中する。ファブレが居てくれてよかった。自分一人だつたらパニックになっていただろう。ブルーエンジエルを旋回させる。二人を乗せた機体は無事に学校の滑走路に帰還した。

窮屈なヘルメットを外して新鮮な空気を吸っていると、ファブレが近付いて来た。彼は完璧な動きで敬礼をした。無駄のない動きに舌を巻いた。慌てて敬礼を返した。

「ご苦労だった。怪我はないか？」

「はい！ありがとうございます！」

「君はいいパイロットになれる」

「え？」

「君の活躍を期待している」

意味深な言葉を残し、ファブレは立ち去って行った。真っ直ぐに伸ばされた背筋。ジャイロコンパスのように正確で狂いがない。

遠くで彼がヘルメットを取ったのが見えた。

緑色の髪が見えたような気がした。

実技訓練を何とか無事に終える事が出来た。次の授業までまだ時

間がある。お茶でも飲んで一息入れよう。制服に着替えて中庭に向かった。行く途中でミルクティーを買った。

中庭は生徒達の憩いの場だ。用務員の人が精魂込めて手入れした草花と中央の噴水が綺麗だ。水しぶきが陽光に照らされ七色のプリズムを作り出している。宇宙で輝く星みたいだ。

「あ。あの人…」

今朝ぶつかった青年がベンチに座っていた。信者が祈りを捧げるように俯いている。どうしようか。話しかけるか、それともターンで校舎に戻るか。迷ったが勇気を出して話しかける事にした。そつと近付く。他人を寄せ付けない空気を感じた。大丈夫だろうか。

「こんにちは。あの、今朝はすみませんでした」

青年が顔を上げた。切れ長の琥珀色の目が動いた。認識しようとする。地味だから覚えていないかもしれない。最悪な出会い方をしたのだ。脳が記憶を消し去ってしまったているだろう。

「ああ…君は、今朝の…。謝罪は必要ないと思うが」

「でも…謝らないと気がすみません」

「そうか、なら、謝罪の気持ちを受け取っておこう」

「ありがとうございます。隣、いいですか？」

青年が頷いた。拒絶されるかと思っていたから驚いた。彼は饒舌なタイプではない。静かな沈黙が流れる。ミルクティーを一口飲んだ。まるやかな味が広がる。ちらりと横目で青年の様子をスパイした。青年は神のお告げを聞くように空を仰いでいた。青年が動く気配。慌てて眼を逸らした。

「実技訓練はどうだった？」

「え？あ、はい。何とか無事に終わりました。飛行中にスピンして慌てました。ファブレ教官が指示を出してくれて…助かりました」

「スピンは失速が原因で起きる現象だ。機体に不備でも？」

「はい。後で聞いた話なんですけど、エンジンの最終チェックを忘れていたそうです」

「整備士は機体とパイロットの命を預かる立場だ。気を引き締めな

「いといけない」

「誰にでもミスはありますよ。生きて帰れたんです。それだけでいいです。整備士の人達が居るから、私達は空を飛べるんです」

何気なく言った言葉に青年は酷く驚いたようだった。青年がじつと見つめてきた。何かを探るように。確かめるように。魂の奥まで見透かすような視線だった。

彼は稀に見る端正な顔立ちだから、見つめられてドキドキした。切れ長の両目を縁取る睫毛は濃くて長い。何でそんなに綺麗なんだろう。嫉妬してしまいそうだ。

「そうか　そういう考え方もあるんだな。ありがとう。お陰で大事な決断が出来そうだ」

「え？いえ、私は何も　」礼を言われるような事を言った覚えはなかった。

「すまないが、教官室の場所を教えてくださいか？」

「教官室ですか？西校舎の四階に上がって、廊下を真っ直ぐ行つて…一番奥の部屋です」

「ありがとう」

鞆を肩に提げると青年は歩いて行つた。生い茂る木々の向こうに青年の背中が消えていった。教官室に何の用だろう。そもそも彼は何者なんだろう。疑問だらけだ。考えていても仕方がないか。そろそろ授業が始まる。飲み終えたミルクティーの缶をゴミ箱に投げ入れた。プロバスケ選手のフォームを意識してみた。見事なロールだった。

『C4Aクラスのソエル・ステュアート。至急教官室まで来なさい。繰り返す』

突然流れた放送に驚き、飲んでいたレモンティーを吹き出してしまった。向かいに座っていたミリーは教科書を盾代わりに構え、噴射されたレモンティーをガードした。ゲホゲホと咳きこみながら、

机に飛び散ったティールをティッシュで拭く。

「呼び出しじゃない。ソエル、アンタ何しでかしたの？」

「わかんない……」

思い当たる理由はなかった。教官室に行くしかないだろう。立ち上がったソエルを見上げ、ミリーが胸の前で十字を切った。

「神の御加護を。アタシ、先に寮に戻ってるね」

「……行つて来ます」

世界中の重力がのしかかったみたいに足取りが重い。床を踏み抜いてしまわないのが不思議だ。「教官室」と書かれたプレートが見えてきた。絞首台に続く階段を上るような気分だ。覚悟を決め、ドアをノックした。入室を許可する声。失礼しますと断り、室内に入った。

「わざわざすまんね。座ってくれ」

「は……はい」

促され、革張りのソファに腰掛けた。呼び出されそうな理由を思い出そうと記憶の中を引っかき回した。もしかしたら朝の講義に提出したレポートの事かもしれない。眠気と格闘しながら仕上げたから酷い内容だと思っていた。単位を貰えない？留年決定だ。

「ステュアート君。君に大事な話がある」

「……はい」もうどうにでもなれ。半ばヤケクソ気味にそう思った。

「ヴァルキリーという飛行チームを知っているかね？」

「え？は……はい。クルタナ空軍が誇る精鋭中の精鋭チームですよね？」

「うむ。ヴァルキリーのエリオット隊長が、君をチームの一員に迎えたいと言ってきた」

「へ？」

教官の口から出た言葉の意味を飲み込むのにしばらく時間を要した。フリーズしていた思考が動き出す。あのヴァルキリーの一員になれる？卓越した腕を持つパイロットが集まるヴァルキリーに？衝撃と興奮が同時に襲いかかった。

「あ…あの…。一体どういう事ですか？何で私なんですか？」

「たまたま偶然、エリオット大尉がここを訪れていてね。君の訓練風景を見ていたんだよ。パイロットとしての技術はまだ未熟だが、磨けばいいパイロットになれると言っていた。それを見越して君をチームに迎えたいと直々に言ってきたのだよ。詳しい話は後日改めて、という事になるが 構わないかね？」

「はっ…はい！」

「話は以上だ」

「解りました。失礼します！」

教官に一礼し、教官室を出た。両足がスキップをしたいと訴えかけてくる。それは駄目だと言い聞かせた。廊下は学校を終えて帰宅していく生徒で賑わっていた。今ここで踊ったら、変な目で見られてしまうだろう。頭の回路がショートしたソエル・ステュアート。そんな通り名がつくのは嫌だ。寮に戻るまで踊るのは止めておこう。階段の前にあの青年が立っていた。階段を下りようとしているようだ、躊躇しているように見えた。何故だろう。足でも悪いのだろうか。

「あの 「姿勢のいい背中に声をかけた。彼が振り向く。

「君か。場所を教えてください。感謝する」

「大した事じゃないです」青年は僅かに右足を庇うような姿勢をしている。

「足にお怪我でも？荷物、持ちますよ」

「しかし いや、そうだな。君の厚意に甘えよう」

青年から鞆を受け取った。書類の束が見え隠れしている。ソエルが先に下り、ゆっくりとした足取りで青年が後に続く。無事に一階に着いた。青年に鞆を返す。ありがとう。端正な顔がほんの僅か微笑んだ。その顔で微笑みかけられたらどんな女性の身も心も蕩けてしまうだろう。彼は自覚していないのだ。

「顔がほころんでいるが…何か嬉しい事でもあったのか？」

「はい。私、チームヴァルキリーのエリオット隊長にスカウトされ

たんです！子供の頃からの夢だったんです！」

「そうか。おめでとう。君はいいパイロットになれる」

「え？」

「君の活躍を期待している。では、失礼する」

脇をすり抜け、青年は生徒の波に紛れていった。

どこかで聞いた台詞。

そう、訓練でファブレ教官が言った言葉だ。

まさか あの青年がファブレ教官？

ドラマの脚本のように出来過ぎた演出だ。偶然だろう。

不思議な人と改めて思った。廊下でぶつかるずっと前に、どこかで会ったような気がするのだ。

（ファブレ教官にもお礼を言わないと。また会えるかな）

彼とはまた会える。

もしかしたら、同じ空と一緒に飛ぶ事があるのかもしれない。

そんな気がした。

廊下の滑走路をランディング。

夢に向かって羽ばたいた。

「…つまんないの」

何度咳いたか忘れるほど咳いた言葉を口にしながら、宙に絵を描いた。空気の見えないキャンバスはとても便利だ。間違えてもやり直す必要はないし、紙を取り変える必要もない。世界に優しい究極のエコロジーだ。

今まで生きてきた中でこれほど退屈な日はないと思う。リゲルもアレックスもソエルも基地に居ないのだ。この三人が居ないという事は、つまり遊んでくれる人が居ないという事だ。刺激を求める脳が退屈を紛らわせる為のある結論を導き出した。ユグドラシル基地を探検する。とても素晴らしい結論だ。

「ゲルダ探検隊、しゅつぱーっ！」

メンバーは自分とお気に入りの縫いぐるみの二人だけ。身を守る武器も、生き抜く為のサバイバルキットもないから慎重に進まないといけない。部屋のドアを開け、無人の廊下を歩く。足の短い縫いぐるみは歩きにくそうだ。世話の焼ける子。よいしょと脇に抱えた。丸くてつぶらな瞳がごめんなさいと謝った。

階段は険しい崖で、窓から差し込む陽光は二人を灰にしようと企むレーザービームだ。目的地は屋上。秘密と謎に包まれた黄金境。何度も何度も屋上に行ってみたいとリゲルに懇願しているのだが、彼は子供には危ない所だから駄目だと言われ続けている。子供扱いされて怒るのは子供という証拠だと聞いた事があった。子供だから駄目だと言われる度に、私は大人だからと言いつき聞かせ、怒りを堪えている。

屋上のドアは魔法の合言葉無しで開いた。雲が多めの真っ青な空。フェンスがあるのが残念だ。フェンスがあるのは自殺者を出さない

為の予防なのか、それとも空を閉じ込めようとしているのか。少し日差しが強い。手を翳し、即席の日傘を作った。

ふわりと白い紙が足下に落ちてきた。拾い上げてみる。白い紙の正体は紙飛行機だった。次から次へと紙飛行機が不時着してくる。自分以外誰も居ない筈。もしかしたら、天使が居るのかもしれない。給水タンクが設置されてある高台に続く梯子を上った。縫いぐるみを抱えているからキツイ。足を踏み外したら自分が天使になってしまっただろう。

無事に頂上に到着。そこには先客が居た。背を向け、黙々と手を動かしている。紙飛行機の創造主は彼のようだ。暮れゆく空のように深いミッドナイトブルーの髪。白いシャツを着た背中も、ダークグリーンのカーゴパンツを穿いた脚も華奢だ。彼だ。空に愛されたエースパイロット。

手の動きが止まった。少年　アッシュ・ブルーが肩越しに振り向いた。暗い紫の目が自分を映した。数秒目が合う。すぐに興味の対象から外れた。アッシュは紙飛行機を作る作業に戻った。側に行ってもアッシュは顔を上げなかった。

「何してるの？」

「紙飛行機を作ってるんだよ」「ぶっきらぼうな答えが返ってきた。機嫌が悪いのだろうか。」

「退屈すぎてミイラになっちまいそうだからな。暇潰しさ」

「ソエルがいないから？」

規則正しく一ミリの誤差もなく折られていた紙がグシャツと乱れた。動揺した証だ。

「ちっ…ちげーよ！誰があんな女…」

ブツブツ言いながらアッシュは手を動かし続けた。アッシュの隣に座った。お気に入りの縫いぐるみのお尻が汚れそうだ。少し躊躇った。まあいいか。この子も疲れているだろう。そっと地面に下ろした。

じっと、紙飛行機が平面の紙から飛行機の形になる過程を見つめ

た。アツシユの白い手は迷子になる事なく順調に動き続けている。製図が頭の中にインストールされているのだろう。あつという間に機体が完成した。

「ホラ。飛ばしてみる」アツシユが紙飛行機を手渡してきた。潰さないように受け取る。

「コツは手首のスナップをきかせるんだ。やってみな」

手首のスナップを意識しながら紙飛行機を発進させた。紙の機体は見事なアウトサイドループを描いた。失速。機体はフェンスを飛び越えてしまった。

「すごい！どうやったらあんなに飛ぶの？」

「こつするんだ。こつ…翼のここんトコを折ってやるんだ。マジでよく飛ぶぜ」

アツシユが翼を折って見せてくれた。

どこかで見た形。

どこかで見た折り方。

記憶が激しく揺さぶられた。

そうだ。この折り方は。

「オイ。どうした？」

「ねえ」

「あ？」

「この折り方…誰から教わったの？」

「んだよいきなり。エリオット隊長だ。隊長が教えてくれた。意外だよな。あの堅物の隊長が紙飛行機の作り方を教えてくれるなんてよ」

「…うん」

「震えてるぞ。大丈夫か？」

「隊長さんに会いたい。どこにいるか知ってる？」

「さあな。オフィスじゃねえの？行ってみな」

ありがとうと礼を言うと、気いつけるよと返事が返ってきた。意外に優しいんだなと驚いた。アツシユは皮肉屋で毒舌だと聞いてい

たから。縫いぐるみを抱きかかえ、ノワリーを探す旅に出発した。
あの紙飛行機の翼の折り方は、父のジェラルドが得意とする折り
方だった。

アッシュはノワリーから教わったと言っていた。
何故、彼がこの折り方を知っているのだろう。
。 。
捜し出して、真実を聞きたい。

灰色の滑走路は広大な砂漠のように熱かった。ラクダに頼らずに
横断。オフィスビルに到着した。ガラス製のドアを抜け、中に入る。
ビルの中はひんやりとした空気に包まれたオアシスだ。エレベータ
ーに故障中と書かれた紙が貼ってあった。冒険にトラブルはつきも
のだ。階段で行く事にした。

くるくる回りながら階段を上る。目が回った所為で足元がふらつ
いた。ぐらりと後ろに身体が傾いた。手摺りから手が離れ、身体が
宙に浮いた。駄目。落ちる。死ぬかもしれない。目を閉じる。縫い
ぐるみをギュッと抱き締めた。

宙を舞う身体は地面に叩きつけられなかった。地面の代わりに誰
かの腕が受け止めてくれた。

誰だろう？

きつとパパとママだ。

ここはもう光の国で、二人が迎えに来てくれたんだ。

目を開ければ、微笑むパパとママが優しく見下ろしている。

そつと目を開けてみた。見下ろしているのは、ジェラルドの無精
髭の生えた精悍な顔ではなかった。父よりも若い顔。目にかかる長
さの緑色の前髪に、心配そうに曇る琥珀色の目が見下ろしている。
形のいい唇が動いた。

「怪我はないか？」

尋ねるノワリーの顔と父の顔が重なって見えた。合わせ鏡のよう
に、彼の中に息づく父を見た。ぶわつと涙が溢れた。涙腺のダムが

決壊してもう止められない。

「わあああああんっ！」

ノワリーの胸に顔を埋め、思い切り泣き叫んだ。紺色の制服を握り締めて泣いた。キッチンとアイロンがかけられて皺一つないスーツに盛大な皺が広がる。白い手袋を嵌めた手が背中を撫でてくれた。怖い夢を見て眠れなかった夜、父がよくこうやって慰めてくれた。

ジェラルドよりも細くて、しなやかな手だった。

それでいて、温かい　そんな手だった。

目の前にオレンジ色の宇宙が広がっている。気泡の星に、氷で作られた惑星とストローのスペースシャトル。ノワリーがわざわざ食堂から持って来てくれた宇宙だ。ガラスのコップの隣にはシヨートケーキの宇宙ステーションがある。スポンジの外壁にクリームのペイント。スライスされた苺の窓というデザインだ。

「遠慮せずに食べるといい」

向かいに座るノワリーが優しく言った。頷き、頂きますと手を合わせた。ケーキをフォークで崩した。ケーキの宇宙ステーションは侵略者に破壊されてしまった。クリームの甘い味が口の中に広がる。クリームは雪のようにすぐに溶けた。

「あの…」

「ん？」

「さつきはいきなり泣いてごめんなさい…」

「謝る必要はない。誰かに苛められたのか？」

「違うの。…紙飛行機を見て…パパを思い出したの」

「紙飛行機？」

ノワリーが眉を顰めた。アッシュとのやりとりを彼に話した。ああ。ノワリーが納得したように頷いた。郷愁が琥珀色の目を覆った。その奥に後悔もあった。ノワリーは静かに話し始めた。

「私は、イージス　君のお父さんと知り合いだった。その時に彼

からその折り方を教えてもらったんだ。娘が大好きな紙飛行機で……お前も子供が出来たら折ってやれと、イージスは言っていた。君を悲しませる結果になってしまったな。……すまない」

「何で……エリオットさんが謝るの？」

唐突に謝られて困った。大人で、一回りも年上で大尉の彼を謝らせるような事をした覚えはなかった。

「君からお父さんを奪ったのは私の責任だ。私の不甲斐なさで、イージスは死んでしまった。彼の人生を奪ってしまった。全て私の責任だ。きつと、お父さんは私を怨んでいるだろう」

「違うもん！」

テーブルを叩き立ち上がった。立ち上がった拍子にコップが傾き、テーブルの上に海を作った。端に流れたジュースが床に新たな海を作る。

「パパはエリオットさんを怨んでないもん！星に還る前に会いに来てくれた時に、そう言ってた！大好きだって、親友だって、……ありがとうって……」

再び涙腺のダムが決壊した。また涙が溢れる。こんな小さな身体の中に、これ程の水が溜まっているなんて不思議だ。泣いても泣いても涙が補充される。ノワリーが立ち上がり、こつち側に来た。長身の身体を折ると同じ目線の高さに屈みこんだ。

「彼は……還る前に会いに来たのか？」

「……うん」

「……そうか。良かった。最後に君に会えて……本当に良かった。彼は四六時中君の自慢話ばかりしていたよ。写真を見せびらかしたりもした。これだけは信じて欲しい。お父さんは君を愛している。これからも、ずっと」

涙と鼻水の所為で言葉が出て来なかった。代わりに頷いた。父のように抱き締めて欲しいと思った。父を知っているのは彼しか居ないから。迷惑かもしれない。駄目もとで訊いてみよう。

「……あの」

「どうした？」

「その……ハグしてほしいの。…だめ？」

ノワリーは一瞬固まった。やっぱり迷惑だったんだ。ほんの少しの間彼は思案していた。頭の中で、色々な考えが回っているのだから。世界の自転速度よりも速く。

「構わない。さあ、おいで」

微笑んだノワリーが両手を広げた。深呼吸をしてそっと腕の中に入った。

引き締まった胸の奥で心臓が動いている。頬に触れる布地は滑らかで、視界の端で勲章が煌めく。

光に触れてみたい。手を伸ばし、勲章を指でなぞった。

長い腕が雲のように優しく包みこんでくれた。

紙飛行機の作り方を教えてもらおう。

飛ばせばきつと、

父の居る天国まで飛んでくれるだろう。

そして、伝えてくれる。

私も、パパが大好きだと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6705u/>

SKY VALKYRIE

2011年9月29日21時58分発行